存在薄弱

金枝　那里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
存在薄弱

【Ｎコード】
Ｎ７４１８Ｏ

【作者名】
金枝　那里

【あらすじ】
※※更新停止中※※　会社からの帰り道、私はいつもどおり電車内で爆睡していた。していた、はずだった。
男女の囁き声と物音に目を開けると、知らない宿泊施設の一室にいた。目が覚めた自分に構わず、見知らぬ男女は会話を続ける。何かがおかしい。
異世界に飛ばされた私は、何故か他人から認識されにくい存在になっていた。

プロローグ（前書き）

各話の注意書きをとっぱらいました。よって、最初にしつこく注意書きを書いておきます。

性描写や気分の悪い表現があろうと、今後一切注意書きはありません。

以下の注意事項を参考に、読むかどうかを判断してください。

■注意事項

・登場人物は全員残念。（主人公含む）
・登場人物の残念さ・気持ち悪さを笑える人向けです。
・逆ハーや恋愛要素の有無を気にする方は向きません。（あってもなくても気にしない人向け）
・気分爽快な話でも、きちんと設定の練られたファンタジーでもありません。
・好みの激しい人には向きません。

自分に合わないと思ったらブラウザを閉じて記憶を抹消することができるか、ただ文字を追うだけで幸せになれるオンノベ好きの方向けです。

以上を踏まえて、よろしい方はどうぞ。

プロローグ

ここは何処だ。目の前の光景は何だ。このピンクな雰囲気は何なんだ。

眠りから覚めた視界に広がっていたのは、予想を斜め上回る光景だった。

落ち着け。眠る前、私は何をしていたか。順序よく追っていけば思い出すはずだ。昨夜は、会社からの帰宅途中の電車内で、いつものように爆睡していたはずだ。乗り過ごすことは滅多にないが、それでも、電車内か駅のホームにいるはずだ。運が良ければ駅の控え室まで運んでもらえるかもしれないが。少なくとも、どこかの宿泊施設の一室なんてところにいるはずがない。目の前に半裸の男性なんているはずがない。終点で車掌さんの渋い声で起こされることはあっても、男女の甘い囁き声で目覚めるはずはない。

「まだいいじゃないか」

状況把握している思考を、男の低い声が遮った。

男が部屋のドアの前で女性を引き留めている。

「ダメよ。早く戻らないと主人が起きてしまうわ」

そう言いながらも、女性の方はまんざらでもない。男は掴んでいた腕に力を入れて、女性を引き寄せた。

「今度はいつ会える」

反対側の手が、女性の腰のあたりを舐めるように愛撫していく。

同時に、私の顔はひきつった。

ちょ、私の存在無視して第二ラウンド始めないで。

「わからない。でも、連絡するから」

「離れたくない」

「私もよ」

熱っぽい視線が絡み合い——二人の影が重なった。

私は顔を覆った。微かに漏れる熱い息づかいと水音が耳に伝わる。

止めてくれ。勘弁してくれ。何故朝っぱらから他人のラブシーンを見せつけられねばならない。何なの、この状況。ある意味突飛すぎて面白いけど！

「それじゃあ、またね」

「ああ。連絡、待ってるよ」

濃厚なキスシーンを見せつけて、女性は満足そうに去っていった。男はその後ろ姿を見送って、身を翻してこちらを見た。

途端、身が石のように固まった。非現実的な事態に混乱していたが、まずは自分の立ち位置を把握するべきだ。男女が同室に――しかも、自分はベッドの中にいる。男一人に女二人というのは理解に苦しむが、先ほどの展開を見れば健全な関係は期待できない。

服は着ている。体に変調はない。昨夜はおそらく、何もなかった。だから、身の危険を感じるのが遅くなったともいえるのだが。だからといって、今から何もないと安心するには気が早い。

男が足を踏み出す。一歩。

「あ……」

何か言おうとして、失敗する。畏怖した体は、かすれた音しか発せなかった。そもそも、何を言うつもりだ？

更に一歩。

男の歩みが酷く遅い。動作の一コマ一コマが焼き付くように目に届く。男が足を踏み出す度に、床が鳴った。

目の前で歩みが止まる。男と視線が絡み合い――

あれ？

男の視線が若干ズレている。私を、というよりもベッドに視線を向けている。疑問の答えを考えつく前に、男はベッドに沈み込んだ。反動でスプリングの効いたマットが跳ね上がり、体がトランポリンに乗ったように跳ねた。

「あの……？」

男はそのままうつ伏せの体勢で動かない。手を触れるどころか、話しかける気配すらない。不審に思って声をかけるも、返事はない。

代わりに、もぞもぞと体を動かして、完全にベッドの中へと滑り込んでくる。掛け布団まで被って、完全に眠る体勢だ。

何この状況。

男からは、微かな寝息が聞こえる。

寝るの早いよ！　説明くらいしようよ！

呆然と男の寝顔を見つめる。うっすら生えた髭。すっきりした顎。通った鼻筋。全体的に彫りの深い顔だ。先ほどのこともあるし、女性に困るような容姿でもなさそうだった。柔らかそうな金髪も、まるで地毛のような艶があった。外国人だろうか。

どちらにせよ、私のような貧相な女を相手にする必要はなさそうだった。さっきの女性も、既婚者のようではあったけど見事なプロポーションだったしな。

ともあれ、何の間違いか一夜を同室で過ごしたようだけど、相手にその気はないようだ。駅で放置されていた私を哀れに思って連れてきたとか、そんな感じなのだろう。たぶん。随分都合のいい解釈だが、それくらいしか思いつかないし。見られてこそ興奮する特殊な性癖のために連れてこられた、という可能性もなくはないが。

いや、止めよう。少なくとも、男が私をどうこうする気がないことだけ分かれば十分だ。今日も仕事はあるし、出勤の準備を始めよう。まだ日も昇りきってはいないが、ここがどこかもわからない。状況把握も含めて、早々に動いた方がいいだろう。起きあがろうと、体をのばす。

「ん……」

男がうめき、手を伸ばした。両手を上に上げ、伸びをしたままの状態の腰の位置に、男は手を回してきた。男はそのまま腰を抱き、甘えるように顔を腹にすり寄せてきた。

「え？」

伸びをした状態のまま、固まった。目を見開いて男を見つめると、男も眠そうに瞼をゆっくりと開いた。

「え？」

視線がかち合う。今度はしっかりと。互いに見つめあったまま硬直し――

男は悲鳴を上げてベッドから滑り落ちた。

「だ、誰だ！」

男は慌てた様子で私を指さした。

それは、私の台詞だ。

一、召喚

私と男は食事所に遅めの朝食を摂りに来ていた。誰何を尋ねた男に、私の腹の虫が応えたからだ。顔から火が出るのを俯いてやり過ごそうとする私に、男の苦笑が降った。ある意味では、良かったのかもしれない。二人の緊張は、幾ばくか解けていた。

「俺は、ヨースウォン・バルトスキー。スウォンと呼んでくれ。君は？」

「明日葉（アスハ）　美信（ミノブ）です」

言いながら、店の内装に目を走らせた。店の中は客のほかに給仕をしている若い女性が一人。テーブルは木の良さを最大限に生かした設計。椅子も同じく。目の前には布で出来たランチマット。ファンタジーなどで見かける魔方陣のような奇妙な模様が描かれている。店内に電球は一切なく、照明は外からの採光のみ。ファミレスとはまったく違う様相である。この男――スウォンの気に入りの場所なのだろうか。

「とりあえず、なんか頼むか。アスハは何にする？」

そもそも、ここは一体どの辺なのだろう。ここまでの街並みは、東京では見かけないタイプのものだった。

いや、はっきり言おう。外国の街並みだった。それもヨーロッパの。木造、石造りの趣きある建築。コンクリートで出来た高層ビルが乱立する東京の街並みとは、大きくかけ離れていた。

どこかの大使館か何かか？　テーマパーク？　街並みに適すると思われる場所を挙げてみる。けれど、通勤途中にそんな場所があるなんて聞いたことがなかった。ただ単に、私が知らないだけかもしれないが。それにしたって、何故そんなところにいる？

「そうですね……」

高速に思考を巡らせながら、スウォンからメニューを受け取る。

このメニューも、随分と質素だ。凹凸のある紙に手書きの文字が並んでいる。紙も、昨今のつるりとした印刷に適したものではなく、随分とざらついている。牛乳パックから紙をすいて手作りしたものを思い起こさせる。

メニューに写真が載っていないのも珍しい。料理名にも凝っているのか、なんだか良く分からない品目が並んでいる。いちいち確認するのも面倒だ。こういうときは、相手と同じものを選ぶのが後悔が少なくていい。

「俺は、日替わりメニューにするよ」

「では、私もそれで」

腹の音が鳴るほどだ。とにかく早く何か食べたかった。値段や日替わりの中身を確認するのが億劫になっていた。

いや、値段は確認しなければ。給料日前の財布は少々心もとない。値段を確認すべく、メニューに再度手を伸ばし――動きを止める。私の荷物はどこにある？　財布は鞄の中だ。さて、その鞄はどこに？

「どうかした？」

スウォンが心配げに声を掛ける。

「いえ、すみません、今手持ちがないことに気づいて。後で払いますので立て替えてもらえますか」

「ん？　ああ、お嬢ちゃんはそんなことは気にしなくていいんだよ。ここは俺が払うから」

お嬢ちゃ――？

思わず言葉を失った。二十五の女性にその呼称はどうなのか。いや、オバサンと言われるよりマシだけれども。

「そんな、初対面の男性に奢ってもらうわけには。後で必ず払いますから」

「若いうちは、こういうのは大人に頼っておきな」

若い……うち？　大人に頼……る？

改めて、目の前の男を凝視した。二十五は仮にも二十代だ。若いと言ってくれる人もいるだろう。けれど、目の前の男だって見た目

私とそうは変わらない。いいとこ、二十代後半だろう。私を若いと言ったり、私に対して自分を大人と称するには違和感があった。

「いえ、あの、私の気が済みませんから」

「固いねえ。親御さんが厳しいのかな。分かったよ、それじゃあ出世払いでいいから」

出世払い？　お前はどこからどう見ても平社員だと言いたいのか？　スウォンのズレた返事に戸惑った。

そんな私の心中など気にも留めず、スウォンはウエイトレスを呼んだ。金に近い茶髪を緩くまとめた女性が、朗らかな笑みを浮かべて走り寄ってくる。その顔は彫りが深く、瞳は透き通った青。外国人とは珍しい。スウォンといい、この辺は外国人が多いのか。

「あらスウォン。珍しいのね、今日は一人？」

「え？」

ウエイトレスは無邪気に尋ねた。嫌味も嫉妬もない口調に、思わず声を上げた。私はテーブルを挟んでスウォンの対面に座っている。良かったらこの後――とウエイトレスはスウォンにしなだれかかる。豊満な胸がスウォンの腕で潰れた。

「いや？　そこのお嬢ちゃんと一緒だよ」

満更でもない様子で女性を受け止め、スウォンは私を目で示した。その視線を追い、ウエイトレスは「あら」と口を開いた。

「あなた、子供がいたの」

ウエイトレスはスウォンから離れてじと目で見つめた。視線に嫉妬の色が見え、私は慌てて口を挟んだ。

「あ、私はただの行きずりの――」

女性の心情に気づいていないのか、スウォンは噴出した。

「家に泊まってるお客さんの子供だよ」

ん？

「あら。じゃあ、今度はその子のお母様が標的なのね」

んん？

「うんまあ、そんなところ。その子の世話を頼まれてね。それより、

注文いいかな」
「ああ、はいはい。ではご注文をどうぞ」
ウエイトレスは、注文を聞くと厨房へと下がっていった。
それよりも、何か引っかかる。私のことを誤魔化すにせよ、もっと巧い言い訳があるのではないか。スウォンが熟女好みなのは薄々気づいていたが、それにしたってその設定はないだろう。そもそも、ウエイトレスも微塵も疑わないとかおかしすぎる。「お嬢ちゃん」、「出世払い」、「親御さん」先ほどの違和感が頭に浮かぶ。
もしかして。
「あの、スウォンさん」
「ん、どうした」
爽やかな微笑み。思い返せば確かに、端々にそういった言動は見受けられた。上から目線で話されるような。
「私って、何歳に見えます？」
スウォンは少し考える振りをした。
「十二歳くらい？」
スウォンは年齢を勘違いしていた。
外国人から見ると日本人は幼く見えるとは言え。十以上も若く見えるってどうなんだ。会話にも支障が生じるので、この点は正しておかねばなるまい。
「あの、私は十二歳ではなく――」
突然、鐘のような音が響いた。
音源を探して目を走らせると、ランチマットが発光しているのに気づいた。いや、正しくはランチマットの模様部分が発光している。緑色の光は目に優しく、落ち着いた。これから何かイベントでも始まるのだろうか。
じっと見つめていると、光が一瞬強まる。
次の瞬間。目の前に料理が湧いて出た。
「え？」
目を剥いて料理を見つめる。

今、何が起こった？
目をこする。
料理がある。
頬をつねる。
料理がある。
料理の皿を触る。
暖かい。
周りを見渡す。
客が談笑している。
再び料理に視線をやり、ランチマットを引っ張りだす。
ぺらぺらの薄い布だ。
テーブルに手を這わせる。
木材の感触。
種も仕掛けもない。夢でもなんでもない。
「驚いた？」
スウォンは楽しそうに笑っていた。
「あ、あのこれどういう仕掛けで……？」
仕組みがまったく想像できない。ニュースに疎い私だが、こんなものが実用化されたら騒ぎになっているはずだ。
「面白いだろう？　転移の魔法を応用化したものらしいよ。最近、実験的にここの店で導入を始めたんだけど、お気に召してよかった」
あ、今嫌な単語が。
「魔法、ですか」
「うん。平和になったもんだよね。でもいい傾向だと思うんだ。戦争の道具だった魔法が、日常に根付くのは」
「戦争……」
呟くと、スウォンは「ごめん」と謝った。食事時にするべき話ではないという意味か、小さな子に聞かせる話ではないと思ったか。
「そう考えると、今の王子も悪くないよね。治安は格段によくなったし。転移系の魔法にご執心なのは考え物だけれど、そのおかげで

こういった魔法ができたんだから」
泣きたくなってきた。
薄々気づいていた。信じたくなかったから、気づかない振りをしていたけれど。でも、目の前で魔法なんて見せられた日には、嫌でも信じないわけにはいかない。
「スウォンさん。あの、ここってどこですか？」
スウォンは不思議そうに首をかしげた。
「シェラトンだよ。ムーイト国のシェラトン」
私は視線を宙へ向けた。
ムーイトってどこだよ。

二、異世界

ここが東京どころか日本じゃない、というのははっきりした。というか、日本どころか地球じゃなく――異世界というのもはっきりした。魔法は地球では二次元の専売特許だ。現実で実現されては困る。

残る可能性は――夢。夢であればいいのだけれど、生憎と私は夢を夢と認識できるタイプだった。ここまではっきりとした五感を感じられることはありえない。突然湧いた食事も、はっきりと味覚が感じられる。ついでに言えば、非常に美味しい。

さて。異世界に召喚された私がこれからすべきことは何か。当然だが、元の世界に帰るべく方法を探すことだ。元の世界で仕事が私を待っているし、何より、ここでは家族も友人もいないのだ。住民票もないし。

だが幸いにして、ここでは魔法という概念が存在する。王子も転移系の魔法にご執心らしいし、異世界へ戻す魔法も存在する可能性が高い。

では、元の世界に帰るためにすべきことは何か。

一、異世界に戻してもらえるよう魔法使いに頼む

二、魔法を習得して、自力で帰る

まあ、要するに他人を頼るか自力で何とかするか。元の世界じゃ魔法なんて概念はなかったけれど、こちらの世界では私でも使える可能性はある。小説や漫画を参考にするのはどうかと思うが、異世界の被召喚者は総じて魔力が高かったりするし。ほら、もしかするともしかしちゃったりするかもしれないじゃない。

おお、心躍ってきた。華麗に魔法を行使する自分を想像し、知らず笑みを浮かべる。その内容が、重い書類を持ち上げるのに浮遊魔法を使っている姿や、料理にファイアーとやってる姿なのは言及しないで欲しい。歳とるとどうしても生活最優先になるよね。大人っ

て夢がない。
　話が脱線したが、ともあれ魔法だ。魔法を使って帰る。そのためには、しばらくはここで生活する術を得なければならない。魔法使いに頼むにもタダというわけにはいかないし、ここでの貨幣を溜める必要がある。
　スウォンが私を子供と認識しているのを利用し、貨幣や仕事などのこの世界の常識を聞き出した。食事をしながら、無邪気に「ムーイトってなあに？　アスハ子供だからわかんなぁい」ってな雰囲気を滲ませてなんとか。無知っぷりに自分で突っ込みを入れつつ情報を引き出す作業は、えらく精神力が要った。
「アスハは、どうして俺の部屋にいたの？」
　スウォンがスープをすすりながら訊いた。食事を開始して、しばらくしてからのことだった。恐らく一番訊きたかったことだろう。子供を刺激しないように猶予をくれる事運びに、見直した。ただの女好きかと思っていたよ。
「黙って入ってすみません」
「怒ってないよ。だから、正直に話してごらん」
　優しい声音。男性独特の低い声が、幼子を宥めるように甘く響く。異世界での心細さを刺激するように染み入り、涙腺を刺激した。演技と意識せず俯いたのは、スウォンを戸惑わせるのに一役買ったようだった。
「私、治安の悪いところから逃げて……、この国に来たんです」
　異世界から来たんです、というよりは現実味があるだろう。スウォンは先を促すように頷いた。
「ご両親は？」
　視線を逸らして、悲しみに耐えるように唇を噛む。たっぷり溜めて、一言。
「いません」
　この世界にはいない。嘘ではない。
　意図したとおり、スウォンは受け取ったようだった。憐れむよう

な視線を向け、私の頭に手を乗せる。ゆっくりと撫ぜられた。
「家は、暮らせなくなって……」
「辛かったんだね」
撫ぜていた手が二度優しく頭を叩き、離れていく。ゆっくりと顔を上げて、縋るようにスウォンを見つめた。
「寒さに耐え切れず、気づいたら部屋に潜り込んでいたんです。ごめんなさい……」
ストーリーはこうだ。両親を亡くし、路頭に迷う。親戚筋を頼ることも出来ず、治安の悪い町に一人放り出される。流れ流れてこの国に着いたが、手持ちは底をつき、宿に泊まるお金もない。寒さに凍えて気づいたら窓の開いていた部屋に潜り込んでいた、と。
もちろん、即興で考えた作り話だ。粗が酷く、突っ込まれればすぐにぼろが出てしまうだろう。適当に言いよどんで、相手に想像の余地を持たせておくのは重要だ。勝手に勘違いさせ、相手にとって辻褄の合うストーリーに練り上げるために。
「そうか。行く所がないなら、うちにおいで」
思わぬ申し出だった。非常に好都合だ。
「え、でも……」
だが、見も知らぬ人間にここまで世話になるのは気が引けた。実際、飛びつきたいほど美味しい話ではあったが。一応、遠慮する素振りをしてみる。
「ちょっとお手伝いしてもらうことにはなると思うけど、部屋もあるし、ずっと居てもいいから」
あくまで優しく。諭すようにスウォンは言った。完全な善意だ。
ここまで言ってもらっておきながら、断る必要がどこにあろうか。せっかくの申し出、断る方が逆に失礼だ。
――と、罪悪感を振り切るように自分に言い訳する。もちろん、罪悪感を感じていることは表情には出さない。思わぬ申し出に戸惑いつつ、躊躇う様子を装う。
「あの、いいんですか……？」

顔色を伺うようにスウォンを見れば、安心させるように深く頷いてくれた。

ああ、神さま仏様女神様。スウォンに後光がさして見える。女たらしとか思ってごめんよ。

昨今触れることのなかった人の厚意に、胸が熱くなった。私は俯いて、バレぬよう目の端を拭った。

三、魔法

食事を終えた後、街へ探索に来ていた。スウォンはこれから仕事に向かうということで、一時的に別れることとなった。スウォンは、慣れぬ子供一人を歩かせることに抵抗があったようだが、ここは治安がいいのだからと言って押し切った。帰る家はないし、頼れる友人はいない。私のせいで、仕事に遅らせるわけにもいかない。何より、一人でこのあたりを見て、把握しておきたかった。

中世ヨーロッパを思わせる石畳の道を歩く。道に沿うように並ぶ建築は、見ているだけで面白い。街行く人の服装も様々。民衆はやや現代に近い、ラフな服装をしている者が多い。男ならシャツにズボン、女ならスカート、といった具合に。時折道を走る馬車や、貴族と思しき人たちはそれなりの格好をしているが、思ったよりも雑多な雰囲気がある。だからだろうか、スーツ姿の私に気を止める人は、一人もいなかった。もう少し先に足を延ばせば市井ということだから、その辺も影響しているのかもしれない。

せっかくだから市井まで足を伸ばしてみようか。市井までの道順を聞こうと、目の前を歩く女性に声を掛けた。

「すみません」

無反応。聞こえなかったのだろうか。ちょうど馬車が通りかかったのもあって、声がかき消されたのかもしれない。

「あの、すみません」

もう一度。今度は気持ち声を大きくして。

しかし、女性は無反応。後から声を掛けるのが悪かったのかと、女性を追い越し、目の前に立ちふさがる。そしてもう一度。

「すみません、市井の道筋を」

女性はまっすぐ前を向いたまま、無反応で歩く。歩調に乱れなく真っ直ぐに歩いてくるので、ぶつかりそうになる。慌てて避けるが、女性はそのまま歩いていってしまった。

どういうことだ？

呆然と立ちすくむ。女性の靴の音がやけに響いている。ヒールの高い靴に、日傘を差した女性の後姿を見つめて、ふと思いついた。もしかして、女性は貴族だったのだろうか。貴族は平民に声を掛けないとか？

何しろ異世界だ。どんな決まりがあるか分からない。だとしたら、声を掛けた相手が悪かったのか。今度は軽装を着ている若い男性に声を掛けてみる。

しかし、反応は変わらず。何度声を掛けても、無視して行ってしまう。異性に声を掛けるのがまずいのかと思うも、女性も同じ。若い男女がシャイなのかと思い、老若男女問わず声を掛けてみるも、誰も返事をしない。

なんだここ。スウォンの気さくさに人好きの多い国かと思っていたが、スウォンが変わり者なだけだったのか。知らない者には答える必要すらないってことか。なんて世界だ。冷たいと言われる東京人だって、声掛けられれば返事位する。

街並みを観光気分で眺め、気をよくしていた私は、街の人間の冷たさに腹を立てた。休暇のつもりで少し羽を伸ばそうかと思っていたが、予定変更だ。一日も早くこの世界から脱出せねばなるまい。何か役に立ちそうな情報でも落ちていないかと、辺りを見回しながら足早に歩く。ふと、大きな建物が目についた。書籍が並んでおり、大規模な本屋のようだった。

魔法書か何か、役に立つ本があるかもしれない。私はその本屋に足を踏み入れた。

魔法魔法……、小声で呟きながらタイトルを流し見る。それっぽいのを片っ端から開き、中身を確認する。しかし、魔法構築に関する書籍はあるものの、肝心の「使い方」に関する書籍が見当たらな

い。あまりに初歩過ぎるのか、どうやって発動させるか、という点についてはどの書籍にも載っていないのだ。

仕方ない。とりあえず自力で発動させるのは後回しにして、召喚魔法について――異世界から元の世界に戻る方法に関しての情報を集めよう。たとえば、過去に異世界から召喚された人間がいないか。その後、その人間は元の世界に戻れたのか。その難易度、危険性、具体的な方法に関して。そもそも、この世界に異世界召喚系の魔法があるかどうかすら定かではないのだ。

方向転換し、召喚に関する書物を流し読みする。しばらく探していると、「異世界からの英雄」というタイトルが目に付いた。そのものズバリ「異世界」との言葉に引き付けられ、手を伸ばす。しかし、本は高い位置にあり、手が届かなかった。

梯子か何かないだろうかと辺りを見渡し、踏み台を見つけた。隅のほうに慎ましやかに置いてある踏み台に近寄る。しかし、踏み台の前には男性が立っていた。その男性は、踏み台の前で本を吟味しており、踏み台を使用するのに邪魔だった。

仕方なしに、声を掛ける。しかし、予想通りに無視された。

棚と棚の間隔が狭く、無理に踏み台だけを移動させるのは難しい。男性に協力してもらい、身を引いてもらわなければならない。かといって、あの本を諦める気にはなれなかった。今は、どんな些細な情報でも惜しい。

「あの」

強めの語調で男性の腕を引いた。本に集中しているであろう、男性の意識を引くためでもあった。

「何か？」

突然腕を引かれて驚いたのか、男性は目を見張ってこちらに視線を向けた。顔をこちらに向けた反動で、銀の長髪が揺れる。灰色の瞳が私を射抜き、一瞬身が竦んだ。

「そ……その、後の踏み台を使いたいのですが」

「ああ、気づかなくてすみません。どうぞ」

男は読んでいた本を閉じ、空いている棚に置くと踏み台を持ち上げ、手渡した。無表情ではあったが、男の心遣いに照れた。

「あ、ありがとうございます」

どもりながらお礼をいい、私はその場をそそくさと去った。

長い銀髪に緩やかな体の線の出ない服装。まさに二次元から飛び出したような男に、私は戸惑っていた。現実でありえないような格好なのに、酷く様になっているのだ。有り体に言えば、かっこいい。容姿も落ち着いた所作も、好みだった。年甲斐もなく心臓が跳ね、顔に血が上っているのが良く分かる。

さすが異世界。美形も半端ない。目の保養目の保養。

乱れた鼓動を整えるため、胸に手を当てて心臓の音を数える。まさか、容姿を見るだけで幸せな気分に浸れるほどの美形を拝めるとは思わなかった。気づかれぬようにちらちらと視線を走らせれば、何冊かの本を抱えているのが見えた。建国の歴史やら政治学やらに混じって転移系の本が積まれている。なんだろう、転移系の魔法って王子だけでなく国全体でブームというか研究が推奨されているのだろうか。

とりとめなく思考をめぐらせ、我に返る。

思考は飛んで、男性が王子の家庭教師として、執拗な言葉攻めで嬲る様を妄想していた。なに考えているんだ。勝手に会った事もない王子の家庭教師役にし、ＢＬ妄想している場合じゃない。私はこの世界から帰るため、情報を集めにここにいるのだ。

踏み台に足を乗せ、「異世界からの英雄」へと手を伸ばす。本を開き、内容へと目を落とした。

本には、過去国が危機に陥った際に異世界から召喚し、世界が救われた事例を記載してあった。内容は歴史寄りだったが、少ないながらも収穫はあった。どうやら、召喚魔法自体は実際に存在するということ。異世界から召喚した事例もあり、過去に王家の危機が救われた事例もあること。異世界人がその後どうなったのかははっきり記されていないが、元の世界に戻ることが出来たと読み取れる記

述があること。召喚術は難易度が高く、特に異世界からの召喚ともなれば、王宮仕えの魔法使いでなければ扱えないこと。国が異世界から召喚する場合は、慎重に魔術を構築した上で行うということ。その後、万全のバックアップ体制をとるため、王自らが異世界人を保護すること。

ぱたんと本を閉じ、一息つく。

帰れる可能性が見えてきた。王宮仕えの魔法使いに会って、金を積んで頼めばいいのだ。望まず連れてこられたのに、金を用意しなければならないのは腹立たしいが仕方ない。この本によると、王家が召喚した場合は、必ず王が保護するとある。つまり、なんだか良く分からない場所に出現した私は、王家とは関係なくこの世界に来てしまったわけだ。偶然か誰かの失敗かはわからないが、誰が原因か分からない以上、責める相手もいないのだ。

ふと外へと視線をやると、随分と日が落ちていた。思ったより時間がたっていたらしい。手の本を元の場所へと戻すと、軽く伸びをする。

さて、スウォンを迎えに行きますか。

四、猫と学校

スウォンは騎士だ。戦争のない今は、街の治安を守るべく活動しているらしい。勤務地というか、組織の中枢は城に据えられているらしい。

というわけで、私は城へと足を向けていた。城は馬鹿でかいので、遠くからでも良く見える。地図がなくとも迷うことなくたどり着けた。

着くのが遅かったのか仕事が早く終わったのか、既にスウォンは門にいた。胡坐をかいて小声で何か呟いている。近づいてみると、猫がいた。野良だろうか。それとも、城で飼っているのか。スウォンに懐いているようで、猫じゃらしに楽しそうにじゃれている。

猫好きなのか、スウォンは愛しそうに猫を見つめていた。このまま見ているのも悪くないが、盗み見ているようなもので、人が悪いだろう。だからと言って、声を掛けるのも躊躇われた。物音で猫が逃げてしまわないかと危惧したのだ。

私はスウォンに近寄ると、小さく声を掛け、そっと肩をたたいた。

「スウォンさん」

突然、猫が短く鳴いて毛を逆立てる。スウォンは体を震わせ、素早く後方へと飛んだ。体勢を低くし、油断なく私を睨む。全身から殺気を滲ませている。

予想外のスウォンの行動に、肩を叩いたときのままの体勢で固まった。あっけに取られてスウォンを見つめる私に気づいたのか、スウォンは緊張を解いた。

「なんだ、アスハか。驚かさないでくれ」

「すみません。あの、声を掛けて猫が逃げたら悪いかと思って」

「いや、俺のほうこそ、怖がらせて悪かった。気配がなかったものだから。疲れてるのかな。今日は早く寝よう」

頭をかきながら、スウォンは上体を起こした。そういえば、スウ

ォンは騎士だ。背後から近寄られるのは文字通り生死を分ける失態なのだろう。よほど猫に癒されていたのか、何か疲れることでもあったのか。

間違っても、昨夜のお楽しみが悪かったんじゃないんですかね、などとは言わない。思っても言わない。

スウォンは私の隣に並び、手を取った。目を丸くして見上げると、爽やかに微笑まれた。

「迷子にならないように、ね」

「……」

繋がれた手を見て、眉を寄せた。

面倒見が良い、と思うべきか。子供相手の気遣いとしては悪くはない。ただ、十二の女児相手に取るべき対応ではないような気がした。十二といえば、小学六年生くらい。思春期まっさかりの年頃だ。父親と洗濯物一緒にしないで――なんて、女性としての自尊心を持ち始める時期でもある。

その年頃の子供が、あからさまな子供扱いをされて良い気分になるだろうか。お兄さんくらいの年齢とは言え、父親にこの態度を取られたら、大抵の子供はへそを曲げるだろう。不自然にならぬよう、歳相応の振る舞いをすべきだろうか。

いや――やめておこう。振り払おうかと思ったが、スウォンに悪気はない。親切にしてもらって、善意で手を取るスウォンの気持ちを踏みにじるほど、恩知らずではない。

「観光は楽しかった？　迷ったりしなかった？」

正直言えば、楽しくはなかった。収穫はあったが、街の人たちの態度は今思い出しても腹立たしい。

「はい。活気があって、見て回るだけでも楽しかったです」

もちろん、正直に言って空気を悪くするつもりはない。

「そう。良かった。どんなところを見てたの？」

「街をぶらついて、大きな本屋さんがあったのでそこを見ていました」

「本が好きなの？」
「というより、魔法に関する本が読めるかと思ったんです。大きな本屋さんでしたので」
「ああ、なるほど。魔法に興味があるの？」
当然、それはもう。興味津々だ。死活問題だからな。元の世界に帰れるかどうかの。
「はい！　今日見た魔法を見て、すごく便利だなって思ったんです」
なるべく純粋に見えるように、瞳を輝かせる努力をする。
「んー。そんなに興味があるなら、ルロールに会わせてやれたらいいんだけれど」
「ルロールさん、ですか？」
「ちょっと変わった奴だけどね。仮にも王宮仕えの魔法使いだから、得るものもあると思うよ」
「魔法使い！？」
勢い込んでスウォンを見上げる。魔法使い、しかも王宮仕え！
是非、是非とも会いたい！
私の食いつきようにスウォンは苦笑した。明日にでも会わせてくれと言い出しそうな雰囲気に、呆れたのかもしれないが。
「けど、今あいつ、忙しそうなんだよなー。なんか遠方任務の準備やら、王子の誕生祭の準備やらに追われてるらしくて。すぐには会わせてやれない。ごめんな」
その言葉に、私は肩を落とした。スウォンの知り合いなら、タダで会えると思ったのだ。そのまま即帰還、となれば上々。無理でも、帰るための具体的な条件が聞けるだろう。お金を溜めるにせよ何にせよ、目標が定まってるかどうかというのはモチベーションに直結する。
「そう……ですか。是非お会いしたかったんですが」
「ごめんね。折を見て話してみるから」
「はい、是非。何から何までお世話になってすみません」
落胆する私に、スウォンは励ますように握った手を大きく振った。

「それまでの間、と言ったらなんだけど、魔法学校に通ってみるのもいいかもしれないな」
「魔法学校ですか？」
そういえば、魔法を習うシステムについても知らなかった。ここでは魔法は学校が教える仕組みなのか。
「そう。実際、ルロールに会えても、あいつから直接教わるのは難しいからな」
「そうですね。お忙しい方みたいですし」
本来であれば、素性の知れない小娘がおいそれと会える身分の人ではないだろう。
「それもあるけど、魔法のレベルが違いすぎるだろうから。アスハは今まで、魔法の勉強をしたことがないんだろう？」
「はい」
「だったら、まずは学校から始めたほうがいいと思うよ。師につくにしても、基本を学んで損はないから」
「そうですね。生活が落ち着いたら、考えてみます」
スウォンの手前肯いて見せるも、正直なところ迷っていた。今日調べたところでは、召喚魔法は酷く難易度の高い魔法だった。学校に行って師について。気の長くなる話な上、習得したところで使いこなせるかどうかは分からないのだ。学校に行くにもタダではないし、不確定な可能性に賭けるのは危険だった。
しかし、魔法を学びたいと言い切ってしまった以上、はっきりと断るのも不自然だった。金銭的な不安もあるが、魔法を学んでいることによって、いずれルロールと話をする際に動機が明確になっていいかもしれないし。
魔法学校、か……。
口内で呟いて真っ直ぐ伸びる自分の影を見つめる。沈み行く夕日は、辺りを紅く照らしていた。

五、給仕

スウォンの口利きで、朝と夜の食事の給仕を手伝うことになった。スウォンの家は宿屋を経営しており、朝と夜は食事を出している。そこで、簡単な注文聞きと配膳を手伝う代わりに当面の宿を提供してもらえることになった。

本日も朝から配膳にいそしんでいるのだが。

考え事をしているのだろうか。煙草を吸いながら天井を見つめる男性へと近づく。歳は恐らく二十代後半から三十代前半。起き抜けか顎には薄っすらと髭が生えている。

盆に男の頼んだパンと珈琲を乗せ、男に向かって最上級の笑顔で声を掛ける。

「お待たせいたしました」

「うおっ！？」

男が軽く体を仰け反らせ、小さく呻く。注文された料理をテーブルに乗せると同時に、だ。男は料理を不思議そうに見つめ、首を傾げてから料理に手をつける。その間、男は私を視界に入れることなく料理を注視している。

客が料理を口に入れたのを確認して、テーブルを離れる。次の客の配膳に向かうためだ。

「きゃっ！？」

また、悲鳴。

何か、おかしい。配膳を始めて気づいた。私が料理を置くと、客は一様に驚くのだ。その後、目の前の料理を不思議そうに眺める。首を傾げる客もいる。注文を伺うときも、肩を叩くまで気づかないし、必ず驚かれる。

確かに、私は存在感のあるほうではない。友人と話をしていても、聞き役に回るほうだ。だからと言って、話しかけて気づかれぬほど

酷くはない。まるで、幽霊にでもなったような。
「まさか」
本日十人目の配膳を終え、小さく呟く。人の流れも穏やかになった。宿屋の収容数から考えて、一区切りと考えていいだろう。カウンターの端に、目立たぬように座り息をつく。
幽霊になったような？　まさか。私は生きている。物に触れるし、食事も出来る。会話だって出来るし、足が透けているわけでもない。
「アスハちゃん！」
ロティア――スウォンの母親が大声を上げた。びくりと肩を震わせ、ロティアを見る。カウンターまで来て、困ったように私の名を叫んでいる。
「アスハちゃん、アスハちゃん――ちょっと手伝って欲しいの、出てきて頂戴」
ありえない。おかしい。頭がぐるぐる回る。今すぐ耳をふさいで顔を覆ってしゃがみこみたい気分だった。見ざる言わざる聞かざる――。
「アスハちゃん」
だが、ロティアは相変わらず私を呼ぶ。目の前にいる、私を。まるでそこにいないかのように振舞って。
「ロティアさん、ここです」
ロティアの目の前に移動して、声を出して告げた。しかし、ロティアの瞳は私を探してあちこちにさ迷う。
「ロティアさん」
ロティアの袖を引っ張る。途端、ロティアは私のいる位置に焦点を定めた。
「あら、アスハちゃん。どこにいたの。探していたのよ」
「すみません」
掴んだ袖を、そっと離す。ロティアは私の存在を認め、ほっとした表情をした。私が消えたと心配したのかもしれない。
「悪いけど、ちょっと手伝ってもらえるかしら。スウォンの部屋に

食事を持っていって欲しいのよ。調理場のほうに料理があるから――」

ロティアの声を聞きながら、途方にくれる。

声に出して、触れる。なぜか、この一連の動作を行わないと気づいてもらえなくなっているらしかった。

「給仕の手伝い、どうしよう……」

前触れなく料理が湧いては、客もさぞかし驚くだろう。幸いなことに、ロティアはまだ気づいていない。だが、注文を聞くのに一々体に触れる給仕に突然湧き出る料理。セクハラな上に不気味だ。学校の怪談も真っ青。怪奇宿屋として噂になるのは時間の問題だ。

結論。給仕は無理。

思いもよらなかった。せっかく職を手に入れたのに、まさか一日で転職先を探さねばならなくなるとは。異世界二日目にして、野宿は勘弁したい。畜生、異世界といったら美形どころに囲まれて、うっはうはの逆ハーレムじゃないのか。カモン、王子！　迎えに来い！などと、冗談を言っている場合ではなく。

幸いにして、宿屋は特別忙しいわけではなかった。来週に王子の誕生祭があり、その関係で一時的に客が増えてはいるらしいが。元々予想していたので、予め準備はしていたらしい。

つまり、私の手伝いはなくてもかまわないのだ。スウォンが、宿に泊まるための建前を、好意で用意してくれただけにすぎない。もちろん、まったく役に立っていないということはない――だろうと思いたい。しかし、怪奇宿屋としての噂を流すことになるくらいなら、手伝いではなく宿代を払った方が向こうも助かるだろう。

「はあ……」

スウォン用の朝食に目を落とし、深く深くため息をつく。

――仕事、探そう。

現実って、厳しい。

六、転職

風に揺れる木々の音。葉の隙間から柔らかに注ぐ光。時折囁くように鳴く小鳥の声。一歩踏み出すと、降り積もった葉の感触が足に柔らかく伝わる。時折小枝を踏み鳴らし、当てもなくさ迷う。

カサ、と枯葉が踏みしめられる音が響く。辺りを見回すと、白い兎がちょんと座っていた。近くに人間がいるというのに、兎は逃げる様子もない。少し遠くにいる兎に近づこうと、足を踏み出す。歩くたびに、枯れ枝の折れる音が響くが、気にしない。兎はその位置から動く気配はなかった。

手を触れる位置まで近づいて、立ち止まる。しゃがんで見ると、ぴくぴくと耳が震えているのが良く分かった。いつ見ても可愛い。小動物は、可愛らしいだけに罪悪感と自己嫌悪が未だに抜けない。せめて一息に――と充分に狙いを定め、小刀を構えた。

「イノシシに兎に鳥。お、今日は卵まで。大量だね」

馴染みの店主に、獲物の入った袋を引き渡す。店主は上機嫌で中身を確認すると、服のポケットから紙幣を取り出した。

「はい、報酬。いつもありがとさん」

「ありがとうございます」

紙幣を受け取って、財布にしまう。誰かに目をつけられる可能性はないが、結構な大金だ。安月給で日々生活していた身としては、早々に仕舞っておかないと落ち着かなかった。

そう。給仕の仕事に無理を感じた私は、狩りで生計を立てる事を思いついた。存在が認識されにくいのは動物にも適用されるようで、狩りは非常に順調に金を溜められた。どんなに近づいても、獲物は私に気づかないのだ。不思議なことに、どんなに音を立てても。

油断している獲物を、至近距離で攻撃するだけなのだ。これほど簡単なことはない。

狩りを始めて今日で七日目だが、随分慣れてきた。最近では、中型動物もしとめられるようになってきていた。重要なのは一撃目だ。一撃でしとめる、もしくは抵抗できないほどのダメージを与えなければならない。だが、慣れれば苦もなくこなせるようになった。そろそろ大型動物にも挑戦しようと思っている。大型動物は報酬がいいのだ。

「アスハ」

「スウォンさん。今帰りですか」

振り向くと、笑顔のスウォンがいた。

狩りで得られたものは、金だけではない。何故か認識されにくい存在を、コントロールできるようになっていた。獲物相手に自分の存在の認識、非認識を確認することが出来たからだ。また、他者が私を見失う、逆に認識する法則も見出すことが出来た。

まず、基本的には認識されない。これがデフォルトだ。この状態から、他者に認識してもらうにはいくつかの条件がある。

一つ、私が他者に認識されるよう意識すること。

ここは感覚的な問題なのだが、どうも「私はここにいる」と意識する――感覚的に言えば、気張る――と他者に認識されるようになるらしかった。しかし、この方法で認識してもらうのは、精神的に疲れる。常に気張るのは、長時間続けることは出来ないからだ。

二つ、相手に触れること。

初め私は勘違いしていたのだが、大事なのは触れること、らしい。どうも接触することで強制的に相手に認識させることが出来るらしい。

三つ、誰かと会話していること。

これはどうやら、誰かが認識している状態だと、他者も認識しやすいらしかった。今も、店主と話している状態だったので、スウォンは私を認識することができた。

他にも細かい条件はあるようだが、基本はこの三つだ。そして、これだけ分かっているだけで、充分に有効活用できるようになった。厄介なこの現象も、慣れれば充分に有用だった。

「ああ、今日は午後から誕生祭だからね。アスハを案内しようと思って」

スウォンは隣に並ぶと、手をとった。節くれ立った掌は、冷え気味の手を温めてくれた。

誕生祭とは、この国の王子の誕生日を祝ったお祭りのことだ。出店や催し物が予定されており、活気のあるイベントらしい。

「いいんですか？」

出会いからして予想がつくと思うが、スウォンは女性関係が激しかった。ここ七日で、複数人の女性の影が見え隠れしている。その中の誰かと、イベントを楽しむものかと思ったのだ。まあ、いずれも人妻のようだったが。

「アスハも楽しみにしていただろう？」

「はい。すごく楽しみにしてました」

この世界の祭りには興味がある。狩りでお金も随分溜まったので、息抜きも出来るだろう。

狩りは意外に金が溜まる。小動物は日銭にしかならなかったが、中型のイノシシを狩れるようになってから余裕が出来るようになった。大体、一匹で半月生活できるくらいの金銭がもらえるのだ。宿代やスウォンに借りた食事代を払っても、充分な金額が手元に残った。生々しい手段だが。

「だったら、案内役が居た方がいいよ。人で賑わうし、出店も多いからね――はい、これあげる」

言いながら、スウォンは何やら紙を差し出した。受け取って、目を落とす。周辺の地図が載っており、小さな文字で店名が書き込まれている。

「ありがとうございます。パンフレットですか？」

手書き感満載の出来に、過ぎ去った学生時代を思い出した。文化

祭のしおりがこんな感じだった。
「そう。こういうのないと、迷うよ」
裏返すと、時間帯で催されるイベントが列記されていた。鐘の数で大体の時間を示しているらしかった。この世界では、時刻に応じて鐘が鳴らされる。時間に関しては若干アバウトだった。
「なるほど。品目と値段が書いてあるのもありがたいですね。懐も暖かいですし、色々見て回れそうです」
聞いたことのない料理名は興味がそそられる。異世界独自の料理法や食材もあって、興味が尽きない。たまにゲテモノかと思える食材もあるが、形が分からなければ気にしない性質だ。
そういえば、友人にはよく言われた。大人しそうな顔して豪快。褒め言葉だと思っている。
「お金、そんなに溜まったの？」
唾液を溜めながら料理に思いを馳せていると、スウォンが心配げな口調で尋ねた。
スウォンはこの仕事に難色を示していた。確かに、女子供がやる仕事じゃない。危険だし、血生臭いし。実際、私だってこの仕事を始めるのには抵抗があった。今だって、命を摘み取る瞬間は抵抗がある。元の世界では、ただのＯＬをしていたのだ。牛や豚は捌かれて食材となった状態でしか見たことがなかった。初めて狩りをした日は、さすがに肉を口にする気にはなれなかった。三日で慣れたが。
「辞めませんよ」
スウォンの言葉を予想して、先回りする。
今だって、できればこんな仕事は辞めたい。スウォンの心配しているような、命の危険はない。だが、罪悪感や嫌悪感を消し去ることは出来ないのだ。慣れる事はあっても。偽善だが、狩りの直後に精神が揺らがないかといえば嘘になる。
それでも。
それでも、私は狩りを続ける。元の世界に帰るために。他の方法は、現状の私には難しい。給仕は言うまでもない。ならば、店番？

前述の通り、人に認識されない状態で客商売は無理だ。では、騎士、護衛、賞金稼ぎ？　力のいる仕事は無理だ。自慢じゃないが、運動神経は良くないし、体力もない。針子？　調理担当？　私はそんなに器用じゃない。簡単なほつれを繕うくらいならまだしも、金を貰うほどの技量はない。料理も同じだ。無論、少しずつ上達させることは可能だろうが、そんな悠長なことは言ってられない。目の前に効率的な方法があるなら、それを優先するのは当然だ。

「でも」

スウォンはなおも食い下がった。心なしか、握られた手の力が強まる。緑の瞳が迷うように揺れた。

魔法学校に行くためには、金が要る。この仕事をする目的を、スウォンはそう捉えている筈だ。あからさまに顔を顰めても、スウォンは続く言葉を口にしなかった。

ここで意地を張るのは薄情なのか。スウォンはもっと頼ってもいいのに、と言いたげだ。思わず顔を顰めそうになるのを抑える。

頼る？　何故。身寄りのない人間に、住む場所を提供してくれるだけで有難いのだ。宿代は全て清算したが。何故、それ以上をスウォンに望む？　何故これ以上の要求を、望める？

金が必要だから用意しろと頼めと？　いや、正直に異世界から来たと告白し、ルロールを紹介してもらうとでも？

言ってどうするのだ。ルロールが召喚魔法を使えるかすら不確定だ。仮に使えたとして、相手の善意に付け込んでお願いするのか？

たとえその境遇が不憫であろうとも、赤の他人に見返りも用意せず頼れるわけがない。外国旅行中に有り金全部すられたからといって、タダで飛行機のチケット用意してください、なんて恥知らずなこと、誰が言う？　スウォンは確かに親切だ。しかし、会って数日しか経ってない。そんな人間の善意に付け込む気はないし、付け込まずとも打ち明けておこうと思うほど信用しているわけでもない。所持金ゼロで呆然としている時に、食事をおごってもらったとして、その程度で相手を全面的に信用しないだろう？　銀行口座を教えて

引き落としの手続きを任せられるほどには、信用しないだろう？
そういうことだ。
ただ、あるいは。
若ければ、そうしていたかもしれない。スウォンが私に害を成すことはないだろうと、心のどこかでは分かっている——信じている。だから、相手に迷惑と知りながら、自分の甘えを御しきれずに泣きついていたかもしれない。しかし、私は若くないのだ。自分の身は自分で面倒を見なければならない。たとえ、理不尽で異世界に召喚されたとしても。泣いて喚いて縋りつけば、誰かが手を差し伸べてくれる年齢は、とうに過ぎた。
私はスウォンを見上げて、笑った。安心させるように。できるだけ柔らかな印象を与えるよう努力して。
「スウォンさん」
握られた手を一旦解いて、パンフレットを差し出す。スウォンに見えるようにして、あるお店を指し示して見せた。
「私、このクウォッカチーフって言うの食べてみたいです」
スウォンの目が細められた。スウォンの憂慮は払えただろうか。
「アスハ……」
「ほら、早く！」
私は急かすようにスウォンの手を握って、引っ張った。
後から、スウォンの苦笑する声が聞こえる。
「それ、酒だよ」
繋いだ手を振り上げたまま、一瞬固まった。
「……」
異世界の料理は、時にこちらの予想を覆す。

七、誕生祭

クウォッカチーフは、スウォンに止められた。こちらの世界では、酒は十六を過ぎてからしい。十二と思われているのだ。堂々と飲酒するわけにはいかない。涙を呑んでジュースを頼んだ。これはこれで美味しかったが。

今は、スウォンに手を引かれながらクレープらしきものを食べている。薄い小麦粉の生地にレタスと人参――のようなものが挟んである。レタスと人参は似た別のもの、で味は全然違う。食感は同じだが、ゼリーのような甘い味がした。

ここの世界の料理は、基本同じものが多い。だが、たまに想像を超える食材や料理があるので油断できない。

ちなみに、レタスも人参も普通にある。さすがに和食はないが、洋食の主だった料理は同じものが多い。煮込み料理とか、ステーキとか。饅頭はないが、焼き菓子はある。さっきも、クッキーをつまんだばかりだ。

「美味しい？」

スウォンが苦笑しながら尋ねた。クレープは食べ終わった。今はジャガイモを揚げた物を食べている。

「はい。美味しいです。やっぱりジャガイモは万国共通ですよね。食べます？」

「うん。じゃあ、ひとつ」

紙袋を差し出すと、スウォンは一つまみして口の中へ放り込んだ。自分ももう一つ口に放り込む。

ふと、刺激的な香辛料の匂いが鼻をくすぐった。カレーっぽい匂いだ。匂いにつられてふらふらと歩き出す。どこの店だろう。匂いに神経を集中していると、腕を引かれた。不思議に思ってスウォンに視線を向けると、背後から人が走り去るのが見えた。スウォンが腕を引かなければぶつかっていただろう。

「ありがとうございます」
「うん。人ごみが多いから、気をつけてね」
私は頷いて、匂いのする方向へ向かった。今度は周囲に注意して。カレーの匂いは、煮込みスープだった。日本のカレーと違い、さらさらのスープにパンを浸して食べるらしい。立ち食いするのは難しかったので、スウォンに頼んで休憩することにした。屋外カフェ形式の椅子に座る。スウォンはビールを飲んでいた。
上下する喉元に熱い視線を送る。
う……羨ましくなんかないんだから！
「随分、人が増えてきましたね」
時刻は午後二時ごろ。祭り自体は正午からだが、開始に比べると人も随分増えた。店員の客引きは活気があるし、歩くのも困難になるほどの人口密度だ。この一帯だけ、若干気温が上がってはいまいか。
「そうだね。これから、メインイベントが始まるからね」
「メインイベント？」
「今日は王子の誕生祭だろう？　王子のお披露目と恒例のパフォーマンスがあるんだよ」
スウォンが白身魚のフライを見ていたので、差し出してやる。香辛料のきいた辛さは酒に良く合うことだろう。スウォンはフォークでフライを刺した。代わりに胡椒まみれの肉焼きを差し出してきたので、ありがたく頂いた。しょっぱい。けど美味しい。
「パフォーマンスって何するんですか」
「それは見てのお楽しみ。ちょうど良く、ここから見えるから。ほら、始まるよ」
スウォンの視線を追う。城のバルコニーに、三人の人が居るのが見えた。遠すぎて顔の判別がつかない。だが、配置的に真ん中が王子だろう。多分。
目を凝らして見つめていると、突然ラッパの音が響き渡った。やけに大音量で、近くで鳴っているようだ。周りを見渡すと、スウォ

ンが近くの噴水を指差した。水底で魔方陣が光っている。
「便利、ですね」
「だろう？」
スウォンは自慢げに笑った。
ラッパの音は鳴り止み、今度は御付の者の口上が始まっている。
「晴れ渡る気候に恵まれたこの良き日、王子は本日を持って二十五の御歳を迎え――」
お付きの者、良い声してるな。どうでも良い内容だけど。
口上を聞き流し、イカの姿焼きに手を伸ばす。先ほど出来上がったばかりのものだ。イカの中に香辛料のきいた温野菜が詰まっている。焼いたイカの風味と、野菜の歯ごたえ。香辛料がピリリと味を引き締める。うん、美味い。お米が欲しい。
口上が終わり、王子の挨拶に移った。内容はよくある挨拶で、非常につまらない。
朝礼の校長の長話を思い起こさせる。淀みなく、流麗に紡がれる言葉は眠りを誘う。内容はためになるのかもしれないが、大抵の人間には響かない。お上品過ぎるのだ。良くも悪くも。
しかし、よく皆こんなもの聞いていられるな。退屈になって、視線を巡らせた。見ると、他の人間も食事に集中している――かと思いきや、バルコニー近くで見物している人たちは、熱心に話を聴いていた。異世界の人にとっては、これはこれで面白いのだろうか。
再び料理に視線を戻したところで、周りから歓声が上がった。
「それではルロール、召喚の準備を」
御付の者の言葉に、私は目を剥いて立ち上がった。
なんだって？
「はい」
ルロールは返事をして、一歩前に出た。呪文らしき文句が途切れ途切れに紡がれる。床に魔方陣があるのか。紫色の光が床から発光した。
ちょっと待て。ルロールだと？　王宮仕えの魔法使いのあのルロ

ール？　いや、それよりも召喚だと？　何を召喚するというのだ。
これから何が始まる？
私の混乱をよそに、魔法は着実に構築されていく。
ルロールの声が止まった。魔方陣の発光が強まる。
目を覆うような光の後。
そこには、一人の男性が出現していた。

八、非常識

出現時、座ったままの状態だった男は、回りの景色を確認すると立ち上がった。
「え？　え？」
男がきょろきょろと頭を振る。手に何かを持っている。あれは多分、携帯ゲーム機だ。
「え？　あれ？　なにここ？　俺確か、家に居たよな」
男は目に見えて取り乱している。間違いない。男は異世界から召喚された。ルロールは、異世界召喚をやらかした。
「突然お呼び立てして申し訳ありません」
御付の者がすっと前へ進み出た。流れるような動作でお辞儀をする。男は釣られたようにお辞儀を返した。
「私、ディレス・ラットハーンと申します。こちらがエルシュ王子です」
「あ、はい。どうも」
男は戸惑った声で返事をした。見えないが、きっと目を何度も瞬いているに違いない。信じられないだろう、夢かと思うだろう、分かるよその気持ち。私は男に同情した。
「本日貴方をお呼びしたのは、何度も我が国を救っていただいた異世界の方々と少しでも交流を図るため――」
「おい、それは何だ」
王子は男の持っている携帯ゲーム機を指した。
「え？　あ、ＰＳＰだけど？」
「ぴぃ・えす・ぴぃ？　何だそれは」
雛鳥か。王子は微妙に可愛い発音をした。
「ゲーム機だよ。ほら、こうやって遊ぶんだよ」
男はゲーム機を王子に差し出したようだった。王子の目の前で操作しているのだろう。ボタンや十字キーの操作音が微かに聞こえた。

「ん？　なるほど、操作に合わせて絵が動くのか。凄いな、面白い」
「だろ？　ここをさ、こうやって……十字キーを回転させると……」
「おお、何か画面内の人が回った！」
「すげーだろ？　カッコいいよな、この技」
「他には？　他にはないのか？」
「あるある！　他にはな……」
何のゲームだ。何をやってるんだ。画面を映せ。
男と王子は楽しそうに会話を始めた。何だこの展開。お前ら楽しそうだな畜生。
王子と男のパフォーマンスを見ている国民も、興味深そうに背伸びしていた。背伸びしたところで位置的に画面など見えやしないのだが。中には飛び跳ねている人も居る。どんな道具か周りの友人と論議しているものもいる。国民は意外にもこの趣向を楽しんでいるらしい。
しかし、楽しげな空気も次の王子の言葉で一転することになる。
「気に入った！　その道具を俺に献上しろ」
「は？」
そうだよな。普通の現代人だったらその反応だよな。お前のものは俺のものか？　どんな俺様だ。
「褒美はやろう。そうだな……この石をやろう」
王子は首に下げていた大粒の石を差し出した。緑色の石だが、宝石の類かは分からなかった。
「は？　なんでそんな石っころと交換しなきゃなんないの？　これ凄く高かったんだけど」
男の言い分はもっともだ。携帯ゲーム機は高い。下手すればちょっとしたアクセより高いのだ。ちょっと綺麗なただの石では交換に値しない。あの石が本物の宝石であれば別だが。ただ、仮に本物だとしても、あの大きさは売買に酷く手間がかかりそうだが。
「何？　これは魔力を込めた魔石だぞ？　何が不満だ？」
ああ、それ余計にいらん。この世界での魔石の価値は知らない。

もしかしたら、この世界の人からしたら破格の申し出なのかもしれない。だが、日本に戻ればそれはただの石だ。確実に。

男もそう思ったのだろう。あからさまに面倒そうに口を開いた。

「魔石？　いやそういうオタク発言はイタイよ。悪いけど、これバイトして買ったんだ。しばらく売る気はないよ。欲しけりゃオークションとかで安く売ってるから、自分で探せば」

随分とはっきり言うな。男は日本の学生のようだが、気づいていないのだろうか。自分の現状に。彼は今、オタクも真っ青の異世界トリップ真っ最中だということに。

「オークション？　なんだそれは」

「めんどくせえな。それくらい自分でググれよ」

その言葉で、周囲の人間は凍りついた。王子は無言だ。

男の口調には蔑みが含まれていた。意味は分からなくても、見下されていることは感じただろう。

「どうしても、そのＰＳＰとやらは譲っていただけませんか」

御付の者――ディレスだったか――が、尋ねた。抑揚のない口調だった。

「しつこいな。だから、売れないって言ってんじゃん」

「わかりました。無理を言って申し訳ありません。本日はお忙しい中――」

「ったく。いくら夢とは言え、コスプレ男たちに囲まれるってありえねえよ。なんか服装もおかしいし。せめて見るならセクシーなエルフが出てくる夢とかさあ」

夢だと思っていたのか。男はぼやくように呟いた。恐らく小声だったのだろうが、男のセリフは一言一句はっきり聞こえた。魔法がしっかり拡声器代わりを果たしてくれた。

「お主」

押し殺した低い声が響いた。王子だった。

男を除く周囲の人間がぴしりと固まった。いつの間にか、周囲の喧騒も止んでいた。国民は皆、固唾を呑んで見守っていた。

「王子」
ディレスが窘めるように王子の腕を押さえた。だが、王子はその腕を乱暴に振り払った。
「お主――先ほどから黙っていれば随分と好き勝手言ってくれるな。よほど俺に喧嘩を売りたいと見える」
王子は静かにキレていた。男に向かって王子は一歩足を踏み出す。異様な空気に怖気づいたか、男は一歩距離をとった。なおも距離を詰めようとする王子を、ディレスは止めた。
「ルロール」
ディレスの言葉に、ルロールは頷いて詠唱を始めた。先ほどと同じように、床の魔方陣が淡く光りだした。
「ディレス、お前――邪魔するな！　詠唱を止めよ、ルロール」
「王子。彼は貴方の臣下ではありません」
ディレスはぴしゃりと言い放つ。王子はその言葉に一瞬ひるんだ。そのタイミングを見計らったかのように、ルロールの呪文が止まる。眩い光が辺りを包み――男の姿は消えていた。

九、失敗

イカの姿焼きが冷めた。

男が強制送還された後、王子は何も言わず奥へと退場した。白けた空気に、ディレスから謝罪があり、余興は終了となった。民衆は活気を失い、散っていった。今は人もまばらになっている。

私自身も、予想外の出来事に呆然とした。

余興が異世界召喚だったこと。召喚理由がくだらなすぎたこと。王子が子供のように駄々をこねたこと。用なしと判断されるや否や、実にあっさりと元の世界に戻されたこと。

特に、ろくでもない理由で召喚しといて無理難題を吹っかけ、気に入らないとなれば実力行使に出ようとした王子に対しては、怒りが湧いた。

「何だったんですか、あれは」

冷めた料理をつつきながら、スウォンに問う。やや憮然と尋ねれば、スウォンは苦笑して答えた。

「今年はまた酷い失敗になったね。子供に本気で激怒する王子もなかなか面白くなかった？」

「面白いとか面白くないとかの問題ですか」

って、ちょっと待て。今、なんて言った？　疑問に思った私に気づいたのか、スウォンは上機嫌に話し始めた。

「去年は猫を召喚したんだよ。その時のあいつらの表情も悪くなかったけどね。もうさ、まんまハトが豆鉄砲食らったっていう表情でさ。あれはアスハにも見せてやりたかったなあ。面白かったよ」

あはは、とスウォンは声を出して笑い始めた。明らかに酔いが回っていた。気づけばテーブルに乗る空き瓶が増えている。何が入っていたかは想像に難くないが、正直それどころではなかった。

「え、これ恒例行事なんですか」

目を丸くして問えば、スウォンは笑って頷いた。

「恒例って言うか、去年からなんだけどね。去年の失敗を省みて、今年は予行練習もしたみたいだよ。初回は失敗して、誰も呼び出せなかったらしいけど」

ちょっと待てちょっと待てちょっと待て。

嫌な予感がするんですけど。

「予行練習……ですか」

「そうそう。一週間ほど前だったかなあ。その時は何も召喚できなくて、ルロールは大目玉食らったんだって。おかげでこの一週間、あいつろくに寝てないんじゃないかな」

一週間。妙な一致が私の顔を引きつらせた。

私がこの世界に来たのはいつだ？　九日前――そう、予行練習があったであろう日時と一致する。

体中の血が逆流した。

「ふざけるな」

私は低く呻いた。血が沸騰しているようだった。テーブルの下で握りこぶしを作る。腕が震えるほど力を入れて、叫びだしそうになるのを耐える。

予行練習だと？　誕生祭の余興に？　しかも、失敗するほど不完全な状態のくせ、無理に行使しただと？

異世界から呼ばれるって言うのがどれだけ迷惑か分かっているのか。誰にだって生活がある。仕事中かもしれない。家で寛いでいる時かもしれない。間が悪ければ、入浴中かもしれない。突然予告なく呼ばれて、大勢の前にさらして。ろくな説明もないまま、見世物にするだと？　何様なんだ。異世界人がそんなに偉いって言うのか。

黙ってしまった私を不思議に思ったのだろうか。スウォンは笑うのを止め、私をじっと見つめた。

心の読めない視線に、はっと我に返った。スウォンは悪くない。八つ当たりしてどうする。

「王子も、統治者としては悪くはないんだけどね」

スウォンはポツリと呟いた。

怒りで滾った熱がすっと冷えていく。スウォンは悪くない。それでも、王子をかばう言葉は、今の私には受け入れ難かった。

思い返せば、余興の最中、観客は皆王子の味方だった。召喚自体に疑問を持たず、見世物として楽しんでいた。突然召喚された異世界人が王子の要求を拒むのを、不思議そうに見ている者も居た。なぜ王子の命令に従わないのかと責める様な目で見つめる者も居た。召喚された者の都合など、欠片も考えていない様子だった。

所詮は他人事なのだろう。それは仕方ない。スウォンも、召喚された異世界人に対して同情を感じている節は見られたが、基本的には王子側の人間だ。もちろん、それを責める気はない。誰だって、他人に起こったことに真の意味で共感なんて出来やしないのだ。

私は、ぬるくなったお茶に手を伸ばした。残りを一気に飲み干すと、爽やかな花の香りが鼻を抜けて行った。頭を冷やせ。今すべきことは怒りに身を任せることじゃない。情報を集めて、元の世界に帰る事だ。ついでに、王子を一発殴れれば尚良し。

「そうですね。あの、スウォンさん。あの男性は、ちゃんと元の世界に帰れたんでしょうか」

「ん？　ああ、多分帰れたと思うよ。召喚ってのは異世界とこちらの道筋を作ることらしいんだ。だから、一旦道筋が出来てしまえば、帰りは簡単らしい」

なるほど。ということは、私も帰る事が出来るはずだ。時間が空いてしまったことは気になるが、恐らく問題ないだろう。過去、国の危機を救ったとされる異世界人は、数日を経てから帰還したはずだ。

「そうなんですか。それは良かったです。家に帰れなかったら可愛そうですから」

私の言葉に、スウォンは憐れむような視線を向けた。何故か乱暴に頭に手を乗せられ、力強く撫でられた。

「ごめん……嫌なこと思い出させたね」

言われて思い出す。そういえば、両親を失って家に帰れなくなっ

た設定だった。

「いいえ。気にしないで下さい。それよりも、私、ルロールさんの魔法を見て凄く感動したんです。あんな凄い魔法を使えるひと、初めて見ました」

テーブルに手をついて乗り出す。息を弾ませて喋る。興奮を装うと、スウォンは嬉しそうに目を細めた。

「うん、良かった。趣味の良いものではないけど、大掛かりな魔法だからね。アスハには見せてあげたかったんだ」

「はい！　素晴らしかったです！　ルロールさんが呪文を唱えるときに光る魔方陣が紫色で凄く神秘的で！　発動の瞬間の光も力強くて、私、そのときびっくりして鳥肌立っちゃいました」

召喚の感想を大げさにまくし立てる。いかにルロールに興味を持っているか伝えねばならない。スウォンはルロールと知り合いだったはずだ。ルロールと会うには、紹介してもらうのが一番手っ取り早いのだ。

ただし、あくまで「魔法に憧れている少女として」だ。決して「異世界召喚された被害者として」ではなく。今日の余興でよく分かるが、この世界で異世界人は「見世物」だ。スウォンも、この見世物を容認している節がある。今、自分の身を明かすのは避けたい。ないとは思うが、正直にスウォンに話して、王子に引き渡される可能性も否定できないからだ。王子の見世物、暇つぶしとして。本来なら、ルロールに話すのすら不安だが――その場でなら、対処も可能だ。こちらにも考えがある。少々強引な手を使っても、無理にでもどうにかしてみせる。たとえ脅してでも。

非情と言うなかれ。最初は、何かの事故でこちらに来たと思っていた。だから「お願い」して帰してもらうつもりだった。報酬も用意するつもりでいた。しかし、実際は「彼らの失敗のせいで」召喚されていたのだ。こちらが下手に出る必要はもはやない。一刻も早くルロールと接触し、元の世界に戻すよう要求する権利が私にはある。

「そうだね……アスハは本当に魔法に興味があるんだね」
「もちろんです！　それに、今日のルロールさんの魔法は別格でした。私、あんな魔法使いになりたいんです！　ルロールさんってどうやって魔法が使えるようになったんでしょう？」
スウォンは考える素振りを見せた。もう一押しだろうか。更に言い募るように口を開く。しかし、言葉が発せられる前にスウォンが訊いた。
「ルロールに会いたい？」
よし！　かかった！
心の中でガッツポーズをとる。
「もちろんです！」
「そっか。それじゃあ、メイドの仕事やってみない？　王宮勤めだから、ルロールの手の空いたときに魔法を教えてもらえるかもしれない」
「え？」
予想外の答えが返ってきた。顔が笑顔のままで固まった。
「今すぐルロールを紹介してやれたらいいんだけど、確か、明日から遠方任務だったはずなんだよ。数日で帰ってくるから、それまで仕事に慣れておいてもいいんじゃないかと思って」
今日は流石に疲れているだろうし、大規模な魔法を使った後だから――とスウォンは続けた。確かに、大規模な魔法を使った後で無理して魔法を使わせるのは危険だろう。
だが。
「そ……、そうですね。えぇと」
だからと言って、スウォンの提案に素直に頷くのは躊躇われた。数日で帰ってくるのであれば、わざわざメイドなどする必要もない。金に余裕はある。数日の滞在費など余裕で賄える。
巧い断り文句を私は必死で考えた。
「それに、やっぱりアスハには危険な仕事はして欲しくないんだよ。給金は少ないかもしれないけど、安定しているし、アスハには向い

てると思うんだ。何より、お金が溜まったら魔法学校に通いながらルロールの話が聞けるし」

言葉に詰まった。

スウォンは真面目に私の将来を考えてくれていた。その場しのぎの「魔法使いになりたい」という嘘に。良心が痛んだ。ここまで言われて「否」とは言い辛かった。

「そ、そうですね。それじゃあ、是非……メイドの仕事やってみたいです」

しぶしぶそう言うと、明後日の方向へ思いを馳せる。

最悪、城に忍び込もうと思っていた。だが、ルロールが居ないのでは仕方ない。ここはスウォンの顔を立てておこう。たかが数日。ルロールの帰還を待つ間、ついでに王子の枕元に立って嫌がらせでもしてくればいい。あいつは一度殴ってやらないと気がすまない。

言い聞かせるようにして、スウォンの提案に頷いた。どうせ、ほんの数日だからと。

十、王宮潜入

背中の壁が冷たい。私は追い詰められていた。
「穢れない――美しい髪だ」
掬われた髪のひと房に口付けられる。青い目で熱っぽく見つめられた。
「欲しいものはなんでもやろう」
低く囁く甘い声。ふっと熱い息が耳元に掛かる。
「俺のものに、なれ」
「ご冗談を、殿下」
鳥肌を立てながら、笑顔で断る。
誕生祭の翌日、スウォンは私をメイド長に紹介してくれた。メイド長は優しい女性で、仕事について手取り足取り教えてくれた。そこまでは良かった。
良かった、のだが。
メイド長に簡単な仕事の説明と城内案内をされているときに、運悪く王子とすれ違ったのだ。王子は私を認め、気に入ったらしかった。メイド長に仕事の説明が終わったら自室に来させるようにと命じたのだ。その時のメイド長の表情は引きつっていた。一抹の不安を覚えないでもなかったが、立場上断れなかった。スウォンには迷惑を掛けたくはない。しぶしぶ王子の自室へと足を運び――現在へと至る。
「悪いようにはしない」
王子は頬に手を沿え、そのまま首筋まですすった。流れるようにメイド服の襟に手を掛ける。第一ボタンが外された。
「殿下」
王子の手を掴み、進行を止める。だが、王子は優しく笑うと、もう片方の手で私の手を引き剥がした。そのままつ、と鎖骨を撫で――中指が胸の中心に触れた。

「優しくする」
王子を突き飛ばした。
不意を突かれた王子は尻餅をつく。その隙にポケットから取り出したハンカチを、王子の目元に投げつけた。
王子から私の姿が消えたことを確認し――存在を消す。
私は基本、認識されない。だが、ある一定の法則で認識されるようになるのは確認済みだ。一度認識された状態を解除するには、その逆を行えばいい。
すなわち、会話を断ち切り、相手に触れていない状態を作り上げ、視界を断つ。視界を断つことで、継続していた「私が存在している」という認識を、見失わせる。
「どこへ消えた!?」
王子は立ち上がって部屋を見渡す。私を探す王子に触れぬよう避け、部屋の出口へと走る。
存在を認識されなくなった状態で、いくら音を立てても気づかれない。乱暴にドアを開け放つと、廊下を全速力で走る。
開け放たれたドアの状態に気づいたのだろう。私の存在に気づいてはいないはずだが、王子は追ってきた。どんな嗅覚だ。ぶつかってしまえば強制的に認識されてしまう。先ほどの恐怖もあり、私はそのまま走り続けた。直進上に、壁が見える。曲がり角に差し掛かり、右折しようと方向転換をしたところで、視界が白く染まった。
「うわ!?」
顔面に衝撃が走る。角を曲がったところで、誰かにぶつかったのだ。顔に感じる布の感触。体温。汗の臭い。さっと血の気が引いてゆく。人間に、接触してしまった。相手は私を知覚した。
まずい。相手は私を認識した。誰かが私を認識したとなれば、他者も私を認識する。つまり――王子も私を認識する。
「見つけた」
背後からの声に、固まった。
先ほどの王子の手つきを思い出し、背筋に悪寒が走った。王子は

確実に、服を脱がそうとしていた。逃げ出さなければ、あのまま行為に及ぶことになっていただろう。

どうしよう。ハンカチはさっき使ってしまった。廊下に使えそうな物はない。この状態で王子の視界を遮るには。

必死で考えをめぐらせる私の頭に、男の手がぽんと乗せられた。

「アスハに何か御用ですか、殿下」

天は見捨てなかった。

震える私を庇うようにして前に出たのは、スウォンだった。

「スウォンさん！」

スウォンの後に隠れると、王子が舌打ちをした。

「その女を寄越せ、スウォン」

「殿下……」

スウォンは呆れたように肩を竦めた。はっきりと断らないスウォンに不安を感じて、服の端を掴む。スウォンは私を引き寄せると、宥めるように肩を叩いた。スウォンの体温に、震えが落ち着いていく。

「聞こえないのか。寄越せ、スウォン」

「従えません。殿下もいい加減、歳相応の女性に目を向けたらいかがですか」

「それをお前が言うか。余計なお世話だ」

「恐れながら殿下。いくら殿下といえど、十二の子供を相手にするのはいかがなものかと思いますよ。アスハに何をしようとしていました？」

「知らん。俺が法だ。それに、何も強制したわけではない。そいつも同意の上だ」

おい。よくもそんな戯言堂々と言えるな。

「そうなの？　アスハ」

んなわけあるか。

頭を振って否定する。

「部屋に呼ばれていきなり壁に追い詰められて。いきなり胸を触ら

れました」
スウォンは深く嘆息した。
「人妻の方が大きくていいのに」
スウォンは小声で呟いた。
ちょ、待て。それは聞き捨てならないぞ。助けてもらっておいて何だけど、確かに胸は小さいけど、本人を前にして言うか。ここで言うか。今言うことか。
「ふん、脂肪の塊の何が良い。重要なのは感度だ。鳴かせ縋らせるのが良いんじゃないか」
お前も、何を言う。話に乗るな。子供の前でする話じゃないだろ。
「はッ。感度がよくなきゃ駄目なんて、自分のテクがない言い訳じゃないですか」
張り合うな！　お前ら、私が居ることを忘れてないか？
「なんだと？」
王子も怒るな！　そんなくだらないことで。
二人は無言で睨みあう。先に、スウォンが折れた。
「まあ、女性の好みはともかくとして。殿下、お話があります。少々お時間をいただけますか」
「ならん。その女を寄越せと言っている」
「アスハ。俺はこのおじさんと難しいお話があるからね。一人でメイド長のところまで行ける？」
「おじさんとは何だ、スウォン。俺にそのような口を利いてただで済むと思っているのか」
「はい。スウォンさんも気をつけて」
「うん。いい子だね」
スウォンは私の頭を撫でた。
「こら、無視するな。聞いているのか」
「聞いていますよ。陛下とディレスにもご列席いただきましょう。ちょうど殿下に見合う素敵なご令嬢の話を耳に入れたんです」
王子はさっと青ざめた。

「な……、待て、それは……！」
「さあ、国の行く末についてしっかりとお話しましょうね。殿下」
スウォンは王子を引きずっていった。呆然と見つめる視線に気づいたのか、一度スウォンはこちらを振り返り、安心させるように手を振った。それに応えて手を振り返す。スウォンの姿が見えなくなってから、息をついた。
「ロリコンかよ、王子」
私の中での王子の評価は、最下位に落ちた。

十一、不審者

王子はスウォンに灸を据えられたのか、とりあえず大人しくなった。あれから二日。昨日は仕事中声をかけられることもなかった。今日も王子の姿を見ていない。

単に王子が忙しいだけかもしれないが。

「メイド長、終わりました」

声をかけると、メイド長は軽く目を見張った。突然湧いたように見えたのだろう。

「いつの間に。それじゃあ、ベッドメイキングの方を手伝って頂戴。今日はあちらで人手が足りなくて忙しいようだから」

「かしこまりました」

詳しい話を確認して、待機室を出る。整備する具体的な部屋を頭の中で反芻していると、前方からメイドが歩いてくるのが見えた。メイド仲間と連れだって、何やら話をしている。

「ねえ、聞いた？　深夜に出る不審者の話」

「あ、聞いた聞いた。突然後ろから抱きつかれるんでしょ？　でも、不審者って言い過ぎじゃない？　誰かと間違えたんじゃないの」

「ま、実際のところはそうでしょ。悲鳴上げたら逃げたって話だし。でも、怖いよね」

「まあねえ。いきなり、空き部屋に連れ込まれそうになったらね」

「え、何、部屋に連れ込まれたの？　それ初耳」

「いや、実際には連れ込まれてないよ。連れ込まれそうになって抵抗したら逃げてったらしいから」

「そうなんだ。被害なくて良かったけど、ちょっと怖いね」

「そうだねー。でもさ、結構格好良いらしいよ？　その不審者」

「えー、ただのデマでしょ、それ。後ろから抱きつかれてなんでそんなの分かるの」

「だよねえ。後ろ姿とか服装とか抱かれ心地がよかったとか色々言

われてるけど、まあ、話半分だと思うよ」
「ああ、身なりが良かったんだ」
「そうそう。やっぱこの仕事って、玉の輿目当ての人が多いじゃない？　多少無理があっても夢見ちゃうんでしょ」
女性たちは私に気づかず、喋り続けた。さすがに待機室の手前で口を噤んだようだが。
それよりも。先ほどの女性たちの話は気になった。
私も、メイドになってからはこちらに住み込みで働いている。メイドの仕事は朝早く夜遅い。加えて給金が安い。よっぽどの事情がない限りは、住み込みで働く。スウォンとロティアは寂しがってくれたが、私も今は城で寝起きしている。当然、夜遅くに城内を歩くことも多い。その不審者とやらに遭遇する可能性がないとは言えなかった。
ただ、一昨日までは私は対象外だと思っていた。一昨日の被害者は侍女だったのだ。
しかし、今回の被害者は私と同じハウスメイドだったのだ。被害者は、まだ入ったばかりの可愛らしい娘だった。
不審者は一体何が目的なのか。誰を対象にしているのか。ただの変態なのか、別の目的があるのか。使用人を狙っているのか、女性なら誰でもいいのか。それとも、特定の誰かを狙っているのか。
先ほどの女性たちの想像通りなら良い。恋人と良く似た後姿に思わず抱きついた――というなら。しかし、単に女性の体を狙った変質者の仕業だとしたら――
頭を振る。取り留めない思考を、断ち切る。考えていたら、目的の部屋までたどり着いていた。
念のためノックし、返事がないことを確認する。気づかれぬとも、何もしないで入室するのは収まりが悪い。ここは客室だから滅多に人がいることはないのだが。さすがにぽっと出の新人に王室関連を任せることはしない。
部屋に入って、ベッドのシーツを剥がす。新しいシーツを広げ、

空気を含ませるように被せ、しわが出来ないように設置する。最後に簡単に部屋の調度品などを確認し、これでこの部屋は終了だ。次は、隣の部屋。

意外にも、この仕事は今の私に合っていた。メイドといえば華やかな女性を思い浮かべる人もいるかもしれない。だが、実際はその逆だ。侍女辺りはまた別らしいが。むしろ、メイドは目立たない方が好ましい。目上の人と「口をきくのも許されない」というほど厳しくはないが、小人のようにいつの間にか仕事を終わらせておく、というのが好まれる。そういった意味では、私はこれ以上ないほど適していた。人が居ようが居なかろうが、普通に仕事して高い評価を得られるのだ。

今も、執事が自室で休んでいる最中に、堂々とシーツ替えをしている。当然、執事は気づいた様子もない。というか、これだけ大げさに振舞って何故気づかない。ベッドメイキングを終えると、部屋の扉を空け、堂々と退出する。執事の視線は今週のシフト表を見つめたままだ。

「しかし部屋、多いなあ」

最後の担当を終え、呟く。あとはこの古いシーツを洗濯担当に渡して終了だ。

夜九時。食事も終えて、入浴も終えた。この世界は、風呂の概念があるので有難い。使用人でも専用の浴場があるのだ。さすがに部屋に備え付けではないし、入浴可能時間は厳しく制限させられるなどの不便もある。だが、身分の低い者に対する扱いとしては上々だろう。給金は安いが、衣食住に不自由はしない。そこそこの住み心地ではあった。

あくびをしながら部屋までの道のりを歩く。角を曲がろうとしたところで、悲鳴が上がるのが聞こえた。

「誰か！」
右側から声が聞こえた。視線を向けると、男性がメイドに抱きついている姿が見えた。遠くて男の顔までは見えない。だが、その服装は上質で、一目で貴族と判別できた。髪は柔らかそうな金。その色に既視感を覚えて後ずさる。
「ちっ」
男は舌打ちを打つと、後方――私の居る方向へと逃げ出した。
上質な金髪と青い瞳。見覚えのある顔。
王子だった。
こちらに一直線に王子が走ってくる。そう、忘れもしない。あのセクハラ王子だ。
思い返せば、被害者はみな小柄な歳若い女性だった。ロリコン王子の嗜好として、申し分ない。
私に気づかず、王子はこちらへ駆けて来る。
私は王子の進路の直線上に、持っていたタオルを敷いた。
「な！？」
王子にはタオルが突然現れたように見えただろう。驚きの声を上げるも、足は急には止まらない。王子の足はタオルを勢い良く踏む。タオルは足の勢いを受け止めきれない。
王子は、バナナの皮よろしく滑った。
「何事です」
背後から、メイド長の声。悲鳴を聞きつけた者たちが、次々と集まってきた。
バレぬよう距離をとり、タオルをこっそり回収した。王子を転ばせたなどとわざわざ公言し、要らぬ面倒を被る気はない。
「あ、あの、後からいきなり抱きつかれて……って、殿下！？」
「何をなさっているのですか、殿下」
メイド長が呆れながら王子を見下ろした。王子はひっくり返って仰向けに伸びている。呆れるのも無理はない。
「……ッ」

王子は後頭部をさすりながら上体を起こした。とっさに受身を取っていたようだから、さほどダメージは負っていないだろう。

「殿下」

メイド長は困ったように眉を寄せた。メイドの悲鳴。廊下には王子のみ。導き出される答えは明白だ。だが、メイド長の立場でそれを口に出すのは憚られることだろう。メイド長が何を言うべきか考えをめぐらせていると、低い声が響いた。

「ああ、殿下。こんなところにいらっしゃいましたか」

「ディレス様！」

メイド長は振り返って目を丸くした。

メイド長の視線を追い、息を呑む。足元から痺れが駆け上がった。ディレスと呼ばれたのは、以前本屋で会った男だった。艶のある銀髪。体の線が出ない柔らかな素材の服。物腰はあくまで低い。だが、表情は鋭利。受ける印象は氷。冷たい——とさえ感じられるのに、顔が火照っていく。

まさかこんなところで再会するとは。世界は広いようで狭い。

「何をしていらっしゃったんですか、殿下。執務はまだまだ山のように残っておりますよ」

「……」

王子は答えない。今更黙秘をしたところで、意味はないだろうに。みな王子が何をしたか想像がついている。

「いい加減になさってください。一国の頂点に立つ者が、歳若い女性に無理矢理痴態をはたらこうなどと。そんなに女性が好きなら、側室を娶りなさい。いたずらに使用人を誑かすなど、混乱の元となります。二度となさいませんよう」

「……」

王子は答えず、ぷいと顔を背けた。

「王子」

ディレスは更に低い声で念を押す。だが、王子はつんと横を向いたままだ。

ディレスはため息をつき、王子を見据えた。
「分かりました。そんなに女性がお好きでしたら、王子の大好きな隣国の姫との縁談を進めさせていただきましょう。よろしいですね？」
王子は途端に青ざめた。横を向いていた頭を勢い良く回転させ、ディレスと目を合わせる。真っ青な顔をして、首を横に振った。
「わ、分かった。二度とこのようなことは起こさん」
ディレスは「よろしい」と頷くと、メイドとメイド長へ振り返った。
「ということです。お騒がせして申し訳ありませんでした」
ディレスは頭を下げて詫びた。
二人は慌てて頭を上げるように頼み、王子を許すことを承諾した。王子に対して「許す」など、と二人はしきりに恐縮していた。
しかし、当人はまったく頭を下げていない。ディレスの対応は立派かもしれないが、それでいいのか。あれではまた、懲りずに同じ事を繰り返す。去り行くディレスと王子の後姿を眺めながら、思う。
「メイド長。あ、あたし、殿下に抱きつかれちゃったのよね」
「そうですね」
「あんな雲の上の人に抱きしめてもらえるなんて……もう、あたし、思い残すことはないですっ」
「それは結構。ただし、よろしいですね？　今回のことは心の中にしまっておきなさい」
「もちろんです。ディレス様にも直々に頭を下げられて、そのご厚意を裏切る真似なんて出来ません」
ディレスの目的は、これだったのだろうと。
所詮、人の口に戸は立てられまい。今回の顛末を目撃したのは、二人だけではない。駆けつけた他のメイドや使用人もいる。いずれ、噂は広まるだろう。
けれど、ディレスが謝ることにより、とりあえずの事態の収拾は図れる。そして、王子自身は謝らず、威厳は損なわれない。

「だからって、ねえ」

王子の瞳は、反省の色を映していなかった。あれは、また同じ事をやらかす。

そしてその予想は、残念なことに日を経たずして現実になる。

十二、盗難　前編

メイドも四日目。随分慣れてきた。調度品をピカピカに磨くのも上手くなったし、窓を曇りなく拭くのも上達したと思う。部屋の位置も大体把握した。肝心のルロールの部屋はまだだが。仕事を行う上で支障がない程度には把握した。頼まれた仕事をこなすのも、随分早く片付けられるようになった。今も予定していたより早く終わったので、メイド長に報告に待機室へと来たところだ。

「……してかしら」

――来たところなんだけど。

「どこ……に、忘れ……って事は？」

微かに聞こえる話し声。慌ててノックを静止したのは正解だった。時々甘えた声が混ざる。いつも凛としたメイド長からは想像もつかない声音だ。その声を受け止めるのは男。聞き慣れた声だ。

ここまでくれば、想像はつくだろう。メイド長はおばさ――お姉さまと言って良い年齢だ。メイドの話を持ってこられたときは疑問に思ったが、こういう繋がりなら何の不思議もない。要するに、スウォンはメイド長とも関係を持っていたということだ。

「ないわ……ちゃんと仕舞ったのよ。確認したのも覚えているわ」

というわけで、私は今、待機室の前で棒立ちになっている。部屋に入るか話が終わるまでここで待っていたほうが良いか、迷っているのだ。さて、どうしたものか。ちょっとした逢引程度なら、このまま待っていたいところだが。相手はスウォンだ。今までのあれやこれやが脳内を駆け巡る。

「あ……、駄目よ。こんな早くから。誰か来たら……」

天を仰いだ。

スウォン……。やっぱりね……やっぱりこういう展開になるんだよね……。

やはりここは出直すべきだろう。そう思って足を踏み出そうとし

たが、次いで聞こえた台詞に足を止めた。
「でも、メイドの一覧表なんて盗んでも意味ないだろう？」
「そうなんだけど……」
「何か、気になることでも？」
「実は殿下から、メイドの人数を知りたいから一覧表を見せて欲しい、と言われたの。メイドのことだから、王后陛下にお渡しすると答えたのだけれど」
スウォンは、その言葉に一瞬沈黙した。
「それは、いつ？」
「昨日よ」
「……」
スウォンは黙った。無言だが、言いたいことは痛いほど伝わった。王子は怪しい。ものすごく。
「メイドに指示を出すのにも、必要な書類なのよ。ないと困るわ」
「でも、証拠はないんだろう？」
「そうなのよ。でも、あまりにタイミングが良すぎて。そもそも、どうしてこんなこと。今までメイドにさほど興味があるわけでもなかったのに。急ぎで人員補給したかったのかしら」
沈黙が降りた。確かに、不自然だ。上に立つ者として、使用人の人数を気に掛けることは悪いことではない。だが、メイドをまとめるのはメイド長の仕事だ。メイドの人数を把握し、採用を行うのも。
「分かった。とりあえず、俺のほうで調べてみる」
「ありがとう。そうしてもらえると助かる」
「勘違いだと良いんだけど」
「そうね。私がどこかに忘れているだけならいいのだけれど」
「いや、それもまずいか。身分やら爵位も書いてあるんだろう？もし部外者に盗まれたとしたら」
「ええ、そうね。簡単だけれど、使用人が使っている部屋割りも書いてあるから。うまくやれば、進入口のあたりをつけることもできるかもしれないわね」

「どちらにしても、早々に手を打たなきゃな」
「そうね。こちらでもなるべく目立たないように聞いて回ってみるわ」
「ああ。そうしてくれ」
スウォンは頷くと、話を打ち切った。足音が聞こえ、慌ててドアから離れる。
ドアが開き、スウォンが足早に去っていく。その後ろ姿と背後の待機室を交互に眺め、逡巡する。
もともと、メイド長に報告に来たのだ。そちらを先に済ませるべきだろう。ただ、どうしても気になった。嫌な予感がしたからだ。
スウォンはおそらくディレスに相談に行くことだろう。相談を受けたディレスは、王子から詳細を聞き出そうとするはずだ。しかし、仮に王子が盗んでいたとして、証拠もないのに白状するわけがない。王子が白を切ったときは、念のため私室を調べておきたい。私の心の平安のために。
考えてみてほしい。王子がこちらの個人情報を握っているなど、恐怖でしかない。ここ数日、ロリっ娘メイドを襲うなどの奇行が目立つ王子だ。メイドの個人情報を握っていたとしたら、非常に不気味だ。阻止できるなら、最優先に動きたい。
そう結論づけると、私はスウォンの後を追った。

十二、盗難　後編

「何が言いたい」
王子が苛立ちを含ませて問う。その表情に焦りが見えるのは、私の思いこみのせいか。
睨むように見上げる王子の視線を、ディレスは動じることなく見下ろした。
予想通り、スウォンはディレスへ相談に行った。話を聞いたディレスは、その足で王子の元へと赴いた。そして現在、王子と対峙しているというわけだ。
「ですから、メイドの人数を気になさるほどのことがあったのか、とお尋ねしているのです。何か至らぬところがあったのなら、今後の為に教育を徹底しなければなりませんので」
「何故そうなる」
仕事の残りを片付けているのだろう。書類にサインをしながら話を聞いていた王子は、手を止めた。理解できないという顔で、ディレスを見上げる。
「当然でしょう？　殿下ほどの立場の人間が、突然メイドの人数を気にかけるのですよ。人数が足りないのではないかと懸念された――つまり、行き届かない箇所が目に付いた、と捉えるのが普通かと」
上に立つ者には理解しにくいのか。
たとえば、掃除が不十分なところがあった、調度品に曇りがあった、ということだ。こういった場合に、人手が足りないのではと心配するのは間違っていない。むしろ、使用人思いとさえ言えるだろう。増員を検討するのであれば。
だが、王子は首を横に振った。
「……そうではない」
「では、殿下の身の回りの世話を任せる使用人の数が足りませんでしたか」

「違う、そういうわけではない」
「では、召し上げたいメイドでもおられましたか」
「……しつこいぞ、ディレス。違うと言っているだろうが。何の理由もない、ただの気まぐれだ」
「なるほど、気まぐれ。そうですよね。まさか、一国の王子ともあろう人間が、メイドの情報を得たいが為、メイドの一覧表を盗み出すなんて、そんな事する訳ないですよね」
「お前……わざと言っているな」
「何をですか？」
ディレスはとぼけてみせた。王子はその顔を嫌そうに見上げる。
「まあ良い。先ほどの発言については聞かなかったことにしよう。メイドの人数について訊いたのは事実だ。だが、他意はない。この件について、これ以上俺から話すことは何もない」
王子は暗に帰れと手を振った。ディレスは僅かに眉をひそめるも、それ以上何かを言うことはなかった。
退室するディレスを見届けて、王子は緊張を解いた。ディレスの尋問中は空気が凍る。私ですら、体が強ばるほどだ。その場に居合わせただけだというのに。その対象である王子にしてみれば、尚更だろう。安堵の息をつき、王子は机の引き出しに手をかけた。
「……早いな」
呟きが部屋に響く。
「すぐに返すつもりだったんだが」
引き出しには、小さな箱が仕舞ってあった。王子はズボンのポケットから鍵を取り出し、箱の上に置いた。途端、箱は淡く光る。カチリと錠が外れる音がした。
王子は箱を開けると、中から紙の束を一つ取り出した。王子の背後に回り込み、そっと盗み見る。王子は表紙から何枚かをめくり、最後尾へと送っていく。興味なさげにページを繰っていた手が、ふと止まる。手が止まったことで、私にも文字を追うことができるようになった。ざらついた紙に踊る文字。そこに書いてあったのは。

名前、アスハミノブ。年齢、十二。身長、百五十八。体重――

やっぱり盗んでたか。

そこには、メイドである私の個人情報が載っていた。名前、年齢は元より、身長体重、果てはスリーサイズまで。メイド服のサイズを合わせるときに測ったものだろう。他にも、保護者であるスウォンの名や、仕事を始めた日、主に担当する仕事内容、部屋の位置などが詳細に書かれている。

呆れながら王子へと視線を戻し、ぞっとした。王子は紙面に真剣に目を走らせていた。何故自分の情報を読み込む必要がある？　たかがメイドの何が気になる？

「Aか……」

王子の頭を殴りつける。

妄想をした。

カップか。胸の大きさか。それが知りたかったのか？　どんだけ変態なんだ。救いようがない。もうお前は、東京湾に沈め。異世界だけど知ったことか。お前はあのどす黒い海の底がお似合いだ。

ダメだ、怒りで頭に血が上っている。思考が支離滅裂だ。とにかく一刻も早く、王子の手からその紙を奪い取らねばならない。これ以上、私の個人情報を読まれてたまるか。

王子からメイド表を取り返す。固く決意した私は、部屋の出口へと向かった。そのまま、ドアを乱暴に開け放つ。もちろん、全開だ。部屋にふわりと風が起こり、冷気が侵入する。

だが、王子は気づかない。認識されない状況で起こした行動は、何故か付随して認識されにくくなる。だが、そんなことは既に分かっていることだ。それを見越して行動を組めば良い。直接的な行動ではなく、間接的に気づくように。瞬間的ではなく、永続的に続く異変を。ドアを開けることでの音と風ではなく、開いたドアからの冷気に違和感を覚えさせれば良い。

さて、次だ。このままでは王子がドアを閉めただけで終わる。逃げる時間を稼ぐためにも、もうひと混乱させておきたい。窓へと近寄る。王子の斜め背後にある窓に手をかけ、そのままの状態で王子を伺う。

数泊おいて、王子は顔を上げた。ドアが全開になっている状態を視界に捉え、軽く目を見開く。

「なんだ……？」

王子は首を傾げ、書類をおいて立ち上がる。それを見届けて、窓をおもいっきり開け放つ。同時に、机に置かれたメイド表を手に取る。これでもう、メイド表は王子には認識できない。私とともに。

王子はドアを閉め、身を翻す。それを尻目に、私は悠然と出口へと向かう。首を傾げながらこちらへ歩き出す王子。王子とすれ違う。足早に歩く動きに、風が頬を撫でた。しかし、王子は気づく様子もなくもとの位置へと戻る。背後で、紙を漁る物音が耳に届く。席に着いた王子が、なくなった書類を探しているのだろう。そのときには、私は既に出口へたどり着いている。ドアに手を掛ける私の耳に、背後の窓へと走る物音が届く。

「曲者か？」

ドアを閉める。王子の混乱を確認することなく、私はそのまま退室した。

王子からメイドの一覧表を取り返した。それは良いとして、問題はこれをどうやってメイド長に返すかだ。素知らぬ顔でその辺に落ちてました、と言うのはあまりに嘘くさい。メイド長もスウォンも、王子を疑っていた。その辺に落ちていた、では説得力に欠けるだろう。まさか王子の私室から奪取してきたとは思わないだろうが、わざわざ疑いの種を蒔くこともない。

では、どうするか。考えるまでもない。メイド長の目に付くとこ

ろにこっそり置いて、立ち去れば良い。不自然さは否めないが、少なくとも私が疑われることはない。

「メイド長の私室は……と」

記憶をたどりながら廊下を歩く。まだメイド長の私室を訪ねたことはない。メイドの仕事に慣れたら、交代でメイド長の目覚ましを担当することになるらしいが、私はまだ免除されていた。

ちなみに、待機室に置いておくという案は除外した。あまり人目に触れてほしくないようだったからだ。確かに、慎重に扱うべき書類だった。待機室に出入りするのはメイドだが、必要以上の情報は時に軋轢の元となる。ざっと目を通したが、爵位持ちもいるようだった。この仕事をするのも色々事情があったのだろう。そういう下世話な想像が簡単にできるのだ。

そういったわけで、書類を返すのにメイド長の私室を選んだ。私室であれば、メイド長以外が入室することはほぼないと言っていいだろう。この時間に置いておけば、ちょうどすぐにメイド長の目に触れるはずだ。都合の良いことに、今はメイド長は不在のはずだ。

念のためそっとドアを薄く開け、部屋の中を確認する。誰もいない。部屋の主はもちろん、この時間であればベッドメイキングも終わっている。予想通りの状況にほっと息をつく。部屋へ入り、小さな机の真ん中に、目立つように書類を置く。ついでに、手近にあった文鎮を重石に乗せておく。

「よし」

満足げに独り頷いて、置かれた書類を見やる。よし、完璧。これなら、メイド長もすぐに気づくだろう。満足した私は、そのまま身を翻した。

ドアを閉めて、ふと気づいた。そういえば、もともとメイド長への報告をしようとしていたんだった。しまった。担当分は終わっているが、報告を忘れていた。この時間なら、メイド長は待機室に――下手をすれば、私室へ戻る途中のはずだ。報告は待機室で行うのがここでの習わしだ。慌てて駆け出し、数歩で壁にぶつかる。

「った……こんなところに壁なんてあったっけ」
鼻を労るようにさすろうとして、その手を止める。
痛くない。顔面から突っ込んだのに。
「壁ではありませんよ」
低い声が頭上から降る。その音は、空気を震わせるように私の体を震わせた。染み入るように伝わる音は、微量の電流を通したかのように、肌の表面を心地よく灼いた。
体中に声が染み渡り、脳がその主を理解する。同時に、顔にぼっと血が上る。
「す、す、す、すみませんっ」
目の前には、ディレスの胸板があった。今さっき、顔面から突っ込んだ所だ。そう意識すると、余計に焦った。舌がもつれる。
「いいえ、気にしなくて良いですよ。こちらも前をよく確認していなかったのですから」
いや、前をきちんと確認していても、私は見えてなかったはずだ。全面的に私が悪い。
「い、いいえっ！　前を確認していなかった私が悪いんです。申し訳ありませんでした！」
早くこの場から去りたい。鼓動は早鳴るし、恥ずかしくて顔が熱い。
頭を下げて謝罪すると、そのままディレスの顔を見ることなく逃げるように走り去った。
ディレスがそのときどんな表情をしていたのかは知らない。変なメイドと思われたか、特に気にすることもなくすぐに忘れ去られたか。私としては、後者であって欲しい。どちらにせよ、その時の私にはディレスの心情を推し量る余裕はなかった。
だから、そのときの私は気づかなかった。背後で響くノックの音が、何を意味するのかを。ディレスが何故そこにいるか、と言うことを。

十三、疑念　前編（前書き）

十三、疑念　前編

メイド生活五日目。本日は、スウォンと一緒に昼食を摂りに街まで出ていた。

ここで、違和感を覚える人もいるかもしれない。そう、たかがメイドが昼食のために街に出るなど、あり得ない。

昼食を摂る休憩時、待機室にふらりとスウォンは顔を出した。今まで、わざわざ待機室を訪ねることなどなかったのに。少なくとも、私に会うためには。不自然すぎるスウォンだが、メイド長は彼の来訪を訝しむことはなかった。示し合わせたように、それどころか快く送り出した。幸い、他のメイドはいなかったが、それすら逆に不自然だった。

「何か食べたいものはある？」

久しぶりに歩く街並みは、活気に溢れていた。きょろきょろと辺りを見回しながら歩く私に、スウォンは尋ねた。

「特には。スウォンさんのオススメってありますか」

「じゃあ、あの斜め前の店にしよう」

そこは、誕生祭のときに出店を出していたところだった。カレーに似た料理を、好んで食べていたことを覚えていてくれたのかもしれない。

酒の味で覚えてただけ、という可能性も否定できないが。

「メイドの仕事はどう？」

席について、メニューを渡しながらスウォンは訊いた。その問いに答えるべく、私は今までの日々を振り返った。

初日は王子にセクハラされた。三日目はセクハラ現場を目撃した。しかも、犯人は王子だった。四日目は個人情報を盗まれた。

思い返してみても、碌な事が起こってない。というか、ほぼ毎日だ。どれだけ充実した毎日を送っていたのか、改めて思い知る。嫌な意味で。

「まあ、慣れました。お仕事は」
仕事は。仕事内容だけは。遠い目をしながら、とりあえず答えた。
「そう？　良かった。何か、体調とかは悪くしてない？」
体調……体調ね。元の世界のことを思うと、胃がしくしくと痛むよ。
いい加減に元の世界に帰りたい。召喚されてからちょうど二週間。無断欠席も良いところだ。もはや会社に私の席はないだろう。いや、まだ間に合う。欠席分を有給に充てれば許される――
わけがない。無断で二週間。有給に充てるとかそういう問題じゃない。二日三日ならともかく。
そりゃ、確かに。ある程度、長期戦になることは覚悟していた。けれど、やはり気は急くのだ。社会人は生活がかかっている。不況の今の時期に職を失うなど考えたくもない。
もちろん、何もしていなかったわけではない。仕事の合間に、ルロールの私室を探すのは忘れなかった。ルロールが帰還していないかも、常に確認するようにしていた。そして本日、やっとルロールの私室を確認できたのだ。これでルロールさえ帰ってくれれば、直接帰還を要請できる。帰ってくれれば。
そういえば、ルロールはいつ帰ってくるのだろう。スウォンの話では、数日で戻ってくるという話だったはずだ。
「ええ、問題ありません。ところで、スウォンさん。このお仕事を始めて数日が過ぎましたけれど、ルロールさんのお姿をお見かけしないんですが、まだ遠方任務中なんですか？」
「ああ、そういえばまだ戻ってないな。やっぱり気になる？」
「はい。直接お話できなくても、お仕事の様子だけでも遠くから眺めたいなと思っていたので。今後の参考に」
「そうだよね。悪い、本来は二、三日の予定のはずだったんだけど、随分長引いてるみたいだ。アスハにはもう少し待ってもらうことになると思う」
「何かあったんですか？」

「どうだろう。あいつのことだから、単に道草食ってるだけかもしれないし……。ごめん、その辺はさすがに俺まで情報が下りてきてないんだ。定期報告はしてるはずだし、騒ぎになってはいないから、何かあったってわけじゃないと思うけど」

「定期報告ですか？」

この世界には携帯電話などは存在しない。不思議に思って問い返すと、スウォンは破顔した。

「アスハは知らないか。遠く離れた地でも、会話のやり取りができる魔法があるんだよ。今までは伝書鳩が一般的だったけど、この魔法が導入されてから、即時に情報交換ができるようになったんだ」

「すごいですね」

スウォンが熱を込めて話すので、思わず頷いた。だが、温度差が生じてしまうのは仕方ないだろう。現代日本を知っている身としては、そのすごさは理解しにくい。現代では、既にテレビ電話も携帯もある。遠方での情報のやり取りなど、できて当然という感覚なのだ。

「うん。すごいだろう？　ちなみに、この魔法の開発を命じたのは殿下なんだよ」

「……」

思わず真顔に戻った。何を言うべきか迷い、沈黙すると、スウォンは噴き出した。

「やっぱり、アスハは殿下が嫌い？」

「嫌い、という……わけでは……」

本音を言うのは気が引ける。立場上にも、話の流れ的にも。だが、好意的な言葉を口にするのは抵抗がある。言うべき言葉を考えあぐねる私に、スウォンはついに声を出して笑い始めた。

「あはは、はっきり言っていいよ。ここには王子はいないんだから。初対面であんなことされたら、そりゃ嫌いになるよね」

「えっと……」

「殿下はちょっと変わってるけど、本当、統治者としては悪くない

んだよ。民が過ごしやすいように、ってことはすごく良く考えてるしね。我侭ではあるけど、独裁ではないし」

そうだろうか。異世界召喚の事は置いておくにせよ、忠言するディレスや諫めるスウォンに対して、好ましくない態度をとっていたような気がする。「そんなことを言ってただで済むと思うのか」など、脅すような台詞を言っていた覚えがあるのだが。

疑問が顔に出ていたのか、スウォンは苦笑した。

「まあ、自分が一番偉い、敬え、ってな態度ではあるけどね。実際にそこで権力に物を言わせて罰することはないから安心して良いよ。ほら、ちっちゃな子供がよく言うでしょ？『お前なんか死んじゃえー』とか。その気もない悪口の一種なんだよ」

「そう……なんですか」

なんと言うべきものなのか。なんとかそう答えると、スウォンは満足げに頷いて見せた。

「そうそう。だから、興味がなかったらはっきり言っていいんだよ。今後、殿下に言い寄られることがあっても、はっきり『嫌いです』って言って拒否していいんだからね」

話が飲み込めてきた。今回の食事の目的も。私は頷きながら、スウォンの気遣いに感謝した。

「そうそう。さっきの話に戻るけどね、今日はアスハにこれを渡そうと思ってたんだ」

スウォンは白玉ほどの小石を差し出した。ルビーに似ている。飲み込まれそうな透き通る赤い石。だが、何の加工も施されていないただの裸石だ。贈り物としては不自然な気がした。首を傾げてスウォンを見上げる。

「あの、これは？」

「魔石だよ。ルロールの部屋からちょろまかしてきたんだけど」

「ちょろまか……」

良いのか。勝手にそんなことして。

「大丈夫、大丈夫。石自体は安いものなんだけれど、中に魔力を込

めてある物は値が張るからさ。どうせアイツは常時魔力を垂れ流してるようなもんだから、一つくらい拝借しても問題ないよ。ところで、本当に全く聞いた事ない？」

「すみません……、どんな物なんですか」

「簡単に言えば、魔力を宿した石だね。視える人はもやを纏っているように見えるらしいけど」

もや、か。そんな神秘的な現象は、私の瞳は認識できなかった。綺麗だが、あくまでただの石にしか見えない。

「あの、それって見えないと魔法の素質がないとかなんでしょうか」

「ああ、違うよ。紛らわしかったね。魔法の素質とそれとは無関係なんだ。視えなかったからといって、アスハが魔法を使えないってわけじゃないんだよ。まあ、視えると便利なことは確かなんだけど」

「なるほど。それで、その石をどうして私に？」

「魔法使いを目指すなら、こういう石に早くから触れておいたほうが良いと思ってね」

「石に触れる……ですか？」

「そう。本来なら、魔法使いは自身の魔力で魔術を構成するものだけれどね。大掛かりな魔法を使うときや、魔力を持たない人は、こういう石の力を借りるんだ。あと、石自体に決まった魔術構成を組んでおいて、自動発動できるようにもするんだよ。こういうのを発展させて、一般の人にも使えるようにしたのが、最初に行った食事処だね。水槽の下にあった、拡声装置も原理は同じだよ」

ランチマットの上に料理がワープした店の事か。あの時は驚いて気づかなかったが、どこかに石を置いて、魔力を供給する仕組みになっていたのだろうか。

「意外に、応用が利きそうですね」

渡された石を手の中で転がしながら相槌を打つ。非常に興味深い。

素直に感心すると、スウォンは顔を綻ばせた。

「まだ実験段階だけどね。こういうのは全て、最近になって始めたことなんだよ。今はルロールと王子で主に開発を進めているんだけ

れど、いずれこういう分野にも力を入れていく方針なんだ。アスハも、大きくなったらルロールと一緒にこういう研究に携わってくれると嬉しいな」

笑いかけるスウォンに、ちくりと胸が痛む。ここまで気に掛けてもらえるとは思わなかった。過去に聞いたスウォンの言葉の欠片が頭に浮かぶ。

戦争、道具、魔法。

そして、スウォンは騎士だ。

素直に嬉しいのだろう。生活に根付く魔法に興味を持った私が。その道を目指そうとする子供が。

確かに、興味はある。もしここで永住するとなれば、片手間にでも調べたいと思うくらいには。けれど、本気でその道を目指す気など、今の私にはない。今の私の一番の目的は、元の世界に帰ること。

「そうですね。いずれ、そういう立場につけるよう頑張ります」

けれど、口から滑るのは、築いてきた嘘をさらに塗り重ねる言葉。今更、本当のことを話す気にはなれない。それに、本当のことを話す意味もない。異世界から来た、魔法使いになりたいわけではない、と正直に話すことに何の意味がある？　それで即座に元の世界に戻れる手はずが整うなら別だが。

というか、そもそもあれだけ女性関係にだらしないのを見せられると、いまいち信用が置けない。いや、ここまでしてくれるほど良い人だってのは分かるんだけれど。贅沢かな、印象の問題で。もちろん、それだけが理由ってわけじゃないのは言うまでもないが。

「楽しみにしてるよ。それで、使い方なんだけどね……」

私の心中など知りもせず、スウォンは上機嫌で魔石の使い方を説明し始めた。

夜の帳が下りた闇。支配する静寂。それらを打ち消すように足音

が響く。決して大きな音ではない。むしろ、辺りを窺うように、遠慮がちに歩を進める様子が目に浮かぶような音だ。そろりそろりと微かに聞こえていた音が、ぴたりと止まる。次いで蝶番の軋む音が密やかに響いた。

部屋に人の影が侵入する。窓から漏れる月の光が、部屋に淡く差し込んでいた。目を凝らせば、周りを確認することは容易い。薄闇は侵入者の姿をおぼろげに描き出した。部屋には背の高い男が一人。無駄のないすらりとした体を包むのは、質の良い服。センス良く施された装飾品は、薄闇の中でさえ時にきらりと光った。その様相も、威厳に満ちた気配も、あまりに場違い。深く濃い青い瞳や、すっと通った鼻筋、整った顎は、威厳の中にも蕩けるような甘さを印象付けた。ここに女性がいれば、従わずにはおれない畏怖と恋焦がれる切ない感情を味わえたことだろう。艶のある金髪は、月明かりに照らされ、その顔に美しく映えた。それらは、この場にあまりに不釣合い。あまりにそぐわない。だが、男は気にした様子もなく、辺りに目を走らせた。その目が部屋の隅に止まる。そこには、質素な寝台があった。

男は目的の物を見つけると、そっとそこへ近づいた。掛け布団のふくらみに、男は胸を躍らせる。早鐘を打つ心臓は、気をはやらせる。駆け出して、乱暴に事を成そうとする心を抑えながら、男は寝台の傍らに辿りついた。

規則正しい寝息。安心しきった寝顔。

それらを壊すのを期待して、男は寝台へと視線をやる。しかし、視界が捉えた枕に、男は目に見えて肩を落とした。

いない。目的の人物は、そこにはいなかった。

部屋はあっているはずだった。昨日、確かに確認した。途中で盗まれてしまって全ては確認できなかったが、部屋の位置は確認済みだった。気づいた彼らが急遽部屋を変更させたか。それとも、タイミング悪く休みを貰って実家にでも帰っているのか。単に目が覚めて一時的に部屋を離れているだけか。男にはそれらを判断するだけ

の情報を握っていなかった。どちらにしても、計画は失敗だ。
男は落胆の息をつきながら、諦め悪く枕へと手を伸ばした。せめて、そこにいたはずの人物の温もりだけでも感じたかったのかもしれない。
しかし、伸ばした男の手は、予想外に枕までたどり着くことはなかった。
男の体が固まる。
手に伝わるのは、熱い体温。やわらかな肌。微かに男の肌を撫でる髪の毛の感触。
「ん……？」
吐息を漏らすかのような小さな声。後を追うように、認識される聴覚、視覚、嗅覚。目を瞬く男に、目の前の女性は寝返りを打つ。女性特有の甘い香りが、男の鼻をくすぐった。
どくんと心臓が力強く脈打つ。考えるだけ無駄だ。男は疑問を切り捨てると、本来の目的へと行動を移した。
男は素早く布団を剥いで、その上へと乗りかかる。肌を撫でる冷気に、女は眉をひそめる。女は、肌寒さに閉じていた瞼をゆっくりと開いた。その瞳を、男は真正面から受け止める。女は驚きに目を見開き、瞳を混乱に揺らせた。その様を、男は楽しげに見下ろす。
「殿下……っ！？」
男――王子は、その表情を満足げに眺め、アスハの首元へと顔を寄せた。逃げようともがくも、圧し掛かられたアスハに逃げ道はなかった。王子の唇がアスハの肌に辿りつく。ざらりと舌が肌を掠めた後、王子は音を立ててそこへ吸い付いた。
「ん……！」
呻くアスハの首元には、紅い花が咲いていた。

十三、疑念　後編

肌寒さに目を開ければ、目の前には王子がいた。何故ここに居る、何故部屋を知っている。疑問が浮かんでは消える。

何故ここにいるか？　簡単ではないか。考えるまでもない。首もとのキスマークが証明している。王子は、夜這いに来たのだ。では、何故部屋を知っているのか。使用人の部屋はいくつもある。だがそれも、すぐに思い当たる。昨日、王子が盗んだのはなんだ？　そこに書かれていたのは、何も胸のサイズだけではない。部屋の位置だって書いてあったではないか。

いや、むしろ。こちらが目的だったのだろう。

思い当たってぞっとする。考えればそれは当然だ。初対面のときから、王子の目的は手に取るように明らかだったではないか。不審者騒ぎも、あるいはわざとだったのかもしれない。運良く私を捕まえ、空き部屋に連れ込めれば上々。人違いだったらメイドから私の所在を聞き出せないか試みれば良い。運悪くメイドは悲鳴をあげて騒ぎになり、ディレスに絞られる羽目となったが、うまくやれば私の私室を探り当てるのに時間はかからなかっただろう。まあ、詰めが甘くて助かったわけだが。

「……っ」

思考が中断する。王子が胸元に口付け、そこから手を差し入れていた。冷え切った掌が肌の熱を奪う。

「殿下……」

侵入する手を掴んで止める。時間稼ぎをしなくては。

「初めてか？　怖がることはない」

初めてとかそういう問題じゃないと思うんだが。突っ込みたいことは色々あるが、まず言うべき台詞が違うだろう。

だが、そう思っていることはおくびにも出さず、首を横に振るだけにとどめる。そして、王子に気づかれぬよう、枕に手を忍ばせた。

「このようなことはお止めください。貴方の立場に傷がつきます」
固い感触。枕の下には、昼にスウォンに貰った魔石を忍ばせていた。スウォンもメイド長も、予想していたのだろう。メイドの一覧表が盗まれた時から。その犯人も、目的も、これから起こるであろうことも。だから、先手を打ったのだ。私が嫌がっているかどうかを確かめて、そうであれば抵抗できる手段を与えるように。
「かまわん。この程度で、俺の地位は揺るがない。そんなことは気にする必要はない。それに、それだけお前は、俺にとって心を乱す女だということ……」
最後は囁くように、王子は甘く口説いた。成功してはいないが。どう言い繕ったところで、要は幼く見える女に興奮してるってだけじゃないか。気持ち悪い。鳥肌が立っているのに、気づいていないのだろうか。本気で嫌悪しているのに、気づかないのか。
「ですが……」
まあ、どちらでもかまうまい。時間稼ぎは充分だ。魔石は既に手の中。あとは、発動のためのキーを起こすだけ。
スウォンは言った。魔石は魔力を溜めただけのものだと。そして、魔力のない者は、魔石から魔力を得て、術式を組み、発動させると。だが、この魔石に関しては、キーで発動する術式が予め一つだけ組んである。
「しつこい。そのような戯言、考えられぬほど溺れさせてやろう」
魔石を強く握る。キーは言葉だ。私にも扱えるよう、単純に組んでくれたらしい。乾いた口内を湿らせて、私は口を開いた。
「拒否。大嫌い！」
瞬間、王子の体は電流が走ったかのように硬直し、体から力が抜けて倒れた。
乱れた服装を整え、ほっと息をつく。スウォンとメイド長には心

底感謝だ。正直、昨日の今日で夜這いしてくるとは思わなかったが、身の危険は感じていた。痴漢撃退用として念のため唐辛子の粉末を肌身離さず持ち歩いていたりしたのだが、正直不安は拭えなかった。狩りをしていたときに急所は把握したが、あくまで殺すために身につけたものだ。顎を狙えば楽に気絶させることができるはずだが、人体ではまだ試していない。魔石を貰えて、本当に助かった。ちなみに、魔石は枕の下だが、唐辛子はポケットに忍ばせていた。

さて、この変態王子はどうしようか。完全に気絶している王子に視線をやる。王子は、私の寝台の上でうつぶせになっている。このまま引きずって部屋の外に放置する？　どうしようかと悩む思考を、騒々しい足音が遮った。

「アスハ！」

勢い良く扉が開かれる。中に入ってくるスウォンとメイド長に、慌てて気を張った。

「どうしましたか」

「どうしたじゃないよ。念のため魔石の波動を追っておいたんだけど、やっぱり来たか」

スウォンは王子を見やった。伸びている王子に呆れきったため息をつく。

「アスハ……ごめんなさいね。怖い思いをしたでしょう」

メイド長が優しい声で謝った。私は慌てて手を振った。

「そんな、メイド長が謝ることじゃないです」

「いや、俺らが悪いんだよ。殿下がこうすることを知ってて、黙って見てたんだから」

いや、相手が王子なんだから当然だろう。何も証拠がないうちから王子を糾弾することなどできるわけがない。

「いえ、お二人とも私の味方についてくださったじゃないですか。わざわざ魔石をくださって」

私がそう言うと、二人は苦笑した。

「露骨だったか」

それは、まあ。あの言葉をキーとして、発動する防犯魔術。説明を聞いたときは王子にしつこく言い寄られたとき用、とのことだったが、その言葉の端々には夜這いを想定していることが窺えた。

「ねえ、スウォン。やっぱり……」

「駄目だ」

メイド長が困ったようにスウォンに話しかけた。だが、スウォンはその言葉を短く遮った。

「でも、殿下の執着は異常よ。殿下のご趣味は知っていたけれど、正直ここまでされるのは初めて見るわ。これ以上はもう……」

「確かに、俺もここまで強硬手段を用いる殿下は初めて見るが……」

「でしょう？　必要であれば、私の実家も紹介するし。アスハのためにも、ここは辞めたほうが良いと思うの」

「そう……だけど」

雲行きが怪しくなってきた。要するに、異常な執着を見せる王子の目の届く範囲で仕事をさせるのは危険だから、メイドの仕事は辞めた方が良いのではないか、ということらしい。

いや、別に良いんだけど。なんで本人の意見を聞かないのか。元々乗り気じゃなかったし、ルロールの私室も把握したし、別に辞めても良いんだけど。というか、その方が都合が良いんだけど。何故スウォンは渋るのか。

「あの、スウォンさん。私も別にメイドは辞めても良いんですが――」

「それは許しません」

辞職を述べる言葉は、低い声に遮られた。甘みを乗せた渋い声。声を聞いただけで、既に頬が火照るのが感じられた。

「ディレス様！」

メイド長が叫んだ。目を見開き、ぽっかりと口をあけている。対して、スウォンはディレスを睨みつけている。

「ディレス、それはどういう意味だ」

「そのままの意味ですよ。そちらのメイド――アスハでしたか。彼

女が辞めるのは私が許しません」
「何故ですか。確かに人手は足りなくなりますけど、このままでは殿下の暴走で使用人は混乱します。それに、アスハ自身にも好ましくありません」
メイド長が訊いた。確かに、許さないとまで言うのは不自然だ。
「それこそ、何故です？　使用人にとって、王子に見初められることは至上の名誉ではないのですか」
「ディレス！」
ディレスの言葉を止めるように、スウォンが叫んだ。私に気を遣っているのか。苛立ついたような声音だった。
「冗談です。側室云々の話は置いておいて、良く考えて御覧なさい。現段階での殿下の執着は異常です。どこか遠くへやったとしても、殿下なら簡単に見つけ出すでしょう。権力も、それだけの能力もあるのですから」
「それは……」
「逆に、貴方たちの目の届かないところの方が、楽に事を運べるかもしれません」
「確かに……」
「そのとき、貴方たちは自分の身は自分で守れと言うのですか」
いや、自分の身は自分で守るものだよ。それは間違っていない。だが、スウォンもメイド長も言葉に詰まった。ディレスは続ける。
「周りに信用できる人もいない状況に放り出して、絶対的な権力を前に、自分で何とかしろと？」
「でしたら、ディレス様はどうしろとおっしゃるのです？　だからと言って、このままメイドを続けさせるのはあまりに危険ではありませんか」
「ええ、ですから、一時的に私の元へと置いておきます。その間、殿下の熱を冷ます方法を考えましょう」
「――え？」
その言葉に、いち早く反応したのは私だった。今、ディレスは何

を言った？

「まあ、お前の下だったら殿下も下手な手は打たないだろうけど」

「そうですね……、とりあえずということでしたら……」

良いのか。それで王子の抑止力になるのか？　どれだけ王子に恐れられているんだ、ディレス。

「でしたら、決まりです。アスハ、貴女は今日から私の下について仕事をしてもらいます。寝所は、私の私室の隣を利用しなさい。隣に私がいるとなれば、殿下もそこでは手を出さないでしょう」

「え……え、え？」

「こちらです。ついて来なさい」

ディレスは私に視線を合わせた。凍るような冷たい矢が私を射抜く。台詞に反してその目は冷え切っていた。もともと、無感情に近いディレスだが、今日は尚更。私が何かをしてしまったのかと不安になるほどに。若干の恐怖といつもの痺れが体を襲う。事態の急展開に頭もついていけず、体が動かなかった。

その様子を見て、スウォンはディレスを呼び止めた。

「まて、ディレス。おまえ、何を企んでいる？」

何か思うところがあるのか。スウォンは探るようにディレスの瞳を見詰めた。そこに言葉以上の意味を読み取ろうとでもするように。

「何も？　私は彼女の身の安全を最優先に考えただけですよ」

ディレスは動じることはない。ただ淡々と、抑揚なく言葉を紡いだ。そこには、意図や企みどころか感情すら読み取れなかった。スウォンはしばらく黙ってディレスを見詰めていたが、やがて諦めたように息をついた。

「分かった。なるべく早く手を打てるようにする」

「ええ、そうしましょう。殿下の不始末は臣下の不始末。私にも面倒がかかります。できるだけ早く解決したいものですね。さあ、アスハ」

手を引かれ、かっと顔が熱くなった。心臓が早鳴る。頭に血が上り、思考がぼやけていくのが分かった。

こうして私は、一時的にだがディレスの庇護下に収まることとなった。ある意味真のシンデレラストーリともいえる展開だ。だが、世間はそうは甘くない。ディレスの私を見据える冷え切った瞳も、スウォンの疑念も、それを指し示していた。しかし私は、あまりの急展開とディレスに繋がれた手に、思考を放棄していた。不自然ともいえるこの展開に疑問を抱くのは、もっとずっと後になってからのことだった。

十四、雑用

夜這い騒動から一夜明けた。眠り足りない。そもそも、ろくに眠れてなどいない。王子への嫌悪感に、恐怖、突然の展開への混乱。眠れるわけがない。それでも、起床時間は体に染み付いているものだ。いつもどおりの時刻に目覚め、隣室へと向かう。

ディレスがどんな仕事をさせようとしているかは分からない。だが、どちらにせよ、誰かの下につく使用人ということは変わらない。主が起きる前に起床し、用を伺っておいた方が良いだろう。

ディレスの私室の前に立つ。震える体を押さえつけて、ノックをした。応じる声を確認してから、入室する。

「アスハです。入ります」

部屋に入ると、ディレスは寝台の傍らで身なりを整えていた。窓から漏れる光が、ディレスに優しく降り注いでいる。日を受けた銀髪は、氷の張った水面のように時折白く輝く。その様は、清廉な冬の空気の中、独り身繕う白鳥を思わせる。冷たく――けれど、決して不愉快ではなく。超然たる孤高。服の白さも相まって、思わず眩しさに目を細めた。

いや、はっきり言おう。天使だ。頭上に輪っかが見える。もうこのまま、空間切り取って絵画にしてしまえば良い。そうだ、ここに携帯がないのが悔やまれる。あったら即写真に撮って壁紙にしてしまえるのに。

「どうかしましたか」

はっと息を呑む。慌ててディレスに焦点をあわせた。あまりの緊張に思考が別次元へ飛んでいた。交わる視線。じわじわと、顔に熱が集まってゆく。

ああ、駄目だ。どうしても慣れない。

「あ……の。今日からお仕事の補佐を担当することになるの、で……」

「ああ、それで」
ディレスは一言呟くと、手近にあった夜着を羽織った。無造作に肩に掛けただけの姿は、色気さえ感じる。成人男性の薄着を目にする機会は限られる。それも、寝起きの頼りない姿など。その場に居合わせる意味を、意識しているのだろうか。それとも、ディレス自身の色気か。
顔を直視することができず、視線をさ迷わせる。迷いに迷ってディレスの後方の窓へと焦点をあわせたところで、ディレスが鬱陶しそうに夜着から長い髪を引き抜くのを捉えた。視界の端で、髪の束がさらさらと流れ落ちる。
ああ、綺麗。シャンプーのコマーシャルに出られるよ……。
「必要ありませんよ」
「え？」
またもや、思考が飛んだ。
慌てて思考を引き戻し、問う。何が必要ないって？
「私の身の回りの世話は必要ありません。目覚ましも、身支度の用意も。仕事については後ほど説明します。まず、食事を済ませてきなさい。食堂を使って構いません。八時ごろから空いているでしょう。九時にはここへ戻るように」
「――かしこまりました」
ごくりと喉を湿らせて、言われた言葉を飲み込む。意味を理解して一礼をした後、身を翻す。
心底ほっとした。正直、ディレスの身支度など心臓が持たない。姿を視界に捉えるだけでも心臓が爆発しそうなのに。さらに近寄る、など。ありえない。
そもそも、異性に身支度の用意をさせること自体があり得ない話だ。普通は。普通ならば。だが、例外はどこにでもある。王子のようにロリコン――は特殊だとしても、ディレスが私を異性と認識すらしていないという可能性はある。幼すぎて。そうであれば、逆に気を遣う必要もない。そう考える場合もあるだろう。幸いにして、

ディレスは常識を持っていたようだが。
そう、常識。当たり前のことなのだ。けれど最近は、常識そのものが信じられなくなっていた。色々と常識はずればかりだったからだ。王子に限らず、スウォンに、自身の特殊体質、異世界召喚そのものも。あまりに非常識ばかり。
改めて、自分の境遇の非常識さを実感する。異世界に飛ぶってだけで充分非常識。なのに、その異世界がこんなろくでもない状況にまみれて襲ってこようとは、誰が想像できようか。
まあ、逆に良いのかも知れない。帰るのに未練の欠片も感じないのだから。とりあえず、ルロールには近づいた。情報を得るのに、ディレスは最適だろう。少なくとも、スウォンよりは。そこそこの地位と立場、そこそこの常識を弁えた相手だ——恐らく。隙を見てルロールの近況を何とか聞きだそう。
自分の今後の目的を再確認して、こぶしを胸の前でぎゅっと握る。
「よし」
気合を入れると、食堂へと足を向けた。

朝食を終えて、ディレスの私室に戻った。その後、ディレスと共に執務室へと移動した。そこで私を待っていたのは、大量の本の山だった。
「とりあえず、ここの山を片付けてください」
「……」
ディレスの指した先には、私の背よりも高く積まれた本の山があった。それが、数列とは言え、部屋の一区画を占めているのだ。目算にして、三畳ほど。
絶句する私を気にも留めず、ディレスは続ける。
「ここの山は図書室から借りたものです。司書に話せば、どこに片付ければ良いのか教えてもらえるでしょう。こちらの山は新規で購

入したものですから、記録は残っていません。寄贈手続きをとり、所定の場所に納めるようにしてください」

「図書室……ですか」

「場所は知っていますね？」

知っている。ルロールの私室を探すときについでに見つけた。けれど、使用したことはない。メイドの管轄外だし、使用する機会もなかった。

「場所は知ってますが」

「分からないことは司書に聞きなさい。ただし、返却手続きを終えた本の片づけは、貴女がやること。この山の片づけまで司書に任せていたら、通常業務が滞りますからね。新規購入の方は任せても構いませんが、手続き以外はできるだけ手伝うようにしなさい」

「はい。かしこまりました」

「それが終わったら、ここに書いてある一覧を本屋から受け取ってくるように。本屋の場所は分かりますか。ここ一帯で一番大きな本屋ですが」

まだあるのか。うんざりするのを顔に出さないよう気をつける。ディレスは机に地図を広げ、ある一点を指差した。そこは、ディレスと初めて会った時の本屋だった。なるほど、ここであの時購入した本も含まれているのか。

「はい。分かります」

「受け取りは急がなくても構いません。そこの山は、明日中にでも片付けば良いでしょう」

涼しい顔でとんでもないことを言う。確かに単純作業だ。作業量もそこまで多くない。作業量自体で言ったら、今日中に終わる量だ。けれど、女性の筋力を考えたら、とてもじゃないが妥当とはいえない量だ。特に、子供に任せるつもりでいるのならば。

無表情で無茶振り。顔を引きつらせつつ、私は頷いた。

「かしこまりました」

本を手に取るべく、身を翻して本の山へと向かう。積まれた本の

一番上へと手を伸ばすと、ディレスが制止の声を掛けた。
「待ちなさい。手が届かないのならば、踏み台を使いなさい」
「え。しかし、踏み台を使うほどでは」
目いっぱい手を伸ばしているが、充分に手は届いている。指の先がかするといったほどでもないし、ましてや、つま先立ちするほどではない。
しかし、ディレスは踏み台を手に抱え、近寄った。
「山が崩れたら大変です。使いなさい」
「え、あ――ありがとう……ございま、す」
不意に近寄られて、心臓が跳ねた。せわしなく目を泳がせつつ、震える手で踏み台を置く。床に固定して置き、踏み台に足を掛ける。震える手に神経を張りながら、慎重に。だが、背後の気配が消えないのを不審に思い、振り返る。
「そういえば、一度、会ったことがあるのですね」
腕を組んで思案していたディレスは、顔を上げた。振り返った私を、真っ直ぐに見つめる。真正面から凝視されて、あまりの緊張に体がふらついた。慌てて踏み台から降り、本の山から距離をとる。
「え、ええ。よく――覚えてらっしゃいましたね」
「あの時は確か――」
記憶を辿るディレスに慌てる。あの時は確か、異世界に関する本を手に取っていたはずだ。できれば話題に出したくない。突っ込まれれば上手くかわせないからだ。
「ディレスさ――ま、は。転移系の本をお読みになってましたよね」
名前を口にするのに躊躇い、敬称に迷った。さん、と言おうとしてメイド長の呼び方を思い出す。メイド長が様付けしていたのなら、それに倣うべきだろう。
「え？　ええ。貴女こそ、良く覚えていますね。そういえば、魔法使いになりたいのでしたね」
スウォンに聞いたのだろうか、メイド長からなのか。そこまで知られているのか。

どうでもいいが、「魔法使いになりたい」という響きに羞恥を覚えた。淡々としたディレスの口調で紡がれるからだろうか。まるで幼い子供が魔女っ子に憧れているようで恥ずかしい。

そう思い至った途端、脳内に桃色の映像が広がった。キラキラしい幻想的な衣装を着た少女達。飛び散る星とハート。点滅する光。彼女達は、可愛らしい笑顔で魔法のステッキを振り回す。意味不明なポーズと効果音と共に片目を瞑って決め台詞――

を、ディレスに冷めた目で見下ろされているような気がした。年甲斐もなく、それになりたいといっている自分を。

分かってる。被害妄想だ。ここで言う魔法使いは、日本のように二次元の少女限定ではない。ルロールのように、大人でも務める立派な職業だ。

どうも、ディレスを前にすると調子が狂う。頭を振って自己嫌悪を振り払った。

「はい。ルロールさんのような魔法使いになるのが夢です」

「そうですか。それでは、その辺の本も参考になるかもしれませんね。読みたければ、適当に見繕ってかまいませんよ。きちんと貸し出し手続きを済ませるのは忘れないように。そうですね――たとえば、これとかは参考になると思いますよ」

ディレスは本の山からひとつ手に取り、差し出した。そこには、百科事典並の厚さの本が乗っていた。その名も、「転移における空間移送時の相互影響を考えた構築方法について」

嫌がらせか。これもう論文レベルだろ。内容の範囲も、装丁の様相も。「魔法使いになりたい」といっている超初心者の少女に何を薦めてるんだ。

受け取りぱらぱらと流し読んでみるも、案の定。何を書いてあるのか分からない。いや、理系の論文のように数式が並んではないし、平易な文章ではあるので、何を言いたいのかは分かるのだが――想定している用途が、段階を一つ飛び越えている。

例えて言えば、目玉焼きから始めようとしている料理初心者に、

魚の下ろし方を教え込もうとしているようなものだ。
「え……と。すみません、まだ私にはこの本は早いみたいです。せっかくですが、もう少し勉強してから読みます」
そう答えると、ディレスは差し出した本と私の顔を交互に眺めた。そして、近くの本棚から一冊の本を引き抜いた。
「ではこちらを。易しいものから始めるのならば、これが良いでしょうね」
差し出された本は、先ほどのものと比べると薄い。装丁も簡素で、表紙もやや薄汚れている。タイトルも載っていない。受け取ってぱらぱらと捲ると、ミミズの這ったような文字が並んでいた。滑らかな曲線を描く線の集合が、ちまちまと一匹一匹並んでいる。時折そのミミズが、くっついたり、もう一匹に食われかけていたり、飛び跳ねていたり、からまっていたり、組体操をしていたり、寝そべっていたりするような様だった。
そういえば。今気づいたが、異世界の文字は日本語ではない。喋っているときは気づかなかったが、こうして文字を読むと良く分かる。それなのに、何故か意味は取れるから不思議だ。この本は、先ほどのものとは違って、読みやすい。本当に初心者向けで、魔力についてから丁寧に解説してある。ざっと流し読み、魔石からそよ風を起こす手順についての解説にたどり着く。思わず試してみたくなり、スウォンから貰った魔石を手に取った。
書かれた手順に従って、魔力の流れを感じる。そのまま、存在する空気を意識し、魔力を乗せて揺らすイメージを描く。
ふわり、と髪が一筋揺れた。
「できた。ああ、これは分かりやすいですね」
成功したのが嬉しくて、笑顔でディレスを見上げ、ぎょっとした。ディレスはこちらを凝視していた。
「よく……解読できましたね」
「え？」
再び手元に目を落とし、本を開く。そこに載っているのは、平易

な文だ。解読するほど難しいことは何一つ書かれていない。先ほどの難解本に比べたら、よっぽど読みやすいと思うのだが。

「それは、王子の書いたものです」

途端、顔を顰めた。何を読ませるんだ、ディレス。仮にも夜這いされた傷心の少女にそのセレクトはないだろう。本気で嫌がらせだったのか。

「はあ。魔法に関する書物まで執筆するとは、サスガデンカデスネ」

棒読みでお世辞を述べる私に、ディレスは僅かに眉を顰めた。

「違いますよ。それはただのノートです。私が殿下の家庭教師をしていたときに、殿下がまとめたものです」

「家庭教師？　ディレス様、殿下の家庭教師をなさってたんですか？」

いつぞやのＢＬ妄想がまさか事実だったとは。しかし、そうだとすると王子がディレスに頭が上がらないのも納得だ。幼い頃から指導されていた存在には、誰でも頭が上がらないものだ。

「ええ。殿下は幼い頃は悪筆でしてね。厳しく指導して、今はなんとか読める文字を書かれるようになりましたが。当時は解読に手を焼いたものです」

なるほど、それで。だから「解読」なのか。この世界はこういう象形文字なのかと納得していたが、ミミズの這った様な文字で合っていたのか。

というか、なぜそんな読みにくいノートを渡したのか。なんだろう、本気で嫌がらせされているんだろうか。

「確かに……少し、読み難いなとは思いましたけれども」

「本当に初心者向けとなると、これくらいしかここにはありませんからね。読めるのでしたら、しばらく貸しましょう」

「……ありがとう、ございます」

王子が書いた、と聞いてお礼を述べるのに引っかかった。今の私にとって、王子は話題にも出したくないほどの存在だ。たとえ持ち物でも、手にするのは精神的に素直には受け入れ難かった。

「その気があるのなら、王子に頼んでみても良いでしょう。きっと、喜んで教えてくれますよ」
「では、図書室行って来ますね」
脳内手帳の要注意人物にディレスの名を書き込むと、笑顔で会話を打ち切る。嫌がらせだ。何故だか分からないが、嫌がらせされてる。
素早く本の山から抱えられるだけの量を手に取る。そうと決まれば、ここに長居するだけ無駄だ。そのまま、図書室へ向かうべく執務室の扉に手を掛けた。

十五、傍観

図書室と執務室を何度も往復し、やっと山の半分を片付けた。図書室の司書のお姉さんは優しく手続きについて教えてくれたし、片付け方もすぐに覚えられた。最初の数回は迷ったりもしたが、慣れるに従ってスピードも上がる。半分を終えたのは、昼食も終えて数時間経ったおやつ時。だが、作業に慣れた今では、今日中に残りを終えることも可能だろう。順調に山が減っていく様子に達成感を感じつつ、執務室のドアを開く。

「なんだ、アスハは居ないのか」

その声に、上り始めていた気分はどん底に落ちた。部屋には何故か王子が居た。私は存在が消えた状態のまま、王子の様子を窺った。

「何しにきたんですか、殿下。政務はお済みですか」

ディレスが不審げに尋ねた。

本当だよ、何しにきたんだ。よくもぬけぬけと顔を出せるな。どれだけ面の皮が厚いんだ。

「休憩だ。昨日の詫びに茶と菓子の差し入れに来たんだが」

「……随分殊勝ですね。反省でもされましたか」

言われてみれば、王子の手には盆が乗っていた。そこには、三人分の紅茶と茶菓子が乗っている。紅茶からは、甘い花の香りがふわりと香った。ジャスミンのような上品な香りだ。

「まあ……な。さすがに、性急過ぎたと思ってな」

「そうですか。わざわざ、使用人にではなく自分で紅茶を淹れ、自らの手でここまで持ってきたと。ここではなく別室でわざわざ茶を淹れてから。随分と深く深く反省なさったようですね、殿下」

確かにおかしい。

王子ともなれば、優雅にアフタヌーンティを楽しむ習慣があってもおかしくはない。けれど、それを自分で用意するとなれば話は別だ。大抵、こういった準備は使用人に任せるものだろう。それに、

持ち運ぶのにわざわざ王子自ら盆を手に持つだろうか。ここでの習慣は知らないが、こういう王宮では配膳ワゴンに載せ、使用人に押させるものではないのだろうか。

もちろん、ディレスの言うように、深く深く反省した――という可能性もなくはない。反省したからこそ、他人任せではなく自らの手で誠意を見せようとしたということもあるだろう。

だが、それにしても、引っかかる。ディレスの執務室には、給湯設備が備え付けられているのだ。茶を沸かすくらいできないわけがない。

そう。わざわざ、別室から淹れて来る意味が分からないのだ。王子手ずから茶を振舞おうとしていたとしても、葉を持ってここで淹れるべきだ。さほど距離が離れていないとは言え、時間が経てば紅茶は冷めるのだから。

その不審さを、ディレスは王子に問うていたのだ。

「……」

だが、王子は何も言わない。沈黙したままだ。

ディレスはその様子を見て、部屋の隅の応接テーブルへと案内した。王子に椅子を勧め、こじんまりとした机を指し示す。

「その盆はこちらに置いてください。ずっと手にされているのは疲れるでしょう」

「ああ……」

王子は頷くと、盆をテーブルの上へ慎重に置いた。微かに揺れる水面が落ち着くのを待って、王子はカップの一つを手に取った。ひとつをディレスの前へ、ひとつを自分の前へ、最後の一つをサイドに分けて配置する。ディレスから見て左側だ。これは恐らく私の分だろう。

一つ一つを丁寧に配置する手つきは慎重で、意外に感じた。こういうときは、もっと横柄に構えていそうなイメージを持っていたのだが。

カップの配置を終えると、王子は茶菓子を中央に置いた。小さめ

の二段のケーキプレートだ。一段目にはクッキーが、二段目にはケーキが乗っている。クッキーからは香ばしい匂いが漂った。焼きたてなのだろう。これも、王子が作ったのか、用意させたのか。見た目は可愛らしい。赤いジャムの乗ったクッキーに、市松模様のクッキー。木の実の乗った一口大のケーキに、粉砂糖で雪化粧されたガトーショコラ――のようなもの。美味しそうだ。恐らくは料理人に命じたのだろう。わざわざ、王子が。やはり、不審さは拭えない。

準備を整え終えると、王子はシュガーポットとティーポットを脇に寄せた。

「ありがとうございます。私も頂いてもよろしいのですよね？」

「も、もちろんだ」

「では、ありがたく頂くことにします。良い香りの紅茶ですね」

言いながらディレスは、自分の目の前のカップ――の左隣の紅茶を手に取った。

「ま――待て、ディレス。それはアスハの分だ」

途端、王子は目に見えて慌てた。

「アスハの分、ですか？」

「そうだ」

「何故です？　ティーカップはちゃんと三つあるのです。他ので構わないではありませんか。それとも、中身に違いがあるとでも？」

「それは――その、だな。女は甘いほうが好きかと思って砂糖を予め多めに入れておいたんだ、それは。お前は、ストレートで飲むだろう？」

ちなみに、私もストレートで飲むタイプだ。仮に本気だとしたら余計なお世話だ、王子。まあ、この慌てようだ。本気ではないんだろうが。

「ええ。そうですね。憶えておいででしたか」

「ああ、昔からの付き合いだからな」

「それは光栄ですね。殿下に私の好みを憶えていただけるなど。けれど、砂糖を既に入れておきながら、わざわざシュガーポットまで

用意したのですか」
「た、足りないかもしれないだろう？」
ディレスは無言で王子を見詰めた。
「……」
「お、俺も、二杯目は砂糖を入れようかと思ってな」
「……殿下」
ディレスは、背筋が凍るような冷たい声を出した。王子はその声に僅かに体を強張らせた。
「ティーポットに直接砂糖は入れられないだろ？」
「盛りましたね」
「……」
「正直に言いなさい」
「……」
「殿下」
「……、ああ、入れたよ。クソ、何故気づくんだ、お前は」
ついに王子はふいと顔を背け、毒づいた。
ああ、やっぱり。何かしてたか。というか、怪しすぎるだろ、王子。
「殿下が小さい頃からお傍に居るのですよ。これくらい気づかなくてどうします――というより、バレバレですよ。もう少し駆け引きを覚えてください。それで、何を盛ったのですか」
「チッ。隣国の商人から手に入れた薬だ。効能は色々言っていたが、要は惚れ薬だ」
王子は舌打ちした。いや、舌打ちしたいのは私のほうだ。ふざけるな、惚れ薬ってなんだよ。お前はどれだけ人でなしなんだ。
ため息をつきたいのを無理矢理飲み込む。いや、そもそも、ため息では治まらない。嫌悪感に苛立ち、呆れ。胃から湧き上がる吐き気と足元から這い上る悪寒。頭が沸騰し、怒りで生じる眩暈。脳内で王子をボコボコに殴りつけることで無理矢理精神を落ち着けた。
ディレスも呆れたようにため息をつき、手に持ったカップを元の

位置に戻す。
「惚れ薬ですか。また、胡散臭いものに手を出しましたね」
ディレスは目の前のカップを手に取り直すと、口元に運んだ。
胡散臭いとか言うより前に、もっと別の問題があるだろう。だが、ディレスはそれ以上咎める様子もない。実際に被害に遭っていないとは言え、甘すぎる。王子の愚行にこの態度では、気が治まらない。
惚れ薬入りの紅茶を凝視する。私のために用意されたという、それ。揺れる水面は他とは変わらない。艶のある水色。どこか上品さえ感じさせるが――それは間違いなく、薬入りだ。それも、惚れ薬なんて言うとんでもない代物の。
「まあ、そうだな。胡散臭い。だが、隣国の商人が持っていた、というところが気に掛からないか？」
冗談じゃない。王子からのものを手に取る気はないが、知らずにいたらどうなっていたか知れやしない。断りきれずに飲んでいたかもしれないのだ。一口くらいは。お愛想で。
じっとそれを見つめると、一つ決心して身を翻す。確か、給湯設備の側にカップがあったはずだ。
「彼女に飲ませるために購入したのではないのですか」
背後でディレスの声を聞きながら、手ごろなカップを物色する。コップでも何でも良い。要は、あのカップに入っているだけの容積さえ満たせればそれでいいのだ。
「違う。元々は、身の危険を感じたからだ。あの国は、この手の開発は得意なほうだからな。その上、あいつは耳も早い。念のため、お前に薬の解析を頼んでおこうと思ってな。アスハに飲ませてから、解析を頼むつもりだったんだが」
取っ手のついたカップを手に取ると、ディレスたちの前へと戻る。ディレスと王子は、なにやら真剣に話している。ちょうど良い。
私は隙をついて、王子の目の前のカップを手に取った。
「実験も込みですか？　あまり感心しませんね」
カップの中身を、さきほど持ってきた空のカップに注ぎいれる。

王子用のカップは空。そこへ、薬入りの紅茶を注ぎいれる。
「いや、生死に関わる危険がないことは確認済みだ。さすがに俺も、あれだけ好みの女を失うのは惜しい。効果がどれほどあるかは知らんが」
注ぎ終わったら、カップを王子の目の前へ戻す。そして、空になった私の分のカップに、王子の分として用意されていた紅茶を注ぎいれる。
要は、カップの中身を入れ替えたのだ。カップの模様が微妙に違うので、別のカップを経由させて、中身だけを。
「スウォンが怒りますよ。可愛がっているのですから」
入れ替え終えたら、証拠は隠滅しておかねばならない。手元に残ったカップを元に戻すため、再び給湯設備へと向かう。
「だから、何故気づく。仕方ないだろう、まさか自分で試すわけにもいくまい」
軽く水で洗い、水気を切る。念のため手持ちのハンカチで水気を拭うと、元にあった場所に収納する。
「そうですがね。まあいいでしょう、これは私のほうで解析しておきます」
一通り作業を終えると、離れた場所から王子を睨み付けた。さあ、飲め。薬を盛られるのがどれほど屈辱か、その身をもって体感しろ。
「頼む。それで、こっちの紅茶なんだが」
「アスハには今、そこの本の片づけを頼んでいます。当分戻らないでしょうね」
「チッ、間が悪いな。もう少し待ってみるが、戻らなければ飲ませておいてくれ」
誰が飲むか。もう金輪際、王子の差し入れは一口たりとも口にするものか。
そんな私の決意を知ってか知らずか、王子は目の前のカップに手を伸ばす。カップの取っ手に手を掛け、話し合いで渇いたのどを潤そうと口を寄せる。

「まあ、本当に効くのなら良いのですが――」
どこか遠くを見やりながら、ディレスが呟く。だが、その呟きは途中で王子に遮られた。
「――っ」
一口、紅茶を口にした王子は、思ってもみない味にむせた。気管にでも入ったのか、こんこんと咳き込んでいる。
「どうしました？」
ディレスの言葉に、王子は首を傾げて見せた。
「いや、紅茶が甘くてな」
「砂糖を入れておいたのでしょう？」
「いや、俺の分には一杯しか入れてないはずなんだが。間違えたか――いや、カップは合っている。これで良いはずだ」
「アスハの分の砂糖を入れているときに手元が狂いでもしたのでは？」
「そうかもしれん、な――ん？」
「どうかしましたか」
「お前、今日は随分と念を入れて髪をセットしたな」
「……」
「肌の調子も良いな」
「……」
「瑞々しくて――」
「間違えましたね、殿下」
「……そう、らしいな。お前に酷く劣情をかきたてられる」
「仕事になりそうですか」
「独りでする分には、恐らく。早々に執務室に戻るとするか。しかし、効き目は本当らしいな。お前が女に見えてくる」
「気持ち悪い事を仰らないで下さい」
「俺だって気持ち悪いさ。段々お前が絶世の美女に見えてくるんだからな――いや、もう……お前でも良いか」
言って、王子は立ち上がって身を乗り出した。テーブルに片手を

つき、もう一方をディレスの頬に手を添える。そのままゆっくりと顔を近づける。ディレスはその様を、呆れたように見やる。

「……確かにこれは、強烈ですね」

そういうと、ディレスは近づく顔をふいと避けた。避けられた王子は、ディレスの首元へ頭を乗せる。ディレスは王子をかき抱くように腕を回し、首元に指を添えた。

「眠りなさい」

同時に、ディレスの指先が淡く光る。王子の体から力が抜け、ディレスに寄りかかるように倒れこんだ。

力の抜けた王子を認め、ディレスはため息をつく。寄りかかる王子を持ち直し、立ち上がると、背負うようにして引きずった。恐らく、奥の部屋に寝かせるのだろう。

奥の部屋へ消えるディレスを見届け、私は身を翻す。本の山へと近づき、数冊の本を手に取る。持てるだけ持つと、仕事を再開すべく、再び図書室へと向かった。

十六、花茶

日もすっかり落ちた。廊下を歩きながら、ふと窓から空を見上げる。薄く伸ばした群青色にぽつんとひとつ、星が輝いている。澄み渡った空。視線を落として、すっと息を吸う。排気ガスなどの余計な塵の混じることのない、純粋な空気。もう少し時間が経てば、もしかしたら満天の星空も見えるのかもしれない。

今まで夜空を見る機会も余裕もなかった。だが、改めて思う。やはり、ここは日本とは違うのだ。廊下を見渡せば、幾分薄暗い。もう少し夜も更ければ、蝋燭か魔石による明かりも灯されるだろう。けれど、現代日本の室内の明るさとは程遠い。消灯時に辺りを照らすのは、月と星の光のみになる。淡く優しい仄かな光――そう言えば聞こえはいいが、都会に慣れた身には、ただ薄暗いだけだ。

つらつらと取り留めのないことを考えて、苦笑する。空気が汚くても、星が見えなくても、温暖化で気象が狂っていても。会社での重圧、年収、老後の心配と問題が山積みでも。それでもやはり、失えばその不便さは身に染みる。たとえどんなに自然が身近に感じられようとも、私にとっては日本の必要以上に整備されたハイテク文化で生きる方が魅力的なのだろう。

「失礼いたします」

目の前に迫ったドアにノックをして、声を掛ける。入室した私を迎えたのは、執務卓に向かったディレスだった。

「ああ、終わりましたか」

ディレスはちらりと部屋の隅に視線をやった。本の山は全て片付けられている。あれだけ雑然としていた一角は、空間を切り取られたかのようにぽっかりとその床面を見せていた。

「はい。全ての本を、言われたとおりに片付け終えました」

ディレスに視線を合わせて、答える。この場合、薄闇は非常に都合が良い。顔の子細を捉えにくいので、緊張しなくてすむのだ。

「意外に早かったですね。ご苦労様です、少し休んでいきなさい」
ディレスはペンを置いて、立ち上がった。
「あ、ありがとうございます」
勧められるままに部屋の隅の椅子に腰を下ろす。それを見届けて、ディレスは給湯設備のある部屋の奥へと消えた。この位置からはディレスの姿は見えないので、耳を澄ませた。奥から食器の音や、湯を沸かす準備をする音がする。しばらくして音が止み、再びディレスが姿を見せた。
「先に菓子をお食べなさい。茶は今沸かしています」
現れたディレスの手には、菓子が乗っていた。
「これは？」
応接テーブルに乗せられた皿には、王子の差し入れの他に、小さな円柱の菓子が乗せられていた。控えめな薄い焼き色。飾り気のない質素な見た目だった。
「スコーンですよ。これは私が食べようと思っていたのですが」
「え、ディレス様も休憩なさるんですか？」
失念していた。普通は、休憩を提案した側も一緒に休むものだ。ディレスと対面するという展開に思い至り、身構えた。
「それはどういう意味ですか」
しまった。思ったままを口にしてしまった。ディレスはやや憮然としている。
「あ、いえ、深い意味は……。あ、お茶。私が淹れます」
立ち上がりかけると、ディレスに制された。
「いいえ、結構です。貴女はここで大人しく待っていなさい」
「え、でも」
「葉やティーポットの場所は分かるのですか」
「……」
「今回は私から誘ったのです。気にすることはありません」
「では、お言葉に甘えて」
ディレスの言葉に、浮かせかけた腰を下ろし、スコーンへと手を

伸ばす。王子の差し入れにはさすがに手を伸ばす気にはなれなかった。見た目は美味しそうだし、菓子自体には薬が入っていないことは知っていても。

「それは、私が食べようと思っていたのですが――待ちなさい、何もつけないつもりですか」

ディレスは止めるが、もう遅い。既にスコーンにかじりついている。

意外にさっくりした歯ごたえ。口に含んだ生地はわた雲のように口内に増殖した。

水分を奪いながら。

「……」

「何をやっているのですか。そのままでは食べ難いでしょう」

もぐもぐと口を動かして見上げる私を、ディレスは呆れ顔で見下ろした。

「微かな塩味が美味しいですね」

唾液と共に飲み下し、感想を述べる。口の中がぱさぱさするが、決してまずい訳ではない。ぱさぱさするが。

「食べるのならこれでもつけなさい。せめて紅茶と一緒に食べなければ口が渇くでしょう」

ディレスは、菓子皿の隣に置いた白いクリームのようなものを私によこした。

「これは何ですか」

「クロテッドクリームですよ。牛乳を濃く煮詰めて作るものです――貴女、スコーンを食べたことがないのですか」

「ないわけではないですが――ディレス様はスコーンがお好きなんですか」

生クリームかと思ったのだが、また違ったらしい。スコーン自体を食べたことがないわけではないが、それ程頻繁に食べることはない。食べるとしても、かけるのはジャムかシロップくらいだ。クロなんとかというのは初めて聞いた。異世界特有の食べ物なのだろう

か。

いや、そもそも。このスコーン自体も日本で食べたものとは若干異なる。日本で食べたスコーンは、もっとふんわりとしたパンに近い食感だった。これはクッキーに近い食感だ。これはスコーンとは異なるが、似たものなので言語翻訳時にスコーンとして認識されるのか。それとも、単に私が知らないだけで、こういうスコーンもあるのか。どちらかは判別がつかなかった。

まあ、どうでもいいことだが。

「好きというより甘いものが苦手――ああ、湯が沸きましたね。お茶にしましょう」

水の沸騰する微かな音を聞きつけて、ディレスは身を翻す。その動作で、銀髪がなびいて光の跡を残した。その軌跡を眺め、ほうと息をつく。

やはり綺麗だ。頭から足の先まで。容姿は言うまでもなく、その物言い、何気ない所作まで。

意識して眺めている訳ではない。ふとした拍子に目の端に捉えただけだ。それなのに、次の瞬間には目を離せなくなるほど惹きつけられる。それだけの美しさが、ディレスにはあった。

「どうぞ」

また、意識が飛んでいた。ディレスの声に我に返り、仰け反る。目の前に、紅茶が突然湧いていた。

目の前へと差し出された紅茶は、ふわふわと不規則に湯気を揺らしていた。真綿を目一杯伸ばしたかのような白煙は、空間を漂いながら上昇し、やがて薄闇に消えていく。

「ありがとうございます」

ティーカップの配置を終えて、ディレスが対面に腰を下ろす。真正面から見つめられるのを避けようとして、ティーカップへと手を伸ばす。手の中の紅茶へと視線を落とし、カップを持ち上げる。顔を覆うようにカップを近づけて、その端に口を寄せたところで、上品な花の香りが鼻腔をかすめた。

思わず手を止め、顔から離す。顔を上げると、正面のディレスと目が合った。無感情な――けれど鋭い視線が私を貫く。

嫌な予感が、する。

反射的にカップをテーブルに置く。カップと受け皿のぶつかる音が辺りに響いた。耳に痛い高音だが、ディレスは何も言わない。ただ、私を見つめるだけ。じっと、黙って。

カタ、とカップが揺れる。手の震えがカップに伝わった音だった。言いようのない嫌悪感が這い上がる。逃げたい――けれど、ディレスの視線は私を捕らえて離さない。私はカップの取っ手に手を掛けたまま、ディレスの視線を黙って受け止めていた。

「どうか――しましたか」

動かない私に、ディレスが痺れを切らしたように問いかける。

可能性が頭に浮かんで消える。まさか、そんなこと。ありえない。勘違いだ。ただの自意識過剰。そう、考えすぎ。ただの偶然の一致。ほら、良く考えてみろ。そもそも、何故？　理由は？　ディレスに何の得がある？

「あ……、の……」

かすれた声は、湯気と共に頼りなく消えてゆく。思考を溶かされるような甘ったるい匂い。思考はぐるぐると同じところを回り続け、答えの尻尾はつかめない。甘ったるい花の香りは、思考を白濁化させてゆく。けれど、否定の結論だけは勘が拒否した。

「飲まないのですか」

「え……」

「喉、渇いているでしょう？」

「っ……」

低く艶のあるディレスの声。目の前で囁かれると、甘い痺れが体を駆ける。

再びそれへと視線を落とす。艶のある紅い水面を見つめながら、カップを握る手に力を込める。どうしたら。どうしたら、この場から――

「アスハが来ているのか！」

奥の部屋へと続く扉が、勢い良く開かれる。騒音が、溜まった澱を吹き飛ばすかのように響いた。その音の主へと視線が集まる。

けれど、そこに立つのは決して歓迎できる人物ではなかった。

十七、混乱

雨雲を散らす勢いで台風が飛び込んできた。そこに立つ王子の姿を認め、私は息を詰めた。

何故いる。さっきカップをすり替えて惚れ薬を飲ませてやったのに。まだ私に執着しているのか。ディレスに迫って眠らされたんじゃなかったのか。確かに、ディレスは眠らせた王子を隣室へと運んでいたが。もしかして、ずっとそこにいたのか。隣室で寝てたのか。

しかし、そうだとしても。どれだけ寝てたんだ。政務はどうした。仕事しろ。

扉の前に立つ王子に、悪びれた様子は少しもない。むしろ嬉しげですらある。それは、無くしたと思っていた玩具を見つけた赤子のようだった。

そう、言い得て妙。まさに玩具。王子にとっての私とは、そういう存在なのだろう。気に入りではあるが、あくまでも物として。だから、相手の気持ちを推し量ることもない。ただ無邪気に自分の欲求を通そうとしているだけ。民は王の臣下。臣下は王のしもべ。しもべは所有物。きっと、そういうことなのだろう。絶対君主制であれば、その思考はさしておかしなものではないのかも知れない。だが、現代日本に生きる私にとっては決して理解出来るものではない。

私の姿を認め、王子はこちらに駆け寄る。途端、嫌悪が這い上がった。近寄りたくない。菓子皿ごと投げつけたくなる衝動が沸き起こるが、必死で抑えた。しかし、あるいは、そうしていたかも知れない。王子が私の目の前まで来ていたら。けれど、私がそうする前に、ディレスが王子を押し止めるように立ち上がった。

進行を妨げられ、王子は不満そうにディレスを睨み付けた。だが、ディレスを押しのけることはしない。そこまでして私に接触する気はないということだろう。ディレスに頭が上がらないのは本当らしい。とりあえず、ディレスがいる場では安心しても良いのかも知れ

ない。そう思って、ディレスの背に隠れた。
「お早いお目覚めですね」
ディレスは鬱陶しそうに王子に視線を投げかけた。いい加減、呆れているのだろう。
「何故そいつの後に隠れる」
ディレスの質問には答えず、王子は尋ねる。王子は私へと真っ直ぐに視線を寄越した。視線を避けるように身を動かすと、王子は視線をディレスへと移した。その瞳はディレスを強く睨み付ける。だが、徐々にその強さは弱まった。怒りの炎は緩やかに沈静化していき――ついには別の何かに取って代わった。
「お前ら、いつの間にそんなに仲良くなった」
嫉妬をありありと滲ませて王子は問う。だが、そこには先ほどまでの勢いはない。視線を私とディレスの間で往復させては、何かを堪えるように時折目を伏せる。
というか、何を見て仲が良いと判断したのか。ただディレスの背に隠れただけでその感想はどうなのか。
「ですから、もう少しお休みなさいと申し上げたのに」
ディレスは溜め息混じりに嘆いた。だが、意味が分からない。なにが「だから」なのか。
確かに、もっと寝ていれば良いというのは賛成だ。むしろ永眠してしまえとすら思う。だが、ディレスがそういう意味で言っている訳ではないのは、言うまでもない。薬で体調の整わない王子を慮っているのだろうか。それにしたって、話の流れが不自然だ。
「そんな事を言って、二人きりで何をする気だ」
「何もしませんよ。殿下じゃないのですから」
「そんな事を言って、お前はいつもそうだ。表情を変えずに嘘をつく。あの時だって、自分は永遠に俺のものだと言っておきながら――」
言って、王子は片手で顔を覆った。
「殿下」

「言うな。分かってる。俺だって、気持ち悪い」
王子は顔を伏せ、舌打ちを打った。様子がおかしい。
しばらく何かに耐えるように顔を伏せていた王子だが、何かを決心したかのように顔を上げる。その瞳は、真っ直ぐに私を捕らえた。力の篭った目線に体が震え、強張る。その隙を突いて、王子は私との距離を詰めた。
王子は私を抱きしめようと、手を伸ばした。
「な……」
「私の前で良い度胸ですね、殿下」
しかし、王子の体が私に触れることはなかった。ディレスが王子の首根っこを掴んで引き離したからだ。
「何故止める」
「何故って――」
ディレスはちらりと私を見た。そして、何か言いたげに王子へと視線を戻す。だが、王子はその視線を避けるようにぷいと顔を背けた。
ディレスはその様子にため息をつく。
「どうするつもりかは知りませんが、せめて、口説き落としてからになさい」
「面倒だ。それに、側室の地位を用意すると言っているのだ。問題ないだろう？」
それは初耳だ。疑ったことはあったが、実際に側室に召し上げるつもりでいるというのを本人の口から聞いたのは初めてだ。
そういうけじめをつける気があるのなら、何故夜這い前にきちんと本人に告げないのか。もちろん、受ける気などはない。だが、それだけで印象は随分変わるだろうに。まあ、それでも正室ではないところからして、その目的は知れるが。
「側室とは言え、それなりの立場を与えるのです。一時でもその身を傍に寄せる者を、考えなしに選ぶものではありません。せめて、惚れ込ませてからにしなさい。後々厄介事を起こされたら面倒です」

「煩い。細かいことを。そんなの、徐々に体に教え込ませてやれば良いだろ。女なんて、ヤってるうちに直ぐ落ちる」

落ちるか、ふざけるな！　どこの二次元だ。最初は嫌よ嫌よと言いつつ最後は……なんてのは、物語の中での話だけだ。本気で「ストーカー、キモイ！」と認識した女性が、後に恋に落ちるなんて現実であるわけないだろうが。万に一つもありえない。世界がひっくり返ってもありえない。

それでも、もしも。万が一にでもあるとしたら。それは相手が目も眩むような絶世の美形だった場合だ。仮にディレスだったらともかく――王子ではときめく前に嫌悪が上回る。

「殿下……娼婦の言葉はお仕事ですよ」

娼館なんて行ってたのか。そこで一体何を吹き込まれたのか。嫌がってみせる娼婦を無理に組み敷き、懐柔させる過程を楽しませる店だったのか。それとも、娼婦に女の手ほどきでも受けたか。嫌がっているように見えても実は――みたいなことを言われたのか。

何にせよ、一国の王子がそれをそのまま信じるな。そんなのただのサービスに決まっているだろう。とことんどうしようもない王子だな。

「おま……、何故知って……！？　いや、そうではなく。俺の地位と容姿と技術があれば、どんな女だってすぐに惚れるだろ。俺がその気になって、落ちない女などいるわけがない。そもそも、アスハだって、恥ずかしがっているだけで――」

どうしてそうなる。もう、ここまでくるとその俺様思考に頭が下がる。

「いえ、殿下。申し訳ありませんが、ご容赦ください。殿下のご希望には添いかねます」

不敬にとられないよう、できる限り丁寧に、けれどはっきりと拒絶の意を述べる。これ以上ないほど分かりやすく。

「いや、恥ずかしがることはない。正直に言って良いのだ。無理に事を急ごうとしたのが気に障ったのなら、今後は――」

だが、王子はこちらの意図しない解釈をした。
な　ん　で　そうなる。
確かに、襲われたことで印象そのものは落ちているが、それだけが問題じゃない。そもそもが、容姿も性格も好みじゃないのだ。しかも、ロリコン変態。その上、私が異世界に来た原因を作った人物ともなれば、惚れるほうがおかしい。
「いいえ。恐れながら申し上げます。本気で、殿下とそういう関係になるのはあり得ません」
「正直に言えと言っている！」
これ以上ないほどはっきりと断っているのに、何故伝わらない。王子は声を荒げ、あくまで嘘を言っていると信じて疑わない。
「正直に言っています」
「……分かった。何が欲しい。言え、何でも用意してやろう。ほら、この白い指にルビーなどどうだ。よく似合うだろう」
手を取られ、指をなぞられる。嫌悪に、顔面を殴りつけたい衝動を抑えながら、軽く手を払った。
「必要ありません。もし私の望みを聞き届けていただけるのでしたら、これ以上私に関わらないで下さい」
王子は舌打ちを打った。
「そうか。よく分かった。だが、俺は諦める気はない。今日のところは帰るが、今後は覚悟しておけ」
何もわかってねぇよ！
思わず、心の中で叫んだ。分かってない、何も分かってない。
だが、王子は私の反論を聞き届けることもなく、執務室を飛び出した。さながら、尻尾を巻いて逃げ帰る悪役のごとく。
「ディレス様、あの……」
人の話を何も聞いていない王子に、何か手を打つ方法はないものか。助けを求めるようにディレスに視線を投げかける。だが、ディレスは相変わらずの無表情で私を見下ろした。
「貴女、本当に殿下が嫌いなのですね」

「え？　いえ、あの……すみません。殿下には失礼なことを。けど、どうしても、ダメで」

王子への嫌悪に、つい言葉が荒くなっていた。不敬を咎められたと思い、謝る。けれど、ディレスは気にしたようすもなく視線をはずした。

「いえ、怒ってはいませんよ。嫌いなら嫌いで良いのです。それなら、それで」

どこか遠くを見つめながら、ディレスは呟いた。

「ディレス様？」

小首を傾げると、ディレスははっとしたようにこちらに視線を合わせた。次いで応接テーブルに乗った菓子皿に視線を向ける。

「ああ、すみません。休憩の途中でしたね。紅茶は――冷めてしまいましたか。仕方ありません。淹れ直しましょう」

途端、ふっと甘ったるい花の香りが漂った気がした。

「あ、いえ。結構です。そんな、何度もディレス様の手を煩わせるわけには」

「いいえ。良いのです。気にすることはありません。すぐに用意できますので、もう少し休んでいきなさい。貴女が殿下を本気で嫌いなら、今後のことも話し合いたいですしね」

今後のことは話し合いたい。けれど、その紅茶は飲みたくはない。ただの勘だが、それは――

何とかこの場から逃れられないかと視線をめぐらせ、ぽっかりと空いた床面に目が留まる。

「いえ、本当に結構です。あの――そうです、本！　本を受け取りに行かなくては！」

「ああ、それは急ぎではないので、明日で構わな――」

「いいえ、せっかくまだ店の空いている時間なんです。早いに越したことはないはずです。行ってきます！」

絡み付くようなディレスの視線を振り切って、執務室を飛び出した。その背に、ディレスの独り言が後を追う。

「あなたは――」

けれど、その続きは私の耳に届くことはなかった。

十八、王位

逃げるようにその場を去った後。あれから、私は宣言通りに本屋へ向かった。注文した本を受け取ると、執務室に戻りディレスに届けた。気を揉みながら執務室に戻るが、その頃には月も輝く時間となっていた。流石にティータイムには遅い時間となっていたので、それ以上引き止められずに済んだ。

一夜明けて、翌日。またあの薄気味悪い紅茶を勧められるかと怯えながら執務室を訪ねる。身を強ばらせながら今日の用を伺うと、意外な言葉が返ってきた。

「昨夜の態度を見て、貴女がどれだけ殿下を嫌っているのかが良く分かりました。少し、話をしましょう。貴女、本当に殿下の側室になる気はないのですか」

「ありません。小指の爪の先もありません」

「何故ですか。もちろん、貴女が殿下に思うところがあるのは分かります。先日のこともありますからね。けれど、殿下はああ見えて、気に入ったものに対しては大切に扱いますよ。魔道具開発に関してもそうです。逆に周囲に耳を貸さず突っ走るものですから、臣下は苦労するくらいです」

「それは、殿下が熱を冷ますのは難しいから、諦めて身を明け渡せということですか」

「違います。確かに、殿下は一度興味を持ったものに対して長期に渡り執着を見せるところがあります。そういう意味では、確かに熱を冷ますのは難しいでしょう。しかし、問題はそこではありません。逆に考えて下さい。貴女は疎ましいだけだと思っているかもしれませんが、それなりに利点もあるのです。日に数時間さえ我慢すれば、身分と生活が長期に渡り保証されるのです。加えて殿下には、まだ正室どころか側室さえいません。うまくやれば、正室並みの待遇さえ望めるでしょう。それ程の環境を何故みすみす手放せるのです？」

それは私がこの世界の人間ではないからだ。いつか離れる場なのに、その場に根付く努力をして何になる。そもそも、耐えられる限度も度を過ぎている。

だが、それを正直に言う訳にはいかない。何か上手い言い訳はないものか。無言を迷いと受け取ったのか、ディレスは更に言葉を重ねた。

「確かに、貴女から見れば、殿下は性格に難があるかもしれません。けれど、元々の殿下の性格はそこまで酷くもありません。まあ、良くもありませんが――そこさえ目を瞑れば完璧と言って良いと思いますよ。容姿に関しては、肖像画だけで遠方から縁談が舞い込むほどでしたからね。男女問わず」

「え？」

「男性でも構わないとすら思えたそうですよ。肖像画だけ見た限りでは。世界は広いものですね」

「それは……大変でしたね」

「ええ。遠方とはいえ、大国でしたので断るのにも気を揉みましたよ。さすがに今ではそういう話はなくなりましたが。それでも、未だに王宮内では騒ぎもありますしね」

「そうなんですか……」

知らなかった。あの王子相手に恋の騒動。そういえば、今思えば不審者騒動の時に抱きつかれたメイドの反応が随分と寛容だった。あれは権力に怯えて口を噤んだというより、役得と喜んでいたのか。

そんなに顔が良かっただろうか……。王子の顔を思い浮かべようとして、止めた。あまりよく覚えていない。もやをわざわざ晴らす労力ももったいない。あいつはモザイク付きで充分だ。それに、どちらにせよ、ディレスのほうが美形だ。思い浮かべるなら、ディレスの顔の方が幸せになれる。

「ああ、これは余談でした。ともかく、好ましくない面があるとはいえ、貴女にとっても決して悪いことだけではないということです。それでも、気持ちは変わりませんか」

「変わりません」
短くそう答えると、ディレスは腕を組み、考え込むように二、三度頷いた。
「分かりました。そこまで強く拒んでいる者を無理に従わせたところで殿下にも良くありません。本格的に殿下をどうするか考えることにしましょう」
「本当ですか！」
勢い込む私に、ディレスは苦笑する。
「ただし、先ほども言ったように、殿下は気に入ったものに対しては凄まじい執着を見せます。その熱を冷ますのは非常に難しいでしょう。加えて、その地位故に苦言を呈すことの出来る者もいません。正攻法での説得は無理だと思って下さい」
「ディレス様でも駄目なんですか」
「駄目ですね。窘めることは出来ますが、そこで拒否された場合、それ以上強制はできません。殿下に命令出来るとしたら、陛下くらいなものでしょうね」
「陛下、ですか……？　あれ、そういえば、殿下はまだ即位してないんですか」
ディレスの言葉に今更ながらに気づく。そういえば、王子は「王子」だった。歳――は忘れたが、少なくとも二十歳は超えているだろう。執政を行っているようだからてっきり既に即位しているものと考えていたのだが。よく考えてみれば、みな「殿下」と呼んでいる。いや、王子だからといって執務を行わないということもないか？
「貴女……」
ディレスが呆れたように見つめた。まさかそんなことも知らないのか、という表情だった。そこには幾分かの疑念も見てとれた。肌を舐めるようにかすめる視線が、私の瞳を捉えた。まるで懺悔を待つかのように、ディレスはじっと私の瞳を見つめる。数瞬の沈黙。しかし、探るような視線は、すぐに引き上げられた。
「そういえば、貴女はこの国に来て間もないのでしたね。先ほども

話したように、殿下はまだ独り身です。この国では現在、独り身の人間では王位を継げないことになっています。独り身では直系の子孫が期待できず、争いの火種になりますからね」

仮に王子が即位したとしても、子供が望めなければその後がややこしくなるということか。確かに、王子が崩御した後の継承問題は面倒そうだ。しかし、それでも今後結婚する可能性がなくもないだろうし、とりあえずでも即位させるのが普通じゃないのだろうか。いや、現王はまだまだ若いのか？　いや、そもそも陛下は王子から見て誰に当たるのか？　父親？　叔父？　それとも、もっと遠い親戚？

どちらにせよ、今なお「王子」として呼ばれているのであれば、まだ王子は王位継承権を持っているということになる。となれば、今の陛下には子供がいないか、王子の父親にあたる人間が陛下にあたるということか。ここの国の王位継承はどうなっているのだろうか。疑問に思わなくもなかったが、私はこれ以上の思考を放棄した。別に、この国がどうなっていようとどうでもいい。

「つまり、結婚していないと即位できないということですか？」

「そう考えてもらって構いません。他にも理由はありますが、それはいいでしょう。今回の件には関係ないことですし」

他にも理由があるのか。興味なさげに話を聞いていると、ディレスが訝しげにこちらを見た。

「話を戻します。つまり、殿下に命令できるのは陛下のみとなります。説得により諦めさせるのは無理と考えてください」

「では、陛下にご命令いただけるようお願いするのは？」

駄目元で言ってみる。案の定、ディレスは眉を寄せた。

「何故？　貴女、よもや自分にそのような権限があると勘違いしてませんね？」

「もちろん、私からは無理でしょうが、ディレス様から進言していただければ」

「ですから、何故？」

「何故、って……」

言葉に詰まる。そりゃ、王子が鬱陶しいからだ。その王子をどうにかしようと話しているところへ、陛下であれば命令できると聞けば、それに縋るものではないか。

「貴女、本当にこの国の事情を理解していないようですね」

ディレスは顔を顰め、腕を組んだ。

「え？」

「殿下は独り身です。けれど、いまだ第一王位継承権を持っています。二十五歳ともなって、ですよ。通常であれば誰かが正妃を迎え、王位を継いでいるものでしょう？」

そんなものか。話を聞きながら思い巡らす。確かに、王子といえばもう少し若いイメージがある。成人すれば前王は退位し、王子が即位するものだ。

いや、待て。確かに、ファンタジー小説などの王子は歳若い者が多い。だが、あれは物語の中での話だ。単に寿命が短く前王が執政を執れなくなってやむなく、といった事情だろう。事実、現代の某国皇太子はもっと歳が上だったはずだ。確か。

ただ、ここは異世界だ。国によっても継承法が違うだろう。この国では子供ができれば王は早々に退位し、十代のうちに即位してしまうのかもしれない。あまり下手なことを言って不審に思われるのも面倒だ。大人しく話を合わせることにした。

「では、何故……」

まさか、あの性格で政務に関しては敏腕だとか？　即位を待望されるほどの器だとか？　そんな馬鹿な。いや、性格と仕事ぶりが必ずしも一致しないのは分かっているけれど。

「決まっているではありませんか。誰も居ないのですよ。王位を継げるだけの者が」

「え……」

さっと血が下がっていくのが感じられた。待て、あの男以外に王位継承権を持つ者がいない、だと？　それはつまり。

「その表情では気づいたようですね。そうですよ、たとえ身分のない子供だとしても歓迎されるのですよ、この国では。殿下自らが望まれる女性は」

「たとえ側室であろうとも、ですか」

「そうです。もちろん、陛下もご健在ですし正妃との仲も睦まじく、まだまだその御子を期待できます」

なるほど、陛下の年齢が気になるが、まだそこまで切羽詰ってはいないというわけか。それは不幸中の幸いだ。けれど、王子の子供が望めるのならそれに越したことはないのだろう。

「なるほど。陛下はできれば殿下を王に据えたいとお考えなのですね」

「そう、ですね……。というより、わざわざ殿下に命令してまでその可能性を潰す必要もないと考えるだろう、というべきでしょうね」

そうか。そうであれば、確かに陛下に進言したところであまり意味はないだろう。先ほどのディレスではないが、「何故わざわざ邪魔をする必要があるのか？」と一蹴されるだけだろう。

しかし、そう考えると疑問も残る。何故今まで王子は正室どころか側室も召し上げずにいられたのだろう。こういう場合、周りがほっとかない気がするのだが。というより、先ほどの話からすると、遠方から縁談が舞い込むほどモテモテだったということじゃないか。いや、さっきの話は男だったが、女性にだって言い寄られる機会は多かったはずだ。それだけモテていたのなら。

「なるほど。ところで、殿下には好いた方でもいらしたのですか」

「ああ、殿下が独り身でいることについてですか。貴女、本当に――どこに住んでいたのです？」

「どういう意味です？」

背筋に汗が伝った。何故だ。それを知らないことで、何故以前の居住を疑われる。不安に腕を組む。だが、ディレスはそれ以上を追求しなかった。

その代わり、ディレスは予期せぬ台詞を放った。

「戦争が、あったでしょう。五年前に」

十九、命令

「……」

息を呑む。

戦争が、あった。それはスウォンからも聞いていたことだ。けれど、今回はただの事実を伝えるだけに留まらなかった。ディレスの言葉の意味するところに思い当たり、言葉を失う。

「今までは復興で忙しかったですからね。そんなことを気にかけている場合ではなかったのですよ。昨年頃からようやく余裕も出て町にも活気が戻りましたが」

そんなこと、全然気づかなかった。民は、穏やかで。町は、活気があって。つい先日も、王子の誕生祭で盛り上がっていて。異世界召喚に腹を立てて――

「ああ、だから……」

思わず呟いて、慌てて口を噤んだ。けれど、ディレスには聞こえていたようで、首を傾げられた。

「だから？」

「いえ、だから今まで独身だったのだと――そんな余裕もなかったのだと理解しました」

今ここで、わざわざ王子を見直したと告げる必要はない。たとえ王子が民を思っていたのだとしても、王子の行動は許されるものではない。特に、その後の行動には許す気もない。

「それなら、結構。立場的にも、状況的にも、貴女が殿下を拒むのは非常に難しいのですよ。それを心得てください」

「はい」

「では、本題です。殿下に正攻法での説得は不可能です。殿下の熱が冷めるのを待つのも難しいでしょう。さて、どうしたら良いと思いますか」

「え……と。別の何かで、気を逸らす？」

「ええ、そうですね。それも一つの答えでしょう。つまり、変化球での対応が必要になるわけです。一朝一夕で成せるものとは考えないで下さい」
「殿下は、気に入ったものに対しては長期に渡り執着を見せる――でしたっけ」
「そうです。具体的な方法は追々考えるとして、その間に襲われでもしたら元も子もありません。貴女はまず、自分の身を自分で守るための術を得なければなりません」
「武術を習え、ということですか」
「違います。所詮女性の筋力は男性には敵いません。ああ見えて、殿下も武術を嗜んでいるのですよ」
さすがに、腐っても王子というわけか。
もちろん、女性だって、鍛えればそこらの男性より強くなることは可能だろう。けれど、同じ条件下であれば、女性は明らかに不利だ。男性に敵うのはレアケースだと思ったほうが良い。それに、今回の場合、組み敷かれることも想定しなければならない。そんな状況を打開するのに、付け焼刃の武術など役に立たないだろう。
「では、魔術を習えとでも？　それなら、スウォンさんに貰った魔石があるので――」
「違います。そもそもが、二人きりで殿下に遭わなければ良いのです。違いますか」
「は？　いえ、それは確かにそうですけれど。そんな、殿下がいつどこを歩いているのかなんて知りようがないですし……」
それが分かれば苦労はしない。自由気ままな王子は、ある意味神出鬼没だ。王子ほどの身分ともあろう者が、平気で使用人の寝泊りしている場所へと出入りするほどなのだから。
だが、何を言っているのかと苦笑する私に、ディレスはとんでもない言葉を投げかけた。
「知りようがなければ、把握できるように細工すれば良いのです」
「……」

待て。

「スウォンから魔石については説明を受けましたね？　自動的に位置を発信する魔石を、殿下の身につけるものへ仕込めば良いのです」

待て待て待て。

それは、臣下としてどうなのか。いや、王子の位置を把握できるのは確かにありがたいが、一国の王子に対して、それはどうなの。プライバシー的な問題もあるだろうに。いいのか。そんなことして。訴えられたりしないのか。それより前に、良心の呵責とかないのか。

「あの……それは、魔石の波動とかでバレたりすると思うのですが」

「バレぬよう細工をするのですよ。まさか、私がそんな分かりやすい術式を組むわけがないでしょう」

「ディレス様が、組むのですか」

「そうです。ですから、仮に殿下に気取られたとしても、貴女が責を問われることはありません。安心なさい」

「そういう問題では……」

あるような、ないような。

躊躇う私に、ディレスは不審げな目を向けた。

「何をそんなに躊躇うことがあるのです？　貴女は責に問われません。魔石は私が用意し、術式を組むのも私です。貴女が関与したことへの証拠は何一つ残りません。何を心配する必要があるのですか」

「心配というか……それは、さすがに、不敬なのでは」

そう言うと、ディレスは軽く目を見張った。

え。なんでそんな意外そうな目で見られているの、私。ディレスの中で私はどんな風に映っているのか。もしかして、王子を誑かす悪女にでも見えているのか？

「確かに、事が露見すれば不敬となるでしょうが――他に何か良い案が？　昨夜の殿下の様子だと、今日から猛攻勢となりますよ。むしろ、昨夜何もなかったのが不思議と思った方が良いくらいに」

「え」

「冗談です。まだ、殿下は私の影があるところでは事に及ぼうとは

考えないでしょう。けれど、貴女が仕事の合間に独り廊下を歩いているときまでは保障できませんよ。あるいは、私の居ぬ間の数刻に待ち伏されるかもしれません。たとえ私室といえど、私も常にそこに居るわけではありませんからね」

「確かに、そうですね……」

あり得ないと言い切れないところが、王子の怖いところだ。

「では、これを」

王子の奇行をうんざりしながら思い出していたら、目の前に小さな石を差し出された。何も考えずに手を出しそうになり、慌てて引っ込めた。

「待ってください。私はまだ了承したわけでは――それに、そもそも、私が殿下にこれを仕込むのですか」

「そうですよ。これくらいは、覚悟していたでしょう？　殿下を拒む事が割に合わぬほど面倒であっても、それでも拒否すると言い切ったのですから」

うわあ、そうくるか。

私は頭を抱えた。王位だのなんだのの説明は、ここに帰着させるための布石か。

確かに断りにくい。私は王子に身を捧げる気はないと言った。ならば、王子に諦めてもらうしかない。けれど、王子が諦めるような性質の人間ではないことは説明された。それを期待するのは無理だ。同時に、時間が解決するのも期待できない。では強制的に押さえつける方法はと考えたところで、「王子」の権限がそれを阻む。だれも王子の行動を制することはできない。陛下であれば命令自体は可能だが、状況がそれを許さないのは今聞いた。打つ手なしだ。こちらから提案できるようなことは思いつかない。であれば、現状、最善と思われるディレスの提案を否定するのは不自然。そして、その方法を理由もなしに拒否するのは私の意思を疑われる。何が何でも王子の側室にはなりたくない、という意思を。

けれど、だからと言って。無茶ぶり過ぎるだろう。いくらなんで

も。

「確かに言いましたが。しかし、そもそも、私と殿下を近づけないようにするための策ではありませんか。何故、私が殿下に近づくなどという危険を冒さねばならないのですか。本末転倒ではありませんか」

どうやって私に仕込ませる気かは知らないが、こっそりやらねば意味がない。状況によっては、王子に触れなければならない。こちらから触れるなど、狂気の沙汰だ。それこそ、襲ってくれと言っているようなものだ。

もちろん、今の私であれば方法がないこともないが――それはまた別の話だ。

「しかし、他に誰が居るのです？　私では殿下に警戒されてしまいます」

「それは……その、他のそういうのが得意な人を雇うとか」

仮にも一国の王子なのだから、そういうのが得意な人間とかいるんじゃないのか。こう、諜報員みたいなやつが。

「確かに殿下に気取られぬよう動ける者もいます。けれど、そういった者は今は全て出払っています」

微かに眉を寄せて、ディレスは答えた。

いるにはいるが、別の任務についているということだろうか。

「でしたら――」

ならばフリーの者を今回限りで雇えばいい。だが、そのことを口にしようとして思いとどまった。その危険性に気づいたからだ。

「無理ですよ。いくら治安が良くなったとは言え、仮にも王子ですからね。信用のできない者をそう簡単に城に入れられませんよ。使用人程度ならともかく、そういうことに長けた人間は余計に」

だが、ディレスは先回りして答えた。どれだけ暮らしが安定していても、よからぬ事を考える者はいるものだ。特に、上に立つ者となれば恨みを買うことも多いだろう。あの王子の性格だ、好ましくなくいと思っている者も多いはずだ。

あ、駄目だ。断る文句がまた封じられた。他になんと言っていいものか。

「とは言っても、実際、どうやって」

「その辺は任せます。殿下が身につけるものの中に仕込んでも良いですし、直接触れても良いでしょう」

ディレスはさらりと答えた。何とでもない事のように。

「ええと、常に身につけているものを外すとしたら、眠るときくらいしかないような気がするのですが……。それに、直接触れるなどしたら襲ってくれと言っているようなものですよね」

「私の目の前でしたら殿下も自重するでしょう。眠るときしかないのでしたら、忍び込めば良いことでしょう？　やりようはいくらでもあるはずですよ？」

思わず顔を引きつらせた。

たとえ襲われる前にディレスに止めてもらえるとしても、王子に触れるなどしたくない。顔も見たくないのだ。触るなどもってのほかだ。寝室に忍び込むのはある意味安全かもしれないが、あまり気が進むものではない。寝込みを襲われたのは一昨日の話だ。過敏になっていてもおかしくはないだろう。

「ですが……」

納得できるものではないが、方法も提示された。拒むための理由を全て封じられ、私はそれ以上の反論の言葉を思いつけなかった。

けれど、肯くにはまだ抵抗があった。ただ意味もなく拒否の言葉を呟く。

「何が納得できないのです？」

焦れたようにディレスが訊いた。

「それは……」

返答に窮す。気が乗らないのは、ただ嫌だからだ。しかし、そう答えるのは許されない。その答えは既に塞がれてしまっているからだ。

今、王子に触れたくないという理由でディレスの提案を拒むこと

はできる。けれどそうすれば、何かの隙に王子に襲われる可能性を覚悟しなければならないということになる。それは、どうあっても王子を拒否すると言った私の姿勢を疑われることにも繋がるのだ。

「もしかして、寝室以外では常に誰か居るだろうから襲われる心配がないとでも考えていますか」

黙りこむ私を不審に思ったのだろう。ディレスが声を掛けた。

だが、違う。私が気が乗らないのは、そこまでする必要がないと考えているからだ。通常であればディレスの提案はそれなりに有効だ。色々と気になるところはあるが。普通であれば、気は進まずとも肯いていただろう。

だが、今の私は違う。寝室で襲われさえしなければ、他で襲われる可能性などないに等しいのだ。基本認識されていないのだから。不意を突かれて触れられる事態にさえならなければ、私は常に安全な位置にいられる。

「そういうわけではないのですが……」

言葉を濁すと、ディレスはため息をついた。次いで、何故そんなに拒むのかと不思議そうな視線を寄越された。

いや、ただ呆れただけか。目の前の問題からただ逃げようとするようにしか見えない態度に。

「あまり、使用人を信用するのも考え物ですよ。仮に、誰かが居たとしても、私やスウォン以外の者は、貴女を殿下から守ることはしません。わざわざ王子に楯突いて不興を買う必要などありませんからね」

その言葉に、はっとした。確かにそうだ。王子に物申せる者など居やしない、とさっき聞いたばかりではないか。もし、メイドと廊下で話していたとしたら。王子は私を認識できる。そこへ強引に乗り込まれたら、成す術などない。メイドは王子に物申せるわけなどないし、口封じをされれば誰かの助けすら望めないのだろう。

安全だと思っていた状況さえ、崩された。もうこれ以上、ディレスの提案を拒むだけの理由は見つからなかった。

仕方がない。断る理由もなければ、逆にこちらに不利となるならば。安っぽい罪悪感と目前からの逃避は振り払わねばならない。

視線をさ迷わせて、息をついた。吐き出した分だけすっと息を吸う。朝の澄んだ空気がのどを抜けた。やや冷たい空気は頭を冷やし、気を落ち着ける。

「納得しましたか」

私の様子を見たディレスが、念を押すように声を掛ける。嫌だと首を横に振りそうになるのを抑えて、ゆっくりと、私は頷いた。

二十、方法

背後から微かに小さな音が響いている。耳をすませてようやく聞き取れるほどの大きさだ。ペン先が紙を引っ掻くかすれた音が不意に止まる。間を置いて紙の擦れる音が耳に届いた。

壁にもたれて息をつく。さっきからこの繰り返しだ。時折身じろぎする音が混ざるとは言え、壁を隔てた先の人物は意外に仕事熱心だった。ぱらぱらと舞うような物音で、紙の束が積み上げられていくのが目に浮かぶ。サインの合間の沈黙は、丁寧にも書類に目を通している様子が窺えた。

そう。私は今、王子の私室の扉の横で耳を澄ませている。いや、正確に言うと扉の横の護衛の騎士の横で、か。王子が寝るのを待って、身につけるものに仕込むことにしたのだ。現在、時刻は深夜にまで差し掛かっている。

もちろん、王子の私室に立ち入るなどしたくはない。二人きりで王子の場にいるなど、何をされたって文句は言えない。扉の外には護衛が二人いるが、助けてくれるなどといった甘い考えは持たぬほうが良いだろう。どこの者とも知れぬ使用人が喚いたところで、王子に害がなければ見捨てる可能性が高い。

それでも、この方法が一番安全で確実なのだ。

実は今日、昼食を終えて戻ると執務室に王子が訪れていた。認識されない状態のまま侵入して様子を窺うと、ディレスと政務について話していた。話を聞いていると、私目当てで訪れたが、手持ち無沙汰に始めた仕事の話で盛り上がった、という状況らしかった。話に夢中になっている王子は、無防備だった。隙はいくらでもあった。けれど、仕込むのは無理だったのだ。

触れれば私は確実に認識される。それは今までの状況から分かっている。突然湧き出た私が、自分の体に触れているとなれば不審に思わぬほうがおかしい。そもそもが、どこに仕込むのが最良かも判

断できなかった。体に直接貼り付けるのは論外。服は替えるだろうし、気づかれやすい。洗濯時に剥がれる可能性も一番高い。宝飾品の類は、体にほぼ密着している。仕込むと同時に認識される可能性が高い。やはり無理だ。

仕方がないので、王子が眠っている隙に持ち物に仕込むことにしたのだ。そして今に至る。

当然だが、王子の私室に長居などしたくはない。さっさと仕込んで帰るつもりだった。だから、王子が寝ているだろう時間を見計らって、夜遅く訪れた。だが、当てが外れた。

王子は意外に仕事熱心だった。外は真っ暗、深夜に差し掛かる時間帯だというのに、眠る気配もない。予想を裏切られた。かれこれ三時間は経ったのではないだろうか。

おかげで私の方が暇で仕方ない。一度こちらが休憩を入れたくらいだ。ついでに部屋から魔石と本を持ち出して、今は暇つぶしに術式の解析を始めている。

術式は面白い。酷く緻密に組まれているところもあるかと思えば、おおざっぱなところもある。随分と不格好なのだ。例えば、キーから処理を開始するあたりは簡単なのに比べ、対象を認識する処理は緻密に組まれていたりする。人体の成分まで考慮に入れた上、更に境界線を引く数式まで組み込んである。そこまでしなくとも、範囲指定で良さそうなものを。持ち主の認識処理は別に組んであるのだから、あとはその範囲だけ弾けば良いだろうに。かと思えば、動力源である魔力の引き回しや処理順序も無駄が多い。周囲の水分濃度が百パーセントであれば、それはもう水中を想定しているわけだから、伝導率など再計算するだけ無駄だ。もう少し上手く組めば省エネになるはずなのだが。

空き領域に複写した術式をこねくり回しながら、単位処理を再構築していく。パズルを組み上げるに似た作業は、良い暇つぶしになった。

おそらくは、定型処理として部品化されたものを継ぎ接ぎして組

んだのろう。偉そうに無駄の多い式だと言ったが、ざっと大枠を捉えただけだ。当然だが、細部を正確に把握できているわけではない。無駄のように見えて必要な処理もあることだろう。もちろん、全体像が把握しやすく、誤作動を起こし難い組み方というのもわかっている。

組み直した式を思考の中で流していると、不意に物音が止んだ。

次いでやや疲れ気味に息を吐き出す音と、あくびの声が聞こえた。乱暴に書類を片付ける音が響いたかと思うと、微かな衣擦れの音が続く。しばらくすると、その音も聞こえなくなった。耳を澄ませて、やっと微かな息遣いが確認できる程度。その息が規則的になるのを待って、私はその場に立ち上がった。

周囲に目を走らせる。扉の両脇に護衛が二人、直立不動で佇んでいる。その目は真っ直ぐに前を向き、こちらに視線を向ける様子はない。存在を認識されていないことを確認し、彼らの位置を把握する。触れぬように気を配りながら、扉に手を掛けた。

ギッと蝶番の軋む音が響いて手を止める。素早く周囲に目を走らせるが、護衛はこちらに顔を向けることもない。気づかれていないことを再確認し、ドアノブに掛けた手に再び力を加えた。

「それで、何に仕込んだのです？」

翌日、無事に終えたことを報告すると、ディレスはそう訊いてきた。

第一声がそれか。

「え？　靴にですが」

あえて「それ以外に何がある」という風を装って答えてみる。だが、ディレスは僅かに眉を寄せた。私の答えは気に入らなかったようだ。

「何故、靴にしようと思ったのです？」

正直に言えば、寝室に入ってすぐに目に付いたからだ。この世界では靴を頻繁に替えるということもないようだし、他の最適な持ち物を探すのも面倒だった。万一にでも王子が起きだしたりしたら心臓に悪い。

だが、正直に話すつもりは毛頭なかった。

「靴が一番簡単だろうと思ったからです」

「簡単ですか？　むしろ、触れるのに一番不自然な箇所だと思うのですが……どうやったのです？」

やっぱり訊いてくるか。

首を傾げるディレスに、私は用意していた答えを口にした。

「殿下の進路上に、いただいた魔石を置いて踏ませました」

その言葉に、ディレスは腕を組み、考え込むように顔を顰めた。しばらくの無言の後、ディレスはじっと私を見つめる。色素の薄い灰色の瞳に射抜かれて、心臓が跳ねた。顔に熱が集まるのを感じて、視線を逸らす。だが、ディレスは逆に探るように私を見つめてきた。肌を焼かれるような錯覚が頬を滑る。ぞわりと粟立つ感覚に息を呑む。

だが、すぐにその感覚は消えた。そっと視線を戻せば、宙に視線をやりながら呟くディレスの姿が目に映った。

「よく見つからずに……」

そこまで言って、ディレスは口を噤む。私に気づいたように視線を戻し、再び口を開いた。

「まあ、良いでしょう。確かに探知機は作動しているようですからね」

そう言うと、ディレスは身を翻して執務卓へと移動した。机の引き出しに手を掛け、中から掌に収まる石を取り出すと、再び目の前へと戻ってきた。

「では、これを」

そう言って、ディレスは手の中の石を差し出した。

「もしかして、受信機ですか？」

石を手の中で転がしながら、術式の有無を確かめるべく意識を走らせる。ざっと流しただけだが、目的のものはすぐに見つかった。
「そうですよ。使い方は分かりますね？　キーは一定範囲の熱と振動にしておきました。石の真ん中あたりを指一本で二回叩きなさい。それで起動できます」
試しに人差し指で石の中央を二回叩いてみる。すると、石の中に小さな光が二つ現れた。一つが青色、一つが緑色だ。
「私はどちらですか」
「緑ですよ。殿下が青色です。今は割と離れていますね。この距離だと私室でしょう。多分、まだ眠っているのでしょうね」
「なるほど……」
魔石の中を覗き込む。確かに、方向からして私室っぽいが、酷く分かりにくい。小さな魔石の中の小さな光を見るのだ。
そんな私の様子を見て、ディレスは執務卓から無造作に一枚の紙を取り出した。
「もう少し詳しく位置を把握したいと思ったのなら、地図を使うと良いでしょう。地図の上に魔石を置いて、一回叩きなさい」
試しに、さっき貰った魔石をディレスの差し出した城内地図の上に乗せ、中央をとんと一回叩く。すると、地図の上に光が転写されたかのように光った。今度は、地図の上に拡大されて映し出されていることもあり、少し見やすい。地図上とは完全にリンクされてはいないようだが、それでも充分分かりやすかった。
「なるほど、これだと分かりやすいですね」
「地図の座標に完全に映しきるのは難しいですけどね。大体の位置を把握することはできます」
「それでも、殿下を避けるには充分です。ありがとうございました」
ぺこりと頭を下げる。本当に、助かるのだ。王子の位置が分かるのと分からないのとでは安心感が全然違う。心の底から感謝の意を込めて、礼を述べる。だが、頭を上げた私を迎えたのは、興味なさげに見下ろすディレスの視線だった。

「それは良かったです。では、これで一応殿下に襲われる可能性はなくなったと考えて良いですね？」
「……ええ、まあ」
無表情で確認をとるディレスに、一瞬たじろいだ。そこには、何の感情も読み取れなかったからだ。言葉だけ聞けば一緒に喜んでくれているようにも聞こえるが、その目は冷たい。何か気に障ることでも言ったのかと怯えるほど、ディレスの視線は冷ややかだった。
「では、今日からはもう少し広範囲を独りで動き回る仕事もこなしてもらいます。それでは、今日の仕事を説明します。内容ですが――」
ディレスは淡々と話し始めた。その内容にぼんやりと耳を傾けながら、魔石を見る。鈍く光る青色は未だ動かない。その様子にほっとして、魔石の動作を止める。光が消えたのを確認して、私は再びディレスの話へと意識を向けた。

二十一、お使い

「届けものをしてほしいのです」
そう言うと、ディレスは机の上の封筒を手に取った。
「届けもの、ですか」
拍子抜けして呟く。要はお使いだ。この辺の地理に疎いと言え、そう難しい仕事ではない。だが、軽く考える私に、ディレスは釘を刺した。
「ないとは思いますが、城の外です。殿下には一応気をつけなさい。私の目の届かない範囲までは保証出来ませんからね。それと、知らない人にはついて行かないように」
おかんか。初めてのお使いじゃないんだから。やや呆れながらも頷くと、ディレスは更に続けた。
「ああ、一応言っておきますけど、くれぐれも粗相のないように。殿下までとはいかないまでも、場合によっては首が飛びかねない相手ですからね」
首が飛ぶってお前。
物騒なことを平然と口にするディレスに、顔を引きつらせる。物申したいのをぐっと飲み込む。文句を言うより、聞いておきたいことがある。
「そういえば、どんな方か伺ってませんでしたね。お訊きしてもよろしいですか？」
「フォード公爵です。隣国との外交を主に担当されている方ですよ。高名な方ですから、貴女も良く知っているでしょう？」
知らない。知るわけがない。さも知ってて当然といった口調で訊かれたが、知るわけがない。特に返事を求められたわけではないが、ごまかすように曖昧に頷いておいた。
「気難しい方なんですか？」
「いいえ、どちらかと言えば温厚な方ですよ。普通にしていれば特

に問題はありません。いつも通りの振る舞いで大丈夫ですが、念のためです。貴女は時々常識が抜けているようですから」

「……」

何だろう、このイヤミ。昨日王位継承について質問したからか。戦争について知らなかったからなのか。

「他に質問は？」

「ありません」

「では、これを。重要な文書ですので汚したりしないように。もちろん、中身を見るなど言うまでもありませんよ」

そう言って、ディレスは封筒を手渡した。ざらつきの残るややくすみがかった封筒。簡単に糊付けで封をした状態。お世辞にも重要文書が入った封筒には見えなかった。

それでも、シワがよらないように気をつけて、エプロンのポケットにしまった。

「確かにお預かり致しました。それで、フォード公爵家までの道順を教えていただきたいのですが」

「ああ、そうですね。忘れていました。駄賃です」

ディレスは懐から皮袋を取り出すと、私の掌に乗せた。意味が分からないまま受け取って、首を傾げる。

「駄賃、ですか？」

出張手当てというやつだろうか。前払いとは気前が良い。

「ええ。城を出たら、これで馬車を拾いなさい。フォード領まで辿り着いたら、この地図を見て行きなさい」

ディレスは執務卓の引き出しから紙切れを取り出した。四つ折りに畳まれたわら半紙は、広げてみるとかなりの大きさになった。新聞の一面くらいはあるだろう。

「……」

こういう物も、魔力とかで何とかすれば良いのに。探知機を作れるなら、地図くらい出来ないものか。携帯ナビみたいな感じで。いや、待て。あれは衛星からのデータがあるからこそ成り立つのか。

考えこむ私にディレスは不審げな視線を向けた。
「どうかしましたか」
「あ、いえ、地図の機能を持った魔石があったら便利だなぁ、と思いまして」
そう答えると、ディレスは眉を寄せた。
「それは、殿下が非常に喜びそうなアイディアですね」
言われて、私も顔をしかめた。二人して苦虫でも噛み潰したかのような表情で見つめ合う。ある意味、ディレスと心が通じた瞬間だった。
多分、考えていることは全く違うだろうが。
「では、行ってきますね」
微妙な空気を振り払うように身を翻す。風にスカートの裾がふわりと舞った。
「気をつけて行ってきなさい」
背中にかけられた言葉は、その内容と裏腹に冷え切っていた。

生ゴミの据えた臭い。湿った生臭さの中につんと鼻をつく酢酸臭。口の中がじわりと痺れる。
不快。非常に不快な空気だった。現在、乗り物酔いの私にとっては余計に。
フォード領まで三時間ほど馬車に揺られた。基本真っ直ぐ走るだけとは言え、石畳の街道は頻繁に上下に揺れた。乗り心地は最悪。まさかこの歳で乗り物酔いになるとは思わなかった。
いや、暇つぶしに王子のノートや図書室で見繕った本を読み、探知機を解析していたのが悪かったのか。吐く前に目的地には着いたが、危なかった。
そう、馬車。遠目から眺めることはあったが、乗るのは初めてだ。物珍しさにはじめは浮かれた。馬とか馬車とかを見たのは初めて

だ。流れ行く景色を眺めて感傷に浸ってみたりもした。だが、すぐに飽きる。暇つぶしに本を読んでみたが、すぐに酔ってそれどころではなくなった。

馬車から降りて、しばらくはその辺に座ってやり過ごした。それでも、まだ気持ち悪い。帰りにもう一度乗ることを考えると憂鬱だ。

ロスした時間を取り戻すため、地図を見ながら、最短経路を割り出した。大通りでは回り道になりそうだったので、小道を進んだ。選んだ道が悪かったのか、暗いし空気は悪い。おまけにひと気もない始末。酔いの余韻が残る身には余計に堪えた。

いや、時折真っ暗な建物の中から光るものがある。人の瞳だろうか。ぎょろりと舐めるように周囲に視線を走らせる様はまるで獲物を見つけた猫のようで――

ともかく。どちらにせよ、か弱き乙女が通る道ではなかった。

くそ、馬車が公爵家まで直接乗り込むのを渋った時点で嫌な予感はしていたんだが、このせいか。いや、そもそもが――

そこまで考えて、息をつく。考えても仕方ないことだ。

今からでも遅くない。時間はかかろうとも、大通りへ引き返そうか。

「いやっ」

迷っていると、女性の甲高い悲鳴が耳に届いた。ガラの悪そうな男二人に引きずられて暗がりに連れ込まれそうになっている女性が視界に入る。

呆れてため息をつく。

こんなところを独りで通ろうとする女性も女性だが、男も男だ。その顔には品のない笑いが貼り付いている。目的は明らかだ。

ああもう、この世界の男どもは本当ロクなのがいないな。こっちに来てからまともな男を見た覚えがない。

どうしたものかと腕を組み、辺りを見回す。辺りにはダストボックス、ダストボックス、ダストボックス……

なるほど、汚臭の原因はこれか。これだけゴミ箱があればそりゃ

生臭いだろう。おもむろにそのうちのひとつに近づいてみる。木でできた四角い箱。蓋があるとはいえ、これでは臭っても仕方ないだろう。それでも、中世みたいに垂れ流しでない分、全然マシなのだろうけれど。

まわりにあるのは、このゴミ箱のみ。他に役立ちそうなものはないし、助けてくれそうな人など見当たらない。

で、あれば。

覚悟を決めてすっと息を吸う。息を止めてゴミ箱の蓋を持ち上げる。そのまま、男どもの背後へと近づく。触れないように注意して、男の足元に置いた。男どもがまだ蓋に気づいていないのを確認して、少し後方にゴミ箱の中身をばらまく。ついでにそこら中にあるゴミ箱を近くの一カ所に集める。最後の一つを運び終えると、背後からカランと音がした。振り返ると、ゴミ箱の蓋が転がって震えていた。男が踏んだのだろう。

「う、わ」

男はバランスを崩してたたらを踏んだ。踏みとどまろうともがくが、地面は生ゴミが散乱している。油分や水分を含んだ生ゴミは、足場を悪くしていた。抵抗虚しく、男は道に散乱している生ゴミとキスをした。

「何やってんだよ」

もう一人が呆れぎみに見下ろした。

「いや、ゴミがいきなり……？」

首を傾げながら男は辺りを見渡した。怒りより先に呆然が先に立っているようだった。

「おいおい、気をつけろよ。周りにこんだけゴミ箱がありゃ、一つくらい散らかってんのもあるだろ……え？」

辺りを見渡し、男は目を見開いた。

「なんだ、どうした」

「おい、ゴミ箱ってこんなに近くにこんなに大量にあったか？」

男は、私が運んだ大量のゴミ箱を注視していた。

そりゃ、私がさっき運んできたからな。目の届く範囲に大量にあるのは当然だ。けれど、それまでは遠くに点々と配置されていたわけだ。近くに囲まれるように存在していれば、違和感も抱くだろう。

「あ？　路地裏だからゴミ箱も多いだろうよ。それより、ゴミが口に入ってこっちはそれどころじゃねぇよ」

男は唾液と共に口の中の物を吐き出した。次いで、苛立たしげに顔についた生ゴミを払い、ぬめりを袖で拭う。

その様を横目で眺め、絡まれていた女性へと視線を向ける。この混乱に乗じて逃げ出してくれればいいのだが。もう一人の男が腕を握っているせいか、女性は棒立ちになったまま動く気配がない。チッと心の中で舌打ちし、並べておいたゴミ箱の一つを持ち上げた。

そのまま、一歩分、男どもに近づいてゴミ箱を置く。終わったら、隣のゴミ箱を持ち上げて同じように一歩分、前へ移動させる。

「あ、れ？　ちょ……待て、おい」

男は目を見開く。ゴミ箱を凝視したまま、顔の生ゴミを払い終えて立ち上がった男の肩をつついた。

「……んだよ。うっとおしいな」

「あれ、さっきより近づいてないか？」

男の声は若干震えていた。そりゃ、確かに今、一列移動し終えたのだ。さっきよりは近づいていて当然だ。けれど、私を認識できない彼にとっては、不気味に映ることだろう。

「ああ？　もとからこんなもんだろ。それより」

さて、もう一回。列の端に戻ってゴミ箱を再び持ち上げる。一歩前へ歩いて、置く。

「いや、近づいてるって！　見ろよ、あれ！」

もはや悲鳴に近い叫び声を上げて、男はゴミ箱の一つを指差した。さっき私が移動したばかりのやつだ。

「ああ？　何酷い声出してんだ。別に変わってないだろうが」

「違う、よく見てみろ！　さっきまでは一列に綺麗に並んでいたが、今はあれだけ一つ分列を飛び出しているじゃないか！」

「……そういえば」
「ヒッ」
納得するように腕を組んだ男に、もう一人が短く悲鳴を上げる。
何事かと問おうとした男は、その男が指差す先に目を向け、言葉を失った。先ほどまで「ひとつだけ」しか飛び出ていなかったはずのゴミ箱が、二つに増えていたからだ。
「いつの、間に」
男の声も知らずかすれていた。
そんな男どもの恐怖を尻目に、私は淡々とゴミ箱を移動させていく。じわじわと包囲網を狭めていくと、分かりやすいほど男どもは怯えた。
「なんだ、これ」
「わけ、わかんねぇ、よ……っ！」
最後の一個を、男どもの目の前に置く。もう既に、男達の至近距離をゴミ箱が取り囲む状態になっていた。
「う、わあああ！」
いきなり叫びだしたかと思うと、男は目の前のゴミ箱を蹴りつけた。慌てて触れない位置まで退避する。充分に距離をとって視線を戻すと、男がゴミ箱を蹴散らし、殴りつけているのが目に入った。
「な、何もない……ただの、ゴミ箱だよな。ただの……」
あーあ、散らかして。あそこまでするまでもなく、ゴミ箱はただの無機物なのに。それ以上でもそれ以下でもないのに。
冷めた視線で見遣って、身を翻す。肩で荒い息をする男達の後方には、もう人の影はなかった。恐怖か、隙をチャンスと捉えたか。女性は既に逃げ出していた。これ以上私が手を出す必要は、もはやない。
時折狂ったように響く悲鳴に、耳を塞いで歩き出す。頭の中には、一つの考えが渦巻いていた。形にならぬしこりのような危疑をもてあそびながら、私は薄暗い道を突き進んだ。

二十二、屋敷

ムーイトの城にも劣らない巨大な門が、どっしりと構えている。荘厳な門を前にして、はたと考え込む。門番がいない。いや、ここは城ではないし、今は夜中でもない。そこまで厳重にしなくてもおかしくはないのかもしれない。領地の周りは水掘だったし、これでいいのか。いや、領民が全部善人とは限らないだろう。そもそも、いくら庭だからって黙って侵入するのは良いものなのか。朝のディレスじゃないが、私はこの世界の常識がない。躊躇ってあたりを見渡した。

そっと押してみると、あっけないほど簡単に門は開いた。大丈夫か、ここのセキュリティ。屋敷の防犯に疑問を感じながらも、とりあえず、頭だけ中に突っ込でみる。中には人っ子一人いない。かろうじて遠くに犬が見えるのみだ。

「すみませーん……」

小声で呟いてみるが、なにも変わらない。あたりはしんとしている。精々、草が風にそよぐ音や小鳥の鳴き声が聞こえるくらいで。

「だーれーかーいませんかー……」

いつもより意識して、先ほどより声を張り上げてみるが、やはり変わらない。

仕方ない。ここでずっと待っていたとしても、仕事は終わらない。家に入るわけじゃないし、そこまで気を使うこともないだろう。例え常識はずれな行動だとしても。

まあ、怒られるくらいはするかもしれないが、謝っとけば良い話だろう。そもそも、気付かない相手にも非はある。最悪、隙を突いて逃げ出せば何とかなるだろうし。

――と、心の中でぐだぐだと言い訳を並びたてて、ようやく決心する。そろりと門の中へと足を踏み出す。最初の一歩を踏み出せば、あとはあっという間だ。そもそも、門から屋敷の扉までそこまで離

れているわけではない。目算でおよそ二十メートルほど。普通に歩けば一分とかからない。

玄関までの道は、石畳で舗装されていた。周りを窺いながらも真っ直ぐ歩いていくと、すぐに玄関まで行き着いた。呼び鈴を鳴らす。軽く一回。だが、何の反応もない。もちろん、気を張ってから呼び鈴を鳴らしている。私の特異体質のせいで気づかぬはずはない。あるとすれば、偶然気づかなかっただけだろう。時間をあけて、今度は二回鳴らす。だが、やはり反応はない。焦れて、今度は三回乱暴に鐘を鳴らす。うるさいほどにりんりんとあたりに音が響いた。けれど、目の前の扉はうんともすんとも言わない。しびれを切らして扉を開けると、こちらに駆け寄る男性が視界に飛び込んだ。

「あの、すみません！」

慌てて声を張り上げる。男性は音が聞こえそうなほど飛び上がった。

「呼び鈴が鳴らされているから来てみれば……。外の者は何をしているのです。誰か、侵入者です。捕らえなさい！」

男性の声に従って、数人の使用人が姿を見せた。

「待って下さい！　私は怪しい者ではありません。ディレスの使いの者です」

今にも飛びかかりそうな使用人に慌てて釈明する。いきなり現れたのは事実だから、怪しいと思われるのは仕方ない。

「ディレス様の？　証拠はあるのですか？」

「え？　この文書をお届けするよう仰せつかって」

エプロンのポケットから預かった封筒を差し出す。男は封筒を受け取り、目を落とした。だが、裏表に素早く視線を走らせると、男は首を振った。

「これではなく。本当にディレス様の使いなら、認証具くらいあるでしょう」

「認証具？」

なんだそれは。聞いてないぞ。首を傾げると、男は背後に控える

使用人を振り返った。
「やはり怪しいですね。捕らえておきなさい」
「え、ちょ……」
なんでそうなる。
いや、私が怪しいのは分かる。本当にディレスの使いかを疑うのも分かる。だが、何も証拠がないわけではない。封筒の中身を見れば、本物かどうかくらいは筆跡でわかるだろう。なぜ中身を見もしないで私を曲者と判断する。仮に使用人が勝手に中身を見る権限がないからだとしても、主人に相談するくらいしてもいいだろう。横暴すぎる。
混乱しながら、なんとか説得できないものかと思案する。周りにいるのはメイドが多いが、男性の使用人もいないわけではない。一斉に飛びかかってこられたら、いくら特異体質を利用しても逃げられない。彼らが様子を窺っているうちに何とか説得しておきたいのだ。周りの動向に気を配りながら思考を巡らせていると、階上から落ち着いた低い声が降った。
「待ちなさい」
「旦那様」
声のする方へ視線をやる。質の良い服に身を包んだ男性が、階段を下りてくるところだった。
「お騒がせして申し訳ありません。すぐに捕らえて大人しくさせますので」
目の前の男が頭を垂れる。ということは、これが屋敷の主――フォード公爵なのだろう。歳の頃は三十半ばか四十に差し掛かるくらいだろうか。髪にはちらほらと白髪が混じるものの、凛とした立ち居振る舞いは落ち着いた大人の男性を感じさせた。紳士という言葉は、この人のためにあるのだろう。若い頃は女性にモテたはずだ。心身ともに完成された人間は、異性云々抜きに安心感がある。
「ああ、お前には連絡がいってなかったか。悪かったな。門を開けたりするのに忙しくて時間がなかった。そいつはディレスからの使

いだ。十二くらいのメイドを使いにやったと連絡があった」
「しかし、それだけの情報では本当にそれがこの者かは分からないではありませんか。それに、たとえ門が開いていたとしても、ただの使いがここに来れること自体が――」
「いや、認証具は持たせたと言っていたぞ」
「え？」
思わず声を上げる。認証具と言われるものに心当たりはない。わざとか忘れたか知らないが、ディレスからは封筒以外に預かりものはしていない。わざわざフォード公爵に連絡を取ったという事は、認証具を渡し忘れたことを伝えるためだと思ったのだが、違うのか。まさか、渡したつもりになっているだけとかじゃないだろうな。実はボケてたりとか。
「お嬢ちゃん。封筒のほかに他にディレスから預かったものはないか？」
フォード公爵はにこやかな笑みを向けた。そう言われても、ディレスからは封筒以外には何ももらってないし、何も注意されていないのだが。強いて言えば、馬車の駄賃をもらったくらいで。
「特に何も。封筒以外は駄賃を貰ったくらいで」
その金も、馬車を使うだけの金額しかもらっていない。足りないと言うほどではないが、自分の懐が温まるほどでもなかった。
それでも、一応駄賃の入った皮袋を取り出す。しかし、それを見た目の前の男性――恐らく執事なのだろう――は表情を変えた。
「ああ、これだ、これ」
フォード公爵が納得するように頷いた。
「え？　ただの皮袋では？」
フォード公爵や周囲の態度に、改めて皮袋を見直してみる。確かに、現金ではなく皮袋に包んで渡してきたことには違和感があった。けれど、改めて見直してみても、ただの質素な皮袋にしか見えなかった。
「見えにくいかもしれないが、ほらここに。小さな紋様が刻まれて

いるだろ？」
　不思議そうな顔をする私に、フォード公爵が皮袋の中央を指さした。見ると、確かに小さな模様が描かれていた。
「確かに」
「どれ、ちょっと貸してもらえるかな」
　言われて、フォード公爵の掌に皮袋を差し出す。皮袋を受け取ったフォード公爵は、中央の紋様を人差し指で押さえた。
「名を」
　短く呟くと、皮袋から浮き上がるように光の輪が描かれた。赤く光る光の線は、やがて複雑な紋様を描き出す。皮袋の施されたものとは違う、独特の奇妙な模様だ。
　なるほど、これが認証具、か。
　皮袋の紋様には凹凸がなかったので気づかなかったが、魔石のような動作をするものが埋め込まれていたのだろう。
「ふむ。確かにディレスの署名だな。よくここまできちんと届け物ができたものだ。幼いのに優秀なんだな」
「あ、ありがとうございます」
　褒められるのは悪い気はしない。その内容には引っかかるところはあるが。
「いや、その歳で見上げたものだ。もしかして、こういう仕事は長いのか？　以前に他の主人に仕えていたことが？」
「いえ、こういう仕事につくのは初めてです」
「なんだと？」
　フォード公爵は目を見張った。
「それでは、ディレスの所は長いのか？」
「いえ、ディレス様に仕えたのは数日前からですけど」
　首を傾げながらも答えると、フォード公爵は唸るような声を上げた。
「ディレスの奴め、やはり侮れん。こんな可愛い娘を隠し持っているとは」

フォード公爵は腕を組んで考え込んだ。横目で見ると、使用人たちも皆目を剥いてこちらを凝視している。
異様な光景に無意識に後ずさる。
「あの、それでは私はこの辺で……」
仕事は済んだ。嫌な雰囲気に退出の意を述べようとする。
「ディレスの所での給金はいくらだ？」
遮られた。
「え？　あの……」
「いや、率直に訊こう。ディレスの下で働くのは止して、俺の元へ来ないか。あいつの倍だしても良い」
「え？」
待て。なんでそうなる。何が起こっている？
目を白黒させるが、驚いたのは私だけではなかった。目の前の執事も、フォード公爵の言葉に目を剥いていた。
「旦那様、それは」
窘めるように執事は口を開く。けれど、途中で思い直したように口をつぐんだ。その隙に、フォード公爵は続きの台詞を被せた。
「事前に連絡があったとは言え――俺は、今日ほど穏やかに客人を迎えられた日を知らん」
「それは、そうですが」
「何より、華がないしな。ここは。ひとりくらいは女が居ても良いと思ってたんだ」
まて、そこか。女好きなのか。まさかお前もロリコン趣味なのか。せっかくロリコンキモストーカー問題が一段落したと思ったのにまたこれか。真面目そうな人だと思ったのにこれか。
「確かに、女性でなければ難しい仕事もありますけれど」
執事は納得しかかっていた。いや、待て待て。このままではまたロリコンに怯える日々に逆戻りじゃないか。もう少し頑張れよ、執事。主の性癖を制するのもお前の仕事だろ。
「そうだろ？　ちょうど良い機会じゃないか。ええと、お嬢ちゃん。

名は――確か、アスハだったか？」
「え、あ、はい」
ディレスが話したのだろうか。いきなり名を呼ばれて声が裏返った。
「俺の元で働かないか。悪いようにはしない」
嫌だ。もうロリコンはこりごりだ。
いや、ロリコンと決まったわけではないが、疑惑があるだけでお断りだ。
「あの、申し訳ないのですが、私は今ディレス様の元で働かせていただいて……」
「あー、そういやそうだったな。悪い。まずはディレスと話をつけないと、お嬢ちゃんも返事がしづらいよな」
「いえ、そうではなく」
「よし、そうと決まれば善は急げだ。付いてこい。ディレスと話をつける」
「あの」
フォード公爵はさっと身を翻す。こちらの意思などお構いなしだ。了承どころかろくな会話すら成立していないというのに、なぜそうも強引に事を進めようとする。王子もそうだが、人の上に立つ様になると人の話を聞かない性格になるのか。いや、人の話を自分の都合の良い内容にすり替えるようになるのか。
「こちらです」
フォード公爵を追おうとしない私を、執事は促した。付いていけって事か。拒否することすら許されない状況か。
仕方がない。軽く息をついて、私は執事の背を追った。

二十三、勧誘

案内されたのは、フォード公爵の執務室だった。私達が部屋にたどり着くと、フォード公爵は机の上の文鎮を手に取った。

フォード公爵はその文鎮を口元に近づける。

「ディレス・ラットハーンに繋げ。クーラルド・フォードだ」

途端、文鎮が淡く発光した。自身を覆うように柔らかな紅い光が現れる。文鎮かと思ったが、どうやら魔石だったようだ。ということは、あれでディレスと連絡をつけるのか。以前スウォンが言っていた「遠く離れた地でも、会話のやり取りができる魔法」が組まれた魔石なのだろう。

「なんですか。先ほど話したばかりなのに珍しいですね」

石から低く痺れるような美声が響いた。ディレスの声だ。その声に身を固くする。ないと思いたいが、ディレスがフォード公爵の話を断らないとは言い切れない。

「その話だが、ディレス。俺に黙って随分と可愛い娘を見つけてきたじゃないか。そういう事には興味がない振りして、お前もやっぱり男だったんだな」

「すみませんが、話が見えないのですが」

私も全く見えない。

「惚けるな。お前が使いに寄越した娘の話だ。こんな上等な娘、どこで見つけてきた」

その言葉に、私は呆気にとられた。上等――とまで言うとは。先ほどから薄々感じていたが、フォード公爵は言葉の選び方が随分と大げさだ。気障ったらしいというか。

現に、ディレスも魔石の向こうで考え込むように沈黙した。

「使いに……？　ああ、アスハのことですか」

「そうだ。まさかここまでの逸材とは聞いてなかったぞ。お前から連絡を貰ってから、急遽客人を出迎える処置はしたが」

逸材、ねえ。

話し込むフォード公爵とディレスの後で、不審げな目を向ける。

十二といえば小学六年生から中学生くらいか。確かに、ひとりで遠出するといえば褒められる年齢ではある。だがそれは、日本での話だ。メイドや侍女として城に上がる者の中には、十二に満たない子供も多い。見た目は日本人である私より大人びて見えるとは言え、子供が働くということが珍しくない世界なのだ。それを、お使いごときで褒められるのは違和感があった。

「その様子ですと、やはり無事に届け物が出来たようですね。彼女は」

「ああ。しかし、通信具を渡し忘れるとは珍しいこともあるもんだな。こちらから出迎えるにせよ――」

「それで、用件は？」

ディレスは遮るように質問した。

「そうだった。単刀直入に言う。アスハを俺にくれ」

聞きながら、苦笑いする。本当に単刀直入だ。しかも、まるで結婚を申し込むかのような台詞ではないか。恭しくお伺いを立てる相手ではないとは言え、メイドを要求するには不適当な台詞だろう。

「本気で仰っているのですか」

案の定、ディレスは信じられないというように聞き返した。

今回は私もディレスに同意する。フォード公爵の正気を疑う。だが、当のフォード公爵はディレスの言葉に鷹揚に笑った。

「本気だ、本気。こちらから出迎える必要のない奴なんて初めてだ。丁度、女が一人欲しいと思っていたし」

「そうですねえ……まあ、貴方のところでしたら安心かもしれませんが……」

「そうだろ、そうだろ？　本人の了承は取ってあるし、引きとってもいいよな？」

フォード公爵は勢い込んだ。このまま承諾されてしまいそうな流れに慌てた。口を挟もうと身を乗り出す。

「本人の了承？　待ってください、彼女が了承したのですか？」
だが、私が口を挟む前にディレスが答えた。僅かに動揺したような声。その様子にフォード公爵は口の端を吊り上げた。
「ああ。そうだよな？　アスハ？」
横目で返事を促すように、フォード公爵は視線を寄越した。
「いえ、あの、私は……」
肯くと思って疑わない態度にまごつく。違うとはっきり答えるのは躊躇われた。私の立場的にも、この場の雰囲気的にも。
「そこに彼女がいるのですか」
だが、私の声を聞いた途端、ディレスの声音は一変した。尖ったピックアイスのような声に、思わず身を固くする。けれど、フォード公爵は気にした様子もなく、魔石に視線を戻した。
「あ？　いるよ。それがどうした」
「すみません、フォード公。先ほどの話は無しです。戻ってきなさい、アスハ」
「――は、はい！」
思わず反射的に返事をする。
「なんだよ。さっきは良いって言ったじゃないか」
掌を返したかのようなディレスの態度に、フォード公爵は不満げに尋ねた。
「良いとは言っておりませんよ。それより、先ほどのお話はお断りします。彼女を渡すことは出来ません」
「なんで」
フォード公爵は短く問うた。私も気になる。実際、ディレスは最初は迷うような素振りを見せていた。なのに、途中で態度を翻されれば疑問にも思う。
「それは後ほどお話します。後日であれば、またお話をさせていただくことも可能かもしれません。けれど、今回はご容赦ください。今、彼女を貴方に差し出すことは出来ません。なんと言われても」
ディレスは茶を濁した。言外に「今は」話す気はないと言われ、

フォード公爵は口をつぐんだ。不愉快そうに眉を顰めてしばらく口を閉ざす。けれど、次の瞬間には悪巧みを思いついた子供のように顔を歪ませた。

「なんだ、随分と」

そこで、フォード公爵は不自然に言葉を切ってニヤリと笑う。

「――惚れ込んでるんだな」

その様子を察したか、ディレスが苦笑する声が魔石から響いた。

「惚れ込むというか……御察しください」

「分かった。そこまで言うなら待とうじゃないか」

「ありがとうございます」

ディレスが礼を述べると、フォード公爵は楽しげに魔石を見つめた。頼みを断られたにしては不可解な表情だ。首を傾げつつ見守っていると、フォード公爵は口を開いた。

「まあ、いいさ。だが、一つだけ頼みがある」

「なんです？」

「帰り道のついでで構わないから、アスハに頼みたいことがある」

転んでもタダでは起きないって奴か。代わりを要求するような話の流れに呆れた。商魂逞しい。いや、この人は商人ではないのは知っているけれど。

面倒なことになりそうな雰囲気に、こっそりとため息をつく。

主に私が苦労しそうだ。多分、ディレスは断らないだろう。異世界に来てとことん運がない。ああ、早く元の世界に帰りたい。ルロールは今どこにいるのだろう。ディレスに聞き出そうにも中々切っ掛けがつかめないし。なんかディレスの周りは空気悪いし。近づくとテンパるから上手く話も出来ないし――

ぼうっと頭が現実逃避をし始める。何をさせられるか知らないが、今度はフォード公爵の雑用だ。慣れない地であれやこれややらされるのは気が滅入る。というか、めんどくさい。頭も思考を拒否するのは仕方がないというものだ。

「なんでしょうか」

ディレスが訊いた。
「なあに、簡単な雑用だよ。かかる費用はこちらで持つ。詳しいことはアスハに直接説明するし、いいだろう？」
「まあ、それくらいなら」
「じゃあ、あとでな。彼女との馴れ初めからきっちり説明してもらうから覚悟しとけ」
「そうですね。では、後ほど」
ディレスが答えると、魔石の光がふっと消えた。通信が終了したということか。
色々と不審なやり取りはあったが、身売りは免れた。とりあえずの身の保障にほっと息をついていると、フォード公爵がこちらを振り返った。
「さて、お嬢ちゃん。話は聞いていたな？　残念だが、ディレスのところに戻ってもらうことになった。もちろん、お嬢ちゃんのことを諦めたわけじゃないから、後でディレスにはちゃんと交渉しておく。そのつもりでいてくれ」
「はあ……」
気のない返事を返す。この辺のしつこさはこの世界の権力者の性質なのだろうか。王子もそうだが、断られたらそれで諦めれば良いのに。日本人の奥ゆかしさを見習って欲しい。
「いや、本当に残念だなあ。こんな可愛い娘がいたら毎日の仕事にも張りが出るのに。報告に来るのはいつもむっさい男ばっかりで辟易してんだけど。なあ、ディレスはああ言ってたけど、黙ってこっちで働かないか？　ディレスが何か言ってきたら、しらばっくれてやるから」
「いえ、それは……」
しかも、さらに口説くか。あまりの押しの強さに困惑すると、執事が見かねて助け舟を出した。
「旦那様。ディレス様も話があると仰っていたじゃありませんか」
「分かってるって。冗談、冗談」

いやいや、目がマジだった。豪快に笑ってはいるが、今も目は笑っていない。隙あらば喉元に食らいつく猛獣のような顔をしている。

「それで、アスハ。頼みごとなんだが――」

けれど、あえて気づかなかった振りをする。話題を変えたフォード公爵は、手に小さな紙袋を乗せていた。受け取ると、微かに薬品の匂いが鼻についた。

「これは――ディレス様にお届けすればよろしいでしょうか」

「違う。ディレス宛じゃないんだ。お嬢ちゃんは知ってるかな。ジェイル・カーンって奴に届けて欲しいんだが」

聞いた事はない。だが、その名に背後の執事が反応した。

「ジェイル・カーン子爵――旦那様、それはいくらなんでも」

振り返ると、執事はもの言いたげな表情で意見する。しかし、最後まで言い切る前にフォード公爵が言葉を引き継いだ。

「まあ、確かにちょっと遠いな。馬車でこっから三時間は掛かる。さらにそこからディレスの元に帰ろうとなると、今日中には無理だろう。けど、急ぎなんだ。やってくれるな？　アスハ」

「……かしこまり、ました」

にこやかな笑顔の裏の圧力に、渋々と肯いた。やってくれるなも何も、もう既にディレスは承諾してしまっている。上司が頷いてしまったものを、部下が勝手に嫌だと断れるわけがない。

「旦那様……」

肯いた私にちらりと視線をやった後、執事はなおも責めるようにフォード公爵を見つめた。

「大丈夫、渡してすぐ帰ってくれれば良いだけだから。何なら、使用人に渡すだけでも、玄関の前に置いとくだけでも良いから」

「それはいくらなんでもまずいのでは」

風で飛ぶ――とかそういう問題ではなく。きちんと相手に渡さなければ、お使いの意味がないだろう。届け物は重要文書ではないのかもしれないが、だからと言って放置しても良い訳がない。

「もちろん、ジェイル本人に渡せれば一番良いんだけどね。不在も

多いし、その辺は気にしなくても良いさ」
「わかりました」
「あ、遅くなることはディレスには伝えておく。あと、今日中には帰れないだろうから、夜はどこか適当に宿を取って。宿代もこちらで出すから。金はあいつに任せるから後で貰っておいて」
言って、フォード公爵は執事に目をやった。その視線を追うと、執事が恭しく礼をとるのが見えた。
「かしこまりました」
「何か、質問はある？」
「いいえ、ありません」
「そう。じゃあ、細かいことはそこの男に聞いてくれれば良いから。後は頼んだ」
「はい、旦那様。アスハさん、こちらへ」
「はい」
促されて、執事の後を追う。退室してドアを閉める直前、フォード公爵の楽しげな声が耳に届いた。
「さあて、ディレスのお手紙を読みますかね」
その様子に妙な違和感を覚える。ディレスは重要文書だと言っていた。ディレスの「お手紙」というほどのん気な内容ではないはずだ。何より、フォード公爵自身が封筒の存在をさほど気にかけている様子がなかったではないか。扉の隙間から見えたフォード公爵の楽しげな様子は、明らかに態度が違っていた。
そこには何が書いてある？　今になってその中身に興味が湧く。フォード公爵の背後で盗み見たい衝動が湧き起こる。何かが噛み合わない気がする。次から次へと疑問が頭に浮かぶ。けれど、執事に急かされて、疑問は一旦頭の隅に追いやった。後で考えればいいことだと。
だが、子爵の屋敷につく頃には、そんな疑問は全て吹っ飛ぶことになるのだった。

二十四、子爵邸

気持ち悪い。

口を押さえながらふらふらとその場にしゃがみこむ。

「大丈夫ですか？」

御者が心配そうにこちらを覗き込んだ。乗り物酔いだ。今回は子爵邸の前まで乗り付けてくれたが、領地内が予想外に揺れた。考えてみれば、当たり前か。領地と領地を繋ぐ街道は、ほぼ真っ直ぐだったが、領地内は区切られているとは言え、あちこちに曲がったりするのだから。しかも、子爵領は山の上にある。ぐるぐると山道を馬車に揺られるのは、想像以上の気持ち悪さだった。

「大丈夫、です」

なんとかそれだけ言うと、立ち上がる。

「私は領地の前か宿の前でお待ちしていますので、用事が済んだらお呼びください」

「はい。では、後ほど」

すっぱいような錯覚のする唾液を飲み下して、ふらふらと門まで歩く。門まで近づくと、門番がこちらに顔を向けた。

「失礼。どんな御用でしょうか」

ここには門番がいるのか。鎧に身を包んだ若い男性だ。

「あ、はい。フォード公爵からの使いです」

「面会のお約束はされていますか？」

「いいえ。届け物をお持ちしただけですので。誰か、使用人の方でも――いえ、届けていただけるのなら貴方でも構わないのですが」

「いえ、私ではさすがに……認証具はお持ちですか」

「はい、ここに」

「確認させていただきます――確かに、フォード公爵の認証具ですね。こちらへ。屋敷内へご案内いたします」

「よろしくお願いします」

普通だ。普通すぎる対応だ。なんだこれ。

笑顔で頭を下げながら、内心は口をあんぐりと開けていた。フォード公爵を訪れたときと全く対応が違う。もちろん、フォード公爵邸の時は、急にディレスが訪問の連絡をしたせいもあるだろう。使用人に連絡をしたり、門を開ける処置で手が回らなかったのかもしれない。たまたま門番が伝令に駆け回っていたのかもしれない。そう言っていたのは聞いていた。けれど、それにしたって――

「段差があるので、気をつけてくださいね」

言われて、足下に目を落とした。階段だ。

「あ、はい。わざわざありがとうございます」

礼を言うと、門番はこちらに笑いかけた。

「いいえ。緊張しますよね、子爵にお届け物なんて。私でも未だに子爵にお会いするのは緊張しますよ」

「え、貴方でもですか？」

「ええ。そう頻繁にお会いすることはないですけどね。あ、こちらへどうぞ。今、執事を呼びますので座ってお待ちください」

「はい」

屋敷の玄関に通され、椅子を勧められる。腰を下ろして門番を見送ると、前方から歳若い青年が現れた。青年は私の姿を認めると、興味深げに一瞥した後、こちらへ駆け寄った。

使用人だろうか。それにしては服の質が良いような。身分も知らぬ見知らぬ他人にはどう対応すべきなのだろうか。迷って、軽く会釈をするにとどめた。すると、青年は親しげに話しかけてきた。

「おお、見かけない顔だね！　君、どこの担当だい？」

青年は珍獣でも見つけたかのような表情をしていた。

「あ、いえ私は――」

ここの使用人ではない。そう答えようとすると、門番が気づいたのか、勢いよくこちらを振り返った。私と青年の姿を目にすると、門番は一瞬身を固まらせた。そのまま、焦ったように引き返してくる。

「ジェイル様！」
その言葉に軽く目を見張る。この青年がジェイル子爵か。若すぎて気づかなかった。座って話をするのは失礼だろう。慌てて立ち上がる。
「君は門番かい？　どうした、こんなところで何している？　ここには門はないよ。それとも、門が移動でもしたのかな。いや、したんだね？　僕も見たいな。どこに移動したんだい？」
子爵は興奮した様子で矢継ぎ早に質問した。勝手に持ち場を離れた門番を諫めているのか。嫌味とも取れる質問にそっと子爵の顔を盗み見る。だが、子爵は瞳を輝かせながら周囲に忙しなく視線を走らせていた。
どうしよう、本気だこの人。
「いいえ、申し訳ありません。フォード公爵の使いの方がお見えでしたので、屋敷までご案内していました」
門番は汗を袖で拭う様なしぐさをした。萎縮している。だが、安心していい。子爵は門番を咎めてなどいない。それどころか、視界に入れてすらいない。それを証明するように、子爵は今存在を思い出したとでも言うように門番に視線を戻した。しかも、そのときには既に先ほどの熱は冷めていた。
「ああ、フォード公爵からの使いか。けど、僕は聞いてないけれど？」
そっけない様子で子爵は訊いた。
「これからお知らせに伺うところでしたので」
「まあいいけどね。それで、この娘がその使いなの？」
子爵は私に視線を向けた。慌てて頭を下げて礼をとる。
「はい。アスハと申します。こちらの薬を届けるよう、フォードより仰せつかって参りました」
「ああ、これこれ。待ってたんだよね。ありがとう、助かるよ」
預かっていた紙袋を差し出すと、子爵は途端に喜色をあらわにした。

「それでは、私はこれで」
「いや、待って。君、ディレスのとこのメイドだろう？　ディレスに頼まれてた解析が終わったから、ついでに持って行って欲しいんだ。悪いけど、ついてきてもらえるかな」
あまり関わりたくない。そう思って早々に退出しようとしたが、止められた。
しかも、私がディレスの元で働いていると何故知ってる。名は名乗ったが、それだけで分かるってどういうことだ。もしや、ディレスと親しいのか。それとも、私が知らないだけで裏では私の個人情報が漏れているのか。
どちらにしても、不気味だ。関わらないに越したことはない。だが、断る正当な理由がない。ディレスへの――主への届け物を頼まれて断るメイドがいたら、躾がなってないどころの話ではない。
「かしこまりました」
渋々と頷いた。
「では、私はこれで失礼いたします」
その様子を見て、門番が身を引いた。正直一緒に来てもらいたいところなんだが、あまり我侭は言えないだろう。
「ここまでありがとうございました」
「いいえ。――あの、頑張ってくださいね」
門番は歯に物が挟まったような顔をしていた。
「え？」
思わず聞き返すも、既に門番は背を向けていた。呼び止めて聞き直すか迷っていると、子爵が急かした。
「ほら、行くよ」
「あ、はい。すみません」
一度門番の背に視線をやって、振り切るように前を向く。前を歩く子爵との間は開いていた。ここで迷っていては、子爵を見失う。門番も既に呼び止めるには躊躇う距離が離れている。であれば、今ここで優先すべきことは決まっている。仕事が先だ。

頭の隅に浮かんだ門番の表情を打ち消して、私は小さくなった子爵の背を追いかけた。

二十五、科学狂

案内されたのは、執務室だろうか。随分と薄暗く、湿っぽい部屋だった。本はあちこちに並び、紙類もそこらじゅうに散らかっている。足の踏み場もない――というほどではないにせよ、整頓された部屋とは言い難い。机の上にはガラス製の透明な瓶が並び、中には奇妙な色をした液体が入っていた。

届け物といい、子爵は薬学関係の研究をしている人物なのだろうか。それが、趣味か仕事かは図りかねるし、この世界に薬学などというものが存在するかも定かではない。だが、この部屋の様相は薬学系の研究室の一室に似ていた。

「んーと、どこだったかなあ。この辺にしまったかと思ったんだけど」

子爵はあちこちの引き出しを開けた。だが、目的のものはなかったようだった。今度は机の上の書類を浚うようにかき回した。

騒々しい音を響かせていた手がふいに止まる。子爵は紙切れの一枚を手にとった。

「ああ、これだ。頼まれてた解析書。まったく、自分であらかた終わらせてるくせして、最後の後始末だけ任せるんだから性質が悪いよ。一番美味しいとこだけ食べちゃうんだもの。ねえ、ディレスに言っといてよ。中途半端な食べかけを寄越すのは止めてくれってね」

「えっと……そちらの書類をお預かりすればよろしいですか」

「そうそう、これをディレスにね。でもその前に」

子爵はおもむろに手元のガラス容器を手に取った。やや茶色がかった緑の液体が容器の中で揺れる。青汁？　飲むにはまずそうだなと眺めていると、突然、中の液体をぶちまけられた。

「ひゃっ」

「どう？　苦い？」

子爵は料理の感想を求めるような軽薄な口調で訊いた。

「何するんですか。って、本当に苦い」
少量だが、口に入った。強烈な苦味に舌が痺れる。
「いやさぁ、思考が鈍くなる薬を頼まれたんだけどさぁ。寝入らないように調合してくれって頼まれて。とりあえず五分くらいは引き伸ばしてみたんだけど、想像以上に苦くなったんだよ」
カフェインでも大量に入れたか。
いや、その前に思考が鈍る薬ってなんだ。途端、肌寒さが身を襲った。自身の肩を抱く。身震いしたのは、かけられた液体の冷たさのせいだけではないはずだ。
「失礼します」
子爵の手元から書類を奪う。用事も済んだし、もう帰る。ここには長居したくない。初対面の人間に、正体不明の液体を浴びせるような人のいる屋敷には。
「どこ行くの？」
だが、失敗した。部屋の扉へと駆け出そうとするも、子爵に手首を掴まれ止められた。
「主人への届け物は確かにお預かりしましたので、失礼させていただきます」
振り払おうと腕を動かそうと試みる。だが、逆に強く掴み返されて終わった。
「おかしいなあ。効きが悪いのかなあ。やっぱり肌からは吸収させるのは難しいか」
子爵は独り言のように呟いた。
何を言っている。
「あの、私はこれで……」
「うぅん、もっと溶液を濃くしないと駄目かなあ。いや、薬剤をもっと細かくすれば肌からの吸収率も高くなるかなあ」
「手を、離してください」
「ね、君、殿下に気に入られているって本当？」
「そんなことより、手を」

「本当？」

ため息をつく。この様子だと、答えるまで同じ質問を繰り返すだろう。

「……殿下は、確かに私の見目をお気に召されているようですが」

容姿だけは。ロリコン王子にとって、私の見た目はお気に入りなのだろう。だが、気に入られているというよりは、ただ単に性欲処理のおもちゃとして見られているだけのような気がするが。

王子を思い出すと気分が悪くなる。眉を顰める私を気にも留めず、子爵はさらに質問を続けた。

「殿下に取り入って、何する気？」

その言葉に、カチンと来る。

取り入るだと？　何故私があんな変態に取り入らなきゃならない。そりゃ確かに身分は高い。けれど、人間としては最低だ。そんな奴に誰が媚を売るか。冗談じゃない。そもそもが、私は一貫して王子を拒否している。それなのに、なんで当然のように「取り入っている」などと言われなきゃならない。私に対する侮辱もいいところだ。

「何するも何も、私は殿下に取り入る気はありません！　取り入るというのならむしろ――」

声を荒げて、はっと息を呑む。今、私は何を言おうとした？

「むしろ？」

冷めた目で見つめられて、全身の血がざっと引く。内容自体は大したことじゃない。言ってしまって罪に問われることも、何か不利になるような情報でもない。けれど、あえて口にするようなことでもない。それも、初対面の貴族に。普段の私なら流してしまえた会話だ。ただ「取り入る気などない」と答えるだけだっただろう。わざわざ「取り入るならむしろルロールに」などと付け加える愚行を犯すはずがない。

「いいえ、何でもありません。それより、手をお離しください」

「やっぱり効きが悪いなあ。覚醒作用のある薬品を入れたことで、逆に頭が冴えるのかなあ。配分的にはもう少し――」

突然、子爵の声が遠くなった。体から力が抜け、がくりと膝をつく。瞼が急に重くなった。

「あ。やっと効いてきた。効くまでに時間がかかるのかな。ねえ、なんでディレスの元で働いてるの？」

「殿下が、ディレス様には、あたまがあがらないと――」

危ない。慌てて唇を噛み締める。違うだろう、ここは「ディレス様が殿下のお戯れから守ってくださると仰ったので」だろう。

あれ、違う。王子ほどの身分から「守る」は変か。そもそも、何でディレスの下で働いているんだっけ。切っ掛けはディレスが自分の下で働けと言ったからで――駄目だ、思考が濁る。何を考えているか分からなくなる。加えて、眠気が酷い。油断すると意識が飛んでしまいそうになる。

「効いてるのか効いてないのかよく分からないなあ。ねえ、君は殿下のことどう思ってるの？」

「変態ロリコンキモストーカー」

そこは譲れない。

「……」

子爵は沈黙した。

って、違う。いくら変態でも言って良い事と悪いことがある。主に身分の問題で。本人ではないが、不敬に訴えられてもおかしくはない。糾弾される前にさっさとこの場を離れなければ。

「失礼、させて――いただきます」

呆気にとられる子爵の隙を突いて、立ち上がる。だが、子爵は見逃さなかった。

「待って。まだ検証も不十分なのに、帰らせるわけにはいかないよ」

「帰ります」

「んー、強情だなあ。何もとって食うわけじゃないのに。それとも、よっぽど人には聞かれたくない秘密でもあるの？」

「……そんなもの、ない」

「じゃあ、いいじゃない。もう少し付き合ってよ。君みたいな外見、

すっごく珍しいし。検体としては貴重なんだよね。他にも試したいものがあるし」

最後の台詞にぞっとした。他にも試したいものがある、だと？

頭が急激に冷えていく。ここにいたら危険だ。逃げなくては。初対面で薬を浴びせるのも相当な非常識だが、それ以上だ。ここにいたら実験体として薬漬けにされる。

「しつこい。帰るって言ったら帰ります！」

喚くように声を張り上げる。

「ああもう。完全な失敗だなあ。これだけ元気があったんじゃあ、全然意味がないよ。作り直しだ」

言って、子爵は私を後ろ抱きした。大声を出そうとすると、手で口を塞がれる。隙間から空気の漏れる音が頼りなく響いた。

「もうこれ、一旦大人しくさせないと駄目だなあ。適当に実験してさっさと帰そうと思ってたんだけど、予定外だ。ディレス怒るかなあ――ああ、あった。これ飲んで」

誰が飲むか。口をきっちり引き結んで、首を横に振る。だが、子爵は無理矢理錠剤を口の中に押し込んだ。こうすることに慣れているのだろうか。力が上手く入らないこともあり、小さな錠剤はあっけなく喉を通ってしまった。

食道を通る異物の感触に血の気が引く。何だ。何の薬を飲まされた。

極度の恐怖に頭が切り替わる。もう、無理矢理にでもここから逃げなければ。言葉で言って許可を取り、礼儀正しく退室する――なんて言ってる場合じゃない。退室が許されないのなら、拘束が解かれないのなら。その元凶である子爵を気絶させてでも逃げ出す道を考えなければならない。

瞼を閉じて、息を吸う。

「ん？　効いてきたかな」

抵抗を止めた私に、子爵が手を緩める。だが、完全に油断したわけではない。このまま逃げ出そうとしたところで、抱き込まれた力

を強められれば終わりだろう。
あとどれくらい持つだろうか？　どれだけ意識を保っていられるだろうか？
焦りに手が震える。気づかれぬよう気を遣りながら、懐へと手を忍ばせる。固い感触が指先に触れたのにほっと息をつき、舌を湿らせた。
「拒否」
輪ゴムが切れるような音がして、子爵の拘束が解けた。対王子用の魔石だ。自由になった私は、そのまま扉へと駆け出す。早くここから脱出しなければ。一分一秒でも早く、一センチでも遠くへ。
踏み出すごとに重くなる体に鞭を打ちながら、屋敷の外へ出る。ふらふらと庭から門を目指して進む。だが、真っ直ぐ進んでいるつもりで、中々前に進まなかった。目指すべき門は視界の中央から段々に逸れていく。足の裏には石畳ではなく、芝生の柔らかい感触が伝わる。
瞼が重い。体がだるい。目の前が白く――
そこまでで、私は眠りの底へと意識を落とした。

二十六、不足

目が覚める。と、同時にくしゃみをする。肌寒い。ここはどこだ。腕をさすりながら周りを見渡す。まだ薄暗い。芝生の青臭い匂いが鼻を抜ける。吹き抜ける冷たい風。前には塀が、後には屋敷が見えた。

思い出した。ここは子爵邸だ。子爵邸の、庭。

「……うわあ」

顔を両手で覆って、呻く。子爵によく分からない薬を浴びせかけられた上、よく分からない錠剤を飲ませられたんだ。なんとか魔石で子爵を気絶させて逃げてきたけど、ここで力尽きたわけか。ある意味、ここで気を失ったのは良かったのかもしれない。人通りという意味ではさほど多くないから、見つかりにくいとも言えるし。下手に馬車に乗り付けていたら、御者に認識されている状態の分、他者にも認識されやすくなるだろうし。一晩経てば、さすがに子爵も深追いしようとは考えないだろうし。

さて、そうなれば。

さっさと城に帰ってしまおう。ディレス宛の解析書はちゃんと持っている。駄賃もある。あとは馬車に乗って帰るだけだ。馬車はどうしようか。さすがに張られていることはないだろうけど、念のため周囲に誰もいないか確認はした方が良いだろう。

「よし」

伸びをして息をつく。体は大丈夫だろうか。その場に立ち上がって、足や手を振ってみる。うん、大丈夫。ちゃんと動く。思考が白濁するような違和感も消えた。体のだるさもない。

体が問題なく動くことを確認し、真っ直ぐ門へと歩き出す。今度は視界がぐらつくこともない。時間にして数分。開いた門の隙間から、門番に触れぬように通り抜ける。交代したのだろうか。横目で見た門番は、昨日の者とは別人だった。

門を抜け、短く息を吐き出す。まだ寒いこの時間、口から吐く息は白い。なんともなしに、両手を擦り合わせて息を吹きかけた。子爵邸から抜けたことで、周囲の冷気をより実感できるようになっていた。

まだ薄暗い道を一人歩いていく。周囲には誰もいない。澄み渡る空気の中で、足音だけが響き渡る。

さて、どこへ行けば良いものか。馬車は宿屋の近くか領地前で待機していると言っていた。この時間帯だったら宿屋だろう。そう考えて途中で寄り道するが、そこに馬車はなかった。もしかして私を見捨てて逃げたのだろうか。これだけ音信不通なら、あり得ぬことではない。一抹の不安が頭をよぎる。他の馬車を捉まえるか、最悪は歩いて別の領地から馬車を呼ぶか。そんなことまで考えたが、領地前にはきちんとあの御者が待機していた。

念のため周囲に目を走らせる。誰もいない。他の馬車もない。人の気配がないのを確認して、御者に声を掛けることなく馬車に乗り込む。馬車の中にも人はいない。何かおかしな細工もない。

そこまで確認した後で、自分の疑り深さに苦笑する。王子じゃあるまいし、凡庸な外見の何の変哲もない娘にそこまでこだわる訳がないだろう。緊張に凝り固まっていた体の力を抜くと、目の前の窓から手を差し出す。丁度御者の背後へと手を伸ばし、肩を叩いてそっと囁いた。

「遅くなってすみません。ムーイトの王城までお願いします」

「うわ！？」

突然現れた私に、御者は文字通り飛び上がった。その振動で、驚いた馬が走り出す。鞭を打たれたと勘違いしたのだ。

「わ、うわ」

突然揺れだした馬車にバランスを崩す。だが、すぐに平静を取り戻した御者は、手綱を持つ手に力を入れた。やがて、不規則な揺れは、すぐに安定した振動へと落ち着いた。

「お客さん、随分長かったですね。俺、もうそろそろ無理かと思っ

て帰る準備をしようかと考えていたところでしたよ」
「ええ。お待たせしてすみません。ちょっと色々ありまして」
「色々かあ。そうだよなあ。むしろ、よく無事で帰ってこられたもんですよ。お客さん、よっぽど運がいいんですね」
「え？　どういう意味ですか」
「どういう意味って、まさか知らないでお屋敷を訪ねてたんですか？」
「あの、どういうことでしょうか」
御者の言葉に引っ掛かりを覚える。まさか、あの屋敷は曰く付きだったのか。
「知らなかったから、あんなに――いや、フォード公爵って隣国との外交を主に担当されてるじゃないですか」
「ええ、それは知って――って、フォード公爵邸の話ですか？　カーン子爵邸のほうではなく？」
酷い目に遭ったのは子爵邸だ。フォード公爵の話を始める御者に、疑問を投げかける。すると、御者は軽く目を見開いてこちらを見た。
「ああ、本当に知らないんですね。お客さん、本当に運が良いですよ。子爵もそうですけれど、フォード公爵邸は仕事柄か結構屋敷が厳重なんですよ」
「え？　でも、門は開けっ放しで警備が厳重なんて全然――」
「いえ、門番がいれば一々門を閉めたりはしないでしょうけれども。そういう話じゃなくて、ちょっと変わった警備をしているって有名なんですよ。フォード公爵邸は」
「変わった警備ですか？」
「そう。まず、屋敷の庭にはよく訓練された獰猛な犬がいる」
「……」
言葉を失う。確かに犬はいた。ドーベルマンに似た犬が。
「そいつが、屋敷に入ってきた怪しい奴には容赦なく吼え、襲い掛かるそうですよ」
「襲い掛か……？」

え、待て。それってどういう。

「加えて、人間の見張りも結構いるらしくて。木の上とか草の影とか――まあ、この辺は存分に脚色もされてるでしょうけど――多数配置されているとか。不法侵入してきた輩には、犬か精鋭の警備員が捕らえるって訳です」

「捕らえるって訳です、って……」

あっさり言うが、それって結構おおごとって言うか、大層な警備なんじゃないだろうか。

「おまけに、それらの目を盗もうと裏口からこっそり――なんて考えると、地面や壁に埋め込まれた魔石にドカン、ですからね」

ドカン、ってなんだ。地雷か。赤外線か。どんな要塞だ。っていうか、そんなところにディレスは私を送り込もうとしてたのか。あの野郎、顔が良いからって何でも許されると思うなよ。

「あの、そんなに厳重じゃ、客人は屋敷には入れないって事なんじゃ」

「そうなんですよね。だから、迂闊に屋敷に近づけないってんでかなり恐れられているんですよ。もちろん、招かれた客人や知人の紹介があれば普通に屋敷に入れますけどね。門番と共に正面から真っ直ぐ訪れた場合は、魔石も犬も反応しませんから」

「それでも、人は反応するんですか……」

「さあ、それは。でも、人であれば問答無用で殺されるってことはないでしょうから。釈明とか出来るでしょうし。というより、門番を連れずに正面から堂々と、なんて不可能ですから、そこは気にするだけ無駄ですよ」

「……そうですね」

私はそれをやったのだが。

「まあ、お客さんの場合は用事があって伺ったのでしょう？　そういう場合は認証具と通信具を持って行きますからね。公爵邸までたどり着いたら、門番に認証してもらって通してもらいますから、危険はないんですが。万一のことを考えて、門番がいないときなどに

は通信具で直接連絡を取ったりもするようですが」
　ああ、だから執事がやたらと疑っていたのか。屋敷の中まで来れたことに。
「でも、それだけの噂があるところって、やっぱり緊張しませんか？　たとえ招かれたり紹介されたりしていたとしても」
「それは、そうですよね」
「だから、お客さん若いのにすごい度胸があるんだなあって思ってたんですけど。なんだ、知らなかったのかあ」
「それで、馬車を乗り付けるのを嫌がったんですね」
「あはは、すみません。間違って屋敷内に乗り付けただけで木っ端微塵にされた同業がいる、なんて噂がありまして。いや本当かどうかは知らないですけどね。やっぱり怖いじゃないですか」
　そりゃ怖いよ。今聞いても震えが走るよ。どういうことだとディレスの首根っこ引っつかんで問い詰めたいくらいだよ。
「それで、カーン子爵邸のほうは？　こちらもまだ何かあるんですか」
　子爵邸は外で一夜明かしたのだ。庭の芝生の上で大胆にも眠っていたのだ。あの下に地雷が埋まっていたなんて考えたくもない。気になって先を急かすように尋ねた。
「こちらは子爵邸、というより子爵ご自身の噂が多いですね。本当かどうかまでは定かではありませんが」
「本人の……ああ」
　そこまで言われて、得心がいく。あれは明らかに性格自体が破綻していた。
「あれ、お会いされたんですか？　珍しいですね、子爵は滅多に人前に出ないと聞いていたんですが。お客さん、やっぱり運が良いんですよ」
「良い……んですか？」
　鸚鵡返しに訊くと、御者は黙った。笑顔のまま引きつった顔には「間違えた」とありありと書かれていた。御者は馬の制御を装って、

ちらちらとこちらに向けていた顔を元に戻した。
「それで、子爵は主に薬学や魔石の研究をされているじゃないですか。しかも、戦争や諜報に使用する類のものを特に」
否定する言葉が見つからなかったのだろう。御者は話を逸らした。
だが、確かに子爵はそういった類の研究をしているようだった。
はっきりと聞いた訳ではないが、あの部屋には薬品臭が満ちていた。
顔にかけられた薬は、未だに臭うほどだ。
って、忘れてた。
思い出して、乱暴に顔を拭う。子爵に得体の知れない溶液を掛けられたのだ。
「うわー……」
ハンカチを見下ろして思わず声をあげた。見事に茶色がかった緑で染まっていたからだ。ところどころに土や葉までついている。どれだけみっともない顔をしていたのか、私は。しかも、その顔でさっきまで平気で外を歩いていたのか。
まあ、御者以外には顔を見られていないからいい——わけない。歳はとったが、私だってまだ女だ。恥ずかしすぎる。
「どうしました？」
顔を覆って俯く私に気づいたか、御者が声を掛けた。
「あ、いいえ。大したことじゃないです。話を続けてください」
「で、まあ。子爵は非常に研究熱心な方ということで、作った薬の検証には力を入れていたらしいんですよ」
「検証……」
「ええ。一応、金で人を集めて、両者納得の上で行っているみたいですけどね。たまに、あそこで人が消えたとか実験室で悲鳴が上がったとか、血のにおいがしたとか——不気味な噂が耐えないので」
ああ、だから門番が気の毒そうな表情をしてたのか。
去り際の門番の言葉を思い出す。常日頃からそういう評判を耳にしていれば、哀れみの目を向けられてもおかしくはない。実験台にされるのだろうと思ったのだろう。

ついでに言えば、そもそもが、公爵の態度からしておかしかった。執事が何か言いたげに公爵を見ていたのも、こういうことだったのか。

まったく、どいつもこいつも。知っていて――私がこうなるかもしれないことを予測していて、送り出したな。

「あ、でもあくまで噂ですから。実際はちょっと変わった方ってだけだと思いますよ」

黙ってしまった私を気にしてか、御者は慌てて言い繕った。だが、私が気にしてたのはそこじゃない。

ディレスといい、公爵といい、どれだけ無茶ぶりなんだ。ただの子供相手になんて危険な場所にお使いに行かせるんだ。

いや、待て。

頭に上った血を冷やすように深呼吸して、ふと思い出す。ディレスは予め公爵に連絡をつけていた。それを聞いて、公爵は「客人を出迎える用意をしてた」と言っていた。セキュリティの解除を行っていたのだろうから、地雷でドカン、ってことはなかったのかもしれない。

子爵も、基本は滅多に人前に出ない。公爵も使いを頼むときに言っていた。使用人にでも渡してくればいい、と。顔を合わせる可能性が低いのなら、簡単なお使いと考えていたのかもしれない。

つまり。危険はあれど、ここまでおおごとにはならないと考えていたのかもしれない。

けれど。それなら、何か。

連絡が上手く行き渡らなくて執事に不審者扱いされたのも、子爵に見つかって変な薬浴びせかけられたのも、全て私の運がないとかいうことか。

いや、違う。そんなこと断じてあるわけがない。確かに、事前に手を打ってくれてたりはしたようだけれども。それ以前にもっと大事なことを忘れているだろうが。

「そうじゃなくて、なんで何も言わない……」

公爵邸が危険な要塞だということも、子爵が人間を実験体にするような科学狂だということも、事前に一言あっていいだろう。実際に赴く人間に、それくらい教えてくれたって罰が当たるもんでもない。

「え？　あ、すみません。てっきりお客さんはご存知のものと思っていたので」

思わず独り言が漏れた。大きな声で呟いたつもりはなかったが、御者は自分のことだと勘違いして謝った。

「いえ、貴方のことではなくて。私の主のことで――」

勘違いを正そうとして、ふと気づく。公爵邸が物騒なのも、子爵が変人なのも、広く知れ渡った常識なのか。それこそ、別の国の小さな子どもでも一度は耳にするくらいの超常識事項なのか。

「あの、もしかして、このことって結構有名な話なんですか」

御者は少し首を傾げてから、答えた。

「ええ。俺も故郷は別の国にあるんですけど、噂は耳にしてましたね。詳しい話はこの仕事始めてから聞いたんですけど。結構有名な話だと思いますよ」

「そうなんですか」

「あ、でも。お客さんはこの辺の国の人ではないですよね？　知らなくて当然だと思いますよ」

「え？」

なんで知っている。軽く目を見張るが、御者はなんてこともない様子で続けた。

「お客さんの容姿、すごく目を惹きますから。この辺にはない色の髪や瞳ですよね。そういえば、どこの国の方なんですか？」

「え、あ、いえ……」

思わぬところから答えにくい質問が来た。まさか、黒目黒髪がそんなに珍しい容姿だとは思わなかった。確かに、周囲にアジア系の容姿をした人間は見当たらなかった。こんなところはファンタジーのお約束か。

「あ、すみません。別の国の王城で働いているって事は、そういうことですもんね」
答えを躊躇っていると、御者は良いように解釈してくれたらしい。勝手に完結して話を打ち切った。
「それよりも、お疲れでしょう？　王城までまだ時間も掛かりますし、少し眠ったらいかがですか？　着いたら起こしますし」
「そうですね。それでは、お言葉に甘えて少し眠ることにします」
どうせ本を読んでも酔うだけだ。さっきまで気を失っていた分、眠気はない。だが、ほっとした分疲れが出たのか、体はだるくなっていた。
「ええ。お休みなさい」
その言葉に、そっと瞼を閉じる。ほどなくして、私は眠りに落ちた。

二十七、心労

目を瞬かせ、くしゃみをする。鼻を軽くこすって、肩を抱く。
「今日は寒いですね」
鳥肌の立つ腕を服の上からなぞっていると、ディレスが眉を顰めた。
「貴女……ちょっとこちらにきなさい」
ふわりと柔らかな袖が舞って、ディレスの腕が伸ばされた。白くて細い指が描く軌跡をぼうっと眺める。
ああ、白魚のような手とはこういうのを言うのだろうな。
「あ、冷た――」
頬に冷たいものが触れて、熱を奪う。ひんやりとして心地よい。その心地よさをもっと味わおうと、目を閉じた。頬に当てられた氷のようなものを包み込もうと、無意識に片手を持ち上げる。
「熱がありますね」
目を見開き、後ずさる。
ディレスの手が、自分の頬に触れていた。その事実を今更ながらに理解して、頭が沸騰する。
「あ、あ、あ、あの……っ」
「報告は明日聞きます。今日はもう寝なさい」
そうだった。私は今、仕事の報告と解析書を渡すために執務室に訪れていたのだ。数分前の記憶すら飛びかねない衝撃だった。
「い、いえ、馬車の中で眠りましたし、大丈夫ですので」
「そんなに顔を赤くした状態で何を言っているのです。私ももう終わりにして私室に戻りますから、安心なさい。自分の寝台できちんと眠りなさい」
顔が赤いのは、不意打ちで触れられたからだ。決して体調不良のせいではない。けれど、私は口をつぐんだ。それをそのまま言葉にしてしまうのはさすがに恥ずかしい。

「わかりました。お言葉に甘えて、本日は下がらせていただきます」
「よろしい。貴女にはやってもらいたいことがあるんですから、風邪なんて引かれては困ります」
「やってもらいたいこと？」
「それは、明日。そんなにふらふらの状態では、話どころではありません。殿下に目をつけられぬよう気をつけなさい」
う。そうだった。王子がいた。寝る前に部屋の鍵は閉めて、扉の前に何か置いておこう。どれだけ効果があるかは分からないが。
「はい」
腰を折って、退室した。執務室の扉を閉めて、懐から魔石を取り出す。充分に離れた光の点が輝いているのにほっと息をついた。この位置なら、まだ王子は仕事中なのだろう。
魔石の光に注意を向けながら、私は眠る準備を始めたのだった。

部屋の扉が叩かれる音で目が覚めた。
「いつまで寝ているのですか。昨日の報告を聞きます。開けなさい」
目玉を剥いて飛び起きる。ディレスだ。
「す、すみません。寝坊、しました？」
悲鳴をあげるように尋ねる。喋ると同時に、声が嗄れているのに気づいた。喉がカラカラだ。どれだけ眠っていたのだろう？　時間間隔がない。慌てて周囲を見渡して、息を呑む。窓から差し込む光の角度が、明らかに朝じゃない。
「とりあえず、鍵を開けなさい」
「あ、はい。少々お待ちください」
寝台から飛び降りて、扉との間に体を滑り込ませる。側面に手を掛けて、力を入れた。木材の軋む音と床の擦れる音があたりに木霊した。
「何しているのですか」

ディレスが不審げに尋ねた。慌てて扉に手を掛ける。
「いま鍵を開けます」
時計の針を回すようにして錠を外す。メイドのときに使っていた部屋と違って、この部屋は鍵が掛かる。その気になれば外から簡単に開けることの出来る簡易なものだが。ディレスの私室の隣だから、もともとはそれなりの身分の人間が使用する部屋なのだろう。鍵を開けたことを告げると、ディレスはそっと扉を押した。
「突然悪かったですね。少し話があったので」
そう言って姿を見せるディレスは、今日も美しい。光り輝く銀髪が扉を開けた微風でたなびいた。銀糸が風に揺れる様が視界に映ってはっとした。
私、いま寝起きだ。
「ちょ、待ってくださ――」
止める間もない。ディレスは部屋の扉を完全に開いた。私の姿を視界に納めて、ディレスは目を見張った。
沈黙が降りる。
痛いほどの静寂に、身を縮こまらせた。雪が降り積もった日の朝のような、肌の表面を刺すような空気があたりを支配する。酷い。いくら髪があちこち跳ねているからって。肌に多少油が浮いているからって。顔がちょっとむくんでるからって。何も言葉を失うことないじゃないか。そりゃディレスは朝起きたときから女神のような完璧な状態なのかもしれないけれど。普通の女は二十歳過ぎれば段々と朝にその年齢が顕著に――
「……なんですか、これは」
ディレスは私をまるで見ていなかった。
ほっとしたような腹立たしいような。理不尽な憤りを感じながらも、ディレスの視線の先を追う。そこには、先ほど移動させた寝台があった。不自然に斜めに位置しているから、目に付くのだろう。急いでいて綺麗に真っ直ぐ移動させている場合ではなかったから。
「寝台です」

答えると、ディレスは眉を寄せた。
「それは見れば分かりますよ。なぜ曲がっているのか訊いているのです。先ほど移動させていましたね？」
「殿下対策です」
扉の前には寝台を移動させておいたのだ。扉の側で眠るというのも落ち着かないが、鍵だけでは心もとない。侵入者のアクションを、一歩でも遅らせられるのなら、これくらい安いものだ。
「危機意識がある、ということは良いことですが。自分の身を出口の側に置くなど、何を考えているのです？」
だが、ディレスにはお気に召さなかったようだ。
「え？　でも、この配置だと扉を開けられたら振動が伝わりますから、起きることが出来て都合が良いと思うのですけど」
「突然の襲撃に対してどうするのです。扉は襲撃時に最初に攻撃を受ける場所ですよ。槍で串刺しも、炎系での魔法で扉を飛ばすのも、よくあることではありませんか」
平然と、ディレスは言った。待て待て待て。話が飛躍しすぎている。槍で串刺しって何だ。鉄の処女か。どれだけ大人数での襲撃を想定している。しかも、よくあることってどういうことだ。たかが使用人一人相手にそう起こってたまるか、そんな物騒なこと。
だが確かに、槍で串刺しにされたり魔法で爆発させられたりしたら、扉の近くで寝ているのは危険だ。それは一理ある。けれど、今は対王子対策の話をしているのであって、決して暗殺対策をしているのではない。
というか、暗殺だってそこまで派手には行わないだろう。戦争やクーデターであれば、なりふり構わない方法も採られるのかもしれないが。それにしたって、狙う人物のあたりくらいはつけるだろう。
「あの、殿下の目的は私の殺害ではないと思うのですが」
そう答えると、ディレスは軽く目を見張った。
「確かに、そうですね。殿下対策のためだけなら、これはこれで最良の対策と言えますね」

言い聞かせるように、ディレスは呟いた。腕を組んで、時折考え込むように頷いている。　ああ、眼福だ。こういうときのディレスの表情は、妙な色気があって良い。そんなディレスの表情を思う存分堪能してから、私は口を開いた。

「そういうことが、あった――いえ、まだ、あるのですか」

戦争があった、とディレスは言っていた。私はその話を「終わったもの」として聞いていたが、違うのだろうか。

私はこの世界の情勢に疎い。街の様子を見て、日本と同じ平和な世界を想像していた。戦争なんて夢物語のあの世界を。

けれど、そうではなかった。数年前とは言え、命のやり取りを伴う争いがあった。それも、ディレスの言葉から察するに、兵と兵だけが戦う類のものではない、血生臭いものが。だとすれば、今もまだ危うい状況なのかもしれない。一歩間違えばこの均衡が崩れるほどの。

「違います。ないとは言い切れませんが、確かに貴女には関係ないことでしたね。余計なことを言いました。忘れなさい」

だが、ディレスはすげなく会話を打ち切った。話を続けたくないという雰囲気を感じ取った私は、慌てて話を転換した。

「あ、昨日の報告ですよね。申し訳ありません。お時間をとらせました。まずは子爵からの預かりものをお渡しします」

サイドテーブルへと駆け寄る。その上に乗っている文書を手に取ると、ディレスが眉を寄せてこちらを見ているのが視界に映った。

「子爵からの預かりもの？」

「はい。解析書ということでお預かりしています。どうぞ」

コピー用紙サイズの茶封筒を手渡すと、ディレスはさらに困ったように私を見た。

「私は、フォード公爵への使いを頼んだはずですが。子爵とは誰のことを言っているのです？」

「ええ。もちろん、公爵への文書はお届けしましたよ。それは別件です。ジェイル子爵からの――」

「何故貴女が子爵の元を訪れているのですか」
鋭い叱責が飛んだ。意味も分からず咎められ、思わず体を震わせる。ディレスが声を荒らげるのは、初めて聞いた。
「え、フォード公爵の使いで……ディレス様も了承なさっていたじゃありませんか」
「ああ、あの時の。雑用と言いつつ、まさかそんなことを頼んでいたとは。時間がかかる雑用だとは聞いていましたが、まったく、あの狸は」
ディレスが毒づくのも初めて見た。けれど、嫌そうに顔を顰める様も美しい。僅かに眉にしわが寄り、肉付きの薄い唇がほんの少しだけ歪められる。その様は、一瞬を切り取って時間を止めた、彫像のような完成された美だった。
呆けて見つめていると、ディレスは手元の封筒へと視線を落としていた。封筒の口へと指を添える。糊付けされた上から、奇妙な紋が描かれていたあたりへ、だ。
印を押さえてから、小さな声でディレスは呟いた。途端、模様が赤く光る。淡く滲んだ光が消えると、何かが剥がれるような乾いた音が響く。見ると、糊付けされていたはずの封筒が、いとも簡単に口を開いていた。
これも、ただの封緘印ではなかったのか。
感心して見ていると、ディレスは中から文書を取り出した。
「まあ、子爵に直接会わずに済んだのは不幸中の幸いでしたね。執事にでも面会しましたか」
その言葉に耳を疑った。
つい先ほど、子爵からの預かりものだ、と言ったではないか。今ディレスが手にしている解析書は。子爵に会わずしてどうやってそれを受け取ってきたと思っているのだ。人の言ったことを忘れるなんて、ディレスらしくない。故意に聞かなかったことにすることは良くあるが。
「子爵にはお会いしましたけれど？」

首を傾げて答えるが、返事はない。見ると、ディレスは取り出した文書に目を落としているところだった。食い入るように文書を見つめている。素早く左右へと走る目が、文書の最下部までたどり着いたところで、ディレスは勢いよく顔を上げた。

「子爵に、会ったんですか」

一応、話は聞いていたらしい。

「ええ。お会いしましたけれど」

肯くと、ディレスは私を射抜くような視線を寄越した。

「それで、ジェイルはなんと言ってこれを――」

だが、ディレスはすぐに目を伏せて訊き直した。その時には既に、射抜くような勢いは収まっていた。

「いえ、よく五体満足で戻って来れましたね」

やっぱりそうか。子爵は「変人」なのか。しかも、周囲に迷惑をかける類の。ついでに言えば、「五体満足」などという言葉を持ち出されるくらいの。

けれど、不信感を覚えると同時に、ディレスの態度に違和感を覚えた。先ほどの勘違いといい、やや早口で尋ねる口調といい、常のディレスの態度とは異なるのだ。言ってみれば、予想外の事態に焦っているような気がするような――

しないような。

ここまで言っておいてなんだが、その違和は、微々たるものでしかない。いつも無表情のディレスだ。今日とて、はっきりと分かるほど表情が変わっているわけでもない。早口と言ったところで、タイムウォッチで秒数を計っているわけでもない。気のせい、と言ってしまえば否定できない程度の違いだ。いうなれば、女の勘――などという何の証拠もないものを頼りに判断しているに過ぎない。

「五体満足とは、どういう意味ですか」

ディレスの心情を量りかねて、鸚鵡返しに問う。

本当なら、この場でネチネチと小姑のごとくディレスを責めてやるつもりだった。そりゃもう、納豆のごとくねばねばと。切っても

切れない糸のように終わったかと思わせて、また同じ話を蒸し返すようにしつこく。執念深く。

だけど、文句を言う前に毒気を抜かれた。ディレスが予想外な反応を示したからだ。まるで、子爵の件は完全な予想外――いやむしろ、都合が悪いとでも言うような反応だった。そんな態度を見せられて、ディレスを詰問しようという気は完全に殺がれてしまっていた。

少なくとも、ディレスの立ち位置をはっきりさせるまでは。

「無事に、という意味ですよ。ジェイルは、貴女のような珍しい存在をことのほか好みますから」

珍しいのか、私。子爵自身も言っていたけれど。肩に掛かった黒髪のひと房を指に巻きつけて、見下ろす。こんなもの、日本に行けばそこらじゅうにいる色なのに。

まあ、現代は染めている人も多いから、人口的には減ったけれど。

「ディレス様は、ジェイル子爵のお知り合いではないのですか」

「知り合いではありますよ。それが何か？」

子爵のことについて聞いてみると、ディレスは僅かに眉にしわを寄せた。あまり仲は良くないのだろうか。子爵はディレスのことをある程度認めているような発言をしていたのだが。

「いえ。私、余計なことをしてしまったのでしょうか」

機嫌を損ねたのだろうか。不安になって尋ねると、ディレスは無表情で私を見返した。

「何故、そう思うのです」

「ディレス様は、私がジェイル子爵と会ったことをよく思っていないようでしたので」

そう答えると、ディレスは納得したように頷いた。

「ああ、先ほどきつく訊いたからですか。余計なことも何も、貴女は言われたまま仕事を果たしただけでしょう？　確かに、私としては予想外なことでしたから、驚きましたけれど」

「予想外、ですか？」

「ええ。まさか、フォード公爵がそんな頼み事をしていたとは思いもよりませんでしたからね。何を思ってそんな仕事をさせたのか――は、良いとしても。私としては貴女をジェイルに会わせるのは意味もなく危険すぎて、避けたいと思っていたのですよ。貴女にとっても、私にとっても百害あって一利なしですから」

「一利なし、ですか」

「実験体にとしつこく頼まれたでしょう？」

頼まれた、というかほぼ実力行使だったが。何故かそれは言わないほうがいいような気がした。

「ええ、まあ。珍しいから、とは言われました」

「ジェイルも、考えなしに薬を投与するような人間ではないのですが。貴女には非常に迷惑をかけましたね」

その言葉に、思わず目を見張った。まさか、ディレスから謝罪のような言葉が聞けるとは思わなかった。

「え、いえ、そんな……私には恐れ多いお言葉です」

予想外の展開に、舌がもつれた。

「フォード公爵も……まさか、あれほどまでに貴女を気に入るとは。貴女、何をしたのです？　何かパフォーマンスでもしましたか」

「それが、私にもさっぱりで。何もしていないのですけれど」

「そうですか。では、何もしていないから、気に入られたのですね」

「え？」

「ところで、熱は？」

何を言っているのか理解するのに時間がかかり、一瞬呆けた。

「おかげさまで、だいぶ良くなりました。少々だるくはありますが、仕事に支障はありません。本日は時間に遅れ、大変申し訳ございませんでした」

「まだ、だるいのですね？」

頭を下げて謝罪する私を気にも留めず、ディレスは確認した。

「少しは。ですが、大したことはありませんので」

「では、今日は仕事は休んでかまいません。ゆっくりと休養をとり

なさい」
「え？　でも……」
ディレスの気遣うような発言に、戸惑う。ディレスはディレスなりに悪いことをしたとでも思っているのだろうか。それとも、単に雑用係に任せる仕事が特にないだけなのか。見上げて顔色を窺うも、その表情からはディレスが何を思っているか読み取れなかった。
「私も、今日は私室で作業をしましょう。殿下のことは気にしなくてよろしい。もし、殿下が訪れるようなことがあったら、ここから叫びなさい。ないとは思いますが」
「動けないことはないですし、そんな大げさな」
「念のため、です。肝心なときに倒れられては困りますからね。明日までに完全に治してしまいなさい」
「明日ですか？　そういえば、昨日も伺いましたけど、明日何かあるんですか」
「ちょっとした会合に、私の供として出席してもらいます。簡単に言えば、荷物持ちですよ。肩肘張るほど大したものではありませんが、体調の悪いままこなすのもなんでしょう」
「ちょっとした会合、ですか」
それってなんですか、という意味を込めてディレスを見上げる。けれど、ディレスはにこりと微笑んで、そっと私の頬へ手を添えた。その冷笑に、背筋に氷を滑らせたような錯覚を覚える。
「それは明日になれば分かることです。余計なことは考えず、休みなさい。ほら、まだこんなに熱があるのですから」
凍った体が、頬に添えられた手の存在で溶け出した。慌てて身を引いて、ディレスの手を頬から離す。先ほどまで触れていた部分が鉄で焼かれたように熱い。
「……はい」
俯いて答えると、ディレスは満足げに頷いた。そのままくるりと身を翻す。
「では、明日」

扉が閉まる直前、ディレスが吐息を漏らすのが聞こえたような気がした。後姿からは良く見えなかったが、直前に視界の隅に認めた表情は、口元が吊り上っていた気がした。

無意識に、触れられていた部分に手を添える。

頬を押さえる掌が、熱を受けて熱かった。

二十八、夜会

蝋燭の燃える臭いと、香水、男女の体臭が混ざり合い、独特の臭いがあたりに満ちている。周りは薄暗い。明かりは蝋燭と魔石の光。それも、蛍光灯のような明るさはない。蝋燭は言うまでもなく、魔石も光の強さを最低限に絞っているようだった。何とか周囲の人間は確認できるが、遠くの人間の顔までは分からない。近くにいても、知り合いでなければ顔の判別をつけるのは難しいだろう。顔に僅かな影が落ちるからだ。加えて言うなら、足元が心もとない。床の模様は何とか分かるけれど、ゴミがあっても気づかない、そんなレベルの暗さだ。ヒールの高い靴を履いている身としては、何かで躓きやしないかと不安に駆られること請け合いだ。

ただ、耳に響く管楽器の演奏だけは無駄に心地よかった。クラシックホールで聞くかのような全身に響くほどの大音量。緩急つけて奏でられる音楽は、不思議と体の緊張を解いた。見知らぬ人、着慣れない服、締め付けられる腰、慣れない場。そんな状況でも、酔ったような心地良い痺れを味わえるのは、この音楽のおかげでもあるのだろう。

それに、周りのキラキラしい雰囲気も独特で飽きなかった。ふと演奏に合わせて踊る紳士淑女へと視線を向ける。見ているだけで、夜会の雰囲気が味わえた。音楽は今、丁度盛り上がりに差し掛かっていた。

見せ付けるような大胆な動き。恋人だろうか。ドレスを揺らす女性の幸せそうな表情に惹きつけられる。男性が愛しげに目を細め、ステップを踏む。その後を追うように一歩一歩足を踏み出す女性は、まるでオシドリのように仲睦まじげに見えた。男性のリードが上手いのだろう。羽毛のような身軽さでフロアを舞っていた女性が、男性を支点としてくるりとターンを決めた。音楽の終焉とともに動きを止めた男女は、すっと身を離して一礼した。見ると、他の男女も

互いに礼をして離れていく。他の相手を探すためだ。
いや、先ほどの男女は逆により一層体を寄せ合っていた。他にも、上手い具合に暗がりに溶け込んで行く者もいる。室内が薄暗いのも、このための仕様なのだろう。これも立派に夜会の名物、と考えるべきだろうか。
「何を呆けているのです」
ぼうっと辺りを眺めていると、ディレスに不審げに尋ねられた。隣に立つディレスを見上げて感嘆の息をつく。ディレスの姿も、いつもとは異なる。この世界の正装なのだろうか。いつもの体の線が出ない服装ではなく、首まで襟の詰まった外套をきっちりと着こなしていた。あれはあれで似合っているのだけれど、こういった貴族服も似合うのだから、美形はお得だ。
「どうして私はこんな所にいるのでしょうか」
そう、ここは夜会の場。目的は知らないが、貴族の社交界のようなものだろう。それに、一介の使用人に過ぎない私が何故参加しているのか。女主人を持つ侍女ですらない私が、何故。
「言ったでしょう、荷物持ちだと」
だが、ディレスは平然と言い切った。相変わらず無茶振りが酷い。荷物など持っていないくせに。持たせる気などないくせに。まったく、今度はどんな厄介ごとをさせる気なのだか。
「何の荷物を持つと――いえ、そうではなく。どうしてこんな格好をさせられているのかということで」
言いながら、改めて自分の服装を見下ろす。そこには、薄い緑のドレスを身に纏った自分がいた。他のご令嬢とは見劣りするとは言え、使用人が着るには豪華すぎる。そもそもが、どうしてディレスの供についているのかもよく分からない。侍女であればあり得るのかも知れないが、男の供に女性がくっついていくなんてあり得るのだろうか。ディレスは荷物持ちなどとほざいているが、ディレスは特に荷物を持っていないから、当然、私が持つ荷物などない。というより、夜会の場で何の荷物を持つというのだろう。

お持ち帰り用の女性でも持たせる気か。スウォンじゃあるまいし。こんな場で見境なく女性に手を出したりはディレスはしないだろう。

「正確に言うなら、雑用ですね。こういった場でも色々とこまごました用事があるのですよ。たとえば」

ディレスはそこで言葉を切って、視線を前方へと移動させた。そこには、白いひげを蓄えた貫禄のあるオジサマがいた。

「やあ、ご機嫌いかがかな。ディレス殿」

「ええ、おかげさまで。侯爵こそ、その後いかがです？　最近は領地の収益も安定していると聞き及んでおりますが」

「そうだな。最近は平和で助かるよ。気候も落ち着いているし、不穏な動きもないようだし。ずっとこのままの状態が続けばいいのだが」

「ええ、まったく」

「ところで、ディレス殿。話は変わるが、もうそろそろ家に戻らないのかね？　お父上がぼやいていたよ」

「そうしたいのは山々ですが……侯爵もご存知の通り、やっと情勢も落ち着いたところですからね。まだまだ城を離れるわけにはいきませんよ」

「君が城に欠かせない存在であることはよく知っているが……君ももういい歳だし、そろそろ身を固めることを考えてもいいのではないかね。お父上も心配されていたよ。このまま独身で通すのではないかとね」

「父がそんなことを。お耳汚し大変失礼いたしました」

「いいや、そんなことはないんだがね。浮いた話一つもないから、わしも心配でね。君がその気になれば女性の一人二人を虜にするくらいわけないだろうに」

「それは買いかぶりすぎですよ」

「いいや。決してお世辞ではないよ。現にわしの娘も――そうだ、わしの娘なんかどうかね？　自分で言うのもなんだが、わしに似てなかなかの容姿で、気立ても良い。もし今、誰も決まった女性がい

ないのなら――」
「申し訳ありませんが」
ディレスは侯爵の言葉を遮って、私の腰を抱いた。
「え？」
ぐっと密着するように傍らに寄せられ、思わず声をあげた。むき出しの腕にディレスの体温が伝わって、体が熱く沸騰した。
「今、私はこの女性しか目に入らないのです」
その言葉に、雪崩が真上から襲ってきた直後のような沈黙が降りた。
ディレスの言う「雑用」は分かった。分かったが、その設定は無理があるだろう。現に、侯爵も顔を引きつらせている。
「ああ、その子は君のいとこか何かかね」
「いいえ、血は繋がっておりません。今、私の頭を最も占めるほどの愛しいひとです」
思わず腕をさすり、立ち上がった毛肌を撫で付けた。手に伝わるざらついた肌の凹凸を、均すように何度も往復させる。嘘くさい。嘘くさすぎる。
「……」
何を言っていいのか分からなくなったのだろう。ついに侯爵は黙ってしまった。そりゃそうだ。どう見たって、私とディレスは不釣合いだ。容姿はおろか、彼らにしてみれば年齢すら釣り合って見えていないはずだ。なにせ、今まで誰も私の年齢を疑ったりしないのだから。しかも、美人でもない、地位があるわけでもない、幼い子供。そんな人間を指して「愛しい」などと言ってみたところで、誰が信じるか。それこそ、王子のようにロリコンを疑うくらいが関の山だ。
――いや、ディレスのことだ。逆にそれを期待しているのかもしれない。持ち上がる見合い話を跳ねつけるための口実として、ロリコン疑惑を植えつけたいのかもしれない。
「そういうわけですので、その件についてはご心配なく。ところで、

フォード公から――」

侯爵が呆然としている間に、ディレスは素早く話を切り替えた。真面目な話なのだろう、持ち出された話題に侯爵は突っ込みすら忘れたようだった。結婚の話を退けるには若すぎるだろう、という当然の疑問は言葉にされることなくうやむやとなった。

となれば、もう私の役目は終わったと思って良いだろう。ひっついている必要はない。早く居心地の悪い体勢をどうにかしたくて、身を捩ってディレスに訴える。ディレスは私に気づくと、ちらりと侯爵の様子を確認してから腰の手を離した。ちらほらと聞こえるフォード公爵やジェイル子爵の名に不穏な空気を感じながらも、私はあえてディレスから距離をとった。あまり彼らの名は耳にしたくない。特に子爵の名は。

ディレスの背に隠れるように移動し、ぐるりと周りを見渡す。どこか隅のほうででもひっそりと休めやしないかと思ったのだ。少し人の熱気がないところで落ち着きたい。

だが、視線をめぐらせている途中で、こちらを睨みつけている女性と目が合った。もちろん、知らない女性だ。何か知らず無作法でもしていたのだろうか。心配になって居住まいを正そうとしたところで、女性がこちらへと近づいてくるのが見えた。真っ直ぐと私の元へ。困ったように周囲を見渡してみるが、ディレスはまだ侯爵と話をしていた。あまりディレスから離れるわけにもいかない。

戸惑いながらもその場に動けずにいると、女性はついに目の前までたどり着いた。睨みつけるような強い視線を向けられて、私はごくりと喉を鳴らした。

二十九、言い合い

目の前に立つのは、目も眩むブロンドの女性だった。女性は私と視線を合わせると、にこりと微笑んだ。どこか陰のある笑顔が怖い。

「御機嫌よう、お嬢さん」

「ご、御機嫌よう」

現代日本ではおよそ使うことのなかった言葉に、口が上手く回らなかった。言い終えてからも、妙な羞恥に襲われた。お嬢様言葉なんて、柄じゃない。

だが、そんな葛藤を知ってか知らずか。女性は馬鹿にするように、鼻を鳴らした。挨拶もろくに言い切れない私に呆れたのかもしれない。

「失礼。わたくし、バジュ伯爵家の長女、フィリーエルと申しますの。貴女のお名前を伺ってもよろしくて？」

よくない。けれど、嫌だと言えるわけがない。嫌味に自分の爵位をひけらかすご令嬢相手に、生意気な態度など後で何を言われるか分かったものではない。

「あ、アスハと申しま――」

「ごめんなさい、どこの家かお聞きしても？　わたくし、世間知らずなものですから伯爵家以外の方は存じ上げませんの」

せめてもの抵抗に苗字だけ名乗ろうとしたところで、遮られた。つまりあれか。要は爵位だけ聞きたかったのか。自分より下の身分であることを白状させた上で、貶めたかったのか。

「いえ、どこの家柄とかはなくただの使用人で」

「まあ、ただの使用人？　使用人がディレス様と共に夜会に出席なさっておいでなの？　あの方のパートナーとして？」

感じていた腹立たしさが、その言葉に和らいだ。要はディレスの傍らに立つ私に対する嫉妬か。ディレスの供としてダンスパーティーに出席している私に妬いたのか。恋人と勘違いして。

そう思うと、途端に目の前の女性が可愛く思えた。

「いえ、パートナーではなくただの荷物持ちとして――」

誤解を解いてやろうと、自分の仕事を明かすべく口を開く。けれど、最後まで言葉をつむぐ前に口を止めた。

背後に伝わる冷気に気づいたからだ。

「何をしているのです、アスハ」

ディレスが近づいてくるのが分かる。カツカツと響く足音が妙に耳に残る。怖い。何か知らんが不機嫌だ。あれか、さっきの侯爵との話が上手くいかなかったとかか。そんなの私の知ったことじゃない。八つ当たりはやめてくれ。

だが、そんな空気に気づかないのか。フィリーエルはドレスの裾を持ち上げて腰を折った。ふわりと華がほころぶかのような優雅なしぐさ。その変わり身の速さに私は言葉を失った。

「御機嫌よう、ディレス様。ご無沙汰しておりますわ」

「御機嫌よう」

だが、ディレスは一言返すのみだった。砂糖菓子のように甘やかに囁きかけるフィリーエルに対し、随分と素っ気無い。そもそもが優しい言葉をかける性格ではないが、それにしたって冷たい。

「遠くからでもディレス様のご活躍はよく耳にしておりますわ。久しぶりに父も交えてお話でもいかがかしら」

「お父上がいらしているのですか」

「いいえ。けれど、後ほど私を迎えに来る予定ですの。そのとき一緒に――それまでは二人きりで……ね？」

色っぽく、フィリーエルは囁きかけた。目の前で繰り広げられる光景に唖然とする。ディレスは明らかにフィリーエルに口説かれている。

確かに、ディレスは絶世の美男だ。性格が悪いところを除けば、容姿も将来性も文句はないだろう。むしろ、もっとわらわらと女性が群がってもおかしくはないはずだ。けれど、目の前の女性を見て、私は心の中で頭を振った。

違う、そうじゃない。ディレスの隣に並ぶのは、もっと深窓の令嬢っぽい感じの女性じゃないと。目の前の女性は美人だが、ディレスの隣に並ぶのは違うだろう。

フィリーエルの目元は、やや吊り上っており、気の強さを窺わせる。将来旦那を尻に引いて優雅に扇を扇いでいそうな容姿だ。いや、嫁の尻に敷かれるディレス、というのもなかなかに捨てがたい。捨てがたいが、相性という意味では最悪だろう。ディレスには大人しめの令嬢か、共に策を弄す腹黒お嬢様とかのほうが似合うだろう。

個人的には、大人しめの女性と大恋愛の末結ばれてくれるのが一番望ましいのだが。そして、お嫁さんの性格に釣られてもう少し丸い性格に改心してくれるととても素晴らしいのだけれど。

まあ、そんな個人的な見解はともかくとして。彼女の誘いを断るにせよ乗るにせよ、自分がいては邪魔になるだろう。そう思って身を引くと、肩を抱かれて止められた。そのままディレスの傍らへと引き寄せられ、恋人のように密着させられた。

「申し訳ない。非常に残念ですが、本日は連れがいるのです」

ああ、こういう場でもか。

密着した場所から伝わる体温に顔を染めながら、心の中でため息をつく。対見合い話だけでなく、女性から直接申し込まれる虫除けまでもやらされるのか。女性相手に断るのに私では歳が足りない気もするが。まあ、いないよりはマシなのだろう。

「まあ。随分と可愛らしい子ですわね」

案の定、遠まわしに幼すぎるだろうと言われた。多分、実年齢は彼女より上だろうに。同性でもやっぱり若く見られるのか。

「そうでしょう？　この愛らしさに夢中なんです。今日もあまり気の乗らない彼女を無理に連れ出したところなのですよ。他の女性に目を向ければ、途端に機嫌を損ねてしまうでしょうから、今日は一日彼女のことだけを見ていたいのです」

その言葉に、ぞわりと肌が粟立った。口元が無意味に引きつる。まさかディレスがこのような甘い文句を使うとは思わなかった。あ

んな鉄面皮でよくもまあ。しかも、あれだけ無茶振りして、あれだけ危険な目に晒しといて、この台詞。どれだけ面の皮が厚いのか。

それでも、利用されているとわかっているくせに。顔を赤くして動揺する自分が憎たらしい。

「よほど大事になさってるのですね」

フィリーエルも、疑いを隠しもせずにディレスを見た。ほら、イメージに合わないことするから。説得力に欠けてるんだよ、ディレス。せめて妙齢の美女を伴っていれば相手も黙っただろうに。

侯爵と違い、積極的な女性相手にロリコン偽装は役に立たないだろう。多分、見破られている。女性はそういうことには聡いのだ。

「ええ。愛しくて片時も離れたくないほどです。申し訳ないですが、本日はこれで失礼いたします。お父上とは、また日を改めて」

だが、ディレスは強引に押し切った。フィリーエルは、似合わぬ甘い台詞を吐くディレスに言葉を失ったように呆然としていた。その隙を突いて、すっと身を引く。私の肩を抱いたまま、ディレスはフィリーエルを置き去りにしてその場を去った。

「何故彼女と話していたのですか」

人いきれが落ち着いたところで、ディレスは訊いた。肩を抱いたまま、ディレスは冷たく私を見下ろしている。

「いえ、私は何もしていないのですが。ディレス様と一緒にいたのがよほど気に食わなかったらしくて」

「言いがかりをつけられましたか」

「はい。さすがディレス様。おモテになりますね」

「あれが好意を寄せている女性の態度ですか。冗談を言うのならもっと面白い内容にしなさい」

「すみません」

いや、冗談でもないが。彼女にいくらかの打算はあったのかもし

れないが、ディレスに好意を寄せているのは間違いないだろう。でなければ、あれだけ嫉妬むき出しの言葉など投げつけてこない。だが、ディレスにとっては冗談でもない、ということなのか。

ディレスの好みについてとやかく言ってもどうしようもない。素直に謝ると、ディレスはため息をつきつつ肩の手を離した。

「まあ、それはともかく。固くなり過ぎでしたよ。もう少し自然に振る舞いなさい」

解かれた拘束に慌てて距離をとる。だが、足を崩してたたらを踏んだ。ヒールの不安定さと、ディレスに二度も抱き寄せられていたことに動揺していたのだ。

「……っ」

つんのめる。転ぶことを覚悟して、目を瞑って手を差し出す。

だが、次瞬間、ディレスの手が腰を抱いた。

「何をしているのです」

吊されたタオルのように、ディレスの腕に絡めとられた。冷め始めていた熱が、再び顔に集まる。何度も触れられて動揺するのが悔しくて、くの字に折れたまま体を捻ってディレスを睨みあげた。

「初心な子供を弄んで楽しいですか」

「初心……？　何を甘い事を。もうそんなことを言うような歳ではないでしょう？」

ディレスは私を地に降ろしながら言った。その言葉に思わず身を固くする。顔に集まっていた熱が、ざっと音を立てて引いていくのが分かった。

まさか、年齢がバレていた？

「何、を……」

震える声を必死で押し隠して、ディレスを見上げる。

「十二と言えばもう充分に女性として扱われる歳です。殿下に限らず、貴女をそういう対象として見る者もいるでしょう。村娘ならいざ知らず、王城で働く者は皆心得ていることですよ」

――バレてなかった。

完璧十二と断じられるのも複雑だが、とりあえずほっとした。ディレスには出来るだけ弱みを握られたくはない。嘘をついていたとバレたら、そこから何を喋らされるか分からない。

胸をなでおろした私に、ディレスの話は更に続く。

「殿下の時も思いましたが、こういう時はもっと女性という性を利用すべきでしょう？　普通、逆に私を籠絡する事を考えるものでしょうに。それとも、それが出来ない理由でもありますか」

ディレスは私を軽く睨んだ。

カマトトぶるなってか。たかが恋人のフリ程度で動揺するなってか。

そりゃ私だって相手が普通の人間だったらここまで動揺したりしない。だが、ディレスは普通の容姿じゃないのだ。

「ディレス様みたいな美人相手に、緊張するなと言うのが無理ですよ」

「……」

ディレスは無言でこちらを凝視した。

「そんな見え透いたおべっかを使ってどうするのです。私に取り入るにも、そのようなあからさまな手段が意味のないことくらいは知っているでしょう」

本音で言ったのだが、ディレスにはゴマすりと受け取られたようだった。良く考えてみれば恥ずかしい台詞だった。少し反省する。

だが、これだけ美形な上、女性にも言い寄られるほどだ。過去、そういう色恋の機会も多くあっただろうし、経験だって豊富だろうに。頭から否定することもないだろうに。

「それとも、機嫌とりのつもりですか。貴女、何のために城に上がったのですか」

そんなの決まってる。帰るためだ。

「ルロールさんのファンだからです。スウォンさんから聞いていませんか」

本心は違うが、まるっきり嘘ではない。ルロールに会いたいから

城に上がったのだ。だが、ディレスは呆れたようにため息をついた。
「……嘘をつくにも考えなさい。そんなことのために異国の地からわざわざここに来る者がいますか」
ここにいるんだよ。というか、わざわざここに訪れたんじゃないんだよ。お前らに呼ばれて強制的にここにいるんだよ。城に来たのは私の意思もあるけれど。
幼子に言い聞かせるようなディレスの口調に苛ついて、心の中で毒づく。けれど、決して口にはしない。それを言ってしまうのは危険だからだ。腹の底が読めないディレス相手に、こちらの情報を必要以上に晒したくはない。
「よっぽど頭に血が上っているようですね。もう良いです、少し頭を冷やしてきなさい」
だが、恨めしげに見上げる視線に何かを感じ取ったのか。ディレスは私を冷たく突き放した。取り付く島もない。別に取り付く気もないから、いいのだけれど。
さっき、確か片時も目を離したくないとか言ってた気がするが、良いのか。
「かしこまりました」
まあ、良いか。私の知ったことではない。ディレスの傍にいなくて良いと言うのなら、それに越したことはない。ディレスは鑑賞には最適だが、隣に立つには気の抜けない人間だ。
私が頷くと、ディレスはぷいと身を翻した。まるで喧嘩した恋人のように素っ気なく――
そこまで考えて、気づいた。ああ、わざとか。
ああ嫌だ、隙がない。本当に気が抜けない。
ディレスを狙ってるご令嬢をかわすには逆効果な気もするが、ディレスのことだ。上手くやるだろう。私が気にするまでもない。ついでに、喧嘩したように見せたのなら、私にかかる火の粉も振り払いやすくなるだろう。そこまで計算したかは知らないが、私にとっては都合が良い。

そうなれば、私が単独で行動するのも可能となるだろう。ただの使用人としてではなく、ディレスの庇護ということも、ディレスと離れた理由も、広まっているのだろうから。

見知らぬ男性と何やら談笑を始めたディレスを視界に留めて、私は身を翻した。

三十、初志

ディレスはなぜ王宮に来たのかと言った。その言葉に、動揺していた私は反発心を抱いた。来たくて来たんじゃない、そっちが勝手に呼び出したからその責任を取らせるためにわざわざこっちが出向いてやっているんじゃないか、と。

けれど、ディレスから離れて正常に思考が働くようになって気付いた。ここへ来た目的を忘れていたことを。王子の問題やらディレスの抜け目のなさに、考えることを後回しにしていたことを。

そう。王宮へ上がったのは、元の世界に戻るためだ。ルロールに渡りをつけるため。けれど、度々起こる予想外の出来事に、いつの間にか「ここで平和に日々過ごすこと」を優先していた気がする。身の安全を確保することに必死になりすぎて。

それでも、今、ディレスに直接ルロールの居場所を訊くのは躊躇われた。ディレスのことだ。よっぽど自然に切り出さなければ、すぐに会話の不自然さに気づくだろう。

なぜルロールに興味を持ったのか。なぜルロールでなければならないのか。ほかの優秀な者では駄目なのか。魔法に興味があるのなら、まずは学校に通うべきではないのか。興味があるというわりに、魔法自体に大した興味を見せないのはなぜか。

今思いつくだけでもこれだけある。これだけ不自然な点があるのに、ディレスが気づかないわけがない。ひとつひとつは細かい。けれど、小さな矛盾も積み重ねればやがてその裏の嘘を暴くための材料になる。小さな綻びも、つつけば広がる。やがて取り繕いようのない大きな穴となる。特にディレスは、そういった話運びが巧い。ちょっとした違和でも、気づかれたら鋭く問い詰められるだろう。過ごした時間は少ないが、それくらいは嫌というほど理解した。そのディレスの追及から、逃れられるわけがない。それだけの話術があるなどと思うほど、自分を知らぬ愚か者ではない。

だが、ディレス以外ならばどうだろう。私を良く知らぬ者ならば？　ディレスの耳に詳細が入らない程度の会話ならば？

おあつらえ向きに、今の状況は調っている。それなりの立場の者が集まった社交場。貴族であればルロールの任務について知っている者もいることだろう。もちろん、普段であれば使用人が貴族に声をかけても無視される可能性が高い。王宮であればそうだった。けれど、今なら違う。ディレスは私を恋人として紹介した。先ほどのディレスのパフォーマンスも手伝って、私とディレスの関係は周知の事実となった。この世界で玉の輿がどういった印象をもたれるのかは分からない。けれど、地位のあるディレスに並ぶ者としてみなされることは確かだった。

現に今、私の周りを貴族が輪になって取り囲んでいる。私は、男女問わず噂好きの貴族の格好の標的となっていた。これはチャンスだ。この機会を逃す手はない。

「ねえ、ディレス様ってどんな女性が好みなの？」

ゆるくウェーブのかかったたれ目の女性が興味津々に問いかける。仮にも恋人としてこの場に立っている人間にそれを聞くか。苦笑した私に気づいたか、隣に立つ男性が軽く小突く。だが、女性は男性へ向けてむくれて見せた。頬を膨らませて言い訳をする姿は微笑ましい。恋人だろうか夫婦だろうか。どちらにせよ、二人の仲が近しいことは窺えた。決まった人がいるのなら、単に好奇心で聞いているだけで悪気はないのだろう。確かに、私も部外者の立場だったら、気にならなくもない。あの無表情男が閨でどんな愛の言葉を囁くかはそりゃもう興味をそそられる。実際尋ねるかどうかは別として。

「こら、そういうことを聞くものではないよ。それより、何が原因で喧嘩してしまったの？」

そう言った男の言葉もあまり気を遣えてなかった。だが、仕方ないことだろう。今の私は、やはり子供で使用人だ。ディレスと並ぶ者だとしても、下に見られるのは当然だろう。加えて、好奇心もあるのだろう。他人の色恋に首を突っ込んで、あれやこれやとアドバ

イスしたがるのは男性も女性も変わりない。
「それが……よく分からなくて。分かるのは、私がルロールさんの名前を出したら急に機嫌が悪くなったってことくらいで」
所詮貴族だ。男の態度は気にするだけ無駄だろう。気にせず、必要な情報だけ聞き出せばいい。
「それはお嬢さん、貴女が悪いよ。恋人との逢瀬の最中に他の男の名を出すなんて。君だって、彼に他の女性の名を出されたら気分悪くなるだろう？」
ディレスのシナリオをなぞる。ディレスの急変に戸惑う恋人を演じると、目の前の男性は得意げに諭した。こうも素直に騙されてくれると、ほっとする。ディレスは無表情で見下ろすだけだったから。嘘も嘘じゃない話でも、見透かされているような視線は落ち着かなかった。
ただ、簡単に騙されてしまう人を見ると、逆に罪悪感を感じないわけでもないけれど。
ほんの少しの罪悪感を感じながら、私は演技を続けるために目を伏せた。
「でも、そんなつもりじゃ……。ルロールさんのことはただの憧れで、ディレス様もそれを理解してくださってたんです。ディレス様は私の夢を応援してくださっていましたし、それを今更……」
「夢？」
「はい。私の夢はルロールさんのような魔法使いになることなんです。もともと王宮に上がったのも、ルロールさんと少しでも接点がもてればって思ってのことだったんです。けれど、私が王宮に上がると同時にルロールさんは任務で王宮を離れてしまって。数日のうちに帰ってくるって聞いていたんですけれど、一向に戻ってくる気配がないので、つい心配になってしまって……」
「ディレス様に問い詰めてしまったんだ？」
「はい……」
「いくら応援していたとしても、やっぱり他の男を心配する言葉を

聞くのはあまり気分の良いものではないんだよ。それも、こんな場でされたら、いくらディレス様だって文句のひとつも言いたくなるさ」

「でも、ディレス様はいつも私の話をにこやかに聞いてくださって。ルロールさんについて話したのだって、一度や二度じゃなかったのに。私、ディレス様はすごく優しい方なんだって思って……それで」

「それは貴女、ディレス様が貴女に下心を持っていたからですわ。愛しているから優しく出来たんですわ」

話を聞いていたうちの一人の女性が口を挟んだ。下心を愛と結び付けるその思考に私はいたく感動した。

「ええ、そうよ。ディレス様があんなに優しく微笑まれるの、私初めて見たわ」

先ほどのディレスを想像したのか。別の女性がうっとりと頬を染めながら賛同した。

私も初めて見た。

確かにあの表情は反則だった。演技と分かっていても、向けられる視線に心ときめくのを抑えられなかった。だが安心して良い、あれは偽物だ。

「そうそう、ディレス様はお綺麗ですけれど、どこか人を寄せ付けない雰囲気があるものね」

ですよねー。ディレス様綺麗だけど、近づきたくはないですよねー。

心の中でうんうんと頷く。さすが女性、良く見てる。意見が一致したことが嬉しくて、思わず一瞬このままディレス様談義でも始めようかという考えが頭によぎった。話が合うのは嬉しい。だが、次の女性の言葉に目を剥くことになる。

「でも、一番の美形といったら殿下よね。私、殿下を遠くから拝見しただけでその日一日中、動悸が治まらなかったもの」

予想外の言葉にぽかんと口を開けてしまった。

なんだって？　王子が一番の美形？

別にディレスを世界一とか言う気はない。だが、王子が一番というのには一言物申したい。どう見たって明らかに、王子よりディレスの方が美形だろう。反論すべく口を開くが、言葉は別の女性に遮られた。

「分かりますわ！　わたくしもあのお顔を初めて拝見したとき、あのような神々しいお方が存在することに驚きましたもの」

神々しい、だと？

あまりの美化されように台詞を発した女性を凝視する。ふわふわとした柔らかな髪と肉付きの良い体。肌は透き通るように白い。瞳を潤ませて見上げて見せただけで、簡単に男どもを落とせそうな容姿だった。彼女であれば、王子にこだわらずともっといい男を捕まえられるだろう。加えて言えば、やりようによっては王子だって落とせそうな容姿だった。

確かに、彼女は子供というより妖艶な魅力溢れる女性だ。王子の好みのタイプではないだろう。だが、彼女に迫られて拒める男性などいるわけがない。個人の好みを凌駕する容姿なのだ。それは、王子も例外ではないだろうに。

「ええ、あの蕩けるような甘いマスクで耳元で囁かれたら、私腰がとろけてしまいますわ」

そう言う女性も、性的魅力に溢れていた。張り出た胸のボリュームと私でも抱き寄せられそうなほどの細い腰は、同性ですら生唾を飲ませるほどだ。その豊満な胸を押し付ければ、男の理性なんて簡単に吹っ飛ばせるだろう。いくら相手がロリコンであろうとも。

「そんなの、当然じゃありませんの！　わたくしなんて、誕生祭は必ず前列を予約してますわよ。少しでもお傍で殿下のご尊顔を拝したいですもの」

うわあ、あの誕生祭か。苦い記憶に思わず顔を顰める。みな意外と熱心に口上を聞いていると思ったら、そういうわけだったのか。口上やら召喚やらというよりは、単に王子の顔を眺めるのが目当てだったのか。

けれど、いくらそれが目当てだとしても。予約までするのはやりすぎだと思った。この女性だって、あんなろくでなしを相手にする必要などないほど綺麗なのに。

というより、予約なんてものがあるほど好評なのか？　その誕生祭の最前列は。

「あら、貴女も？　私もよ。貴族令嬢たる者、やはりそこははずせませんわよね！」

女性達の言葉に突っ込みを入れつつ、そこまで聞いてふと気づく。あれ。ちょっと待て。なんだか雲行きが怪しくなってきたような気がするぞ。話題が私の主導権を離れ、王子の美形談義にシフトしている。

「で、でも……ディレス様の方が美形ですよね」

どうにか話題を王子から引き離そうと声をあげる。すると、周囲の女性は一瞬沈黙した。そして、可愛そうな子を見るような生暖かい笑みをこちらに向けた。

「そうですわよね。貴女からしてみれば、ディレス様が一番ですわよね」

「恋人に勝るひとなどいませんものね」

「ディレス様も美形ですものね」

え。あれ？　何この恋は盲目みたいな流れ。私はディレスに恋してなどないし、普通に色眼鏡なしに美形だと判断してるだけで。なんなの、私がおかしいの？　いやそんなことない。ディレスは美形だ。王子への嫌悪を差し引いて考えても、王子よりディレスの方が美形だ。間違いない。

もしかしてあれか、異世界とこちらの世界とは価値観が違うのか。美形の感覚が。うん、そうだ。そうに違いない。異世界なんだから仕方がない。私の美的感覚がおかしいなんてこと、絶対ない。

ふと学生時代の友人の苦笑いが頭に浮かんだ。だが、浮かんだイメージは強制的にかき消した。いや、あれは違うのだ。あれはあの友人の好みが私とかけ離れていただけだ。決して私の価値観がどう

とか言う問題ではない。
「いや、殿下も美丈夫ですけれど、ディレス様のほうが……っ！」
もはや意地になって主張する。だが、私の声は突然湧き上がったどよめきに遮られた。
「ほう。ディレスもなかなかに隅に置けないな。こんなに愛されて」
聞き覚えのある声がかけられた。その声の主に思い当たり、ぴしりと体を固まらせる。つい最近聞いた覚えのある声。できれば永遠に聞かずに過ごしたかった声。
まっすぐとこちらに近づいてくる背後の気配に、私は思わず頭を抱えた。

三十一、情報収集

「あら。フォード公爵ではありませんの。珍しいですわね、こんなところに出席されるのは」

耳をふさいでこの場から走り去ってしまおうか。そう考えていたが、気づいた女性に見事に打ち砕かれた。私を取り囲むように輪になっていた人の群れは、フォード公爵を受け入れるように場を譲った。

「ああ。ディレスが出席すると聞いてな。アスハも同席するんだろうと思って見に来たんだ」

「あら。アスハさんとお知り合いでしたの？」

「ああ、つい先日な。ところで、体の調子はどうだ、アスハ」

背後から掛けられた言葉に、びくりと肩を震わせる。この期に及んで逃れられるなどと思ってはいない。いないが、こんなに直球に水を向けられるとは思わなかった。

「はい、おかげさまで何とか」

錆付いた蝶番のように、鈍い動きで公爵を振り返る。

「そうか。ジェイルに会って体調を崩したと聞いていたから、心配していたんだが。元気そうで何より」

何よりじゃねぇよ。絶対心配してないだろう、フォード公爵。

言葉だけ聞けば気遣っているようにも聞こえなくもないが、よく見れば分かる。目と口が楽しそうにひくついているのだ。おまけに、わざとらしく目配せまでしてくる始末だ。私を心配してるわけがない。

「え？　ジェイルって、ジェイル・カーン子爵のことですか？」

鷹揚に頷くフォード公爵に毒づいていると、背後で男性が呟くように訊いた。見ると、目を丸くしてこちらをじっと見つめている。

「そうだ。ディレスの使いで俺の元に来たお嬢ちゃんに、俺が頼んだんだがな」

私が口を開く前に、フォード公爵が答えた。その言葉を聞くと、周りにいた人間は一瞬息を呑んだように静まり返った。

「まさか……ジェイル子爵にお会いしたとは」

「さすが、ディレス様が見込んだ女性というわけですね」

周囲の貴族が口々に適当なことを言い始める。さすが、ジェイル子爵。変なところでまた私の印象に補正がかかった。

「まあ、お嬢ちゃんなら大丈夫だとは思っていたけどな。今日も来てみれば面白いことになってるし、本当にお嬢ちゃんは興味をそそられるな」

こちらに向けられたフォード公爵の視線に、ぞわりと肌を粟立たせる。興味をそそられるってどういう意味だ。ロリコンか、やっぱりロリコンなのか。無意識に一歩後ずさると、フォード公爵の斜め後ろにいた女性が助け舟を出してくれた。

「あら、駄目よ。彼女はディレス様のものなんですから」

「ああ、そうだったな。聞いて驚いたよ。先日聞いたときはそんな素振りもなかったのに、まったくお嬢ちゃんといいディレスといい、楽しませてくれるね」

好きでやっているんじゃない。そう言いたくなるのをぐっとこらえていると、先ほどの女性が軽く目を見張って尋ねた。

「あら。フォード公爵はご存じなかったんですの？」

「しかも、つい先日ってことは――」

「それから何か仲が発展したってこと？」

「やだ、何か燃え上がるようなことけしかけたのではありませんの？　フォード公爵」

疑問の声に続いて、周囲の女性たちが次々に声を上げた。彼女たちの中の何かに火をつけてしまったようだった。女性たちは目を輝かせて口々にフォード公爵を問い詰め始めた。その熱心さにひるんだ様子もなく、フォード公爵は顎をさすりながら考え込むように唸った。

「さて。俺は何もしていないが。そういえば、子爵邸から帰って風

邪で寝込んだってな？」
　何故そこまで知っている。情報の筒抜け具合に思わず肩を抱く。
だが、恐怖を感じる前に女性たちの黄色い声がやかましく響いた。
「まああ！」
「きゃあ、それですわ！」
「愛しい人が弱弱しく寝込んでいる姿を見て、ディレス様もご自分の気持ちにやっと――」
　こっちの世界も恋物語は多分に妄想が含まれるものなのか。ご令嬢たちは色めき立った。頬を染め、楽しそうに意見交換をし始める。彼女たちのテンションについていけず、会話の聞き取りを放棄した。興奮した女性たちの声は、キンキンと耳に響く。まあ、仕方ない。きっと十代の女の子だしな、ここにいるほとんどの女性は。恋に恋するお年頃ってやつは、どこの世界に行っても共通なのだろう。
「ところで、フォード公爵。ルロールさんのこと、何かご存知ありませんか」
　盛り上がる周りを尻目に、フォード公爵に訊いてみる。御者の話によれば、フォード公爵は外交を担当しているとのことだ。遠方任務についているルロールのことについて、何か知っているかもしれない。
「ルロール坊やか？　今は確か任務中だろう？　ディレスから聞いてないのか？」
「ええ、それは聞いています。けれど、確かルロールさんは数日程度の短期任務と聞いていたんですが」
「そういえば、そうだな。任務に発ってから日も経つか。なんだ、連絡がつかなくなったりしたのか？」
「ああ、アスハさんは魔法使いになるのが夢なんだそうですよ。そのために王宮に上がったんだそうです」
　話を聞いていた男性が助け舟を出してくれた。だが、フォード公爵はその言葉に露骨に眉をひそめた。
「魔法使い？」

「ええ、そうなんです！　後学のために是非ともルロールさんとお話をしたくて。あの、皆さん何かご存知ありませんか」
　一人一人に問いかけるように、周囲をぐるりと見渡す。なるべく多くの人と視線を合わせると、周囲の人たちは困ったように顔を見合わせた。
「あの……、御不在、だったんですか？」
　目で会話をしていた一人が、こちらに視線を合わせて訊いた。
「はい、誕生祭の翌日から任務でお見かけしないのです」
　そう答えると、周囲はざわめき立った。
「ああ、何か遠くで調べものがあると伺ったような……」
「いや、新しい魔法書が入ったから受け取りに出かけるって話じゃなかったか？」
「いやいや、高名な教授の公演があるからって出かけたんじゃなかったか？」
「俺が聞いたのは大規模な実験のために周りに何もない場所へ行くとか……」
「いやいや、隣国の珍しい菓子を食べに行くとか……」
　周囲の人たちが、口々に適当なことを言い始める。話に一貫性がないし、具体性の欠片もない。おまけに、最後のは任務とは無関係だ。
「今、どこにいるのかご存知ありませんか」
　知りたいのは、ルロールが今どこにいるか、いつ帰ってくるのか、だ。何をしているのかは実はあまり重要ではない。いつ帰ってくるのかがわかれば黙って待っているし、それがあまりに長引くようなら、こちらから赴いても良い。
　けれど、周囲は互いに顔を見合わせるだけで、知りたい情報は得られなかった。
「公爵はご存知ありませんか」
　仕方なく、フォード公爵に水を向ける。フォード公爵は黙って楽しそうに周囲の会話を眺めていた。だが、私の言葉を聞くと真顔に

戻ってこちらを見つめた。
「それを、何故俺に聞く？　答えられないわけではないが、ディレスも知っていることだ。聞くなら主人であるディレスに訊くのが筋だろう？」
やはり外交を担当するだけあって、情報の扱いには慎重なのか。フォード公爵は遠まわしに答えられないと断ってきた。しかも、こちらを試すような発言まで織り交ぜて。主人であるディレスが知っていることならば、ディレスに訊くのが一番良い。主人を通さないのは何故か。それにどう答えるべきか迷っていると、フォード公爵は何かを思いついたようにニヤリと笑った。
「それとも、俺の元にくるか？　その気があるなら、今教えてやってもかまわないが」
「え……と」
まだ執着していたのか。てっきり諦めたものと思っていたのだが。考えてもみなかった言葉に思考を乱されて、口がうまく回らない。何から答えるべきかと考えていたところで、フォード公爵の視線が不自然に動いたことに気づいた。
「ああ、お嬢ちゃんなら俺以外から聞いても良いんじゃないか。あいつなら知っているだろうし。交換条件でも出してみるか？」
「交換条件？」
質問の意味を問いただそうとしたところで、フォード公爵の視線の先に気づいて固まった。満面の笑みを浮かべてこちらに走り寄ってくる男性の姿を見つけたからだ。
「ああ、君！　やっぱりそうだ。珍しい検体候補！」
「……」
「悪いな。もっと早く教えるつもりではあったんだが」
じと目でフォード公爵を睨むが、効果はなかった。フォード公爵は楽しそうに豪快に笑って私と子爵を眺めていた。
「遅いですよ」
言うのが遅い。わざとなんだろうが、既に子爵は人だかりの中心

までたどり着いてしまった。私を中心として輪のように囲んでいた人の群れは、子爵を避けるように形を崩していた。ここへたどり着くのに障害はない。けれど、ここから逃げ出すのには周囲の人間が邪魔になる。そんな状況では、私に逃げ場などない。人ごみにまぎれるのは簡単だが、フォード公爵が目で追うだろう。誰かの視界に留まったままでは、認識を解除させることはできない。人が多いこの場では、強制的に見えない状態へもっていくことは不可能だった。子爵は、すぐに私の目の前までたどり着いた。引きつった顔でジェイル子爵を見上げる。

　ジェイルは弾んだ息のまま、満面の笑みを浮かべて私を見た。ぞっとする。怖さのあまりフォード公爵へと視線を向けるが、腕をがっしりとつかまれた。

「やあ、こないだは酷いじゃないか。この僕に対して魔石を使うのみならず、黙って屋敷を去るなんて。君には試したい薬がいっぱいあったのに」

「魔石なんか使ったのかい、お嬢ちゃん。さすが、俺の見込んだ女だ。やるね」

　フォード公爵はさも愉快そうに笑った。本気で楽しそうな爽やかな笑い方が余計に癇に障る。人の不幸は密の味、と言うけれど。本人の前ではもう少し自重しろ。

「止むを得なくですよ。笑ってないで止めてください」

「無理だね。そこまで暴走したジェイルは俺には止められないよ」

「さあ、ディレスに許可を貰いに行こうか。検体として使用するには、やっぱり持ち主の許可が下りないとね」

　フォード公爵の言葉に許可を得たとでも思ったか。子爵はぐいと腕を引いた。

「ちょ、フォード公爵。本当に、冗談じゃなく止めてくださいってば」

「いいじゃないか。ディレスの許可が下りるわけもなし。恋人に守ってもらえ」

恋人のくだりでフォード公爵は含み笑いをした。
くそ、恋人云々が嘘だと知ってて言っているな。高みの見物気取りか、腹立たしい。
引きずられないように足に力を込めていると、目の前の女性が興奮した様子で声をあげた。
「まあ、素敵ですわ！　アスハさん。仲直りする絶好のチャンスですわよ！」
応援された。今までの会話を聞いてなかったのか、子爵の危険さを知らないのか。能天気な発言に顔が引きつる。しかも、こっちは本気で言っているのだから性質が悪い。冗談じゃない。まだ何もルロールについて聞き出せてないってのに。ここで退場させられてたまるか。
「や、嫌です、まだ皆さんとお話したいことが……っ！」
子供らしく情に訴えてみる。手っ取り早く先ほどの女性のドレスの裾を軽く掴んで、泣きそうな表情で見上げる。すると、女性は目を見張ってぽかんと口を開けた。だが、すぐに呆けた顔を引き戻し、笑みを浮かべた。
「まあ」
「あら。わたくし、ちょっとディレス様のお気持ちが分かったような気がしますわ」
「ええ、わたくしもですわ」
目に入れても痛くないほど可愛がる甥っ子姪っ子を見るような目で、微笑まれる。注意は引けた。あともう少し、と更に言葉を続けようとしたところで、目の前の女性が腰を屈めて私と視線を合わせた。
「怖がらなくても大丈夫よ。ディレス様だってもう怒っていませんわ」
違う！
「で、でも」
戸惑うように視線をさ迷わせると、女性は笑みを深くした。ぽん

と頭に手が乗せられ、軽く撫ぜられる。
「大丈夫よ。こんなに可愛らしいのですから、ディレス様だって他の男性に差し出そうなんて考えないわ。そもそもが、だから、喧嘩したのでしょう？」
それはただの嘘だ。というか、そんなことはどうでもいいのだ。私だって、実際、ディレスが私を子爵に引き渡すとは思っていない。仮にそんなことになったとしても、逃げ出せるだけの算段はある。
拒んでいるのはそうじゃなくて、それが理由ではなくて。
「でも、ルロールさんのことがまだ……」
「それは駄目よ。彼のことはまたの機会にしなくては。今回は、素直に貴女のディレス様への気持ちを伝えなさい」
違う、そういう言葉が欲しいわけじゃない。いやいやと頭を振ると、女性はぽんぽんと二度頭を叩いた。
「難しいことじゃないわ。さっきみたいに言えばいいのよ」
「え？」
意味が理解できず、一瞬呆ける。込めていた力が緩んで、足がずるりと滑った。空気の読めない子爵が力任せに引っ張ったからだ。
「殿下よりもディレス様のほうが大好きです、ってね」
あの台詞か！　しかも、微妙に脚色されている。私はディレス様のほうが美形ですよね、と言っただけだ。大好きどころか好きとすら言ってない。ただ単に容姿の美醜を述べただけなのに、それがどうして個人的な好悪に掏り替わる。
呆れる間にも子爵は私の腕を引く。一度引きずられた足は、うまく力を込められずに床を滑る。ずるずると引きずられるが、誰もそれを咎めはしない。それどころか、歓迎ムードですらある。こいつら、子爵の評判を知らぬわけではないだろうに。
いってらっしゃいといった目で周囲に温かく見送られながら、私はずるずると引きずられた。

光量が最低限に抑えられた廊下を歩く。あれから、ディレスの許可を得るため、広間を子爵に引きずり回された。だが、ディレスは広間には居なかった。どうしてもディレスから許可を得ようと躍起になっていた子爵は、何を思ったかそのまま私を暗がりに連れ込んだ。

「いないねえ。困ったなあ。一体どこに行ったんだい、君の持ち主は」

居るわけがないだろう。ここにいると思うあんたの頭の方を疑うよ。

赤茶のビロードのような絨毯に、先の見えぬほど続いた道。左右の部屋からは時折押し殺した男女の息遣い。生臭い臭い。男女の汗の臭い。辺りには何とも言えぬアダルトな雰囲気が漂っている。

妖しい。妖しすぎて、絨毯に落ちた影が別のものにすら見えてくるほどだ。こんな淫らな場所にあのディレスが用があるわけがない。居るわけがない。探すだけ無駄だ。上司としては色々思うところがあるが、女性関係に関してはディレスは綺麗だった。共に居た期間は短いが、女にだらしがないかくらいは分かる。ディレスは執務室にも私室にも女性を連れ込んだ様子はないし、夜中に逢引に出かける様子もなかった。決まった恋人が居るかどうかまでは分からないけれど。加えて、あの性格。こんなどこで見られているか分からぬ場所で、自分の弱みを握らせるような振る舞いはしないだろう。

「ここにはいないと思うのですが」

「えー？　なんで？　広間に居なかったら、あとはここくらいしかないと思うんだけど」

子爵は手を引きながら呑気に答えた。ちなみに、今は腕ではなく手を繋がれている。抵抗をしなくなったのを見て、子爵は手を握った。小さな子がするように、遠足に行くような足取りで大仰に手を振って「さあ行くよ！」とのたまった時には、あまりの興奮具合に戸惑った。

ディレスが見つからなくて落ち着いたのだろう。今はさすがに普通に手を引いているが。

「ディレス様の性格から考えて、こんな暗い場所には用がないと思うのですが」

子爵だって知っているはずだ。ディレスと交流があるのなら、彼がこういう場に興味がないことくらい想像がつくだろう。こんな場所を探したところで意味がないことも。

だが、子爵は私の想像とは真逆の反応を返した。

「なに言ってるの、君。ディレスだからこそこういう場所に用があるんでしょ？」

「は？」

思わず聞き返す。ディレスの性格を知っていて、この場を知っていて、それでもなお、ディレスがここに居ると言うのか。冗談で言っているのかと思い、子爵を見上げる。壁側の蝋燭の明かりが逆光となって子爵を照らしている。薄暗い仮面は子爵の表情を隠したが、笑っていないことだけは分かった。おそらく、本気で言っているのだろう。

「むしろ、ディレスが優雅にダンスでもしてるほうが意味わかんないよ。君、ディレスの何を見ているの？」

子爵は不思議そうに問い返した。それは確かにそうなのだが。大広間に居ないからと言ってここを捜すのも極端過ぎる。この辺りは確かに広いが、まずは他の場所から探すべきだと思うのだ。たとえば、夜会の主催者の部屋とか、応接室とか。挨拶――という名の密会で人目を忍んで主催者と面会している、とかのほうがあり得ると思うのだ。あのディレスなら。

「ディレス様がこんな場所に？　わざわざこんなところまで女性を連れ込まなくても、ディレス様ならいくらでも――」

そう言おうとして、口火を切る。だが、子爵は何かに思い至ったように天井を見上げて頷いた。

「ああ、そういう意味か。恋人云々って本当だったの？　なんだ、

妬いてたんだ」

「違います」

だが、子爵は華麗に勘違いしていた。短く否定するが、子爵の瞳は私を映していない。ぼんやりと宙に視線をさ迷わせながら、記憶を探るように黙り込む。しばらくして、ふいにぽつりと何かを言いかける。

「あれ？　でも、君って確か……」

しかし、その言葉はすべて発せられることはなかった。

「何をやっている、アスハ！」

陰気臭い場に知った声が響いたからだ。薄暗い道でも光り輝く髪がぼんやりと浮かぶ。蛍のようだ。闇に光るところも、その目的も。蛍が発光するのは諸説あるらしいが、夜に光るのは交尾のためとも言われていたはずだ。

何のためにここにいるかは知らない。もしかしたら、私以外の素敵なロリータ娘と懇ろになっていたのかもしれない。けれど、私に飽きたとは言い切れない。他に女がいたって、男は「できる」のだ。今ここで、絶好の機会を王子が見逃すとは思えない。ディレスは居ない。子爵は頼れない。どうにかして、王子から逃れなければならないのだ。

こちらに走り寄る金髪の姿を見て、胃に重い物が落ちるのを感じた。

三十二、争奪

駆け寄るようにして目の前に現れたのは、王子だ。薄闇でもなお輝く金髪を振り乱して現れた王子は、子爵と私に射殺すような視線を寄越した。

「こんな所で何をしている、アスハ。ジェイル、貴様もだ。俺の女をこんな所へ連れ込んで、まさかタダで済むと思ってはいまいな？」

誰がお前の女だ。どさくさに紛れて嘘をつくな。

相変わらず腹立たしい奴だ。その顔を視界に入れるだけで頭が沸騰しそうになる。あまりの不愉快さに奥歯をかみ締めていると、頭上から子爵ののんびりした声が降った。

「ああ、殿下。そう言えばそんな話もあったね。いいの？　もしかして、二股になるんじゃないの、これって」

子爵は私をちらりと見た。

二股も何も、私は王子はおろかディレスとも関係はない。公爵のように冗談で口にしているのかとも思ったが、その瞳は心底不思議そうに輝いていた。

まあ、同時にどちらでもかまわない、という色も窺えたが。

子爵の顔色を窺っていると、王子がこちらを睨んでいるのに気づいた。子爵と私を苛ただしげに見ている。その視線を鬱陶しいと思っていると、王子は噴火したように怒鳴り始めた。

「何を言っている！　俺がアスハ以外の女に興味がないのはお前も知っているだろう」

私以外の女、じゃなくて幼女以外の、だろう。そんなはた迷惑な話を当然のことのように語るな。というか、ロリコンなのをそんなに堂々と大声で叫ぶな。

王子の怒鳴り声をできるだけ意識に上らぬよう、姿を視界に入れぬよう下を向く。片手を耳に当てる。いっそのこと、貧乏揺すりでもしたい気分だ。目を瞑りながら不快な声に耐えていると、子爵の

間の抜けた声が飛び込んできた。
「あ、殿下知らないんだ」
「知らないって何をだ！　既にアスハに手を出したとでも言う気か？」
話が全然進まない。子爵は王子の話を聞いていないし、王子も子爵の話を聞いていない。もともと人の話を聞くような性格ではないが、今日は更に輪をかけて酷い。気に入りのおもちゃを取られた怒りで頭に血が上っているのだろう。
それでも、二人が互いに気を取られているのは好都合だ。この隙に逃げられないかと繋がれた手を解きにかかる。そっと、慎重に。だが、子爵はすぐに気づいた。視線は王子に向けたまま、子爵は拘束を強めた。捕らえた獲物に歯を食い込ませるように、ぐっと掌を握り潰される。痛い。
駄目だ、逃げることも出来ない。掌の痛みに、私は早々に逃げるのを諦めた。手の動きを止めれば、子爵は拘束を弱めてくれた。だが、これで子爵の意識が完全に逸れているわけではないことは分かった。隙を突くのは無理だろう。となれば、強引に逃げ出すしかない。だが、男二人を気絶させるのは難しい。子爵も王子も、背が高いのだ。いわゆる急所と呼ばれるこめかみ、眉間、目玉などは殴打することすら不可能だ。道具があれば子爵は可能かもしれないが、あいにくそんな便利な道具など持ち合わせていない。当然だが、真正面から取っ組み合って勝てるわけもない。見た目は細いが、子爵だって男なのだ。王子は言うまでもない。一応、魔石は持ってきているが、魔石の有効範囲は狭い。二人同時に気絶はさせられない。視界を奪うのも同様。一人だけ認識を解除しても意味がない。一瞬視界を奪っても、もう片方が私を認識していたら、片方が解除された認識を取り戻すのだ。意味がない。
もちろん、全く手がないわけではない。周囲が暗いから、子爵だけどうにかして走って逃げるという方法もなくはない。適当に角を曲がるとか、そこらの空き部屋に飛び込んでも良い。そうすれば、

一瞬は視界を断てるだろう。だが、逃げ込んだ先で、男女が取り込み中だったりしたら笑えない。認識がどこまで続いた状態と判断されるかは賭けだ。タイミングが悪ければ、部屋の中にいる人間に認識されて、解除されかかっていたのが無効になる恐れがある。

王子は単純だが、同じ手に何度も引っかかるほどの馬鹿ではないはずだ。チャンスは一度だけ。それも、不意を突いて行わなければならない。成功率も不確かな方法は、最後の手段としてとっておきたいのだ。

仕方無い。溜め息をつきつつ、私は王子を見上げた。

「あの、殿下は何故このような場所に？」

「そう言えば、珍しいよね。いつも令嬢に囲まれて身動きとれないからって公式以外絶対出席しないのに。何かございましたか、殿下？」

最後の台詞は王子に向けて子爵は言った。まるで今その存在に気づいたというような素振りだった。その態度が気に障ったか、王子は再び怒鳴り声をあげた。

「何かも何もない！　ディレスがアスハと共に夜会に出席すると聞いたからだ。あいつもあいつだ。いくらアスハの歳が若いとは言え、こんなところにいる男なんてろくなもんじゃない。物珍しさに手をつける奴がいたらどうするんだ」

お前が言うな。その物珍しい幼女に執着しまくって寝込みまで襲う恥知らずが。

「なるほど。ところで、ディレスをご存知ないですか」

子爵は王子の気持ち悪い発言を華麗に無視した。

「ディレスか？　知らん。そもそも、何故貴様がアスハと共にいる。ディレスはどうしたんだ」

「さあ。私もディレスを捜しておりまして。彼女が一人でいたので一緒に捜していたのですが」

「なんだ、そういうことだったのか。それならそうと早く言え。アスハが世話になったな。礼を言おう」

子爵がまともに会話するようになったからか、王子の声のトーンは落ち着いた。軽く息をついて、ほっとしたようにこちらを見る。

うるさくなくなったのは良いが、単純すぎる。素直に信じるな。

確かに嘘は言ってないし、間違ってるわけではない。だが、子爵は決して私の身の安全を守ってくれていたわけではない。むしろ、私の身を危険にさらそうとしていたのだ。しかも、子爵の噂や性格を知っていれば容易に想像できる事柄のはずだ。なぜ、少しも疑わない。顔見知りのようなのだから、子爵が私にどういう理由で目をつけるかくらい、想像がつくはずだ。

一国の王子が明らかに怪しい発言を鵜呑みにしてどうする。言葉の裏くらい見抜けないのは問題だろう。そんなんじゃ、悪意を持った臣下に良い様に操られるだろうに。

「分かった、アスハの身は俺が預かろう。責任持ってディレスの元へ送り届けてやる」

王子の単純さに呆れていると、王子はこちらを見てそう言った。ぞわりと足元から嫌悪が這い上がる。王子の視線がこちらを舐めあげるように見たからだ。ヒールを履いた足から腰、ウエスト、胸。ゆっくりと、体の線をなぞるように移動していく、視線。まるで直接肌を撫で上げられたようだった。気持ち悪い。滑った視線の後からぶつぶつと鳥肌が立つのが分かった。

もう、後先考えずに力いっぱい魔石投げつけて最大出力で感電死させてやろうかとすら考えた。もちろん、実際にはしない。できないし。ここで癇癪を起こして暴れるほどの子供でもない。

深呼吸するように深く息を吐き出して、何とか耐えた。溜まった黒い澱を数度吐き出して、考える。キモくて吐き気がして塵も残さず爆発すればいいのにと思って顔が変形するくらい踏みつけてやりたいと思うけれども。引き渡されたら引き渡されたで、王子一人相手のほうが逃げるのにまだ有利だろうか。もちろん、一番良いのは子爵にうまく断ってもらうほうだけれども。元の目的どおりディレス探索に戻って、ディレスから提案を断ってもらうのが一番楽だろ

う。だが、子爵の立場から王子の提案を断るのは難しいだろう。王子に引き渡される可能性も考慮しなければならない。這い上がる気持ち悪さを必死で抑え込みながら、この場をうまく乗り切る方法をシミュレートする。王子につくか、子爵につくか。具体的にどうするか――

「いえ、殿下の手を煩わせるわけには。ディレスに用もありますし、僕にお任せいただけませんか」

考える間にも、話は進む。子爵は王子の提案をやんわりと拒んだ。

「構わん。遠慮することはない。ディレスには俺から言伝てやる。気にせずアスハを寄越せ」

だが、もちろん、王子は鬱陶しそうに子爵の提案を却下した。面倒そうに子爵を見やる。だが、王子の言葉に子爵は唇の端を吊り上げた。

「殿下からに命令していただける、と？」

「ああ。何でも言え。構わんから、早くアスハを――」

言いながら、王子は堪えきれないとでもいうように私を見た。何を考えているのか手にとるように分かる。おそらく、既に王子の中で私は剥かれているのだろう。こんな貧相な体によくも欲情できるものだ。喉元まで吐き気が這い上がるが、必死で飲み込んだ。

「では証文を。殿下は僕に彼女を検体として提供するようディレスに命じる、と」

そんな私を知ってか知らずか、子爵はマイペースに話を続ける。服の胸元から紙を取り出し、呪文を唱えるかのように呟く。

「ああ、検体でもなんでも――何だと？」

呟かれた内容に、王子が目を剥く。だが、遅い。紙に添えられた人差し指から赤い光の筋が糸のように伸びて、模様を描く。奇妙な模様は、子爵の言葉と共に溶けるように紙へと吸い込まれて消えた。おそらく、こちらの世界の証文なのだろう。消えた光に満足げに頷いて、子爵は紙を王子に差し出した。

「はい、後は殿下の宣誓ですね。お手数ですが、お願いします」

「ちょっと待て。頼みというのはお前の実験にアスハを使うということか」
「そうですよ。それ以外に何があると？」
目に見えて慌てる王子に、子爵は何を当たり前のことをとでも言いたげに答えた。
「何がも何もない！　俺の話を聞いていなかったのか。万一にでも副作用が出たらどうする気だ。壊れた女を抱く趣味は俺にはない」
王子は差し出された紙を乱暴に払った。紙がぱらりと床に落ちる。
「失敗前提ですか、厳しいですね。少しは僕のことも信用して欲しいものですが――では最後に感度を上げてからお返しするというのはいかがですか。楽しめますよ」
事も無げにそう言う子爵に眩暈がした。だが、子爵は動じた様子もなく、地に落ちた紙を拾い上げた。
「意識が飛んでいれば同じだ。認められん、他の条件に変えろ」
「分かりました。では、ディレスに直接頼むことにします」
「ふざけるな。ディレスが許す訳がないだろう。たとえ許したとしても、俺が許さん。諦めてさっさと寄越せ」
「ご心配なく。僕には僕の取引材料があるんです」
「埒が明かんな。もう良い。来い、アスハ」
ぐいと腕を引かれた。突然のことに心の準備が不十分だった。触れられた箇所からぞっと鳥肌が広がる。
だが、幸か不幸か王子の元へと引き寄せられることはなかった。子爵がもう一方の手を握ったまま離さなかったからだ。
「どういうつもりだ。俺に逆らうつもりか？」
「いいえ、まさか。ただ、ディレスを捜すのをご一緒させていただこうかと思いまして」
王子に睨みつけられながらも、子爵は手を離そうとしない。
「貴様……」
王子は子爵を睨みつける。二人の間に緊張感が走った。

「はい、そこまで！」

パン、と手を叩く音が響いた。音のした方へと視線をやれば、暗闇から人の姿が浮かび上がった。

「何だ、スウォン。邪魔するな」

「ああ、スウォンか。久しぶり。こんな所で何してるか知らないけど、邪魔しないでくれるかな」

闇から浮かび上がった人影は、スウォンだった。ああ、この場に一番似合いすぎる。何をしていたか聞かずとも想像できる。助けに入ってくれたのには感謝するが、直前までのスウォンの行動を考えると微妙な気持ちになった。

「そうは言うけどね。殿下達の話し声でムードぶち壊しなんだよ。せっかく楽しく過ごしてたのにさあ、続きをする気もなくすよ」

「お前の事情など知ったことか。黙ってろ」

「同感だね。耳栓でもしてれば？」

「うわあ、そうくるか。まあ、良いけどね。アスハ、こっちおいで。俺と一緒にディレスの所に行こっか」

スウォンはちょいちょいと手招きした。

おお、スウォン良い奴。ちょっといろんな液体とかどぎつい香水の臭いとかが漂ってる気もするけど、もうそんなのどうでもいい。喜び勇んでその胸に飛びつこうと駆け出して、腕を拘束されていたことを思い出した。

「ちょっと。後から来て何勝手なことしようとしてるの」

「そうだぞ、ジェイルの言うとおりだ」

二人は不満げに口を尖らせた。

「まあ、そう言うなら一緒に付いて来れば良いんじゃないの？　俺は構わないけど？」

スウォンがそう言うと、二人は黙って悔しそうにスウォンを見た。

二人とも、ディレスが怖いのだろう。ついて行ったところで、二人の目的が叶えられる可能性は低い。子爵まで黙るのは予想外だっ

たが、私にとっては良い流れだった。
「ちぇ、ついてないなぁ。君も一緒じゃ僕に分がないじゃないか。どうせ君も僕に反対なんだろう？」
「決まってんだろ。ジェイルのやってること自体に反対はしないけど、子供は副作用が出やすい。ジェイルは暴走すると周りが見えなくなるから、加減も間違えそうだしな」
「まあ、そこは否定しないけどね。あーあ、それにしても本当、ついてない。ディレス一人でも骨が折れるのに、三人相手に説得する気にはなれないや。仕方無い、今日は大人しく引き下がるよ。命拾いしたね、君」
子爵は手を解くと、あっさりと身を翻した。最後に「また今度ね」と囁かれたのは寒気が走ったが、今日のところは諦めたと思って良いだろう。
要は、王子とスウォンとディレス相手に私を検体として差し出すよう説得するのは勝算がないと判じたわけだ。次がない、とは言い切れないけれど。
「さて。殿下はどうなさいますか」
子爵が姿を消したところで、スウォンは王子を振り返った。
「上手く子爵を追い返したな。よくやった、褒美をやるからまずはアスハを寄越せ」
相変わらず懲りない。堂々とどうしようもない要求を突きつける王子に、スウォンは呆れたようにため息をついた。
「では、一緒にディレスの所へ行きましょうか。どうしてここにいるのかたっぷりお話しましょうね。ええ、ディレスと一緒に」
にこりと笑ってスウォンがそう言うと、王子の顔は引きつった。

三十三、他視点

暗い廊下をスウォンと二人歩く。王子はいない。スウォンが共にディレスと話をしようと持ちかけると、王子は目に見えて慌てた。どうやら、護衛もつけずにこっそり抜け出してきたらしかった。王子は、自分の立場やしていることの意味は理解していたようだ。ディレスに会えば、自分が何を言われるか、ということは。

確かに、仕事を放棄したと知ったらディレスは容赦なく説教するだろう。しかも、護衛もつけずに。釈明の余地はない。多分、私を襲うことに関しては何も言わないだろうけれども。

ディレスの説教は精神的に辛い。いや、私はまだ説教されたことはない。だが、説教じゃない詰問は受けたことがある。詰問ですら辛いのだ。説教となれば尚更だろう。ディレスの話運びは粘着で、理論詰めで、厄介だ。一言喋るごとに、足を絡まれ、周囲を閉ざされる。知らぬうちに追い込まれ、徐々に逃げ道を潰される。気づけば背後はない。そんな感じなのだ。

そんな状況に身を置くくらいなら、一度撤退したほうが賢い。どうしたって、勝ち目はないのだから。王子はディレスの顔を思い浮かべるように逡巡して、迷いを振り切るようにその場を去った。やはり周囲の言うとおり、王子はディレスには弱い――いや、誰も彼もがディレスには敵わないのか。実際、たとえ私が王子の立場であったとしても、ディレスに真正面から歯向かおうとは思わない。いくら立場があろうとも、言葉を交わす以上は彼を論破する自信がないからだ。

ちなみに、護衛はスウォンが近くにいた知り合いの騎士に頼んでいた。一応、スウォンも仕事でここに来ていたらしい。いや、直前は完璧プライベートだったとは思うけれど。

「ねえ、アスハ。本当に大丈夫？」

スウォンは私に視線を向けて訊いた。

「はい。今日は本当に助かりました。ありがとうございました」
「ん……、今日のことだけじゃなくて。ディレスはちゃんと、殿下から守ってくれてる？」
心配げに見下ろす視線に、考える。一応、守ってくれてはいる。方法が少々突飛だったり無茶振りだったりはするけれど。王子センサーの魔石をくれたり、寝室はディレスの隣にしてくれたり。風邪で寝込んだときは、一応気遣って私室で仕事をしてくれたりもした。今回、王子に見つかったのは、単に私が油断していたからだ。魔石は持ってきていたが、起動するのを忘れていた。だから、今日の件に関して、ディレスに非はない。
一応、気は使ってくれている。王子の件に関してだけ言えば、一応。
「はい。まあ、それなりに」
「そっか。なら良いんだけど……」
スウォンは何か言いたげに私を見下ろした。口を開き、思い直したように口を閉じる。諦めたかのように顔を背けたと思ったら、やはり諦めきれぬようにまた口を開く。それを何度も繰り返すので、見ていて落ち着かない。
「どうかしましたか？」
やんわりと促してみると、スウォンは覚悟を決めたように真っ直ぐな視線を向けた。ひとつ息を吸って、口を開く。
「ディレスと付き合ってるって、本当？」
思わず足を止める。予想外すぎる言葉に、目を見張ってスウォンを見上げた。冗談かとも思ったが、スウォンは真面目な顔で見下ろしていた。
「デマです」
「そうなの？　仲が良さそうだったからあり得なくもないかなと思ったんだけど」
「仲が良い？　冗談は止めて下さい」
想像してみて、寒気がした。繋がれていないほうの手で肩を抱い

て、これ以上ないほどに嫌悪を表現して見せる。だが、スウォンは不思議そうに首を傾げた。

「え、冗談じゃないよ。そうだなあ、ほら、ディレスが俺や殿下と話しているの見たことあるよね？　その時どう思った？」

「どうって、何も思いませんでしたけど」

「でしょ？　態度が冷たく見えるかもしれないけど、あれがあいつのデフォルトだから。逆に俺達とあまり差を感じないんだとしたら、凄いことなんだよ。ディレスは女の子が苦手だからね」

確かに、子供は好きそうではない雰囲気だけれども。それは単にジェネレーションギャップで話が合わないのを、説明するだけ無駄だと話自体を諦めてしまうからそう見えるだけだろう。実際、私もよくこちらの世界の常識を知らないと言って呆れられ、説明を放棄される。ただ、本当に必要な説明は辛抱強くしてくれるというだけで。別に、それを仲が良いというのとは少し違うと思うのだ。

現に、嫌味やら仕事の無茶振りは結構きつかったりする。

「でも、結構仕事の振り方がきつかったりするんですけど」

「そりゃ、ディレスは仕事の鬼だから。本当に面倒になれば放置するよ。逆に、無茶とも思える仕事を任されるんだとしたら、それだけ期待されてるってことだよ」

そうだろうか。ディレスの底冷えするような瞳を思い浮かべて、ぶるりと体を震わせる。あれは決して私に何かを期待しての言動じゃない。むしろ、ボロを出させるために罠にかけるような――うまく言えないが、もっと陰湿な、何か、だ。

けれど、真っ向から否定したところで、信じてはもらえないだろう。会話の断片しか見ていないスウォンには。

「そうなんですか。でも、恋人云々は嘘です。見合いとかの誘いを断る口実が欲しかったみたいですよ」

そう答えると、スウォンは困ったような顔をした。じっとこちらを見つめる視線が落ち着かない。また、躊躇うように視線をさまよわせ、口を開閉する。しびれを切らして催促すれば、スウォンはお

ずおずと口を開いた。
「アスハはディレスのことが好きなんじゃないの？」
「なんでそう思うんですか」
「いや、さっきみんなの前でディレスへの熱烈な愛を叫んだって聞いたから」
私は顔を引きつらせた。
アレか。ただディレスが美形と言っただけで、話が誇大化しすぎだ。しかも、噂が広まるのが早すぎる。
「それはただ、ディレス様が美形ですよねって言っただけで、別に愛とかそんなんじゃないですよ」
「でも、殿下より美形だって叫んだそうじゃないか」
「事実じゃないですか」
そう言うと、スウォンは黙った。こちらをじっと見下ろして、探るように見つめてくる。だが、何かを疑うような視線も、すぐに別の色に取って代わった。同時に、スウォンの瞳が細められ、唇が弧を描くように吊り上がる。そして、時折何かを思い出したように頷く。
気に食わない。その何もかも分かりました、とでも言いたげな悟りを開いたような表情が。しかも、その瞳が納得したように揺れるのだから余計に。
「良い。何も言わなくて。分かってるから。思い返してみれば、アスハはたまにディレスをじっと見てたもんな」
何この反応。すっごい腹立たしい。私は眉を寄せてスウォンを見上げた。
「誤解です。私は別に――」
「うん、大丈夫。からかったりとかしないから。ああ、でも、これで納得したよ。あれだけ殿下に迫られて、動揺しないどころか嫌悪すら見せるから、不思議だったんだけど。そういうわけだったんだ。うん、良いねぇ、初々しいなぁ。損得なしに、脇目もふらず一人を追いかける純粋さ。若さって良いよねえ」

駄目だ。何かスウォンの開けてはいけない扉を開いてしまったようだ。

「もう何でも良いです。どうせディレス様に会えば分かることですし」

「うん、最初にディレスがアスハを預かるって言い出した時は不安だったんだけど。上手くいってるようで安心した」

スウォンは心底ほっとしたような柔らかい笑みを向けた。本気で言ってるのだから性質が悪い。そんな顔されたら、何も言えなくなるじゃないか。

「不安、ですか？」

「うん。アスハも不安そうだったし、ディレスの態度がおかしいような気がしたから。本当にアスハを守ってくれるか心配だったんだよね。ディレスはどちらかと言えば殿下寄りの立場だから」

「殿下寄り、ですか」

「正確に言えば違うけどね。ディレスは殿下ではなく陛下の意思で動くから。陛下と殿下の利害が一致するとは限らないしね」

「陛下と殿下の利害が一致しないことなんてあるんですか？」

「どうだろう。今は執政は殿下がほとんど担当してるし、殿下の命は陛下の意思であるのが大半だとは思うけどね。実際、ディレスは殿下の命から陛下の意思を考えて行動してるはずだよ」

と、言うことはディレスは陛下直属の臣下というわけだろうか。今までディレスの立場をあまりよく考えてこなかったが、ただの元家庭教師、というわけではないのだろうか。

「だから、今回はどういう判断を下すか微妙で心配だったんだ。あの歳で世継ぎを設けていないというのは問題だから、とにかく殿下が望む女性ならって判断される可能性もある。けど、だからと言って、平民を召し上げるのも問題ないわけではないからね」

確かに、それはディレスも言っていた。王位継承権を持つのが、一人しかいないこと。その王子がまだ子を設けていないこと。だから、いくら平民と言えども王子を拒むのが難しいことも。けれど、

平民を召し上げるのが問題だ、ということは一言も言ってなかったような気がするが。

「問題？」

「あ、アスハ個人が悪いとかじゃないからね？　ただ、やっぱり一国の王だからさ。できれば政治に有利な姫を迎えたほうが都合は良いんだ。先に側室、というのも外聞的によろしくないしね。難しいところだけれど、陛下なら下手に平民を召し上げるのを良しとしないかなとも考えられなくもないし」

なるほど、それはそうだ。ディレスがそのあたりを一言も言わなかったのは気になるが、そんなものだろう。ディレスが一から十まで説明してくれると考えるのは甘い。少し考えれば分かる当たり前のことだし。

「そうですよね。私も、殿下の隣にはもっと高貴な方が立つべきだと思います」

そう返すと、スウォンは曖昧な笑みを浮かべた。

「それに、アスハはまだ小さいから、すぐには子供を産めないだろうし」

そう言いながら、スウォンはちらりと私の胸に視線を落とした。あからさまな視線に顔を引きつらせる。私の表情に気づいたか、スウォンは、はっとした顔をした。

「あ、いや、大丈夫。アスハの年だったらそんなもん……だ、よね？　いや、すぐ大きくなるから大丈夫！」

何の話だ。自信なさげなフォローが腹立たしい。悪かったな、この世界の十二歳の平均より小さいよ。もうこれ以上大きくならないよ。

黙ったまま見つめていると、スウォンはさらに早口にまくし立てた。

「本当だって！　まだまだ成長期だから！　ほら、牛乳とか飲むと良いって言うよ！」

「……」

何と言うべきか分からずに黙って見上げる。すると、何を勘違いしたのか、スウォンはこちらの言葉を待たずに口を開いた。
「ほら、背とか体つきとかが成熟すれば、殿下の好みから外れてアスハにとっても望ましいでしょ？」
「……そうですね」
「あ、もしかしたらディレスもそのつもりだったのか。だから、長期戦になると思って――」
「もういいです、スウォンさん」
思考が明らかに脱線し始めたスウォンを止める。壊れたからくり人形を見ているようで楽しくないわけでもなかったが、このまま放っておくのは可哀想だった。
それに。
「何をしているのです？」
前方には冷気を発する人影が見えていた。

三十四、弱み

「やっと見つけた。ったく、アスハ放って何してんだよ」
「何って、決まってるでしょう？　仕事ですよ」
ディレスは悪びれもせず平然と言い切った。
こんな薄暗い所で何の仕事だ。眉をひそめると、スウォンが慌てたように口を挟んだ。
「だからって、アスハを置いていくことないだろう？　知らない大人が沢山いるところで独り放り出されれば、どれだけ心細いか想像つくだろ」
「貴方こそ何を寝ぼけたことを言っているのです？　仕事の話に子供を連れていけるわけがないでしょう。彼女がか弱い子供だと言うなら余計に」
「まあ……そうだけどさ」
スウォンは不満げながらも黙った。
「それに、寂しくないよう、きちんと居場所も与えてあげたでしょう？　噂好きの貴族達が構ってくれたはずですよ。そうでしょう？　アスハ」
「ええ、まあ」
「そうだけど、それならどうして連れて来たんだ。そもそも、ここに連れて来なければならない理由なんてないだろう？」
「アスハは私の下に付いたのですよ？　徐々にでも仕事を覚えてもらわねば困ります。それがたとえ一時的な処置だとしても。ずっと仕事もさせずに放置するわけにもいかないでしょう？　それとも、私に孤児院まがいのことをしろとでも？」
「つまり、軽い顔見せのために恋人という理由を与えて放り出したってことか」
「そうです」
ディレスが言い切ると、スウォンは片眉を跳ね上げた。

「お前、アスハの気持ちを考えたことがないのか」
若干低くなった声音に、スウォンを見上げる。ディレスを睨みつけるようなスウォンの顔に、嫌な予感を覚えて握られた手を引く。だが、スウォンは私に気づかない。ディレスはそんな私たちの様子を無視するように更に言葉を続ける。
「気持ち？　何故。アスハにとっても悪い話ではないでしょう？　噂が広まって殿下の耳にでも入れば、取りあえずの矛先は私に向きます。彼女を守ることにも繋がるのですよ」
その言葉に、スウォンの表情は更に険しくなった。
「あの、スウォンさん」
心配になって、スウォンを見上げながら再度手を引っ張る。だが、スウォンはこちらを見ようとはしない。ディレスを睨みつける視線を強くし、ついには声を荒らげた。
「分かってねえよ！　偽りの恋人を演じさせるなんて酷すぎるだろ。特にアスハは年頃の女の子なんだぞ！」
酷じゃない、酷くない。そんなのは大した問題じゃない。首を振りつつ腕を引くが、怒り心頭のスウォンには、全く気づいてもらえなかった。
まずい。なんだか、話の流れがものすごく嫌な方向へ向かっている気がする。何故スウォンはそこまで怒っている？　ふいに直前のスウォンの言動を思い返して、青ざめた。まさか、あの勘違いのまま下手な同情でも感じているのか。そうだとしたら、非常に都合が悪い。
お願いだから、それ以上言うな。恋人を演じるくらい大したことはない。大したことはないから、それ以上余計なことは言わないでくれ。
「スウォンさん、私は大丈夫ですから」
縋り付くようにスウォンの腕を両手で引く。だが、遅かった。
「アスハはなあ、一途にお前を想って――！」
仕方なしに、スウォンの足を踏み潰した。スウォンは息をのんで

こちらを見下ろした。
さすが騎士。かなり力強く踏み潰したのに、スウォンは悲鳴どころか呻き声すらあげなかった。だが、さすがに痛みは感じたらしく、私の訴えには気づいてくれた。皆まで言い切る前に、スウォンは口を止めた。
「すみません。でも、それ以上は止めてください、スウォンさん」
それ以上はさすがに本人を前に言ってほしくはない。この世界では私の美的感覚のほうが狂っている――らしい。認めたくはないが。それを知った今となっては、下手にディレスの容姿を褒めていたことなど知られたくはない。それはさすがに、恥ずかしい。
「ごめん」
私の意図を汲み取ったか、スウォンは素直に謝った。
「随分うまくやったようですね、アスハ。上出来です」
「……光栄です」
ディレスは半目で見下ろした。嫌味だろう。上出来も何もない。苦々しく答えると、案の定ディレスはすぐにスウォンへと視線を向けた。
「スウォンも。アスハのお守り、助かりました。礼を言います。アスハ、来なさい」
「はい。スウォンさん、ここまでありがとうございました」
ぺこりと頭を下げると、スウォンは取り繕うように笑みを浮かべた。
「うん、どういたしまして」
言いながら、ぐしゃぐしゃと頭を撫でてくる。口にできない何かを込めるように――いや、ペットを誉める時のように乱暴に。ひとしきり髪をかき回してから、スウォンはそのまま耳元に顔を寄せた。
「いつでも頼って良いんだからね」
ほんの一瞬。低く囁いて、スウォンはすぐに顔を離した。最後に頭をひと撫でして身が離される。
「じゃあ、またね」

ディレスと私を交互に見つめて、スウォンは身を翻した。
「全く、貴女は。せっかくこちらがお膳立てしたというのに。一体何をやっていたのです？」
「何って……」
ルロールの情報を得ようとして失敗し、子爵に連れ去られ、王子にセクハラされ、スウォンに諭された？
考えてみると、確かにろくなことやってない。
「随分と貴族達に話題を提供したようですね。フォード公が喜んでいましたよ」
「そうですか」
「そうですか、ではなく。何のつもりかと聞いているのですよ。確かに恋人の振りをしろとは言いましたが、ここまでやれとは言ってません。やりすぎです」
「申し訳ありません。まさかあれほどの反響になるとは思いませんでした」
素直に謝ると、ディレスはため息をついた。これ以上の叱責は無意味と考えたのだろう。
「まあ、良いでしょう。次から気をつけなさい」
そう言って、ディレスは手を差し出した。訝しげに見上げる。
「あの、何かお預かりしているものでもありましたっけ？」
「手、です。広間に戻るのですから繋いでいたほうが自然でしょう」
心臓が、跳ねた。
「むしろ、喧嘩中を装ったほうが、今後に都合が良いと思うのですが」
動揺を必死で押し隠しながら身を引く。言い訳はそれなりに筋が通っているはずだ。だが、ディレスは疑うように鋭い視線を向けた。灰色の瞳が私を映す。その瞳は冷たい。なのに、体は芯から熱を帯び、痺れていく。決して信用できるひとじゃない。それなのに、まだ、この容姿に胸が躍るのを抑えきれない自分に腹が立つ。駆け上がる痺れを誤魔化すように、視線を逸らした。

「貴女は本当に無駄な事には頭が回りますね。それも、中途半端にわざとですか」
「どういう意味ですか」
ディレスは再び溜め息をついた。
「殿下が貴女にご執心なのも、少なくはありますが知れ渡っています。今日確認したので間違いありません。取り入ろうと寄って来る貴族もいるでしょう。その時、私と貴女の関係が良好であるとしたほうが都合が良い。貴女よりもまず、私や私たちの関係を壊すことに目が向きますから」
「……」
つまりは、命を狙われたりあからさまにすり寄られる確率が減る、ということか。
――だが、本当にそうだろうか？
納得しかけて、すぐに疑問が頭をよぎった。確かに、貴族にとって私は取るに足らぬ使用人だ。けれど、同時に御しやすい――何をしても許される下級市民でもある。何かを仕掛けるなら、立場のあるディレスを相手にするよりも、私を狙うのではないのか？　それも、見た目は子供だ。口が回ると知れているディレスよりも、私を相手にするほうが成功率は高くなる、と考えるはずだ。普通ならば。
いや、ディレスがそのことに気づかぬはずはない。貴族たちの考えを読み違えるはずはない。ならば、ディレスの言葉は正しいはずで――
「理解したのなら、行きますよ」
巡る思考はディレスの言葉に遮られた。はっと見上げるが、遅い。ディレスは強引に私の手を取った。
びくりと肩を震わせる。ディレスに手を取られたのは初めてだった。やや骨ばった感触が掌に伝わる。男性にしては冷たい手。けれど、絹のように滑らかな肌触り。掌の細胞ひとつひとつを感じ取るように神経が集中する。心臓が早打ち、目の前が真っ白になった。
「ほら、行きますよ」

ぐいと手を引かれて、足がもつれる。タコのように足が絡まって、爪先が絨毯に引っかかる。

気づけば、目の前は床だった。

「った……」

「何をしているのですか」

私を見下ろすディレスの瞳は、相変わらず冷たい。表情を映さない目が、少しだけ火照りを冷ました。

「すみません、ヒールに慣れなくて」

言いながら、慌てて立ち上がる。足に軽い痛みが走るが、気づかない振りをした。

ヒールに慣れていないのは嘘ではない。五センチ以上のヒールの靴を履くことなど滅多にないのだ。しかも、こんなに細い踵の不安定な靴など。

埃を払いながら、立ち上がってドレスの皺や腰枠の型崩れを撫で付ける。あまり効果があるとは言えない行動だが、それでも必死で直そうとしていると、ディレスの呆れたような溜息が聞こえた。

「仕方ない……いえ、こちらのほうが好都合ですか」

急に背中と膝裏に熱が差し込まれ、目線が高くなった。

「え？」

近くなったディレスの声、直に伝わる体温。目を剥いて固まる私に、ディレスは面倒そうに私を見た。

「これできっと、フォード公にもご令嬢たちにもご満足いただけることでしょうね」

やや投げやりに、ディレスは吐き捨てた。

よっぽど、私の広間での行動が気に食わなかったのだろう。けれど、何もここまでしなくても。ディレスらしくもない嫌がらせだ。大人気ない。

「いや、あの……、おろして、ください。何も、ここまでしなくても」

視線をさ迷わせ、意味もなく手を動かして空を切る。頬に集まる

熱に気づかれたくなくて顔を背けるが、ディレスは無言でじっと見つめるだけだった。

わかっている。その瞳の冷たさも、この行動に保身以上の意味がないことも。けれど、それでも――

「なるほど」

ぽつりと、ディレスは呟いた。その言葉の唐突さに意味を問おうとして振り返り、バチリと視線が合わさった。体中に電流が走る。

「我慢なさい。貴女が必要以上に彼らを煽ったせいで、こちらも後には引けなくなってしまったのですよ。下手に和解の口入れをされるより、こちらのほうが手っ取り早いのです」

「でも――！」

言いかけた反論は、蝶番のきしむ音が邪魔をした。知らぬ間に広間の扉の前まで来ていたのだ。闇に慣れた目に光が飛び込んで、目を瞑った。

私たちの姿を認めたか、周囲がざわつき始めた。

「さあ、もう一仕事ですよ」

甘やかな笑みを浮かべながら周囲を見渡して、ディレスは額に口付けを落とす。氷付けされたようにぴしりと体を固まらせた私を見て、ディレスは更に笑みを深くした。

唇が離れる直前に、ディレスは小さく囁いた。

――貴女には簡単でしょう？

その言葉も、今起こっている現実も。どこか他人事のように私を襲った。

三十五、起点　前編

夜会を終えて、翌朝。いつものように朝食を終えてディレスの執務室へ向かう。足が重い。床に足が吸い込まれるような錯覚さえ覚える。要は、ディレスと顔を合わせたくない。

あの後――ディレスと共に広間に戻った後の記憶はあまりない。貴族たちが色めき立って周囲を囲んで何か言っていた気がするが、具体的に何を言っていたかまでは覚えていない。ああ、フォード公爵が遠くから楽しげに見つめていたのは覚えている。実に嬉しげに口の端をつり上げていたのは。だが、それくらいだ。

その後は、確か適当に貴族の質問に頷いて――いや、ディレスに強制的に頷かされて――気づけば私室、気づけば朝、だった。結局ルロールに関しては情報を得られなかったし、最後はディレスと仲睦まじいアピールをしただけで終わったことになる。ディレスもよく乗ったと思うけれど、今思い出しても恥ずかしい。酔った勢いで上司にぶちゅーとしたような気恥ずかしさだ。

うう、顔合わせたくない。ディレスは気にしてないんだろうけれど。というか、むしろわざとっぽかったけど。

扉の前で立ち止まり、息を吐く。

まあ、相手が気にしてないと分かっている分だけ、マシか。これで相手も動揺していたら目も当てられない。

ぐだぐだ悩んでも仕方ない。深呼吸して鼓動を落ち着けると、執務室の扉を叩いた。

「はい。開いてますよ、入りなさい」

いつも通りのディレスの声。乾く口内を湿らせて、震えぬように声を出した。

「アスハです。失礼いたします」

入室すると、執務卓の傍らにディレスがいるのが視界に入った。ディレスは机上の魔石を撫でていたが、私に気づくと顔を上げた。

「出掛けます。ついてきなさい」
言うが早いか、ディレスは扉へと――こちらへと歩き出す。
「え、どこへですか」
無表情で横切るディレスを振り返る。ディレスは既に扉の取っ手に手を掛けていた。
「ホルツ・ホーボルト侯爵邸ですよ」
ほるつ・ほーぼると、こうしゃく――仮名で頭に文字が浮かぶように、音だけが頭を素通りした。またなんか新しい貴族の名が出てきた。碌な目に遭っていないからか、理解を拒否するように名が頭に入らないのだろうか。口中で何度か呟いて、やっとその意味を理解する。ああ、侯爵か。ホルツ・ホーボルト侯爵邸、ね。そこへ行く、と。そこまで理解して顔を上げて、ふと違和感に気づく。目の前が、扉だ。既にディレスの姿はない。置いていかれた――そう理解したところで、扉の閉まる騒音に我に返る。
慌てて扉へと手を伸ばし、扉の先に見えたディレスの背を追う。
「あの、また雑用ですか？　昨晩みたいに」
「違いますよ」
歩調を合わせられるほどに追いついて尋ねるも、ディレスはこちらを振り返りもせずに答えた。
「では、何故私も？」
そう尋ねると、ディレスは突然足を止めた。振り返って私を見る。氷の矢で射抜くような視線を寄越されて、逆に目を見張った。
口答えしたとでも思われたのだろうか。
「理由が必要、ですか」
氷柱で突き刺すような底冷えした声だった。あまりの態度に喉が凍る。代わりにただ頭を上下させると、ディレスは冷気を霧散させて目を伏せた。
「仕事だからです。今日はただ見ているだけで構いません。流石に話までは聞かせられませんが、相手にする人物の雰囲気だけでもつかみなさい。いきなりフォード公のような人間を相手にするのは難

しいでしょう？」
「今回お会いする方も、フォード公爵のような方なんですか」
「違いますが……それは本気で言っているのですか」
「え？」
呆けたように返事をすると、ディレスは溜め息をついた。
「フォード公のような人間が何人もいてたまりますか。先ほどのはただの例です。彼ほどではなくとも、貴族はみな変わり者です。身分からして釣り合わない者が渡り合うには、それなりの度胸と慣れが必要です」
「はあ……なるほど」
確かに、王子といいフォード公爵といい、ジェイル子爵といい、今まで会った貴族は碌なもんじゃなかった。変わり者、という言葉では控えめすぎるほどの人間だった。
ディレスの言葉にこれ以上ないほど納得していると、胡散臭げな目を向けられた。
「随分興味なさげですね。まあ、ジェイルに気に入られながら何の投薬もされずに戻って来られるほどですから、度胸は心配ないのかもしれませんけれど」
「えっと……」
ディレスを見上げ、言葉を詰まらせる。
完全なる嫌味だ。ディレスの表情でなんとなく察せる。けれど、そんなことを言われても困る。あの時はただ必死で逃げてきただけだ。だが、何を言うべきか迷っている間に、ディレスは更に嫌味を重ねた。
「そうですね。もう独りでジェイルの交渉役を任せても良いですか」
「なんで子爵――いえ、まだまだ未熟者の私では、力不足かと存じます。是非ともディレス様のお気遣いから徐々に慣れていきたいと思います」
「別にフォード公でも良いのですよ。貴女は相当気に入られているようですし」

「いえ、是非とも。是非とも、お供させて下さい」
熱を込めて頼めば、ディレスは興味を失ったかのように背を向けた。
「では、黙ってついてきなさい」
そう言って、再び歩き出したディレスを、私は足早に追いかけた。

ディレスの見下ろす瞳が冷たい。いつものこととは言え、体調不良の時は余計に精神的ダメージを受ける。口を抑えながらうずくまる私に、ディレスは呆れたように息をついた。
「それほど長い時間でもないでしょう、情けない」
「す、みま……、せん」
そんなこと言ったって、馬車は想像以上に揺れるのだ。よく、ファンタジー小説とかで馬車やら馬やらに乗って優雅に遠出する貴族が描かれるが、実際はとんでもない。少なくとも、この世界の馬車は優雅なんてもんじゃない。石を敷き詰めた凸凹道を堅い木の車輪で移動するのだ。現代のようにコンクリートで平らに舗装されているわけでもなければ、自動車のタイヤのように衝撃を吸収する要素もない。言うなれば、空気の抜けた自転車で、砂利道を全力疾走しているようなものだ。どれだけ不快かなど想像するまでもない。しかも、気の抜けないディレスを目の前に二人きりで。加えて言えば、私は三半規管がそんなに強くできていない。酔うな、というのが無理な話だ。
「仕方ありませんね。あともう少し、我慢なさい。ホルツ侯爵に頼んで中で休ませてもらいましょう」
「申し訳、ありま……せ、ん」
「立てますか」
「……はい」
酸味のする唾液を飲み込んで、声を絞り出すように答える。

本音を言えば、もう少しじっとしていたい。動けば気分が更に悪くなるだろう。だが、あまりに迷惑をかけるわけにもいかない。所詮使用人、主の予定を遅らせられるほどの身分ではない。

それに、ディレスのことだ。動けないなどと言ったらそのまま放置されかねない。

「それは結構。動けないと言い出されたら、昨夜のように抱き上げねばなりませんからね」

「え」

思わず青ざめる。立ち上がりかけていた足に震えが走った。

ディレスの意図が読めない。いや、元々ディレスの考えなど分かりはしない。だが、ディレスはこういった状況になれば、容赦なく私を切り捨てると思ったのだ。微妙な優しさが薄気味悪い。ディレスの意志を読み取ろうとして、顔を見上げる。だが、ディレスの表情はいつも通りだった。

微妙に変化が見られる気もしたが、気のせいだろう。ディレスは無表情のまま、すぐに視線を外して門番の元へと足を向けた。

「動けるのでしたら、ちゃんとついて来なさい」

冷血漢、そう罵りつつもよろよろとディレスのあとを追う。ディレスは門番に認証具を渡していた。

「お待ちしておりました。どうぞ中へ」

門番の導きに従って、門をくぐる。

門番に先導されて屋敷へ案内されると、扉の前で執事に出迎えられた。

「お待ちしておりました、ディレス様。どうぞこちらへ。客間までご案内致します」

恭しく礼をとる執事に、気持ち悪さも忘れてぽかんと口を開ける。なんだこれ。随分な歓待じゃないか。今までとは随分態度が違う。

「ええ、でもその前に彼女を少し休ませてもらえませんか。ここに来る間に少々具合を悪くしてしまったので」

「え？」

目を見張ってディレスを見上げる。まさか本当に体調を慮ってくれるとは思わなかった。
「かしこまりました。こちらへ――」
「あの、ディレス様？」
執事が答えるのを遮って、ディレスを見上げる。だが、ディレスは私に気づかないとでも言うように、執事へ視線を向けた。
「では、私は用事を済ませてきます。彼女のことは頼みましたよ」
「お任せください、お客様のご案内は――」
「いや、あの、待ってください、ディレス様」
またもや執事の言葉を遮る。ディレスはわずかに眉を寄せて私を見下ろした。
「何か？」
「あの、私は侯爵にお会いしなくてよろしいのですか。確か今回は侯爵のお顔を拝するために私を連れてきたと。確かに多少は気持ち悪いですけれど、落ち着いてきましたし、本来の目的を忘れるほどでは――」
気持ち悪いが、ディレスとホルツ侯爵が話しているのを眺めているくらいはできる。いや、仕事の話を聞かせる気はないと言っていたから、そこまでする必要はないのかもしれない。けれど、顔合わせくらいはできないわけがない。そもそもが、当主に挨拶もなく屋敷で休むのは失礼ではないのだろうか。
そういう意味を込めて大丈夫だと訴えてみるも、ディレスの目は冷ややかだった。
「そんな調子で何を言っているのです。侯爵の目の前で粗相でもされては、面目がありません。それとも、貴女は私に恥をかかせたいとでも？」
「いえ、滅相もない」
まるで私の言葉を信じていないような目で見られて、若干凹む。そんなにも、具合が悪そうに見えるのだろうか。
「では、大人しく休んでいなさい」

「かしこまりました」
有無を言わさぬディレスの言葉に、反射的に肯く。一連のやり取りを見守っていた執事は、決着がついたことを認めると、誘導するように私に声をかけた。
「では、お連れ様はこちらへ」
「ご案内致します」
執事の背後から、年若いメイドが現れた。赤茶の髪をひとつにまとめた十六、七くらいの少女だ。朗らかな笑みを浮かべて躍り出た少女は、ただの連れである私に対しても丁寧に腰を折り曲げた。
「こ、こちらこそよろしくお願いします」
慌ててお辞儀を返せば、メイドはふわりと微笑んだ。
「恐れ入ります」
はにかむような笑顔が初々しい。心が荒むディレスの無表情に慣れていたから、柔らかに笑いかけられるだけで緊張が緩んだ。だが、日だまりのような暖かな空気は長く続かなかった。和む私をディレスは冷たく見下ろした。
「気を緩めぬように。くれぐれも失礼のないようになさい。貴女、アスハのことを頼みます」
ディレスは相変わらずの鉄面皮で和んだ空気にヒビを入れた。
「はい、もちろんです。お任せください。参りましょう、お客様」
「はい」
華がほころぶような微笑みにつられて笑顔を返す。視界の端に眉を寄せるディレスの顔が映ったような気がしたが、気にしない。ディレスと共にいなくて良いと言うのなら、それで良い。身を翻すディレスの背を視界の端に捉えながら、私は少女の後を追った。

三十六、起点　中編

案内された部屋で大人しくしていると、気持ち悪さはすぐに引いた。体調が整うと、すぐに暇になった。魔石の解析でも始めようかと考えていると、メイドが気づいてお菓子を持ってきてくれた。

「では、魔法に興味があって城に上がったのね？」

「私は、ディレス様に見初められて城に上がったと伺っていたのですが、違うのですか」

――のだけれども。

「いいえ、見初められたなど恐れ多い。ディレス様は魔法使いに憧れる私に援助の手を差し伸べてくださっただけです」

なぜか侯爵夫人を交えての恋バナになっていた。

そう、すべては昨晩の夜会での出来事のせいだった。侯爵は夫婦とも夜会に出席していなかったそうだが、一日で噂は伝わったのだそうだ。脅威の伝播率。もちろん、その内容はかなり大雑把で、大げさに誇張されていた。けれど、侯爵夫人の興味を引くには充分だった。噂のディレスの恋人がいる、と耳に挟んだ夫人は、好奇心を抑えきれずに様子を見に来たということだった。

「まあ。では、噂はかなり脚色されていたのね」

侯爵夫人がティーカップを口元に運びながら残念そうに呟いた。見ると、メイドも気落ちしたようにお茶菓子を頬張っている。

ある意味異様な光景だった。主と使用人が一緒にティータイムを過ごしているのだ。だが、夫人はそれを自然に受け入れていた。仲が良いのだろうか。

確かに、この世界では、必要以上の差別はないようだけれど。

「で、でも、ディレス様は素敵な方で、私を含め王宮の使用人の憧れです」

あまり無関心なのも問題だろう。慌ててフォローを入れれば、二人の瞳は輝いた。

「まあ、そうなの？」
「ですよね。そうこなくっちゃ、乙女じゃないですよね！」
もう乙女じゃないんだけど――と若干の居たたまれなさを感じながらティーカップに手を伸ばす。カップを傾けて二人の視線を遮った。
さて、どこまで嘘をつくべきか。あまりディレスを持ち上げるのは望ましくない。昨夜もやり過ぎだと叱られたばかりだ。だからといって、完璧に誤解を解くのも、ディレスの望むところではないだろう。次、ああいった機会がないとも限らない。
自分のすべき振る舞いを考えていると、侯爵夫人がカップを置いた。
「そうね。やはり女性は将来性のある男性に輿入れして、家を守るほうが向いているわよね」
夫人の言葉に深く頷いて、メイドが賛同の意を示した。
「その点、ディレス様は申し分ないですよね。家督を継ぐかはともかくとして、陛下の信も厚いですし。地位も名誉も将来性も兼ね備えてらっしゃいますから」
「それに、遠方に勤務することもないわね。戦時中、最前線に身を置く夫を待つのは辛いもの。いくらホルツに適う者などいないと知っていても。それに、ホルツだから待っていられたけれど、うちの息子みたいにちょっと抜けていたら危なっかしくて心配だもの。その点、ディレス様は安心よね」
「安心……」
思わず顔をひきつらせつつ呟いた。
確かにそう簡単に殺られたりしないイメージはあるけれど。逆に言えば、抜け目ないとも言えるわけで。その抜け目のなさに常に冷や汗をかいている身としては、安心の一言で済ませられると、複雑な気持ちになる。
「坊ちゃまといえば、今回は随分と帰りが遅いですね。時間のかかる任務でしたっけ」

「時間がかかるも何もないわ。隣国に学術書を閲覧に行っているだけよ。全く、どこで道草食っているのかしら」
「あれ、それは本当におかしいですね。隣国って言ったらコーリスでしょう？」
「そうよ。あの国も広いけれど、学術書を閲覧するとなれば、行く先は王都に決まっているわ。ここから馬車を使ったって三日とかからないのに」
「坊ちゃまのことですから、よっぽど学術書の読み込みに没頭してるんでしょうね」
「でしょうね。違うと言い切れないのが情けないわ。遊びじゃないのに、全く。あちら様にご迷惑をかけていないと良いのだけれど」
「勉強熱心なお方ですから。禁帯図書区域とかに嬉々として入り浸って、時間をお忘れになっていそうですね」
「本当、あり得るわ。全く、任務という自覚はあるのかしら。ディレス様にもご心配をかけて」
「え、ディレス様が？」
思わず目を見張る。あのディレスが、心配？　ホーボルト侯爵の子息とディレスは、そんなにも仲が良いのだろうか。
「ええ、そうよ。貴女にもご足労いただいて悪かったわね」
「いえ、私のような人間には勿体ないお言葉です。それよりも、ディレス様が『心配』ですか？」
何かディレスの弱みを掴めないかとしつこく問いかける。けれど、夫人はこちらの意図など気にも留めず、茶菓子に手を伸ばした。
「そう？　そう言ってもらえると助かるのだけれど。ディレス様には本当に良くしていただいているわ。爵位に関係なく、出来た人間というのはいるものね」
「出来た人間……」
表情を作るのに失敗し、半笑いで繰り返す。
確かにディレスは仕事は出来そうだけれど。人格的にどうかと言われたら、決して出来た人間などとは言えない。ディレスの対人ス

キルが高いのか、夫人が節穴なのか。どちらかは分からなかった。
「今日もわざわざ屋敷までお越しいただいて。どうせ帰還が遅いのは、あの子がふらふらしているからに決まっているのに」
「はあ……」
「学院での成績は良かったのだけれど。まだまだにホルツは適わないわね」
だんだんと、息子への愚痴と侯爵への惚気に話の流れが移る。どう答えるべきか。覇気のない返事をすると、メイドが気づいたようにフォローを入れた。
「でも、坊ちゃまだってすごいじゃないですか。最近はほら、異世界召喚を成功させた天才って。一人では誰も行うことの出来ないと言われていた術ですよ」
「――え？」
待て。今、何か重大な言葉が耳に届かなかったか？
「ああ、あの殿下の催し物ね。確かに難易度の高い術ではあるけれど、あんなもの使えて何になりますか」
「え、ちょっと待って下さい。もしかして、ご子息のお名前って――」
間違いない。異世界召喚に殿下の催し物。この人の息子と言うのは、ルロールだ。
「あら、そういえば貴女も魔法使いになりたいと言っていたわね」
「そっ……、そうです！　誕生祭で見た召喚の術に憧れて！」
妙な高揚感が体を支配する。裏返り、どもりそうになる声を必死で制す。そうだ、焦るな。ルロールは隣国にいる。隣国の――コーリス国の学術書を閲覧に行っている。知りたい情報は充分だ。あとは、その裏づけをとるだけ。何も難しいことはない。
「ああ、あれは憧れますよね。膨大な魔力と難解な術の保持、把握。魔法使いを志した者なら誰でもその力の流れに圧倒されますよね」
「まあ。でも、まだ完璧に成功させられるわけでもないのに」
「それでも凄いですよ。一人であの術を成功させたのは、坊ちゃま

が初めてじゃないですか」
「まあねぇ」
夫人が不満げに頷く様子に、話の区切りを感じて、舌を湿らせる。ルロールの裏づけを取る好機だ。さて、どう切り出せば良いだろうか。
「今回だってその功績が認められて――はい！」
だが、会話はノックの音に打ち切られた。メイドは返事とともに勢い良く立ち上がり、扉へと駆けた。
「ディレスです。アスハを迎えにきました。こちらだと聞いたもので」
その言葉に、メイドは勢いよく扉を開けた。入室したディレスは室内に視線を巡らせる。素早く動く目は、私を捉えた後、夫人を捉えて止まった。
「まあ、ディレス様。よろしければご一緒にお茶でもいかがかしら」
「せっかくですが。これから予定がありますので」
「まあ、残念だわ。二人揃ったところで噂の真相を聞いてみたかったのだけれど」
言いながら、夫人は少女のように笑ってみせた。無邪気を装う笑みは、からかいの色が見えた。
「ええ、申し訳ない。またの機会に――アスハ」
「はい！」
突然呼ばれた名にびくりと震える。声が裏返った。
「乗り物酔いは落ち着きましたか」
「はい。おかげさまで、もうすっかり良くなりました」
「では帰りますよ。来なさい」
「え、でも、あの……」
夫人とメイドに視線を走らせる。この二人は貴重な情報源だ。ルロールがどこにいるのかは分かったが、それがどこまで信用できる情報なのかや、隣国についての道順などを聞いておきたい。ディレスやスウォンでも訊けなくはないが、二人に訊けるのならそのほう

が都合が良い。
「どうしました？」
「えっと、あの」
だが、言えない。言えるわけがない。ディレスの冷えきった瞳を前にして、そんなわがまま、言えるわけがない。それでも、すぐに諦めるには惜しくて、もごもごと口中で呟く。すると、私を見た夫人が助け船を出した。
「まあ、そんなに急かさなくても良いじゃないの。彼女もやっと気分が落ち着いてきたばかりなのだし。お茶の一杯くらい飲んでも罰はあたらないと思うけれど？」
夫人の言葉に、ディレスはほんのわずかに眉を寄せた。
「面倒な」
ディレスは小声で吐き捨てた。
「え？」
ディレスらしからぬ台詞に目を見張る。だが、顔を見上げた時には、ディレスの表情はいつも通りに戻っていた。いつもどおりの、無表情に。
「お気遣いありがとうございます。しかし、予定も詰まっておりますので、そうゆっくりもしていられないのです。アスハもまだ万全とは言えないのかもしれませんけれど、我慢してください」
「えっと」
答えに迷うように口ごもれば、ディレスはこちらへと一歩距離を詰めた。無意識に体が強張る。
「それとも、独り残したことを、まだ拗ねているのですか」
「そういうわけでは……」
ゆっくりと、ディレスはこちらへと歩を進める。一歩一歩近づくディレスから、白い煙が湧き起こる——かのように見えた。
また一歩。ディレスが足を踏み出す。そのたびに、体温が急激に下がっていく。また一歩——もう一歩。ディレスが距離をつめる。目の前まで辿り着いて、ディレスは歩みを止めた。立ち止まったデ

ィレスは、無言で私を見下ろす。見下すような視線に体を仰け反らせると、ディレスはその場にしゃがみこんだ。

決して合うことのなかった視線が、同じ位置で交わった。恐怖が全身を駆け抜ける。視線を逸らそうとするが、阻むように手を握られた。

「寂しかったのは貴女だけではないのですよ」

「は……？」

かすれた声で、意味ない音を漏らす。口の中はカラカラに干上がっていた。そんな私に追い討ちをかけるように、ディレスは握った手を優しく撫でた。指の間をさするように軽く。その途端、ぞわりと全身が総毛立った。焦れるような熱が体を走る。反応を楽しむように弄んで、ディレスは右手を私の頬に添えた。わずかに体を震わせると、ディレスは私の瞳を覗き込む。

「私も、貴女と離れて辛かったのです。だからこそ、早く二人きりに――ね？」

心臓が跳ねると同時に、体が凍った。

「な、何を……」

舌が上手く回らない。ときめいたのは一瞬だ。上がった体温は、すぐに冷水を浴びせかけられたように冷えた。

何故だ。どうしていきなりこんなことを。寒気に肩を抱きながらディレスを見る。その瞳は、熱のこもったものでないのは言うまでもなく、共犯を求める目ですらもなかった。あえて例えるなら、試験管で反応する薬品を見る目で――生き物ですらない。

「そうよね！　私としたことが野暮なことを申しました。さあ、アスハさん。存分にディレス様に甘えてらっしゃいな」

他人から見れば、恋人との痴話喧嘩にでも見えるのだろうか。夫人は的外れなことを口にした。

「いや、え、あの」

「ええ、ではお言葉に甘えて失礼致します。いきますよ、アスハ」

「あの……」

捕食者に睨まれた野生動物のように体が動かない。微動だにしない私に、ディレスはため息をついた。
「……甘えん坊ですね。抱き上げられたいのですか」
「いいえ！　歩けますっ！」
昨夜の恐怖が蘇る。拘束を解かれたバネのように反射的に飛び上がった。足に力は入らない。自分の足ではないかのようだ。その場で足からくずおれてしまいそうなのも、なんとか耐えた。立ち上がった私を認めると、ディレスは無言で扉へと向かう。その様子を見て、メイドが慌てて扉を開けた。
「お見送り致します」
にこやかな笑みを浮かべて、夫人は出入り口まで先導した。

三十七、起点　後編

「飲みなさい」

夫人に見送られて屋敷を出た後、ディレスは何かの店――おそらく薬局の類だろう――に寄った。終始無言のディレスに、声をかけるのは躊躇われた。黙ってディレスと店主とのやりとりを見つめていると、何やらコップらしきものを手渡された。

「なんですか、これ」

陶磁器らしいコップだ。中に揺れるのは、泥水のように濁った液体。その色の気味悪さにふと嫌な考えが浮かぶ。

まさか、嫌がらせじゃないだろうな。

「薬湯ですよ。また同じ道を行くのです。気分が悪くならない保証などないでしょう？」

ディレスは予想外の言葉を返した。反応に困って固まっていると、店主が口を挟んだ。

「いやあ、今時珍しいね。酔い止めなんて売れたの久しぶりだよ。船にでも乗るのかい？」

「あ……ああ、ありがとう、ございます」

どうやら本当に嫌がらせではなかったらしい。だが、それならそれで、余計に謎は深まった。ディレスの瞳は相変わらず冷え切っている。そこには、優しさなど欠片も感じられない。間違っても、私を思いやっての行動とは思えなかった。

まあ、単に酔って吐いたりされるのが面倒なだけ、ってオチもあり得なくもないけれど。

「あの……先程はどうしてあのようなことを？」

ひたすらに苦い薬湯を飲み干して、ディレスに尋ねる。ディレスは私を一瞥した後、無言で支払いを済ませて店を出た。慌てて追いかければ、ディレスは店の前で立ち止まっていた。私の気配を察して、ディレスはくるりと身を翻す。

「もう一度、訊きましょうか」
振り返ったディレスの銀髪を、風が揺らした。糸のようにたなびく髪の一本一本に目を奪われる。美を一瞬に封じ込めた絵画のような光景。そのあまりの美しさに息を呑む。
だが、時を忘れて魅入る私を、突風が現実へと引き戻した。髪が荒れ狂う。視界を遮る黒髪を抑えて、なんとかディレスへと視線を戻した。ディレスは冷めた目で私を見据えて、口を開く。

「何のために、貴女は城に上がったのですか」

ひとつひとつの音を区切るように、小さな子供に言い聞かせるように、ディレスは尋ねた。まるで、よく考えて答えなさいとでも言うように。
だが、考えるまでもない。そんなの決まっている。私が城に上がったのは――。
「ルロールさんにお会いするためです。誕生祭でのルロールさんを見――」
はっと息を呑む。
首を傾げつつ答えを口にして、気付いた。ディレスの質問の意図に。
「魔法に興味があると言いましたね」
「……っ」
急激に体が冷えていく。口中が乾き、声にならない音が漏れた。
だが、ディレスは無情にもさらに追い討ちをかける。
「現魔法師団長には興味がありませんか」
血の気が引く。冷たい汗が背中を伝う。
そうだ。私は魔法に興味があると言った。だから、ルロールに会いたいと。そのために城に上がったと。そう言った。ディレスの前で宣言した。その上、これでもかというほど昨夜貴族相手に聞いて回った。おそらく、ディレスの耳も入っていることだろう。その執

拗なまでの執着ぶりを。
だから――
ルロールの父親の名を知らないなんてこと、あり得るはずがない。
「わ……たし、の。目指す魔法使いとは……、系統が違うから、です」
「系統？」
かすれる声で、途切れつつも言い訳する。だが、ディレスは胡散臭げな視線を寄越すだけだった。その視線に、心が折れそうになる。何もかも投げ出して、ここから逃げ出してしまいたくなる。いや、もうルロールの居場所を知っているのだ。ここに――ディレスの元にいる必要などない。逃げてしまっても、何も問題ない――
現実逃避し始める脳を、歯をかみ締めて止める。
逃げる？　どうやって。今、認識されている状態で、どうやって逃げるつもりだ。認識を解除するにも、どうやってディレスの目を遮る？　すぐ後ろの店内に逃げ込む？　そんな機会など、ディレスが与えるだろうか。あの、隙のないディレスが。どうやったって逃げ切れるとは思えないディレス相手に、そんな思い付きの行動が通用するだろうか。
それに、逃げるということは、自分が「後ろ暗いことをしている」と証明しているようなものだ。逃げ切れなかったときに言い訳が立たない。
何より、今。私の足は氷付けされたように動かない。かろうじて口が動くだけ。ならば、私ができるのは、ひとつだけ。
怯える心を叱咤して、さらに情けない言い訳を紡ぐことだけだ。
「私が……目指すのは。誰かを傷つける類の術ではなく、生活を潤すためのものだから、です」
「なるほど？　つまり、殿下側ということですか」
全身の血が引く。

そうだ。私の主張はまさに王子の思想と一致する。いつだったか、スウォンが言っていた。魔法は戦争の道具だった、と。王子の試みはまだまだ馴染みのない価値観なのだろう。今日だってそうだ。魔法は人を傷つけるためのもの、という考えが、夫人の言動からも窺えた。

つまりは。魔法を戦争の道具として考えない私の動機は、酷く異端に見えるはずだ。この世界の住人にとって。

それなのに、私は王子を否定している。いや、人格自体を拒否することには矛盾はない。けれど、王子の魔法に対する姿勢にすら、私は関心を見せていない。そんな態度でいながら、この理由を持ち出すのは不自然だ。王子はいわば、自分の目指す道を叶えられるだろう理解者だ。それが目の前で両手を広げているにも関わらず、自らそれを潰す道を選んでいるのだから。

そう、ディレスはその矛盾する態度を鋭く突いているのだ。

いや、私の中で矛盾はない。王子を拒むことも、ルロールとの謁見を熱望するのも、矛盾なく成立しうる事柄だ。だが、他人から見ればどうだろう。魔法使いになりたくて、そのきっかけとなったルロールに会いたいからと言って城に上がる。そのくせ、ルロールについては何も知らない。それどころか、ルロールのファミリーネームすら知らない。魔法使いの最高権威とされる魔法師団長――ルロールの父親――に、興味すら抱かない。理由を聞けば、忌み嫌っているはずの王子の思想を持ち出してくる。

矛盾しているのは火を見るより明らかだ。疑われて当然、訝しがられて当然。朝のディレスの態度も、思い返せば当たり前だった。憧れのルロールの父親に会わせてやるというのに、何故と問われれば、疑いもしよう。

「そう……です。思想に関して言えば、恐れ多くも殿下に近いと言えるのでしょう」

「あんなに殿下を拒否しているのに？」

「……、殿下、は。私に魔法使いとして期待しているわけでも、そ

の手の話相手としてお時間を割くおつもりもないでしょう」
　王子が私に期待するのは、人間としてではなく、玩具としてだ。性欲処理の。玩具の奏でる音に興味をそそられることはあっても、その言葉を理解し、共感しようとするつもりはないはずだ。そこは、ディレスとて反論するつもりはないだろう。
「そうでしょうね。けれど、玩具も愛着が湧けば愛しむ対象となります。本当に実力でのし上がるよりも、ずっと楽に望む地位を手に入れられるはずです。貴女が、そんなことにも気付かないとは思いませんけれど？」
「気付かないとまでは言いません。けれど、頭で分かっていても、どうしても受け入れられないこともあるでしょう？」
「そうですね。確かに、貴女はあまりにも幼い」
　言って、ディレスは私へと手を伸ばした。体格のことを言っているのだろう。震え、熱を持つ体を自制しながら、ディレスを見上げる。今ここで、視線を逸らしてはならない。
「でしたら、私の申し上げることもご理解いただけるはずで――」
　心臓が、跳ねた。
　ディレスは伸ばした手を頬に添えて、親指で唇をなぞった。目の前が白く弾け、言葉を失う。
「私ですら、体を強張らせるほどに」
「――な、にを」
「さて、もう一度訊きましょう。何のために、貴女は王宮に上がったのです」
　唇を優しく愛撫しながら、艶のある声でディレスは訊いた。そう、まるで女性を口説き落とすような態度を「わざわざ」装いながら。
　気付かれた、のだ。
　弱みを、握られた。こうされれば、ろくな答えが返せぬことを悟られた。思考が熱に浮かされ、舌が回らぬことを。
「……っ」
　唇の表面を、指がかすめる。ディレスのやや冷たい親指の腹が、

痺れるような感覚を与えた。
「答えなさい」
このまま口付けを請うかのような目つきで、ディレスは命じた。脳が蕩けるように思考が白濁する。誘われるように口を開き――ただ、質問の答えを口にする。
「ルロールさんに、お会い――するため……、です」
何とか、かすれた声で返す。
だが、私の答えを聞いて、ディレスは眉を寄せた。期待した答えではなかったのだろう。当然だ。城に上がった目的は、ルロールに会うためで間違いない。嘘偽りない事実だ。けれど、これが「何のためにルロールに会いたいのか」であったのなら、また展開は違っていただろう。私にとって幸いなことに、ディレスは質問の仕方を間違えた。
期待する答えが得られないと分かると、ディレスは目に見えて態度を変えた。誘うような色気を帯びた視線を、凍える視線に豹変させる。添えていた手は、何の余韻も躊躇いもなく、元に戻された。
「なんとあっても、そう答えるつもりですか」
「つもりも何も、事実です。それ以上もそれ以下もありません」
ディレスが態度を元に戻したことで、思考が明瞭になる。きっぱりと言い切ると、ディレスは諦めたように目を伏せた。腕を組み、考え込むように黙り込む。数分の沈黙の後、ディレスは射るような視線を向けた。
「よろしい、分かりました。それ以上何も言う必要はありません。貴女がそういうつもりなら、こちらにも考えがあります。明日から私の部下として遠慮なく使わせてもらいますから、覚悟しておきなさい」
「は？　どうしてそういう流れになるのですか」
「そのような曖昧な理由を述べる人間をルロールに会わせてやるほど、私がお人よしだと思いますか」
「……」

思わない。というより、きちんとした理由があっても、善意だけでそんなお膳立てをする人には見えない。

黙りこむ私を見て、ディレスはわずかに眉を寄せる。だが、すぐに続きを口にした。

「ルロールに会う暇がないほど、予定を詰めて差し上げます。それこそ、余計なことを考える間もないほどに」

言いたいだけ言い切ると、ディレスはぷいと背を向けた。そのまま、無言で歩き出す。ついて来いということだろう。私は慌ててディレスの後を追った。

きっと、ディレスは私を疑っているのだろう。何を疑っているかは分からないけれど、私の何かを。そして、今後、その証拠を握るつもりでいるのだろう。部下として働かせることで。

けれど、その目論見は無駄になる。

何故なら私はもう、ルロールの居場所を知ったのだから。

三十八、隣国

侯爵邸から戻ると同時に、荷物を纏めた。狩りや使用人の給金で貯めたお金や、スウォンにもらった魔石。証文具や探知器。それに着替えなどのこまごましたものを加え、街で薬湯を揃えてから適当な馬車に乗り込んだ。念のため乗車手続きは踏まず、他人と相乗りする形で無断でこっそりと。ディレスにもらった探知器は、余計な処理を完全に止め、証文具は予めプロテクトを外しておいた。探知器は何もしていない時にも何故か魔力が流れていたので、それを止めた。魔力は貴重なので、たとえ微量でも垂れ流しにするのはもったいないのだ。もちろん、きちんと理解したわけではない処理を止めるのはあまり好ましいことじゃない。もしかしたら、ある一定距離まで近づいたら自動で警報を鳴らしてくれるような便利な処理が組まれているかもしれないのだ。だから、ムーイトにいたときは、念のためそのままにしていた。余計なことして、身の危険にさらされたら笑えない。けれど、ムーイトから離れた今ならさほど問題ないだろう。動作させていないときに処理を止めただけだから、別段不都合はないはずだ。事実、たまに起動したときにも王子を示す光は離れて行くばかり。順調に距離が開いていた。

なお、証文具は一度使用するごとに魔力が枯渇し、反応しなくなるように組んであったので、繰り返し使えるように組み換えた。探知器から必要分だけ魔力を移し、ロックを外せば簡単だった。そのあまりのあっけなさに、逆に心配になったほどだ。電子認証のようなものなのに、随分とセキュリティが甘い。認証具として使うなら、使用後に処理自体を削除するように組むくらいしなければ、悪用され放題だろうに。まあ、おかげでこうやって再利用出来るのだから、私としては文句はないけれど。

途中で寄った街で休んだり馬車を乗り換えたりしながら、なんと

か三日。私はコーリスにたどり着いていた。

ちなみに、乗車代はこっそり馬車に置いてきた。御者のおじさんは驚いていたけれど、これが私の精一杯のやり方だった。正規の方法で乗車するのが一番なんだろうけれど、私は私の身が可愛い。保身を考えたら、たとえプライベートを覗いてしまうような趣味の悪い方法でも採用する。

そうして、コーリスまで辿り着いて、私は馬車から飛び降りた。薬湯を飲んでいても気分の悪さが多少は残る。ふらついた足に力を入れ、すっと息を吸う。ムーイトとは異なったにおいが、肺を抜けた。

コーリスは巨大な都市だった。王領ということもあるだろうが、ムーイトと比べてもずいぶんと街並みがしっかりしている。いや、ムーイトは再興中だから比べるのもおかしいのだろうか。ムーイトは王城を離れると、すぐに石造りと分かる平屋が並んでいた。けれど、コーリスは違う。きっちりと溶かし固められた頑丈な壁。さらに二階建ては普通のことで、三階建ての建物すらある。そして、何よりその街並みが目を引いた。ひとつひとつの建物が、その街の景観を形作っているのだ。赤や橙の暖色系を基調とした色使いが並ぶ居住区は、レゴで作られた箱庭を思い起こさせた。国が違うだけで随分と受ける印象が違う。

景観を眺めながら歩いていると、すぐに城の前までたどり着いた。心なしか、ムーイトより頑丈そうに見える。あたりを見渡して門番を見つけると、認識してもらうために気を張った。

「すみません」

「うわあ！」

甲冑に身を包んだ門番は、大げさなほどに体を仰け反らせた。甲冑のつなぎ目がぶつかり合い、金属音がやかましく響く。

門番が落ち着くのを待ってから、丁寧に腰を折る。
「ディレスの遣いで参りました、アスハと申します。突然の訪問、失礼致します。こちらに我が国の魔法使い――ルロールがいるはずです。恐れ入りますが、話をさせてもらえませんか」
「ディレス？　ああ、ムーイトのディレス様か！　けど、どうしてここへ？」
「ルロールの帰還が遅いので様子を見てくるようにと命じられて参りました」
ルロールの帰りが遅いのは確認済みだ。理由としては文句はないだろう。自信満々に答えるが、門番は困ったように腕を組んで唸った。
「とりあえず、認証具を見せてもらえますか」
「はい」
待ってましたとばかりに認証具を差し出す。魔力も処理も初期状態にセット済みだ。だが、認証具を確認する門番は、眉を寄せて唸った。
「確かにディレス様の認証具ですね。嘘ではないようですが――どうしたものか」
「何か？」
「いえ、確かにルロール様はこちらにご滞在されていました。けれど、もう随分前に城を出たはずですよ？」
その言葉に、眉を寄せる。そんなはずはない。ルロールはまだ、城に戻ってはいないはずだ。入れ違いになった可能性は低いと思うが、念のため確認しておいたほうが良いだろうか。ルロールがここを去った日を尋ねるべく、門番を見上げる。
「ルロールはまだ、ムーイトには戻っておりませんが。恐れ入ります、ルロールがこちらを発ったというのはいつ頃のことですか」
「……」
だが、門番は困ったように口を閉ざした。
「大体で構いませんので、教えていただけませんか」

「十日くらい前、かと……」

その答えに、私は高速に思考を巡らせた。ちょっと待て。私がここへ来て――確か、一ヶ月くらいだ。十日前といったら、王子の誕生際のすぐ後くらいになる。二日、三日程度の。そんなことがあり得るのか？　ディレスなら、確かに嘘はつきそうだが――いや、その頃は、ちょうど王子に夜這いされた頃だ。そのとき、スウォンに確認している。ルロールはまだ帰ってきていないのか、と。スウォンが私に嘘をつく必要はない。そのときに帰ってきていなくても、帰還の日取りぐらいは連絡が来ていてもおかしくないだろう。であれば、門番の言葉はおかしいということになる。

「待ってください。では、ルロールは数日も滞在せずにここを発ったということですか」

「そういうことに……なりますかねぇ」

「……」

歯切れが悪い。疑いを滲ませて見上げれば、門番は観念したように息をついた。

「すみません、私も詳しいことは良く知らないんですよ。確かにこちらに滞在されて三日くらいはお姿をお見かけすることがあったんですが、それ以降全くお見かけしなくなったものですから、てっきりお帰りになられたものだと……」

「では、他に門の番を担当されている方にお話を伺うことは可能でしょうか」

「出来なくはないですが、無駄になると思いますよ。数日前に、仲間内で話題になったことがあったんですが、誰も知らないようでしたから」

ということは、ルロールは帰還の途中で何かの事件に巻き込まれたのだろうか？　確かに領地と領地を繋ぐ街道はあまり治安が良いとは言えない。だが、ここまで来るのにそんな物騒な話は何も聞かなかった。では、ルロールが使ったルートが私とは異なるのだろうか。それとも、帰還の途中で極秘任務を命じられたとか？　いや、

そもそもが誰もが門を通ったことを知らないというのはおかしくないか？　門番は侵入者を防ぐためにいるものだ。常に配置されていなければ意味がない――はずだ。門を通ったはずの者を見落とすことなど、あり得るのだろうか。

駄目だ。分からない。推理するにも情報が足りなさ過ぎる。

「あの、ルロールが直前までいたと思われる場所、拝見することは可能でしょうか」

手がかりがほしい。藁にでもすがる思いで門番に頼み込む。門番は少しの間逡巡したが、すぐに近くの騎士に声をかけた。同僚なのだろう。騎士は私へと視線をやると、軽く頷いた。それを見て、門番はくるりと私を振り返る。

「少々お待ち下さい、上官に確認してきます」

三十九、姫

戻ってきた門番は、小さな子供を連れてきた。年の頃なら十六、七。こちらの世界の成熟度に併せて考えるなら、実年齢はもっと下だろう。眩いばかりのブロンドと、アーモンド色の大きな瞳が印象的な少女だ。桜の花びらを重ねたような、淡い薄桃色のドレスが視界に踊る。花のようなドレスは、まだあどけなさの残る少女によく似合っていた。だが、だからこそ余計に、隣の甲冑との組み合わせが異様に映った。何事かと見上げれば、門番は困ったような顔をした。

「あらあら、随分可愛い娘を寄越したものね。貴女、名は？」

少女はその姿に似合わぬ貫禄で私の名を尋ねた。

「アスハと申します」

「では、アスハ。わたくしが城内を案内致します。よく見ていきなさい。そして、帰ってエルシュに伝えなさい。ルロール殿は確かに我が国を発った。そのような失礼な疑いをかけるのなら、遣いではなく自分で赴き、私の目の前で吼えてみなさい――とね」

エルシュって誰だろう、という疑問が頭をよぎる。だが、それは訊けるような雰囲気ではなかった。少女の言葉に門番と門番代理の騎士が顔色を変えたからだ。

「そんな、城の案内に陛下自らのお手を煩わせるなど……！　案内くらい、私達使用人にお任せください」

「え？」

予想外の呼び名に目を見開く。

今、門番は何と言った？　目の前の、どう見ても十代前半にしか見えない少女のことを、何と呼んだ？

背筋に汗が伝う。なんだかおおごとになってきた。ルロールがここにいるのは間違いないと思っていたから、適当にでまかせ言ってルロールに引き合わせてもらえば終わりだと思っていた。門番に認

証具を渡し、ルロールのいる部屋まで案内してもらって、即帰還、と思っていたのだ。何も難しいことはないと。だからこそ、こうして「任務」と偽って正規の手続きで入城しようとしたのだ。あとですぐバレる嘘だと知りながら。

だが、門番が口にした敬称が事実だとしたら、私の立場は危うくなる。すべてが嘘ではないが、ディレスに連絡をとられでもしたら厄介だ。もう顔を合わせることなどないと思っていたから、何も言わずに出てきたのだ。いわゆる夜逃げ状態で。言い訳など考えていない。

こんなことになると分かっていたら、たとえ少々面倒でも、認識されていない状態で強行突破したのに。まさか、フォード公爵のようにトラップ城だったりしたら笑えないとか思って、正規ルートで入城しようとしたのが仇となるとは。

頭を抱えていると、門番の息を呑む音が響いた。見ると、少女が壮絶な笑みを浮かべて門番を見ていた。

「アナタ、今何と言って？」

「は？　あの、私達にお任せ下さいと……」

「そうじゃないわ。その前。アナタ、わたくしのことを何と呼びましたか？」

その言葉を聞いた途端、門番たちの顔は青ざめた。

「あ……も、申し訳ありません。リシア姫」

「まあ、良いわ。良い機会だから貴女にも言っておくけれど。わたくしを呼ぶときは姫と呼ぶように。それ以外の呼称は不敬として扱うので肝に銘じておきなさい」

「はい……かしこまりました」

何故、とは訊けなかった。少女――姫からは有無を言わせぬ雰囲気が漂っていた。

「そう、よろしい。素直な子は嫌いではなくてよ。では、参りましょうか、アスハ。ついてきなさい」

言って、姫は優雅にドレスの裾を翻す。追いかけようとすると、

門番が慌てたように声を上げた。
「お待ち下さい。先程も申しましたが、城の案内は私どもに……」
「良いのです。彼女は仮にもエルシュの遣いなのだから、丁重に持て成さねばなりません」
「いえ、私はディレスの遣いなのですが」
誰だか知らないが、話が食い違っては困る。訂正すると、姫はにこやかな笑みを浮かべて首を振った。
「ええ。存じています。貴女はディレス殿の遣いですわね。ですが、ディレス殿の遣いということは、エルシュの遣いということですわ。貴女は何も遠慮することはないのよ」
言い聞かせるような声音に少々安堵する。先ほどの壮絶な笑みは、背筋を凍らせるのに充分だったからだ。けれど、言葉の意味は理解できなかった。どういう意味だろうと首を傾げていると、門番がなおも食い下がった。
「ですが……」
「それとも、わたくしの言葉が聞けぬと仰るの？」
「め、滅相もない」
姫が語調を強くする。にこやかな笑顔で言うのだから、余計に怖い。途端に門番は顔を青くして、頭を下げた。
「では、大人しく仕事に戻りなさいな。アスハも参りますよ、おいでなさい」
「はい」
門番が素直に従ったのに満足したか、姫は軽やかな足取りで身を翻す。
姫の体は私より若干低い。抱き寄せられそうな華奢な体躯は、庇護欲をそそるに充分だった。けれど、ドレスを翻す時の些細な振る舞いや、歩くときの身のこなし方は高貴な淑女を思わせた。事実、身分は高いのだろうけれど。年齢からはとても信じられないけれど、先ほどの態度や身のこなしを見ていると、陛下というのも頷ける。少なくとも、そうであるよう――上に立つものとしての教育を施さ

れていることは窺えた。
後姿を眺めながらそんなことを考えていると、姫がふと思いついたようにこちらを振り返った。
「アスハと言ったかしら。貴女、ディレスの部下なのかしら？」
「はい。簡単な雑務を任されております」
「まあ、珍しい。あの堅物がこんな可愛らしい娘を部下に据えるなんて。よっぽど気に入ったのね」
「いえ、そんな……」
社交辞令、のようなものだろう。反論したいのを抑えて、曖昧に笑った。
「そうだわ、ディレスの部下ならエルシュに会う機会も多いわよね。エルシュは元気かしら？」
「えっと……」
言葉につまる。まただ。エルシュとは誰だ。けれど、知っていて当然と話を向けられれば、尋ねようにも躊躇われる。答えに迷うように視線を揺らせば、姫はくすりと笑みをこぼした。
「あら、もしかして会ったことがないの？　あの子、なんだかんだ言ってディレスに懐いているから、執務室にもよく訪れると思ったのだけど」
「懐く、ですか」
ディレスの元に訪れるような客などいただろうか。記憶を探るも、検討はつかない。
「たまに兄弟のように見えたりするから、羨ましく思ったものだわ。歳が近いからかしら。わたくしの教育係りは歳が離れていたから、想像がつかないのだけれど」
その言葉で、私は頭を抱えた。
「随分と……、親しげに話されるんですね」
げっそりとした声で当たり障りのない返事を返す。
間違いない。エルシュとは王子のことだ。名前なんて覚える気などなかったから、気付かなかった。下手なこと言わなくて良かった。

王子の名など覚えたくもないし、記憶のメモリを使用するほどの価値もないけれど、知らないで済まされる問題ではない。ムーイトの使者として他国を訪れるような人間が、自国の王子の名を知らないでどうする。

けれど、それにしたって姫の呼び方は違和感があった。ファーストネームを呼び捨て、など。隣国というだけあって、国同士だけでなく、個人的な付き合いでもあったのだろうか。

「あら。嫉妬？」

「違います」

嫌な勘違いをされた。眉を寄せて即答すれば、姫は不思議そうな表情をして口元を扇で覆った。

「そう？　エルシュなら貴女のような娘は好みそうだと思ったのだけれど。それとも、あの子の目に留まらぬように、ディレスがうまくやっているのかしら」

「いえ、そういうわけでは」

目は思いっきりつけられている。それこそ、王宮勤務初日から。だが、余計なことを口にする気はなかった。それに、姫も私の答えを求めてはいなかった。

「あら、じゃああの子の好みとは微妙にずれているのかしら。残念だわ、貴女みたいな娘だったら、側室でも良い関係を築けそうだと思ったのに」

その言葉に、目を爛々と輝かせる。

「殿下とご婚約が決まってらっしゃったんですか」

期待に満ちた目で姫を見つめる。おそらく、身分も容姿も充分。王子にとって、非の打ち所のないパーフェクト物件。姫には気の毒だと思うが、二人が結ばれてくれれば、言うことはない。元の世界に戻るとはいえ、犯罪者予備軍問題が解決するのは非常に喜ばしいことだ。けれど、姫は心底残念そうに首を振った。

「ああ、違うわ。まだよ。あの子ってば恥ずかしがってなかなか首を縦に振らないのよ」

「そう……なんです、か……？」

意外な返事に、イントネーションが波打った。相槌を打つように平坦に答える途中で、王子が恥ずかしがると言う光景に疑問が浮かんだ。最終的に語尾を上げようとして失敗し、声が裏返っておかしなことになった。

変な相槌を打ったことに羞恥に顔を染めるが、姫は私の言葉など聞いていないようだった。こぶしを握り締め、瞳に炎を灯して熱く宣言する。

「でも、近いうちに必ず手に入れて見せるわ。わたくし、欲しいものは必ず手に入れる性分よ」

「姫なら、殿下の好みにぴったりですし、すぐに上手くいきますよ」

むしろ、王子が拒むことのほうが信じられない。

「まあ！　応援してくれるの？」

「もちろんです」

力強く頷けば、姫は一瞬だけ意外そうに目を見張る。だが、すぐに婉然と微笑んだ。

「ありがとう。嬉しいわ。まさかムーイトに私に味方してくれる娘がいるとは思わなかったわ――ああ、ここが図書室よ」

いつの間にか、目的地に着いていたようだった。姫は私を誘導するように扉を開けた。

「すごい量ですね」

目の前に広がった本の多さに目を見張る。ムーイトの倍はあるだろう。

「そうでしょう？　これだけではないのよ。ここにあるのは魔法書の類のみだから。歴史書や薬学書などは、また別の階にあるわ」

「他の階にもあるんですか？　すごい！　本当にすごいです！　こんなにたくさん……！」

息を弾ませて辺りを見渡せば、姫は目を細めた。

「貴女、本当に珍しい娘ね。ルロール殿もそうだったけれど、そこまで喜ばれると悪い気はしないわ。良いわ、好きなだけ見ていきな

さい。特別に許可します」
「あ、ありがとうございます！　でも、非常に残念ですが、ルロールを捜さなくては」
「あら、そうだったわね。何か分かるかしら？」
「いえ、調べてみないことにはなんとも……すみません、少々お時間をいただいてもよろしいでしょうか」
「もちろん、好きになさい。わたくしは別の調べものをしているので、終わったら呼びなさい」
「はい。何から何までありがとうございます」
「気にすることはないわ。これも外交の仕事のうちのひとつよ。それと、念のため言っておくけれど、魔法はここでは使えないわ。探索は行えないから気をつけなさい」
「え？　使えない、んですか」
確かに、懐に忍ばせた魔石に意識を伸ばしても、反応が鈍い。処理の詳細は読めるし、書き換えはできるけれど、外に出力できないというか……。ムーイトではこんなことはなかったはずなのに。
「やはり驚かれるのね。ルロール殿もそうだったわ。わたくしとしては逆に、城の中で魔法が使い放題なのが驚きなのだけれど」
「え……でも、使えないと不便ではありませんか」
「あら、珍しいことを言うのね。貴女もエルシュ派なのかしら」
その言葉に、ぞくりと背筋に悪寒が走る。最近聞いた言葉に良く似ていたからだ。銀糸の長髪が脳裏に浮かび、慌てて頭を振った。
「そういうわけではありませんが……最低限の魔法が使えないと、不便ではないかと。灯りくらいは使えないと、文字も読めなくありませんか」
「あら、ここは夜は使用禁止よ。読みたければ貸し出し手続きをとって部屋で読むまで。何も不便ではないでしょう？」
「……そう、ですね」
反論できずに頷くと、姫は扇で口元を隠して楽しそうに笑った。
「ふふ。そう困った顔をしないで頂戴。貴女の言いたいことは分か

るわ。確かに、最初はコーリスでも魔法を許可していたのよ。けれど、魔法使いって言うのは困ったものだから。読んで得た知識を、その場で使おうとする者が続出したのよ」

「あ……なるほど」

「そう。それが、貴女の言うように灯り程度のものなら特に問題はないわ。大気中から水分を抽出するとか、重い荷物を浮かせてみるとか、その程度ならね。けど、魔法が何のためにあるかを考えれば、想像つくでしょう？　小規模で走行テストのつもりでも、失敗して大火事なんてよくあることよ」

魔法は戦争のためにある。とすれば、求める知識もその手のものになる。ここで使用するには適さない、失敗したら大火事では済まない類のものだろう。いや、もしかしたら死者も出たのかもしれない。

「最初はね、使用できる魔法の出力を抑える程度にしたのよ。けれど、それも無駄だったの。大量の魔力が必要なくとも、危険な魔法はあるものね」

「そんなものあるんですか？」

想像がつかない。素直に問えば、姫は笑いながら答えた。

「ええ、わたくしもそう思っていたわ。けど、あるのよ。たとえば――周囲の人間の神経を侵すよう、空気を震わせる術とかね」

「……」

「ふふふ。呆れちゃうでしょう？　仮にもわたくしがいるこの城で、そんな無差別な術を使用するなんて。確かにここにいることは少ないけれど、有効範囲は広いのよ。わたくしに被害でも出たらどう言い訳するつもりなのかしらね」

「え……、ええ。まったくです」

「ムーイトはまだ復興中だから、こういった平和ボケした問題は起こらないのかもしれないわね。けれど、そのうち、考えなければならなくなるはずよ。図書室内だけではなく、城内でどこまで魔法を許すかを」

「そうですね。貴重なお話をありがとうございました」
「あら。いいのよ、参考程度にとどめて頂戴。エルシュはエルシュで考えがあるでしょうから。あの子はわたくしとはまた別の方法で、城内の安全を確保するほうが合っているはずよ」
「別の方法ですか」
「ええ。どんな方法かはわたくしには答えられないけれど。それより、アスハ。ルロール殿の探索は良いのかしら？」
「あ、はい。捜してみます――けど、魔法が使えないのは完全に予想外でした」
「そうね。あの方は常時魔力を溢れさせている方でしたけど――それを探索するのは無理でしょうね。ルロール殿が良く座っていたのはあのあたりの席だったけれど――あとで滞在中に使用されていた部屋も見てみる？　部屋には魔力制御をかけていないから」
「はい、是非。念のため、あのあたりも調べてみますね。あの、何から何までありがとうございます」
頭を下げると、姫は扇で口元を隠した。
「いいのよ。わたくし、貴女のことも気に入ってよ」
「恐れ入ります」
曖昧に笑って、もう一度頭を下げた。社交辞令だろうけれど、今までの扱いが扱いだっただけに、まともな反応が予想以上に堪えた。普通の対応のはずなのに、どういう顔をしていいか分からない。思っている以上にディレスと王子に毒されていたようだ。その事実に思い至り、苦笑した。
ルロールは、まともに話ができる人だと良いのだけれど。

四十、違和

「やっぱり、変だ……」

すっかり暗くなった城内を、魔石を片手に練り歩く。その反応に、私は腕を組んで唸った。

図書室捜索のあと、ルロールが滞在中に使用していた部屋も見せてもらった。即興で練り上げた処理を魔石に埋め込み、魔力捜査を行う。図書室と違い、魔力を捕捉することはできた。それがルロールのものかは自信がないけれど、スウォンからもらった魔石に込められたものとは似ていた。おそらくルロールの魔力と思って間違いないだろう。スウォンはこの魔石を「ルロールの部屋からかっぱらってきた」と言っていたから。もちろん、この魔力――魔石が、どこからか購入したものという可能性もある。だが、ルロールに限って言えば、それは考えにくいだろう。何故なら、魔力の込められた魔石はものすごい高いから。

いつかスウォンも言っていたが、尋常じゃない値がする。随分前の話だが、一度、魔石を買い足そうと街に出たことがあった。だが、そこに書かれていた値段に冗談じゃなく目を剥いた。処理も何も組まれていないただの魔石ひとつで、私の半月分の給料に相当する値がついているのだ。もちろん、買えないことはない。半月分といえど、メイドの給料を基準にした値段だ。スズメの涙程度の。狩りのときの貯金もある。だが、ただの魔石は、現代日本で言う「電池」の役割程度でしかない。そんなものに、給料の半月分の値がつけられていればその価値も窺い知れる。

そんな割の合わない値段設定のものを、わざわざルロールが購入するだろうか。常時魔力を垂れ流すような、魔力に不自由しない人間が。

そう考えれば、部屋に残る魔力はルロールのものと考えて間違いない。間違いない――のだが。

おかしいのだ。残る魔力の跡が。

ルロールの魔力は、部屋と図書室の通路に色濃く残っている。他には、謁見の間と、出入り口である門までの道のり。城をくまなく探索してみたが、他には魔力の跡を確認できる場所はなかった。ただし、門と謁見の間に残る魔力は驚くほど薄い。まるで、ここに来たときに仕方なく通り過ぎたとでも言うような薄さだ。もし、ルロールが帰りにも門を通ったと言うのなら、もう少し色濃く反応してもよさそうなものだと思えるほどに。

もちろん、即興で組んだ魔石から得たただの感触だ。いや、感触というのもおこがましい。ただの勘でしかない。けれど、この直前まで図書室にいました！　な魔力の残りようが違和感を覚えて仕方がないのだ。

「あれだ。図書室で本を読んでたら、異界の門が開いちゃった、てなファンタジーだったりしたら面白いなあ……」

図書室まで辿り着くと、手探りでルロールが良く座っていたという席まで進む。昼間も調べたが、やはり気になって仕方がないのだ。

「暗いなあ」

魔力で明かりを灯せない分、外からの光に頼っているのだろう。窓が大きくとられているので、夜でも歩くのに不自由はしない。外には丸い月が浮いており、図書室内を淡く照らしている。

ルロールはここで何を読んでいたのか。現魔法師団長の息子であり、自身も魔法使いとして城で働くエリート。高度と言われる召喚術を成功させた天才。それほどの人間が、わざわざ他国にまで赴いて読む必要があった本とは、なんだろう。席から一番近い棚に近づいて、タイトルを眺めていく。そこに並ぶのは、百科事典並みに分厚い本ばかりだった。

「時空座標計算法、魔力定着・流動法、意思伝達物質相互変換法、体組織圧縮理論、時空空間外部位置把握法、世界の甘味処百せ――んん？」

タイトルを呟きながら本を取り出して、思わずタイトルを二度見

した。だが、何度見たって同じだ。そこには間違えようもなく「世界の甘味処百選」という本が存在していた。

「ちょ……え？　えええ？」

乱暴に本を開けば、色とりどりのお菓子のイラストと、国名、その店の名、地図らしきものが載っていた。

明らかに、グルメ雑誌の類だった。

「えええ、なんで。ちょ、おかしいでしょ。いやだってここ、魔法書の類しか置いてないって言ってたじゃん。明らかにジャンルが違うじゃない。何で階の違う本が混ざるの」

あまりの動揺に、独り言ということも忘れて脳内の思考をそのまま舌に乗せる。

だって、しょうがないじゃない。あれだけ真面目なタイトルが並んでいたところにいきなりこれじゃあ、驚かないほうがおかしいだろう。なんなの、どうしていきなりお菓子本になるの。

「あ、もしかしてこれはお菓子本と見せかけて実は高位魔法の心得が暗号で隠されて――！」

途中まで呟いて、やめる。

ないない。あるわけない。宝の地図じゃあるまいし、伝達するための手段である本に、暗号など隠して何の意味がある。ただの片付け忘れだろうと背表紙を確認し、ふと気づく。

「分類が、違う？」

お菓子本はもちろんのこと、そのほかの本も全て、分類が違っていた。背表紙に書かれた記号は、一致する棚に収められる。これは、現代日本とほぼ同じだろう。日本の分類は確か人類が発展する上で学んできた順に数字が振り分けられている――とか聞いたような気がするが、この世界ではそうではない。少なくともムーイトではただの記号でしかなく、棚に書かれたものと一致するかどうかで収納された。分類に意味がある場合もあるが、適当に記号を付与することもある。要するに、分類と言いつつきちんとジャンル分けされているわけではないと言うことだ。ここはコーリスだが、本の並び方

に違いはないだろう。先ほどの本は、ぱっと見れば一緒のジャンルに見えなくもない。もちろん、お菓子本は除く。だが、記号上は異なる分類だった。つまり、この本は適当に仕舞われたということになる。現に、手元にある本以外はきちんと書かれた記号に従って収納されている。

と、いうことは。もしかしてこれは、ルロールが読んでいた本ではないのだろうか。

そうであれば、手掛かりになるかも知れない。ルロールは何を考えてここに来たのか。何を調べたかったのか。ここで姿を消した痕跡は残っていないか。嬉々として分厚い本のページを捲る。何か、何かヒントになるようなものが――

だが違和を感じて、ページを繰る手を止める。文字がぼやけて読めない。目を瞬いて、眉間を押さえてみるが瞼は重く、自分の意思とは反対に下りていく。

「あ、れ……？」

この感覚は知っている。忘れもしない。子爵邸のお使いのときの感覚と同じだ。だが、何故。

子爵のときと違うのは、その効き方だ。子爵のときは抗いがたい急激な眠気が襲ったが、今回は違う。じわじわともどかしいほどに緩やかに、体の感覚が奪われてゆく感じだ。

いや、違う。薬の効き方を考察している場合ではない。どうして、眠くなる？　この現象の原因を考えようとするが、眠気が思考の邪魔をする。そういえば、夕食に出された飲み物が、やけに嫌な味だったような気がする。嫌な予感がして一口で止めたが、もしやそれが――

扉側から、ノブを回す音が響く。人の気配と物音に、目が覚めた。まだぼやける頭であたりを見渡して、首を傾げる。

「ん……？」

朝？　いや、あたりはまだ暗い。日付が変わるほどではないだろうが、深夜に差し掛かる時刻だろう。

ここはどこだ？　コーリスの図書室だ。そう、ルロールの痕跡に違和を感じて調査のために忍び込んでいたのだ。

カタ、と物が動く音がかすかに響く。状況を把握していた頭を切り替えて、音のするほうへと視線を向ける。司書だろうかと何気なく目を向けて、息を呑んだ。そこには、盆を持った姫がいた。

なんで。

最初に頭に浮かんだのはそれだった。どうして姫がここにいるのか。こんな夜遅い時間に。食事を乗せた盆を持って、人目を忍ぶように書棚の奥を探っているのは何故なのか。だが、考えるまでもなく答えは出た。姫の指先がある一点を捉えると、カチと何かが嵌るような音と同時に書棚が移動したからだ。

暗闇の中へと姫が消える。私は慌てて、その後を追った。

四十一、ルロール

暗闇の先は階段が続いていた。足元と目の前の姫に気をつけながら、階段を下る。しばらくすると、薄明かりが灯された部屋へと辿り着いた。しかし、そこに広がる光景に、私は言葉を失った。

「精が出ますね」

「ええ、いつもいつも、ありがとうございます」

うずたかく積まれた本の間で、一人の男が床に腰を下ろしている。男は、胡坐をかいて一心不乱に魔法書を読んでいた。姫に声をかけられた男は、魔法書から顔を上げ、微笑して見せた。その顔を見て、体中に震えが走る。忘れもしない。随分前に遠くから見ただけだけれど。彼の顔は記憶に刻み付けていたのだから。

そう。そこにいた男性は――ルロール・ホーボルト、その人だった。

「いいえ。こちら、食事になります」

「なんだか悪いですね。陛――いえ、姫自らこうして差し入れを持ってきていただけるとは」

「いいえ。お気になさらず。あまり根を詰めすぎないでくださいね」

「お気遣い恐れ入ります。ご心配いただいてなんですが、僕も趣味のような任務で楽しませてもらってますから。こんな貴重な本を閲覧できるなんて、夢のようですよ」

「そう言っていただけると、わたくしも嬉しいわ。夕食はこちらに置いておきますので、きちんと召し上がってくださいね」

「はい。ありがとうございました」

ルロールがぺこりと頭を下げる。姫は近くにあった机の上に盆を乗せると、こちらを振り返った。出口へと歩き出す姫に、慌てて道を譲る。しばらくして、背後で書棚が移動する音が響いた。姫の気配が階上からなくなるのを確認して、ルロールの肩を叩いた。

「こんばんは」

「わああっ！？」
突然現れた私を見て、ルロールは文字通り飛び上がった。
「初めまして。ムーイトから来ました、アスハと申します」
「ぎゃああ、幽霊ぃ！？」
悲鳴を上げて、ルロールは読んでいた本を投げ出した。さらに、本気で私を幽霊と思ったか、逃げるように立ち上がって足をもつれさせた。バランスを崩した足が、床に散らばった本のうちのひとつを踏み潰す。床と本は変な角度から入った力に耐え切れず、ずるりと滑る。思い切り良く滑ったルロールは、本の山に頭から突っ込んだ。
「大丈夫ですか」
「ひっ！　こうなったら魔法で――ああ、ここは魔法も使えないんだった！　助けを呼ぶにも誰もいないし、どうしたら……っ！」
あわあわと顔を庇うようにルロールはむやみに腕を動かす。その動きで、近くにあった本の山が腕に当たる。また雪崩が起きた。
「あの……」
すごい混乱ぶりだ。結構な数が頭に当たっている気がするのだが、大丈夫なのだろうか。心配になって埋もれたルロールを掘り当てようと手を伸ばす。だが、私の手から逃げるようにルロールは後ずさった。
「な、何者ですか、あなたは……っ！」
「えっと……、ディレスの元で働いております。アスハと申します」
「――は、ディレスの？」
知っている名を聞いて理性を取り戻したのか、ルロールは動きを止めた。
「はい。あなたにお願いがあって参りました」
「願い……？」
「私を、元の世界に帰してください」
ルロールは、ぽかんと口を開けて私を凝視した。
「元の世界、ですか？　家、とかではなく？」

「はい。元の世界、です。随分前のことになりますが、ルロールさん、殿下の誕生際の前に一度、異世界召喚の実験をされていますよね？」
「ああ、そういえば、リハーサルとして一回――え？」
「そのときに、召喚されたのが私です」
「……」
ルロールは、無言で目を瞬いた。
「信じられませんか」
「いえ、唐突過ぎて頭が追いつかないと言うか――確かにあの時、微妙な手ごたえはあったので、何も召喚されていないのはおかしいとは思っていたのですが――」
「ええ。位置がずれて召喚されたみたいですね。ちなみに、召喚された場所はスウォンさんの宿屋でしたよ」
「スウォンの宿屋ですか……誤差としてはあり得なくもないか」
ルロールは目を伏せて、手を顎に当てて考え込んだ。何度か頷く姿からして、何かしら思うところがあるのだろう。納得できたのならそれで良い。私は先を促した。
「ご納得いただけましたか？　その失敗で私は意味も分からずこちらに喚び出され、帰ることもできずに何日もここで過ごすことになったんです。お願いですから、私を元の世界に帰してください」
だが、ルロールはすぐには肯かなかった。困ったように眉を下げ、私を見上げる。そして、少し躊躇うように口ごもってから、言葉を口にした。
「えっと、すみません。その前にちょっとお願いがあるんですが」
「なんですか」
「手を握らせてもらっていいですか」
眉を寄せる。何がしたいのか。まさか、芸能人ならぬ異世界人と握手したいなんて馬鹿げた理由でもあるまいし。
「まあいいですけど……、どうしてですか」
それでも、相手は自分の帰還の成否を握っている人物だ。考えな

しに却下するのは躊躇われた。仕方なく、疑いの目を向けつつ理由を尋ねれば、ルロールは慌てたように手を振った。

「あ、あの、変な意味ではなくてですね。貴女の言っていることを確かめたいと言うか――召喚された、と言うのが本当なら、魔力にその痕跡が残るはずなのでそれを確かめたいと言うか。あ、もちろん疑っているわけではないのですが！」

そういうことか、と腑に落ちる。むしろ、そういう理由なら最初から言ってくれてもいいのに。

「そういうことなら、どうぞ」

「ありがとうございます」

手を差し出すと、ルロールは壊れ物を扱うような手つきで私の手を握りこむ。そして、目を瞑って小声で何かを呟きだした。

「――っ」

軽い痺れが握られた腕を走り抜ける。突然の痛みに声を漏らせば、ルロールが慌てたように手を離した。

「すみません、痛かったですか」

「いえ、ちょっとびっくりしただけです」

「最初に言っておけばよかったですね。気が利かなくてすみません」

「いえ、もう大丈夫ですから」

言って、もう一度手を差し出すと、ルロールは首を横に振った。

「いいえ、もう充分です。確かに、僕が召喚に失敗したせいでこちらに喚ばれた方だということがわかりました。こちらの手違いでお喚びし、気づかず辛い思いをさせたこと、お詫びいたします」

ルロールは腰を折って深々と頭を下げた。その最上級ともいえる礼に、逆にこちらが慌てた。謝られて当然とは思っていたけれど、実際目の前にして詫びられると、もういいよと水に流したくなるのは日本人の性質だと思う。

「それはもういいです。それより、私を元の世界へ戻してほしいのですが」

「ええ、それはもちろん。ですが、すみません。すぐにはちょっと

無理ですので、もう少しお時間をいただいてもよろしいですか」
「どうしてですか？　できれば、今すぐにでも元の世界に戻してもらいたいんですが」
「ええ、分かってます。でも、ここ、大規模な魔法は封じられているんですよ。上とは違って灯り程度の魔力は出力できるんですが、召喚規模ではさすがに無理ですから」
「じゃあ、ここを出れば良いってことですよね？　すぐに出ましょう、すぐに出て、ちゃちゃっと元の世界に戻してください」
「待ってください、ここを出てもすぐには無理――」
言いながら、私は階上へと駆け出した。ルロールに会えたことと、ルロールが思った以上にこちらの立場に理解のある人間だということで気が急いていた。ルロールの制止の言葉も聞かず、階段を駆け上がり、出入り口に手を添える。薄暗い闇の中で、手探りに扉の取っ手を探し出す。それらしい凹みに手を掛け、力を入れて扉を引いた。
だが、すぐに絶望が私を襲った。
「嘘……」
呆然と、呟く。びくともしない。さっき、姫が簡単に開けていた扉が、びくとも。嫌な予感に冷たい汗が背筋を滑り落ちる。
「ああ、アスハさん。落ち着いてください、召喚は僕でも完璧に扱える術ではなくてですね」
「ルロールさん！」
「はい！？」
勢い良く振り向けば、ルロールはびくりと肩を震わせた。だが、そんなことはどうでもいい。
「すみません、ここ、引いてみてくれませんか。扉が開かないんです」
「え？　あ、はい。わかりました」
身を引いて扉の取っ手を示せば、ルロールは首をかしげながらも頷いた。位置を交換して、ルロールが扉の前に立つ。扉の凹みに両

手を掛け、ルロールは力を込めた。
「やっぱり……」
だが、扉はびくともしない。
「ああ、ダメですね。開きませんねえ」
青ざめる私に、ルロールは間延びした声で呟いた。あまりにのんびりした態度に苛立って、私は声を張り上げた。
「開きませんね、じゃないですよ！　これ、閉じ込められたってことじゃないですか、私たち！」
せっかくルロールまで辿り着いたのに。すぐそこに帰還の道が開けているのに。そう思うと、自然と声は荒くなる。
それに、もうひとつ。嫌な予感が先ほどからひしひしとするのだ。
だが、ルロールは私の焦りを気にした様子もなく、悠長に頷いた。
「そうですねえ」
「そうですねえ、って、なんでそんなにのんびりしてるんですか！」
「気持ちは分かりますが、落ち着いてください。そうですね、ここにいても意味がないですし、一度下へ下りませんか」
「……わかりました」

四十二、盲目

「どうぞ」

ルロールは私を椅子に座らせて、温かい紅茶を勧めた。鼻にカップを寄せて香りを楽しみ、一口だけ舌に乗せる。美味しい。変な味はしないことにほっとして、勢い良くカップを呷った。

「あれ、なんでここでお茶が？」

温かい熱がのどを通り抜けて、気付く。ここは図書室だ。隠し部屋になってはいたが、本が揃っているのだから、間違ってはいないだろう。なのに、温かいお茶がどうしてここにある？

「ここって、もともとは私室を兼ねていたそうなんですよ。ずいぶん昔のことですけどね。司書がここで寝泊りして、私物の学術書をここに置いて読んでいたそうです」

「それって、良いんですか？」

公私混同も甚だしい。日本でそんなことしたら、非難轟々の騒ぎではない。だが、この世界で日本の常識が通用するとは限らない。控えめに尋ねると、ルロールは苦笑した。

「そうですね。僕も初めて聞いた時にはずるいと思いました。でも、そうして集めた本が、ここにあるものたちです。その人は、本当に本が好きだったんでしょうね。ここにある本はすべて、他では読むことのできない貴重な書物ばかりです。普通の人には全く面白くもないでしょうけれど、その手の専門家にとっては垂涎ものばかりですよ。かなり年代ものもありますが、状態も良いですしね」

「確かに、珍しそうなタイトルが並んでますね」

ルロールは、手元にあった本へと手を伸ばした。目を細めて、愛しげに表紙を撫でる。その様は、まるで愛しい恋人に触れるかのようだった。

ついさっき、私に驚いて踏み潰していたような気がするが、そこは忘れておくことにした。

「ええ。こんなに貴重な書物を読めるというのは、本当に幸せなことです。変な話、僕は一生ここに閉じ込められてもかまいません」
恍惚とした表情で、ルロールは呟く。まるで愛を語らうかのような熱の篭りように、ルロールの頭が心配になった。
「それはどうかと思いますけど、仮にルロールさんが良くても、私は困ります」
「ああ、すみません。脱線しましたね。アスハさんもここに居ろ、と言っているわけではないです。ただ、もともと私室として作られていたので、生活するに最低限の設備がありますよ、と言いたかっただけです」
「仰りたいことは分かりました。一応、設備は整っているから、すぐに命の危険を考えなくて良いということですね」
小さなものだが、浴槽や手洗い場もあるようだ。本当に、ここで生活することもある程度は可能なのだろう。だが、先ほども言ったが、私はここで生活したいわけじゃない。ルロールはどうだか知らないが。
「ええ。で、食事は姫が日に一度、こちらに持ってきてくれます。その時に外に出たいと頼めばいいんですよ。確かに、こちらから扉が開かないのは不思議ですが、おそらく立て付けが悪くなったとかそんな理由でしょう。ずいぶん古い部屋ですからね」
まさに軟禁状態じゃないか、と思ったが口にするのはやめておいた。ここの生活を満喫しているルロールに何を言っても無駄だろう。珍しい魔法書を前に語るルロールは、恋に浮かされた少女だった。むしろ、まだここにいたいと言わないほうが意外なほどだった。変なことを言ってへそを曲げられたくはない。
「そうですね。あの、ルロールさんは今まで外に出たことはないんですか」
「そういえば、ないですねえ。コーリスに来て三日目くらいでここを案内されて、それっきり。食事は運んできてもらえるし、特に不都合もなかったですから」

「そうですか。では、今、食事を持ってきてもらったばかりだから、次は明日の夜ですね」
「はい。そのときに頼めばいいんですが、そういえばアスハさんはどうやってこちらに来たんですか。その口ぶりだと、姫に案内されて、って感じではないですね」
「ええ、それなんですが。あの、その姫っていうのは、リシア姫――リシア女王陛下ですよね。ここに食事を届けているのは」
「そうですよ」
「おかしいですよ、それって。私、ディレス様の遣いということでルロールさんに謁見を申し込んだんですが、姫はルロールさんはここには居ないって仰ってましたよ」
「え？」
「門番の人もルロールさんはてっきり帰ったものだと思ってたみたいで。ルロールさんの手掛かりが掴みたいからって無理言って中に入れてもらったくらいなんですよ」
そう言うと、ルロールは目を見開いた。
「え、まさかそんなはずは。姫はずっと僕に差し入れてくれていたんですよ？」
「姫は確かに友好的で、図書室とルロールさんが使用していた客室を案内してくれはしたんですけど。ルロールさんがここに居るとは一言も仰いませんでしたよ」
「そんな……」
「それで、ルロールさんの魔力の跡をたどってみたら、客室と図書室くらいしかほとんど魔力が残ってないじゃないですか。なんだかおかしいなと思って図書室を調べてたんですけど――」
そこまで言って、口を噤む。これ以上を口にするべきか。これは私の推測だ。眠くなったのが、必ずしも夕食が原因とも、盛った犯人が姫とも、言い切れない。
「どうしました？」
黙ってしまった私に、ルロールが心配げに顔を覗き込む。その瞳

を覗き込んで、迷うように視線を逸らす。証拠もないのに犯人扱いなど、陰で悪口を言うようなものだ。言ってしまって良いものだろうか。悩むように考えをめぐらせて、迷いを振り切るように頭を振る。確かに、どうあっても告げ口だ。褒められたことじゃない。けれど、ここは異世界だ。しかも、ムーイトよりさらに事情の分からない他国。最悪の事態を想定して動かねばならない。今までを思い出してみろ。あり得ない、とも思うような事態が何度も起こっていたではないか。そう、用心するに越したことはない。

私は覚悟を決めて、ルロールを見据えた。

「いえ、図書室を調べていたんですけど、そのあと、眠くなってしまったんです」

「ああ、長旅に慣れない場所ですもんね。疲れが出たんでしょう」

労いの言葉をかけるルロールに、頭を振って否定する。

「いいえ。違います。あれは、疲れから来る眠気じゃない。あの、抗いがたい眠気は」

「あの……？」

断定する私に、ルロールは困ったような視線を向けた。これから口にする内容を悟ったか、私の気迫に気圧されたか。だが、ここで止めるわけにはいかない。ひとつ息を吸って、続きを舌に乗せた。

「ジェイル子爵はご存知ですか？　彼に飲ませられた薬と同じ効き方でしたよ、あの眠気は」

「え、それって……」

「直前に振舞われた夕食に盛られていたんでしょうね。多分――水に。変な味がしたから、一口で止めておきましたけど」

言い切ってルロールを見上げると、目を丸くしてこちらを見つめていた。確かに、突然こんな事を言われても困るだろう。何かフォローをと考えていると、ルロールが口を開いた。

「味が分かるんですか……」

ルロールは微妙な顔で突っ込んだ。

うるさい、私だってこんな特技身に着けたくなかったよ。という

か、多分味じゃなくて勘で判断したというのが正しいだろう。というか、突っ込むところはそこか。

フォローを、とか考えた自分が馬鹿らしい。気を使うのがアホらしくなって、私はさっさと話を続けた。

「それで、少しの間眠ってしまったんですけど、物音がして目を覚ましたんです。なんだろうと思って見ていれば、姫が隠し通路みたいなのを開けているじゃないですか。びっくりして、後をついていって――ルロールさんを発見した、ってわけです」

「そうか。それにしても、よく姫に見つかりませんでしたね。ここでは魔法も使えないのに――僕も全然気配を感じなかったので驚きましたよ」

「ああ、それは私が認識されづらい体質だからですよ」

「え？」

「それはともかく、姫はルロールさんが居ることを知っていながら隠していた。さらに、私に薬を盛った。明らかにおかしいですよ。信用して良いんですか。いえ、本当にここが安全だと思って良いんですか」

私の体質のことは良い。ルロールが信用できるかも分からないし、あまり詳しく説明したくはない。それより何より、今はもっと考えなければならないことがある。姫の態度は明らかに怪しい。ルロールを知らないと言いつつ、自ら食事の世話をしているのだ。まさか夢遊病じゃあるまいし、双子なわけもないし。夢遊病ならもっとふらふらとしているだろうし、ルロールとて気づくだろう。双子ならば私が「リシア女王陛下」と口にした時点でルロールから指摘が入るはずだ。つまり、彼女は間違いなく正気の上でルロールのことを黙っていた。そしてこれは、知らなかったで済む問題じゃない。私は敢えて「ディレスの遣い」と名乗っているのだ。わざと――知っていて黙っていたとなれば、それは何かを企んでいるからだ。

「ううん。そう言われると、なんとも言えないですけど。仮に、僕がここで閉じ込められたとしても、便りがなくなればディレスあた

りが気付いてくれるから大丈夫じゃないかなあ」
だが、ルロールは間の抜けた声でなんとも楽観的な答えを返した。
「便りって……それ、どうやって渡してるんですか？　魔力も効かないこの場で。それ、ちゃんとディレス様の元に届いてます？」
眉をひそめて聞き返す。だが、ルロールは気にした様子もなくぼんやりと宙に視線をさまよわせた。
「あー……、確かに。姫に渡してますから、もしかしたら届いてないかもですね。姫がわざと僕を閉じ込めているんだとしたら」
「ダメじゃないですか、ルロールさん。いくらなんでも、のんき過ぎますよ」
いや、「かも知れない」などと言っている場合じゃないだろう。もっと焦るべきだろう、この事態は。けれど、ルロールは顎に手を当てて、考え込むように首を傾げた。
「そうですかね。でも、姫のあの態度、どうも僕をどうにかしようという気はないように思えるんです。僕も付き合いが長いわけではありませんけど、根は悪い人じゃないはずですよ」
そして、極め付けがこの台詞。根がお人好しなのか知らないが、随分と姫の肩を持つ。何だろうか、実は以前から交流があった間柄なのだろうか。ルロールは侯爵だし、それなりの地位と役職を得ているはずだ。以前から姫と面識があってもおかしくはない。だが、ここまでの状況証拠を突きつけられてもなお、姫を庇うルロールの心情は理解できなかった。
「根が悪いわけじゃない人が、食事に薬を盛りますか」
「いやまあ、そこは……きっと何か理由があるんですよ。だって、閉じ込めるにしては穴だらけですよ。僕がその気になれば、姫を押しのけて外に出るくらいできますから。いくら僕がひょろくても、姫一人に敵わないほどではないですよ」
口調を若干きつくして問えば、ルロールは口ごもった。それでも、答える内容には一理ある。確かに、甘いのだ。閉じ込める目的でいるにしては、警備が。

「それは確かに、そうなんですけど……、それでは、どうします？」
「次に姫が来たら、普通に一緒に外に出ましょう。それでディレスに連絡を取って、ムーイトに戻りましょう」
その言葉に、一瞬息を詰まらせる。背筋に伝う汗と下がる体温。顔が引きつるのを悟らせないよう意識しながら、鸚鵡返しに問う。
「ムーイトに、戻るんですか？」
「はい。僕、今ほとんど手ぶらなんですよ。あの複雑な術を構築するには、組み立てた術式を保存する媒体が必要なのです」
「そうですか……」
つまり、どうあってもディレスに会わなければならないらしい。まさか再びムーイトに戻ることになるなんて考えてもいなかったから、ディレスのことなど気にせずに無断で飛び出してきたのだ。顔を合わせるのは気が重い。あからさまに声のトーンを落とす私に、ルロールは不思議そうに顔を覗き込んできた。
「あれ、何かまずいですか？　アスハさんもディレスの下で働いていたのなら、一度戻った方が良いかと思ったんですが。挨拶とかしたいですよね？」
「ええ、まあ。それについては、ここを出てからゆっくり話しましょう」
純真無垢な笑顔を向けるルロールに、さりげなく視線を逸らした。話題を続けるのが辛くて、適当に誤魔化した。話を逸らす私に、ルロールは少しだけ首を傾げるが、気にせずに話を続けてくれた。
「それで、ないとは思いますけど、もし姫が僕の要求を拒んだら、アスハさん独りでここから外へ出て下さい。姫はここに僕しかいないと思っているはずですから、隙をつけば簡単だと思います」
「分かりました。タイミングを見計らって、外から扉を開ければ良いですね」
「はい。外に出れば転移術が使えるはずですから、一緒にムーイトに戻りましょう」
「はい。元の世界に戻れるまで、よろしくお願いします」

「いいえ、こちらこそ。早く元の世界に戻れるように僕も最大限お手伝いさせていただきますので、よろしくお願いします」

言って、ルロールはぺこりと頭を下げた。そして、待ってましたとばかりに私を見つめて口を開く。

「ところで、夜まで暇なので――本を読んでいても良いですか？」

「……お好きにどうぞ」

私の返事を聞くや否や、ルロールは本の山へと嬉しそうに埋もれて行った。

四十三、欺罔

規則的な足音が階上から響く。その音に、ごくりとのどを鳴らし、薄暗い出口へと視線を向ける。

カツン、と硬いものどうしがぶつかる音。

徐々に近くなる音に、私は知らず身を強張らせる。来た。そう、日に一度の差し入れを持ってきた姫が、ここへ。

「こんばんは」

邪気のない笑みで、姫はルロールに声を掛ける。食い入るように魔法書を見つめていたルロールは、その声にはっとしたように顔を上げた。

「こんばんは。気付かなくてすいません、集中していたもので。今日もありがとうございます」

「いいえ。今天才と誉れ高いルロール殿のお役に立てるのでしたら、安いものですわ。どうぞ、思う存分ご覧になってくださいな」

「そのことなんですが、姫。僕ももうずいぶんとこちらにご厄介になりました。ここにある本もあらかた読み終わりましたし、もうそろそろ自国へ戻り、術の完成に力を入れたいと思うのですが」

遠慮がちに、ルロールは言葉を舌に乗せる。姫はその言葉に軽く目を見開く。ちらりと部屋の隅の差し入れに視線を移した。部屋の隅には、昨夜届けられた食事が置かれている。姫はそれを見て、表情を消した。昨夜差し入れられた食事は、ルロールが時間がもったいないと言ってろくに口にしていなかった。食い入るように食器を見つめていた姫だが、すぐに満面の笑みでルロールを見上げた。

「あら。遠慮なさらないで。あらかた読んだと言っても、召喚に関するものだけでしょう？　ここにある書物、まだまだ全て読みきるには時間が足りないのではなくて？」

言いながら、姫は扇で口元を覆う。

「ええ、そうですが、でも」

「この本たちは、ここでしか読むことができない貴重なものばかりです。ご多忙なルロール殿のこと、ムーイトでもお忙しいでしょう。このような機会が、もう一度訪れるとは限りませんよ」

「うっ……そう言われるとあの本もまだ読み終わってなかったんだった。あ、お菓子レシピに至っては、手をつけてさえいないっ」

「それに、わたくしも……。ルロール殿が帰ってしまわれるのは寂しいわ。ね、もう少しくらいよろしいでしょう？」

ルロールの頬に手を添えて、姫は囁いた。桜色の唇が誘うように開かれている。思わず啄みたくなるような唇を前にして、ルロールは頬を染めて顔を背けた。

「そう、ですかね……うん、もう少しくらい、良い、かも……」

初心な態度に嗜虐心を刺激させられたか。姫は口の端を吊り上げる。その蠱惑的な笑みは、見るものを惹きつける魅力を宿していた。

そのまま、姫はするりとルロールの首へと手を滑らせる。闇に映える白い指が、ルロールの首筋を撫でる。艶めかしい動きに、私は知らず喉を鳴らした。固唾を呑んで展開を見守っていると、姫の指はルロールの襟を捕らえた。気付いたルロールが視線を合わせるが、遅い。

次の瞬間、姫はぐっとその襟を引いた。

「何を――」

突然の行動に目を見開き、ルロールは問う。だが、疑問の言葉は最後まで紡がれることはなかった。ルロールは頭を引き寄せられ、その言葉を塞がれた。角度を変えて深く口付ける合間に、ルロールのくぐもった声が漏れる。口内を貪る水音が断続的に響き、与えられた唾液を飲み下す音が生々しく辺りに響いた。

私が居ることも忘れ、二人の行為は止むことを知らない。白熱しだした行為と逆に、私の頭は急激に冷えた。

なんでいきなり、ラブシーン見せ付けられてるんだろう。これはアレか、実は姫はルロールが好きだったとかそんなオチなのか。国に帰したくなくて一芝居打ったっていう、ありがちロマンスストー

リーだったのか。
あまりの急展開に呆然と二人を眺める。ルロールは姫に翻弄されるようになすがままになっていた。全くの無抵抗。まだ終わりそうもない。もしかして、満更でもないのだろうか。それとも、姫のテクニックが凄いのか。どちらでも良いが、ここにこのまま残るのは出歯亀もいいところだろう。とりあえず場を外そうと階段へ体を向ける。
だが、身を翻した途端、背後で重いものが倒れる音がした。
何事かと振り返って、言葉を失う。
「おかしいわね。目の前のものにしか興味を抱かなくなっているはずなのに」
そこには一人口元を拭う姫の姿があった。
「いつの間にかあの娘もいなくなっているし、何か変だわ。二人セットで引き合いに出せば、良い取引材料になると思ったのに」
冷めた目で、姫はルロールを見下ろす。ルロールは姫の足下でうずくまり、ぴくりとも動かない。先ほどまで熱い愛を交わしていた相手に対する視線とは思えぬほど、姫の瞳は冷え切っていた。
「さて。これからどうしたものかしら。すっかり予定が狂ってしまったわ」
夕飯のメニューを気にするような口調で、姫は呟く。口元に扇を寄せて、姫は艶やかに笑んだ。
「まあ、彼女は良いわ。ディレスのあんなに慌てた顔も見れたことだし」
パチンと勢い良く扇を閉じて、姫はこちらへと体を向ける。途端、真っ直ぐと向けられた視線にびくりと体を奮わせた。姫はこちらへと一歩足を踏み出す。慌てて、出口へと駆け上がる。呆然としている場合ではない。
「そうね。彼に関しては予定通りで行きましょう。態度が急変したのは気になるけれど、量を増やせば良いだけだわ」
くすりと笑いを漏らす姫の声が、背後から追いかけてくる。背後

に迫った姫に触れぬように慌てて避けて、距離をとる。姫はぽっかり開いた壁を振り返ると、開いた扉のすぐ側に手を添えた。指先がある一点を探し出し、止まる。カチリと音がして、不自然に開いた扉は閉ざされた。

姫が図書室から姿を消したのを確認して、隠し扉へと飛びついた。扉の周辺を探るが、闇は視界の邪魔をする。指先に神経を集中させて、微かな違和を見つけ出す。辛抱強く指先を滑らせて、四角く縁どるように刻まれた微かな溝を感じる。

「ここだ……！」

見つけたそこに力を入れて指を押し込んだ。引っかかるような微かな抵抗の後、指先がわずかに沈む。数泊の後、カチリと音が響いて扉が開いた。階段を足早に駆け下りて、うずくまるルロールの元に駆け寄る。

「大丈夫ですか、ルロールさん！」

乱暴に体を揺らす。だが、ルロールはぴくりとも動かない。嫌な予感に青ざめる。

どうしよう。もし、手遅れになってしまっていたら。

足先から寒気が這い上がる。私が引き金を引いたとも言えるのだ。仕方ないことだったとはいえ、知らなかったとはいえ、私に責任があるわけじゃないとはいえ。人の命を左右するのは――

いや、違う。私が今すべきことは、自己嫌悪に陥ることじゃない。少しでもルロールが助かる可能性を高めることだ。

飲まされたであろう薬を吐き出させれば何とかならないだろうか。いや、大量に水を飲ませた方が良いか？

とりあえず何かしなきゃと震える手でルロールに手を伸ばす。ルロールの肩へと指先が触れる。

その瞬間、ルロールは寝返りを打った。

「んー……、むにゃむにゃ」

同時に、気の抜けた寝言があたりに響く。

「な、んだ……」

規則正しい寝息に、腰が抜けてへたり込んだ。体温は正常、顔色も良い。体に不調はない模様。少なくとも、即効性の毒ではなかったようだ。

「もう食べられないですよぅ、んー……、んにゃ」

何か食べている夢でも見ているのか。ルロールは幸せそうな顔で口をもごもごと動かした。その呑気な顔を見て、思う。

――蹴り起こしたい。

優しく声をかけても、揺すっても、叩いても、ルロールは起きなかった。いわゆる昏睡状態なのだろう。鼻を摘んで口を塞いだときはさすがに起きたようだったが、すぐに眠ってしまって意味がなかった。会話も成り立たず、意志疎通も出来ない。

仕方ないので、最初の打ち合わせ通り、客室からルロールの荷物を取りに行った。ルロールから聞かされていた荷物を探し出し、隠し部屋まで運ぶ。そのあと、荷物をまとめて身支度を整えた。ルロールが起き次第すぐにここを発てるように。

結局、ルロールは夜明け前になってようやく目を覚ました。正確に言えば、何とか頭が働くようになった、と言うべきか。一定時間ごとに体を揺すって、その反応を確かめていたからだ。昏倒してから五度目で、ルロールは何とか会話が成り立つレベルで目を覚ましてくれた。

「んー…それでは、姫はぁ……、僕のことを……謀って、いたんですねえ……」

とろんとした目を瞬かせながら、間延びした声でルロールは言った。まるで、人事のような物言いだった。その上、気持ちよさそうに伸びまでしている始末だ。ほぼ完徹となった私は、その姿に殺意を覚えた。

「そうですよ、ですから、一刻も早くここを出ましょう。夜が完全に明けてしまったら、ここから出るのも難しくなります」

階段の方を見上げながら、ルロールを急かす。内側から開ける手段はまだ分かっていないから、扉は開けたままだ。もし姫が様子を見にきたら、不審に思われるだろう。いや、姫だけじゃない。誰かが見回りに来るかもしれない。それに、もたもたしていたら図書室が開館する。騒ぎになれば、脱出が難しくなるのだ。

なにせ、ここの国では女王である姫が一番の権力者だ。姫が黒といえば、白も黒になる。何か行動を起こすなら、姫に見つからないように行いたい。

「そうですねえ、では荷物を持って……」

言いながら、ルロールは書棚へふらふらと歩き出す。書棚の前でぴたりと足を止めると、本に顔を近づけて停止した。そのまま、びくとも動かない。

「何、やってんですか」

ルロールは本に手を添えて、鼻先が触れるほどの近距離でじっとその場に佇んでいた。

「いや、これで最後になるから、お別れの挨拶をしようと思って」

真顔でルロールは一段一段に手を滑らせていく。その手はまるで壊れ物を扱うように優しく、その瞳は愛しい恋人を見送るかのように切ない。その狂気じみた行動に、言いようもない寒気が全身を駆ける。

「時間がないんです、急いで下さい」

「あああ、まだきちんとお別れが済んでないのにいぃ……」

強引に手を取ると、ルロールは情けない声を出した。手を引かれながらも、未練がましく、ちらちらと背後に視線をやっている。

「ほら、あと少しですから！」
階段を駆け上がり、図書室の扉を開く。本の独特のにおいが充満した室内に、新鮮な空気が入り込む。まだぼうっとしているルロールの手を乱暴に引いて、図書室の外に出る。扉を閉めると同時に、背後のルロールから妙な違和感が立ち上った。
「ん。魔力が戻りましたね」
胸の前で手を軽く握って開くを繰り返して、ルロールは呟いた。言われてみれば確かに、何かが違う気がする。それが何か、と言われれば言葉にするのは難しいのだけれど。確かに何かが違うのだ。これがきっと、魔力と呼ばれるものなのだろう。
「魔法は使えますか」
「ええ。結構取られたみたいですが、何とか」
気のせいか、話し方もはきはきしている。瞳に宿っていた嫌な濁りが消えていた。
「薬の効果が切れたんですか？」
「いえ、切れてはいないと思いますよ。ただ、魔力が戻って使えるようになったので、自浄して凌いで――」
途中で、ルロールは私の手を取った。胸元に抱きこまれ、視界がルロールの黒衣で包まれる。
「何を」
突然、何を。そう尋ねようとして、理解した。背後を空気を切る音が耳に届き、次いで嫌な気配を感じたからだ。
「あらぁ。惜しかったわあ」
ぞくりと緊張が走る。間延びした声は、今最も聞きたくない声だった。
「ルロールさん、魔石を」
ルロールの胸に顔を押し付けたまま、小声で言う。ルロールは少し戸惑ったように身じろぎした。当然だろう、ここに魔法のエキスパートがいるというのに、わざわざ自分で応戦すると言っているのだ。

「違います、連絡用のを。時間を稼ぎます。その間に、計画通り術を組み上げてください。あんまり持ちませんから、手早く。それから、気付かれないように」

「わかりました」

割と無茶な注文をしているにもかかわらず、ルロールは力強く頷いた。差し出された魔石を掌に載せる。もともと私が持ってきた二つに、ルロールの私物のひとつだ。ここを出たらディレスへ連絡を取る予定でいたのだが、そのときに使用するはずのものだ。もともとは、任務の定期連絡として持たされたものらしいが、そんなことは今はどうでもいい。

「まあ、可愛らしい。わたくし相手に応戦する気？」

姫は誰も連れていなかった。おそらく、ルロールの様子を見に来る程度の軽い気持ちで訪れたのだろう。それでも、強気に挑発してくるのは、自身の腕に絶対の自信があるのか。それとも、はったりだろうか。どちらにしても、魔法の使えない私では相手にならないのは目に見えている。少しでも相手に油断してもらうに越したことはない。

「誰かさんのせいでルロールさんが骨抜きなので、仕方ないじゃないですか」

ルロールが使えないことを仄めかせながら、魔石に意識を走らせる。

連絡用の魔石から、適当にそれっぽい処理を探し出す。連絡用の魔石だから、こちらの声を記録して相手側へ転送する処理があるはずだと当たりをつけたのだが、案の定。目的の処理はすぐに見つかった。抜き出して自分の使用していた魔石に組み込んで、調整する。この程度の組み換えなら、わけもない。似たような処理をコピって貼り付けてちょちょっと数値をいじる程度のものだ。すぐにできる。

「ふぅん？　変だと思っていたけれど、貴女がルロール殿を誑かしていたのね」

姫は少しだけ眉を顰め、扇で口元を覆った。

「人聞きの悪い。食事に惚れ薬を混ぜ込んでいた貴女が言いますか」
「あらぁ。お見通しだったのね。さすが、ディレスが寄越しただけあるわあ。優秀ね」
「お褒めに預かり、光栄です」
「でも、詰めが甘いわね。ルロール殿もまだ使えないようだし、貴女一人でわたくし相手に歯向かおうなど愚の骨頂。ふふ。時間稼ぎをしていたみたいだけれど、意味はなくてよ。時間稼ぎをしていたのは、貴女ではなくて――」
ふわりと姫のドレスの裾が舞い上がる。姫の体が、青い光で包まれた。自身の絶対の優勢を悟り、姫は不敵に笑う。だが、私はにっこりと笑い返してやった。
「勘違いしているみたいですけど。私、ディレス様の遣いじゃないですよ」
「は？」
姫の動きが止まる。その隙を逃さず、さらに畳み込むように言葉を重ねる。
「違います。あの人の味方のつもりは爪の先ほどもありません。まあ、土産として貴女の言質を差し出すくらいはしますけど」
その言葉に、姫は面白いほど身を強張らせた。言葉の意味を飲み込むように、私の手の上の魔石を凝視した。
「アスハさん！」
ルロールの呼び声が響く。さすが、天才。難易度の高いとされる術をこの速さで一から組み上げるとは。私なら絶対に出来ない。ムーイトの図書室やディレスの書棚で調べたことがあるが、あんな膨大な術式を構築するのは無理だ。常人の成せる技じゃない。
呆然としている姫を尻目に、発光し始めた魔法陣の中へと身を寄せる。
「な――待ちなさい！」
姫の魔力に呼応しているのだろう。ドレスや髪の毛が怒りを表すように膨れ上がる。けれど、魔力は対象を捉えることは出来なかっ

た。

「では、御機嫌よう、姫」

私とルロールの姿は、既にそこにはなかったからだ。

四十四、転移

目の前が白く霞んだと思ったら、すぐに見たことのない雑木林が視界に広がった。青臭い葉の匂い。吹き抜ける風が、草葉を揺らしてざあっと音を立てた。周囲を見渡すが、視界に映るのは木々ばかり。街はおろか、人すら見当たらない。ここは一体、どこなんだろう。そう思って、ルロールに尋ねようと背後を振り向く。だが、あるはずの人影がない。慌てて視線を巡らせば、足下から呻くような声が耳に届いた。声のするほうへと視線を下ろせば、ルロールが地べたに這いつくばっているのが見えた。

「無茶しますね、アスハさん」

「え、っていうか、どうしたんですか」

慌ててしゃがみこめば、ルロールはぐるりと寝返りを打つ。仰向けになったルロールは、宙を見つめながら軽く息をついた。

「すみません、ちょっと……魔力切れです」

「魔力切れって、大丈夫なんですか」

顔を覗き込んで尋ねれば、ルロールは目を軽く瞑った。そのまま、疲れを乗せた声を喉の奥から響かせる。その様子をただじっと見守っていると、ルロールはすうっと小さく息を吸った。草木のささやかな音の中で、ルロールの呼吸が数度響く。少しの無言の後、ルロールは目を開けて頬に貼り付いた髪をかき上げた。

「大丈夫です、少し疲れたくらいで命に別状はありませんから。それより、これからのことなんですが」

「そういえば、ここはどこなんですか？　見たところ、ムーイトではないみたいですけど」

「ああ、ここはコーリスとムーイトの境にある街道……を少し外れた林道です。すぐには追って来れないはずですから安心してください」

「はあ、それなら良い……んですか？」

「良くはないです。街道なんてあまり治安の良い場所じゃありませんから。長居はすべきじゃないですね」

確かにそうだ。街道とは、領地と領地をつなぐ道。よって、ここで起こった犯罪は、その責任が不明瞭になる。誰も、自分の土地以外の厄介ごとなど背負い込みたくはない。自然、街道の取り締まりは緩く、悪事がのさばる結果となる。

「それじゃあ、あんまり悠長にここで休んでいられないんじゃないですか？」

そうなると、早々にここを離れたほうが良いのではないだろうか。ここで盗賊にでも襲われたら都合が悪い。私一人であればどうとでも出来るだろうけれど。

そう思いつつ尋ねれば、ルロールも頷く。

「ええ、そんなに長くは休んでいられませんね。まあ、治安が悪いって言ってもまだ朝ですし、大丈夫だとは思いますけど。一応跡は濁しておいたので、数時間は見積もっても良いはずですよ」

「そうですか……でも、これって、あまりのんびりしている状況じゃないのでは？」

数時間は見積もって良い、とは言ったが、逆に言えば数時間しか余裕がないということだ。それだけの時間でルロールの魔力が元に戻るとは思えなかった。少なくとも完璧には無理だろう。

案の定、ルロールは苦い顔をして頷いた。

「そうですよ。でも、しょうがないじゃないですか。あの場ですぐに転移の術を使えなんて。いくら僕でもそんなにすぐにムーイトまで飛べる術式は組めませんよ。おまけに言えば、あの図書室でかなり魔力を取られていたみたいですし」

「すみません。でも、ルロールさんに任せて応戦するのも違う気がしたんです」

素直に謝ると、ルロールは苦笑した。

「いえ、咎めているわけではないですよ。そうですね。僕が前に出ていたら、姫は躊躇わずに他の人間を呼んだでしょう。普段の僕な

らそれでもどうにか出来たかもしれないですけど、万全じゃない今日の僕では確実に分が悪い。アスハさんが前に出てくれたのは、多分、最善だったんでしょうね」

そう言った後、ルロールは息を吐く。長く――体の中の悪いものを吐き出すように。熱く漏れる息遣い。額にうっすら浮かぶ雫に気づいて眉を顰める。

「もしかして、結構辛かったりしてます？　今」

心配になって尋ねれば、ルロールは苦笑した。

「辛いですよぅ。そりゃもちろん。転移なんて簡単に言いますけど、召喚に次ぐ大規模魔術ですよ。二人も長距離移動させたら、魔力も枯渇しますよ」

「すみません。打ち合わせ通りだったので、大丈夫だと思ったんですが」

もともとの打ち合わせでは、図書室を出て落ち着いたところでディレスに連絡を取り、転移の術でムーイトに帰る、という予定だった。そうすれば、門番の問題もなく、すんなりとコーリスから脱出できるはずだったのだ。

「ああ、そうか。確かに、あの説明じゃそう勘違いされても仕方ないですね。あれは、ディレスに連絡を取ったあとにディレス側から道を繋げてもらって、その跡を通るイメージだったんです」

「そうすると、魔力の消費量が違うんですか？」

道と道を繋いで――そういえば、そのような説明をいつかスウォンがしていたのを思い出す。けれど、ディレス側から道を繋げることが、今回の件とどう関係があるのだろうか。魔力を使うのは実際に転移するときのはずだから、ディレスが手伝おうが手伝わなかろうが、ルロールの魔力の増減には関係ないような気がするのだけれど。

そう思って何気なく尋ねると、ルロールは目を見張って私を見つめた。

「え、それって何かの冗談ですか？」

「え？」
「あ、れ？　アスハさん、魔法使ってましたよね？　転移は確かに難易度の高い術ですが――あれ？」
「冗談じゃないですし、何かおかしなこと言ってます？　私」
「えっと、そうか。結構簡単にアレンジしてたから、ディレスに仕込まれたかと思ってたんですが。考えてみれば、こちらに来てあまり日が経ってないんでしたよね」
「あの……？」
「天然なんでしょうね。思えば、確かに普通とは違う使い方をしてるみたいですし」
「あの、仰ってる意味がよく分からないんですけど」
ルロールは勝手に納得する。意味が分からないと説明を求めれば、ルロールは苦笑した。
「ああ、すみません。ええと、なんでしたっけ――そうそう、転移の術のことでしたね」
「そうです。ディレス様から道をつなげると、魔力の消費量が節約できるんですか？」
どうも理解しにくいが、話の流れから察するに、そういうことなのだろう。原理はさっぱりだけれど。
素直に疑問を口にする私に、ルロールは呆れることなくふわりと笑う。少しだけ生気が戻ったような笑みを見せて、ルロールは解説を始めた。
「あまり難しいのもなんですし、簡単に説明しちゃいますね。転移の術は移動するポイントへの道筋を作るのと、実際に移動する動作に魔力を使うんです。ここまでは良いですか？」
「はい」
「道筋を作る、って聞くとなんだか魔力をあまり使わないようにも聞こえますけど、違うんです。確かに、跳ぶほうが魔力を使う場合が多いですけど、場合によっては道筋を作るのにかなりの魔力を費やすこともあるんです」

「どうしてですか」
「たとえば、僕がここから、今アスハさんがいる位置に転移しようとしたら、どうなります？」
そう言ってルロールは私を指差した。今、私が居る位置だ。指された人差し指をまじまじと見つめ、考える。当然ながら、ここには私が居る。転移とか魔法とかの問題以前に、ここにルロールが移動するのは不可能だ。訊かれるまでもない。もしかして、ぶつかって私がはじき出されるとか、そういった類の答えを求めているのだろうか。質問の意味が分からなくて、私は首を傾げて思ったままを言葉にした。
「私が居る位置ですか？　私が居たら無理だと思うんですが……」
解説を促すつもりで口にした答えだったが、予想に反してルロールは満足そうに頷いた。正解だったらしい。
「そうですよね。そこに何かの障害物があれば、転移の術はあっさり崩壊します」
「崩壊って……」
平然とルロールは言い切った。そのあっけらかんとした物言いに、逆に言い知れない不安が背を這う。簡単に転移と言って術を行使したけれど、実は綱渡りどころの話じゃないのではないだろうか。崩壊したらどうなるのだろうか――という疑問は、口にする前に飲み込んだ。
そんな私の胸中など気にした様子もなく、ルロールは話を続ける。相変わらずの柔和な笑みを浮かべたままで。
「だから、転移する場所を前もって探索し、そこに物体が存在していないことを確認します。場合によっては、術が発動するまで何度も同期をかけるんです。ついでに言えば、他の魔法使いがその地点を使わないようにロックもかけます。その地点だけでは心もとないので、大抵は必要な面積の二倍以上を確保します。で、せっかく確保したポイントに、人とか虫とかが入ってこられたら厄介ですから、排除するための魔法もかけます」

「あああ……」
「それを、術が発動するまで、永遠に。ね？　結構疲れるでしょう？」
　ルロールは簡単に言っているが、何もない地点を算出してそこへ意識をつなげること自体が結構な労力だ。しかも、ロックをかけて、排除して……といった処理を他の術式と平行しながら維持し続けるとか、どんだけ大変なんだ。考えるだけで気が遠くなる。
「すみません、何も知らなかったので、私……」
「謝ることじゃないですよ。実際、使ったことのない術の難しさはすぐに理解できないものですから。僕もアスハさんがこちらに来て間もないのを忘れていました。あんまり手際よく術式を組み替えるものですから」
「組み替えるってそんな大層な」
「それが結構重要なことなんですよ。ディレスが女性の指導に力を入れるのも珍しいですね。ディレスの指導は厳しかったでしょう？」
　勘違いしているルロールの言葉に、思わず視線を逸らす。
「確かにディレス様は厳しかったですが……」
　ええ、いろんな意味でとても貴重な体験はさせていただきましたけれど。人生経験という意味では大変勉強になる指導をしていただきましたけれどね。別に魔法の使い方自体を指導されたわけではない。確かに魔法書を見せてもらったりはしたし、私が魔法を使える切っ掛けを作ってくれたのはディレスだ。だが、それを指導というには違うだろう。
「ああ、ディレスといえば、アスハさん。連絡を取りたいので、魔石を返してもらえますか」
　視線を逸らして遠い目をする私に気づいたか、ルロールは話を変えた。これ以上ディレスの「指導」を思い返すのは精神的に辛い。私にとっても幸いとばかりに話に乗ろうとして、動きを止める。
「えっ」
「え？」

意味を理解して顔を引きつらせれば、ルロールもつられたように動きを止めた。困ったように見つめてくるルロールに、引きつった顔をどうにか苦笑に変化させた。

「えっと、これです。ありがとうございました」

「あ、はい。ではちょっと、ディレスに連絡を取りましょうか。姫のあの様子だと、あちらで結構騒ぎになっていたみたいですから」

よっこらせ、と掛け声をかけて、ルロールは上体を起こした。

「そうですか。それでは私は向こうのほうで――えぇと、花でも摘みに」

トイレの婉曲表現を使ってその場を去ろうと腰を浮かす。けれど、その場を離れる前にルロールの手に腕を取られた。

「待ってください。さっき、姫の言質を録ってたでしょう？　ディレスに説明するにも、あれがあるとすごく便利だと思うんですけど」

「ああ、あれですね。はい、魔石はここにあるので――」

魔石を地面に置いて、再び腰を浮かす。だが、今度は乱暴に手を垂直に引かれた。加えられた力に従って、その場にすとんと腰を下ろすはめになる。

「ちょっと、アスハさん。ふざけないでくださいよ。僕があの場から出られたのも、姫の言質を取れたのも、アスハさんのおかげじゃないですか。ディレスに説明するのに、その本人が居なくてどうするんですか」

「う……すみません」

「喧嘩でもしたんですか？」

「そのような、そうじゃないような」

「大丈夫ですよ。僕も一緒に謝りますから、ここに座って」

とん、とルロールは自分の隣を叩いた。

四十五、警戒

「ああ、ディレス？　僕です――ルロールですけど」
「ルロール――って、ルロールですか！？　何やってんですか、貴方は！」
　関口一番、ディレスの叱責が飛んだ。ルロールは両耳を押さえて目を瞑って見せる。うるさい、というジェスチャーだ。ディレスには見えてないし、あまり意味はない動作だと思うのだけど。
「ああ、すみません。なんか姫に薬盛られてたみたいで。見事に捕まってました」
　ディレスの大喝などものともせず、ルロールは告白する。知らされた真実の重大さとルロールの態度の差に、魔石の先でディレスが絶句した。数瞬の沈黙の後、ディレスは再びルロールを怒鳴りつけるべく息を吸う。
「捕まってました、じゃないでしょうが！　それで？　今どこに居るんですか」
　揺らいだのはほんの少し。さすがにいい大人だけあって、ディレスはすぐに気を取り直した。
「ムーイトとコーリスを繋ぐ街道を少し外れた林道です。ちょっと魔力も搾り取られてたみたいで……アハハ」
　だが、ルロールは軽薄な口調で答えた。理性で押し止めたディレスの神経は、きっと見事に逆撫でられたことだろう。
「アハハ、じゃないですよ！　こちらがどれだけ気を揉んだと思ってるんですか」
「心配しました？　嬉しいなあ。ディレスに心配してもらえるなんて」
「嬉しいとか言ってる場合ですか。全く、こっちはこっちで殿下絡みで鬱陶しい問題が山積みだったというのに」
　ぼやくディレスの台詞に無意識に魔石から距離をとる。含みのあ

る物言いが示す意味は、自然と体を強張らせた。
「考えすぎると禿げますよー。それで、今回の件なんですけど、どこまで情報行ってます？」
「顔が見えないからって随分な言いようですね。――ええ、そうですね。こちらが把握しているのは、こちらの帰還要請に『ルロールは勝手に帰った』の一点張り。『不審に思うなら殿下自ら赴いて来い』の――要するに殿下の訪問要求でしたね」
本題に入ったルロールに、ディレスもいつもどおりの落ち着きを取り戻した。ディレスの言葉に、ルロールは唸る。
私達を取引材料に、姫は身勝手な要求を付きつけていたらしい。いや、私達というのは違うか。私はあくまでおまけであって、本命はルロール。先ほどのディレスの会話から察するに、姫は随分前から内々にこの要求を突きつけていたようだ。それは、ディレスの言葉の端々から窺える。随分とくだらない理由で人を拘束したものだ。軟禁とはいえ、仮にも隣国の地位ある人間を人質にとろうなど、思い切ったことをする。いや、地位ある人間だからこそ、人質になるのは分かるけれど。王子といい、この世界の王族は、どこか頭のねじが飛んでいるのだろうか。
そのお粗末な理由に呆れつつ、魔石を眺める。日の光が反射してきらめく魔石に、ふとあることが思い浮かぶ。そういえば、と思い出す。
私がコーリスに乗り込む直前、ディレスは私をホルツ――ルロールの父親――の屋敷に連れて行った。そもそもが、このときのディレスの目的は何だったのだろう。あの時はいろいろあって頭が回らなかったが、今なら想像がつく。恐らくだが、この時に姫から要請があったのだろう。つまり、あの時ディレスが私を連れ出したのは、単に私の素性を疑っていたからだけではなく、ホルツへの報告と相談という目的もあったのだろう。相変わらず容赦ない。ディレスにはいつも肝が冷えさせられる。
「ははあ。やっぱりですか。殿下もいい加減諦めれば良いのに。顔

は好みのはずなんだし、破格の条件なんですから、妥協すればみんなが幸せになれるんですけどねえ」

しかし、人質となった当のルロールはまるで他人事のようだった。

「それは殿下に直接言いなさい。私だって、殿下がその気になってくれれば一番嬉しいですよ。そういえば、殿下の好みといえば、こちらも少々厄介な事がありましてね。そちらに私の遣いという事で黒目黒髪の少女が来ていると姫が言っていたのですが――」

自分の話題に凍りつく。察したルロールがこちらに目を向ける。視線に言葉を込めるようにルロールを見つめる。その意味に気づいたか、ルロールは軽く頷いて再び魔石へと視線を戻す。

「ああ、アスハさんのことですか？　今ちょうど、隣に居ますよ」

――理解してなかった。事も無げにルロールは私の所在を暴露した。

思いもよらぬ返事だったのだろう。ディレスは沈黙した。

だが、一瞬の静寂の後、ディレスは鋭い警告を発した。

「離れなさい、ルロール！」

「は？」

緊迫した空気に、私とルロールは目を丸くした。予想外の反応だった。怒られるか、もしくはねちねちと「何してるんですかいいご身分ですね」的な嫌味を言われるとは思ったけれど、警戒されるとは思ってもみなかった。ただの少女――と思っているはずの――相手に、何をそんなに神経を尖らせる必要がある？

「いいから、その少女から離れなさいと言っているのです」

なおも警鐘を鳴らすディレスに、ルロールと私は首を傾げる。二人で顔を見合わせて、互いに思い当たることがないことを確認すると、ルロールは疑問を解消すべく魔石へ目を向けた。

「ええー、どうしてですか。というか、痴話喧嘩に僕を巻き込まないでくださいよ」

そして、ルロールは余計なことを付け加えた。緊張感のないルロールに脱力する。だがそれはディレスも同じだったようだ。ディレ

スはため息をつくと、勢いを落とした。
「痴話喧嘩――アスハですね。貴女はまた何を吹き込んでいるんですか」
「吹き込んでませんよ。ルロールさんもふざけるのは止めて下さい」
少しきつめに睨めば、ルロールは降参したとでも言うように手をひらひらと振った。
「いやあ、アスハさんがディレスと喧嘩したと言うから、ちょっと場を和ませてみようかなと思ったんですけど」
余計なお世話だ。大体、あの冷血漢がそんな戯言で誤魔化せるわけがない。事実、飛ぶような叱責は収まったものの、ディレスは相変わらず私を警戒していた。
「喧嘩？　そんなことより、彼女から距離をとりなさい、ルロール」
「だから、なんでそんな酷いこと言うんですか。彼女は僕の大切な恩人ですよ」
「恩人？　何ですか、それは」
「ほら、僕、薬盛られてたじゃないですか。目の前の本にしか興味が持てなくて、外のこととかすっかり忘れてたんですけど、アスハさんが来てくれたおかげで外のことにも興味を向けられるようになったんです」
「なるほど？　目の前の本から、アスハに薬の効力が傾いたわけですか。で？　何が目的なんですか、貴女は。望みどおりルロールを骨抜きにして、何をさせるつもりですか」
ディレスの言葉は疑いに満ちていた。確かに、ムーイトを発つ直前に尋ねられたことなので、疑問に思っていたのは知っていたけれど。そこまで不審に思われていたとは思わなかった。
ルロールに会えたことだし、別にもう答えてしまってもいいかなと口を開く。だが、私より前にルロールが答える。
「随分棘のある言い方しますね。そんなに僕とアスハさんが一緒に居るのが妬ましいですか」
「妬ましいとかそういう問題じゃありませんよ。ルロールは知らな

いかもしれませんけど、彼女は殿下の書類箱から書類を持ち出した手だれですよ」

「――は？」

思わず、間の抜けた声を上げる。けれど、意味が分からなかったのは私だけだった。ルロールは腑に落ちたというような顔をして、魔石に話しかける。

「ああ、殿下のアレですか。それは確かにすごい手腕ですけれど――そんなことしたんですか？　アスハさん」

「え？　書類箱って、何ですか？」

「とぼけても無駄ですよ。殿下がきっちり仕舞っておいたメイドの一覧表、書類箱から持ち出していたでしょう」

メイド一覧――ああ、アレか。書類箱の意味するところを理解して、思い出す。確かに、以前、王子が盗んだメイド一覧表を取り戻してきたことがあった。けれど、それが一体何だというのだ。確かに、王子の持ち物に手を出すのは褒められたことではない。場合によっては罪に咎められるだろう。けれど、あれはもともと王子の持ち物ではないし、ディレスだって良い顔をしていなかったではないか。確か、メイド長の訴えに従って、王子を遠まわしに責めていたはず。私があれを持ち出したところで、問題はなかったように思えるのだが。

それに、あの時自分は誰にも認識されていなかったはずだ。証拠はない。ディレスが何故私を疑っているかはともかくとして、証拠がなければ私の行いはディレスにとっても利があるはずだ。ディレスとて、メイド一覧を盗み出した王子を良く思っていなかったはずなのだから。利益もないのにただ正義感で私を糾弾することに、ディレスは何の意味も見出さないはずだ。

「それは確かに殿下の目を盗んで抜き出してきましたけど。それが何か？」

「殿下は書類箱の鍵を肌身離さず持っていたはずですよ。どうやって開けたと言うのです？」

その言葉に、ディレスが何を言いたいのかを理解した。
つまり、ディレスはこう言いたいのだ。メイドの一覧表は王子愛用の書類箱に仕舞ってあったはずだ。しかも、その書類箱には鍵がついている。鍵がなければ開けることは出来ない。鍵は王子が肌身離さず持っている。だから、王子から鍵を盗まない限りは書類箱から中身を抜き出すことは出来ない。もちろん、箱ごと盗んだり、鍵を盗んだりして中身を取り出したというのなら、簡単だ。誰でもというわけにはいかないが、隙を突いて盗み出すこともできるだろう。けれど、箱ごとなくなった、鍵がなくなった、というのなら、王子が何か口にするだろう。よって、箱も鍵も盗まれていない。メイド一覧表は、どうにかして鍵を開けた上で中身だけを抜き出されたのだ、と。
ちなみに、一度王子から鍵を盗んだ上で箱を開け、再び鍵を王子に気づかれぬように返却するという方法もなくはない。ないが、騒ぎになってから一覧表が発見されるまでの時間を考えれば、非現実的だろう。それに、仮にそうした方法で盗み出したとしたら、それこそ本当に看過できない「手だれ」と言える。
つまりが、私が王子の書類箱から一覧表を盗み出してきた手腕に、ディレスは見当違いも甚だしい誤解をしたのだ。恐らく、諜報員といった類のものを想像したのだろう。
「開けたと言うか、殿下が開けた隙を突いて盗み出してきたってだけなんですが」
しかし、自分が何故それが出来たかを説明するのは非常に面倒臭い。私は説明を放棄して、その具体的な方法についてははぐらかしてみせた。
「アスハさん、それはあんまり堂々と言うことじゃないような」
「そうですよ。どうして殿下に気付かれずに盗み出せるのですか。言い訳するならもっと考えなさい。そもそも、ちょっと問いつめたくらいで姿を消しておいて、よくもそんな白々しい嘘がつけますね。しかも、しっかり殿下探知機の追跡機能を切って」

案の定、ディレスは不満げに突っ込みを入れる。確かに、ディレスからしてみれば不審な態度だったのかもしれないけれど。それにしたって、ただメイド一覧表をメイド長の私室に置いてきたのを見られただけで、そこまで思考が飛躍するとは――

と、今までのディレスの態度を思い起こして、ふと思考を止める。あっさりとした発言に流してしまいそうになったが、今、ディレスは聞き逃すことの出来ない単語を口にした。殿下探知機の――追跡機能、と。

「あれ、追跡機能だったんですか――って、ディレス様どういうつもりですか」

確かに、探知機の解析をしているときに、変だとは思ったのだ。妙な処理が組まれているな、とは。けれど、ディレスから渡された殿下探知機の術式は非常に緻密に組まれていた。ディレスの性格を表したように事細かく、無駄なく、しかも良くそこまで思いつくなと思うほど執拗な例外処理を組まれていた。だから、私には理解できないだけで、これも必要な処理なのだろうと不審には思わなかったのだ。あまりにも綺麗に組まれた術式だったから。ただ、この処理は動作させていないときも魔力を垂れ流しているようだったから、コーリスに来る前には魔力節約のために処理を切ったのだけれど。

「というか、殿下探知機ってなんですかって突っ込みたいのは僕だけですか？」

ストーカーのような機能を無断で搭載していたことを責めるとはどういう了見だ。そうディレスを責めると、同時にルロールが常識的な突っ込みを入れた。

だが、私もディレスもそれどころではなかった。自然、ルロールの良識ある疑問は黙殺された。

「貴女の行動が怪しすぎるからでしょう。少しは自分の行動を思い返してみなさい」

ディレスはぴしゃりと言い返した。

この野郎。悪びれた素振りすら見せやしない。親切めかして殿下

から守ってやるとか言いながら、しっかりと私の動向を監視していたわけか。なんて極悪。なんて鬼畜。ふつふつと煮えるような怒りが腹の底から沸き上がる。

「怪しいって何がですか。私は普通にルロールさんにお会いするために城に上がっただけです」

「ルロールに？　殿下の求愛を退けてまでにこだわる意味がわかりませんね」

「ちょっと、落ち着いて下さい二人とも。ディレスも。あなたらしくもないですよ」

魔石を通して火花を散らす私たちを見かねて、ルロールは話に割り込んだ。まるでそこにディレスが存在するかのように、ルロールは私と魔石の間に体を滑り込ませた。

「私は落ち着いていますよ」

ルロールの気配を察したのだろうか。ルロールの背後から、ディレスの不満げな声が響いた。間に割って入られて、気分を害したような様子だった。

そのあからさまな態度に、ルロールは背後の魔石にちらりと視線をやった。魔石は淡く光るのみ。ディレスの姿を映し出しているというわけでもないから、その表情は分からない。けれど、明滅する光は、ディレスの表情を容易に想像させた。それを見て、ルロールはため息をつく。

「わざわざ口にしているところからして、落ち着いてないじゃないですか。もう、頭に血が上りすぎですよ、ディレス。珍しい。落ち着いて、最初から整理しましょうか」

疲れたような表情で、ルロールはこちらを振り返る。ルロールが話の舵を取ってくれるらしい。先を促そうと、私は鸚鵡返しに尋ねた。

「最初からですか？」

「そうです。アスハさん、貴女は何のために僕に会いたがっていたのですか」

どこから話をさせられるかと身構えれば、ルロールは予想外のところから切りかかった。確かに、ある意味ディレスの疑惑の根本だろうけれど。

ほんの少しだけ、答えに迷って押し黙る。今まで頑なに口を噤んでいたことだ。即答するには躊躇いがあった。けれど、もうすでにルロールに会っているのだ。ルロールから元の世界に戻してあげるという言質も取っている。とすれば、今更ただ無言を貫き通すのは、誤解を招くだけで何の特にもならない。そう判断して、私はようやく口を開く。

「そんなの決まっています。ルロールさんに元の世界に戻してもらうためです」

「……は？」

あっさりと、本当の理由を口にした私に、ディレスは間の抜けた声で応えた。本当に、思いもよらぬ返答だったのだろう。確かに、いきなり「元の世界に戻りたいから」なんて理由を持ち出されれば、驚くのも無理はない。

「ああ、やっぱり。知らなかったんですね。アスハさんも、どうして言わなかったんですか？」

「あんなふざけた理由で他人を無理やり喚び出す人間なんて信じられますか。ディレス様は殿下側ですし」

ディレスは確かに王子には厳しかった。王子の行動を諫める場面も見たことはある。けれど、それでもあくまでも他の人間と比べていくらか常識的な対応だった、というだけだ。国の頂点に立つべき王子への対応としては、という意味で。だが、それは決して親が子に対するような絶対的な関係ではない。あからさまな悪事を問いただすことはあっても、基本は「叱る」ことはない。王子の行動を「止める」ことはない。王子が本気で私を手篭めにしようと動いたら、ディレスはきっと、注意することはあっても、行動を阻止することはないだろう。いや、私の素性を疑っていたときならば、別の目的で阻止するということはあるかもしれないけれど。王子の身を案じ

るという意味で。
　けれど、異世界人としてある意味素性がはっきりしたのならば、話は別だ。王子が私を求めれば、ディレスは積極的には拒まないだろう。最悪の場合、王子は私を拘束するかもしれない。自分の性的嗜好に合致した人間で、かつ異世界人という私を、王子が見逃すとは考えにくい。何をされるか知れたものではない。
「まあ、それは僕らも申し訳ないとは思っているんですけど……あの余興を見れば、不信感を抱かれてもしょうがないですかね」
　言葉の裏を読み取って、ルロールは私に賛同してくれた。けれど、ディレスは哀れむどころかなおも疑いの目を向けた。
「待ちなさい。貴女が異世界人という保証などどこにあるのですか。召喚を行ったのは昨年からですよ。彼らの消息はきちんと把握しています」
「あ、すみません。誕生祭の一週間くらい前の失敗あるじゃないですか。あの時だそうです」
「あの時は確か誰も――ああ、それでですか。確かに筋は通ってますね。ですが、証拠は何もありませんよ」
「ディレス、本当に珍しいですね。一緒に居て、アスハさんの違和感に気付かなかったんですか」
「だから、何をですか」
「アスハさん、魔力がないじゃないですか」
「それがなんだと――」
　言いかけて、ディレスは口をつぐんだ。ルロールの示唆する内容に気づいたのだろう。
「気づきましたか。確かに、魔力を隠す技術はなくもないです。けど、アスハさんの場合、隠すために抑える類の流れではなかったでしょう？　むしろ、別の術のせいで吸い取られているような消え方だったはずです。つまり――」
「御託はいいです。つまり、確認したんですね？」
　先を急ぐようなディレスの問いに、ルロールは苦笑した。

「はい。僕の術が、不完全に絡まってました」
「そういう――ことですか」
「そういうことです」
「どういうことですか」
勝手に納得する二人に、ついて行けない。説明不足で意味が分からない。確かに、私には身に流れる魔力がないけれど、それが何だというのだ。この世界ならだれでも必ず魔力を有しているというのならそれでいい。魔力がないから、異世界人だ、というのはそれはそれで筋は通っている。けれど、それならそれで、魔力がないと気づけばすぐに異世界人と気づかれるはずだ。それこそ、ディレスが私の素性に気づかないはずがない。ルロールの言葉から、召喚術の失敗のせいで本来あるはずの魔力が失われているのであろうことは察しがつく。けれど、それが私が異世界人であることの証明になるというのが、どうしても理解できなかった。
説明を求めると、ルロールはにっこりと笑った。
「僕の術の失敗で、アスハさんの魔力が枯渇しているということですよ。だから、自身では魔法を使えなかったでしょう？」
「確かに、そうですね。もともと、魔法という概念のない世界だったので、あまり違和感はなかったんですけど」
「そういう世界もあるみたいですね。けど、ここでは多かれ少なかれ、誰でも魔力を持っているのが普通です。魔力というのは、生命力に等しいものですからね」
「そうなんですか。でも、召喚術の失敗のせいで、どうして私の魔力が枯渇するんですか」
そこが分からない。そもそも、術が失敗するとはどういうことだろう。召喚時の着地点がズレたというだけではないのだろうか。身を乗り出して尋ねるが、ルロールはふと視線を逸らして魔石に目を向けた。
「そうですね、それを説明する前に――ディレス？」
「何ですか」

突然水を向けるルロールに、ディレスはつまらなそうに返事をする。
「これで、アスハさんが異世界人ということは信じてもらえました？」
「信じるも何も、あなたがそうだというのなら、そうなんでしょう？」
「では、話を元に戻します。僕は今、魔力がほとんどないです。ここからムーイトまで跳ぶだけの術は組めません」
「つまり、こちら側からあなた達を喚び出せということですか」
「そういうことです」
ディレスはこちらの言いたいことを先回りした。しかし、自分で言い出したにも関わらず、ディレスはルロールの肯定に難色を示した。
「そうは言われても、あなたたち二人分でしょう？　あなたではないのですから、私の魔力では無理がありますよ」
「足りない分は、僕の部屋から適当に魔石を見繕って使ってください。こちらの位置情報は僕から送信しますから、ポイントを繋ぐのはそれほど大変ではないはずです。ここから歩いて帰るのは、さすがに危険です。僕だけではないですし」
「仕方ありませんね。では、準備してくるので待っていなさい」
ため息と共に、ディレスが腰を上げる物音が響く。どうやら、ルロールの部屋へ魔石を取りに行ってくれるらしい。
私に対する誤解は解けたのだろうか。
「よろしくお願いします」
魔石の先のディレスに向かって、ルロールは律儀に頭を下げる。
その言葉と共に、淡い魔石の光が色を失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7418o/

存在薄弱

2011年9月27日12時38分発行